

学位論文

左利き者の書字教育に関する研究

小林 比出代

2020

目 次

序章	7
1. 問題の所在と本研究の意義	9
(1) 問題の所在	9
(2) 先行研究の検討	14
(3) 本研究の意義	15
2. 研究の目的と方法	18
(1) 研究の目的	18
(2) 研究の方法	18
第1部 左利き及び左利き者の研究	23
第1章 左利き及び左利き者の医学的・心理学的考察	25
1. 「左利き」の定義と「ラテラリティ」	27
2. 左利きの割合	28
3. 左利きの発生起源と種類	29
4. 利き手と大脳との関係	30
5. 順手と逆手 —Levy の仮説から—	32
6. 幼児期の利き手	33
7. 利き手への社会的・文化的影響	34
8. 書字における右手の優位性	35
9. 左手書字から右手書字への「矯正」の是非	36
(1) 幼児期における左手書字から右手書字への「矯正」	36
(2) 小学校低学年以降での左手書字から右手書字への「矯正」	39
10. 「利き手」との観念に基づく臨床生理学的な見地からの検討	41
第2章 左利き及び左利き者の書字に関する考察	45
1. 日本における左利きに関しての社会的意識 —書字の側面から—	47

(1) 保護者を対象とした意識調査の結果から	47
(2) 昨今の新聞記事から	47
2. 小学校学習指導要領における	
左利きの児童への学習指導に関する内容の変遷	49
3. 学校教育における左利き及び左利き者の書字の受けとめ方	49
4. 左利き者に有効な具体的方策に関する検証	
—『左きき書道教本』における紙の置き方を参考に—	53
(1) 『左きき書道教本』における左手書字のための用紙の置き方	55
(2) 左手毛筆書写での半紙の置き方と字形の関係に関する分析	57
① 調査内容と分析方法	57
② 左手毛筆書写での半紙の置き方と字形の関係に関する調査結果 及び比較考察	60
(3) 左手毛筆書写に際しての	
半紙の置き方と字形の関係に関する考察	86
(4) 左手硬筆書写での用紙の置き方と字形の関係に関する分析	90
① 調査内容と分析方法	90
② 左手硬筆書写での用紙の置き方と字形の関係に関する調査結果 及び比較考察	92
(5) 左手硬筆書写に際しての	
用紙の置き方と字形の関係に関する考察	116
(6) 紙の置き方の検証が示唆する	
具体的方策を検証することの意義と課題	120
第Ⅱ部 左利き者の書字教育に関する比較研究	121
第3章 漢字圏 —左利き者の書字教育未開拓圏—	123
1. 中国及び韓国における	
左利き者の書字教育に関する国としての指針	125
2. 左利きに関する漢字圏においての文化的背景	135

第4章 イギリス —左利き者の書字教育検討に肝要な視点—	139
1. イギリスの教育制度の概観と特徴	142
2. ナショナルカリキュラムに関する概説	142
(1) ナショナルカリキュラムの変遷	142
(2) ナショナルカリキュラムの特徴	146
3. 現行のナショナルカリキュラムでの	
Handwriting の教育目標における左利き者への書字指導	147
4. イギリスの教科書制度の特徴	151
5. 現行のナショナルカリキュラムに準拠した	
Handwriting のテキストにみる左利き者への書字指導	152
6. イギリスにおける左利き者の書字教育に関する文献的考察	154
(1) Jean Alston(1996) : <i>Writing Left-handed</i>	
<i>A guide for parents and teachers</i>	
<i>of left-handed children.</i>	
Manchester, UK : Dextral Books.	158
(2) Gwen Dornan(2007) : <i>Writing Left-handed</i>	
<i>... Write in, not left out.</i>	
The National Handwriting Association	167
(3) Lauren Milson(2008) : <i>Your Left-handed Child</i>	
<i>Making things easy for left-handers</i>	
<i>in a right-handed world.</i>	
London, UK : hamlyn.	182
(4) Julie Bennett(2015) : <i>HANDWRITING Pocketbook</i>	
<i>A pocketful of tips, tools and techniques</i>	
<i>for teaching, improving and troubleshooting</i>	
<i>handwriting.</i>	
Hampshire, UK : Laurel House.	194
(5) (1) から (4) に鑑みるイギリスでの左利き者の書字教育	195

第5章	日本の学習指導要領に相当する教育指針が存在する	
	アルファベット圏の国（イギリスを除く）における例	
	—書字マイノリティへのまなざし—	199
1.	オーストラリア —南オーストラリア州を一例として—	201
	(1) オーストラリアの教育制度	201
	(2) 『SACSA』にみる	
	南オーストラリア州での左利き者の書字教育	203
	① 『Handwriting in the South Australian Curriculum	
	2nd Edition』における左利き者への書字指導	203
	② 『R-10 English Teaching Resource』における	
	左利き者への書字指導	213
	③ 『Handwriting South Australian Modern Cursive	
	R-7 Language Arts』における左利き者への書字指導	215
2.	フランス	218
	(1) フランスの教育制度の概観と特徴	219
	(2) フランスの学習指導要領の概観と特徴	226
	(3) 『2002年初等学校学習指導要領』における	
	左利き者への書字指導	226
	(4) フランスの教科書制度の特徴	231
	(5) 現在フランスにおいて用いられている	
	書字教育のテキストにみる左利き者への書字指導	232
第Ⅲ部 左利き者の書字教育に関する今後の展望		235
第6章	左利き者の書字教育に関する考察	
	及び諸外国の教育から得られる示唆	237
1.	アルファベット圏諸国から得られる示唆	239
2.	アルファベット圏諸国から見出す課題	241
3.	日本における「文字を書くこと」に関しての「伝統」「文化」	242

第7章 左利き者の書字教育における今後の展望	245
1. 利き手及び左利き者に関する書字学習の在り方を	
公的に提示する必要性	247
(1) 漢字圏での左手書字から右手書字への「矯正」に関する	
毛筆使用の影響	247
(2) 教育の質的な向上が成就するための要件	249
2. 左利き者の書字学習と	
アメリカの特別支援教育における書字学習に通底する見解	250
3. 「Society5.0」の方向性に沿った試論	252
(1) 「Society5.0」に基づく展望	253
(2) 毛筆のみ常時右手で扱う左利き者に関する附記	254
(3) 左利き者の脳機能や認知機能に関する検証において考慮する点	255
4. 日本での左利き者の書字教育に関して必要な研究の方向性及び方法	256
(1) 本論考各章に記した具体的な文言に関するカテゴリー分類	256
(2) 研究の方向性及び方法に関するカテゴリーごとの提起	267
① 目標研究	267
② 教育内容研究	268
③ 教材研究	270
④ カリキュラム研究	272
⑤ 学習者研究	272
綴章	273
1. 研究の成果	275
2. 研究の課題	277
 [謝辞]	 281
<参考資料>	283
<引用・参考文献>	331

〈凡例〉

- 書式は1ページ35字×30行にする。
- 注はページごとでの脚注として示す。
- 表及びグラフは各章ごとのナンバリングとする。ただし、第2章に関しては、表及びグラフ数が多いので、各項ごとのナンバリングとする。
- 〈引用・参考文献〉は各章ごと引用した順番に記述する。ただし、第1章での、医学（生物学・生理学）・心理学の分野における利き手及び左利きと大脳との関係について用いた文献と、第4章での、イギリスの教育制度の概観及びナショナルカリキュラムの変遷や特徴について用いた文献と、第5章での、フランスの教育制度の概観及び教育制度、学習指導要領、教科書の特徴について用いた文献に関しては、発行年順に列挙する。
- 各章での表中に用いている訳語は、日本語での引用文献（邦訳書）がある場合、当該の文献において用いられている語をそのまま記載する。
- 現在日本では **Handwriting** の教育における専門用語に関し、共通の理解に基づいて一般的に用いることができる訳語が決まっていない。従って、本論考では、基本的に、用語の表記は全て原語によるものとする。ただし、和訳に定説がある用語に関しては、その語を用いることにする。

序 章

1. 問題の所在と本研究の意義

(1) 問題の所在

筆者は、書写教育を「手で文字を書くことに関する教育」と広義に捉え、これまで、文字体系の違いを超えての比較研究、具体的には、日本とアメリカ、イギリス、オーストラリア、フランス各国との書字教育（＝文字を書くことの教育）に関する比較研究を試み、各国の書字教育政策に考察を加え、史的変遷の特徴と意義を明らかにすることによって、書写教育分野を比較研究の一つとして位置づける可能性を模索してきた。

他方、筆者は、文字を書く際の利き手の問題が、特に小中学校の教育現場で切実な課題となるにもかかわらず、左利き者の書字指導に関して十分な検討がなされてきていないとの問題意識を持ち続けてきた。

近年日本では、左利きを右利きに「矯正」する傾向が低くなり、以前に比べて左利きが増加したと指摘される。一方で、書写教育の分野において、左利きに関する研究が充実しているとは言い難いのが現状である。その要因としては、左利きの書字及びその教育に関する研究を、単に目の前にある手もしくは書字行為だけの問題としては捉えることができない点や、対象者の数が限られる上にその実態が多種多様とされるためデータがとりにくい点等が挙げられる。現行の学習指導要領においても、左利きの書字及びその指導に関する事項については触れられておらず〔詳細後述〕、保護者や授業（指導）者からの、左利きの児童生徒の書字指導に関する疑問や不安は後を絶たない。

2015(平成 27) 年 4 月、筆者が勤務する信州大学教育学部にて、中学校国語の教員免許状取得に必修となる授業「書道基礎」の初回に、受講生各人の書写力形成に関して自由に記述してもらったところ、2年生から以下のコメントが寄せられた。

〔前略〕私にとって、初めての書道(ママ)の授業の思い出は、とても苦いものでした。〔中略〕

私は左ききです。左ききなんて珍しいものではありません。ですが、私のいたクラスには不幸にも私だけしかいませんでした。

だからでしょうか？ 先生には、きっとそれが許せなかったのでしょうか。45分の授業の中、基本私は先生と一対一で右手で字を書くことを強制されました。私は先生に握られているあの手の痛みや感触を今でも覚えています。

級友からは興味と憐みの視線を向けられ、先生からは左ききであることをなじられ、私にとっては、習字(ママ)は一種のトラウマとして心に刻まれています。確かに私はあの時に、字に対する小さなプライド、自尊心を傷つけられたのです。習字(ママ)は右ききでなければいけないのでしょうか？

後述の新聞記事〔「第2章 1.(2)」〕の掲載から10年の年月を経ても、それどころか、極端な話をすれば、1881(明治14)年生まれの會津八一が、1947(昭和22)年65歳の時に行った講演「書道について」の以下の内容(『独往の人 會津八一展』中村屋サロン美術館, 2018, p.4)と比べても、左利き者の書写教育に関して状況は然程変わっていないことに自戒の念を抱いている。

會津は、小学生のころから、「書き方」(習字)の時間が恐ろしくなるほど苦痛であったという。〔中略〕 會津は書き方の時間が苦痛だったのは、他の人よりも字が下手だということもあるが、元々左利きであるため、利き腕でない右手で筆を執って書いたことにより、手本に書いてある通りに書き写すことが出来ない部類の人間であったからだと説明している。

2013(平成25)年度の全国大学書写書道教育学会においても、「全国大学書写書道教育学会・第27回(京都)大会ラウンドテーブル」での【テーブル①記録】「書写・書道教育の実践論」の中に【6. 左利きの児童生徒への対応について】として¹、同じく【テーブル③記録】「書写・書道の学習者論」の中に【小学校での指導から左利き児童生徒の指導について】として²、左利き者への学習指導に関する質問や意見が活発に交わされた様子がまとめられている。清水の「利き手問題については、漢字や日本語が右手縦書き文化で発展してきたことをふまえて論じなければならないところに難しさがあるのだが、学習者のための対応を研究し、教科書等でも積極的に対策していかなくてはならないだろう。」³との指摘は真摯に受けとめるべきである。杉崎の、「左手書字」の問題につい

¹『書写書道教育研究 第27号』(全国大学書写書道教育学会編)2013, p.106.

²『書写書道教育研究 第27号』2013, pp.125-126.

³清水文博「ラウンドテーブル テーブル③書写・書道の学習者論 学習者の立場から考えていかなければならないことは何か」(『書写書道教育研究 第27号』2013) p.118.

では「入門期」での調査が「極めて困難であり」、「経過観察も極めて難しい」ため、「その時期を経て筆記具の執筆姿勢が固まる成人を対象に行うこともやむをえない」⁴との見解は、大局的かつ長期的な観点から一理あるものの、現実問題として、左手書字への不安や課題は、文字学習入門期をはじめとした児童の書写学習に対して今も恒常的に集中すること、それは、これまでの書写教育が左手書字に関する具体的な方策を立ててこなかった（こられなかった）ことにも起因する点を勘案すると、たとえ些細な事項であっても、左手で書字活動を行う児童への指導に関わる何らかの指南を提示することが今日の書写教育には求められていると考える。教科書や教師用指導書等を通して左手書字の児童生徒に具体的な示唆を与えることは、現在書写教育に携わる者へ課せられた喫緊の使命である。しかしながら、このような要請に応えられる研究が充実していないのが現代の日本における実状である。

現在、日本の教育改革では、20世紀末からの国際的な動きを受け、「ユニバーサルデザイン教育」「インクルーシブ教育」の視点に重点が置かれてきている。これらの考え方に関して、田上他は次のように解説している⁵。

インクルーシブ教育について、高橋智（2007）は、「学校が様々な違いや多様なニーズを有する子どもの学習と発達、協働と連帯の場になっていくこと、換言すれば『共学・協働と発達保障』の実現を追究する学校教育のあり方を示したもの」（高橋智,2007）（※高橋智（2007）「障害・特別ニーズを有する子どもの特別教育史」東京学芸大学特別支援科学講座（編）『インクルージョン時代の障害理解と生涯発達支援』第11章，日本文化科学社，pp.151-160.(小林注)) としている。

中央教育審議会初等中等教育分科会報告（2011）（※中央教育審議会初等中等教育分科会（2011）「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」(小林注)) は、インクルーシブ教育システムの基本的な方向性を、「障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で学ぶことを目指すべきである」とした。また、文部科学省「インクルーシブ教育システム構築事

⁴ 杉崎哲子「書写・書道の学習者論に関する研究の方向性」（『書写書道教育研究 第28号』2014）p.73.

⁵ 田上美由紀 猪狩恵美子「日本におけるユニバーサルデザイン教育をめぐる研究動向 —インクルーシブ教育の実現を目指した通常学級改革の視点から—」（『福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学 第3号』2017）pp.19-26.

業」(2014)(※文部科学省初等中等教育局特別支援教育課(2014)「インクルーシブ教育システム構築事業」(小林注))では、共生社会実現にむけての教育分野における重要課題を、特別支援教育に加え、「障害のある者と障害のない者が可能な限り共に学ぶ仕組みを構築すること」とし、これを「インクルーシブ教育システム」として

いる。

こうした動向を背景とし、通常学級の中で、障害の有無にかかわらず全ての子ども

の学習参加を保障する教育実践として、「ユニバーサルデザイン」が注目されつつある。

もともと「ユニバーサルデザイン」は、90年代にアメリカの建築家ロナルド・メイスによって提唱された、建築や日用品に対する用語として広まった概念である。障害者権利条約では、「ユニバーサルデザインとは、調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計」(外務省, 2014)(※外務省(2014)「障害者の権利に関する条約」(小林注))とされ、年齢や性別、障害の有無にかかわらず、全ての人の使用を想定した製品、環境、計画及びサービスの設計を指している。

このユニバーサルデザインの考え方を教育に応用した動きを、「ユニバーサルデザイン教育」や「授業のユニバーサルデザイン」といい、「児童生徒への学習に対する『わかりやすさ』を追求すること」ととらえられ、「特別なニーズのある児童生徒はもちろん、すべての児童生徒にとって利益のある考え方」とされている(片岡美華, 2015)(※片岡美華(2015)「ユニバーサルデザイン教育と特別支援教育の関係性についての一考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編第66巻』, pp.21-32.(小林注))。

「通常学級の中で」「全ての子ども

の学習参加を保障する」との教育改革の方向性は、まさに左利き者の書字教育に関する課題を考究する必要性と合致する。

さらには、書字に不安を抱く左利き者の実状に鑑みた教育の在り方について何かしらの示唆を提起することは、SDGsの目標とも大きく関わる。外務省は、SDGsについて、ホームページに次の解説を掲載している⁶。

⁶ 外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html> (2019年12月30日閲覧)

持続可能な開発目標（SDGs）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さない（leave no one behind）ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

続く「持続可能な開発のための2030アジェンダと日本の取組」のページでは、「2030アジェンダ」が「相互に密接に関連した17の目標と169のターゲットから成る『持続可能な開発目標（SDGs）』」の詳細として、「目標4」に「教育」を提唱しており、また、その具体的な内容は「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」ことであると明示している⁷。

左利き者が、書字に関してストレスのない公平な教育を享受できるように努められているとは考え難い現況自身に問題がある。本問題の解決に臨むことは、SDGsの目標「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育」を提供することにも資すると考えられる。

以上をふまえ、本項のまとめとして、本研究における問題の所在について簡潔に記す。

- 21世紀、令和の時代になってもなお、書写教育の分野において、左利きに関する研究は充実していると言い難い現状にある。
- 文字を書く際の利き手の問題は、特に小中学校の教育現場で切実な課題となり続けているにもかかわらず、左利き者の書字指導に関して、書写教育研究の専門領域において十分な検討がなされてきていない。
- 左手書字への不安や課題が、就学時（文字学習入門期）をはじめとした児童の書写学習に対して集中するのは、これまでの書写教育が左手書字に関する

⁷ 同 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000270587.pdf>（2019年12月30日閲覧）

具体的な方策を立ててこなかった（こられなかった）ことも大きな要因となっている。

○左利き者の書字教育について、インクルーシブ教育や SDGs と問題が共有されていない。

（２）先行研究の検討

「1.（1）」でも述べた通り、現在、左利き者の書字教育に関して、書写教育研究の専門領域の立場から論じた日本での先行研究は、「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」「学習者研究」のどの側面に関しても充足していない。例えば、全国大学書写書道教育学会学会誌『書写書道教育研究』（同学会編）の創刊号（1987年3月発行）から2020年7月現在の最新号（第34号、2020年3月発行）に採録されている全ての論文の中で、左利きの書字及びその教育に関する論考は、小林比出代「左利き者の望ましい硬筆筆記具の持ち方に関する文献的考察—書写教育の見地から—」（『書写書道教育研究 第20号』2006 pp.30-40）と、小林比出代「利き手・非利き手での書字活動時における脳血液動態の比較—NIRS及び筆圧握圧計測装置による測定を通しての試論—」（『書写書道教育研究 第31号』2017 pp.41-47）〔詳細は「第1章」参照〕の2件のみである。

日本と同じ漢字圏である中国や韓国においても、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関する論究は散見しない。

ここで、参考までに、中国や韓国における、左利きの児童への書字学習及び指導に関して簡単に述べる〔詳細は「第3章」参照〕。

中国の教育部（日本の文部科学省に相当）が発行する『教学大纲（教学大綱）』（日本の『学習指導要領』に相当）において、2019年現在、「写字（日本の「書写」に相当）」に関する内容の中に、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関する記載はない。

韓国の韓国教育部（日本の文部科学省に相当）が発行する『国語科教育課程』（日本の『学習指導要領』の『国語編』に相当）においても、2019年現在、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関する記述はない。また、2000年発行の小学校第1学年国語科用教科書（国定）に、左利きの児童に示唆を与える文

言やイラストないしは写真は掲載されていない。

(3) 本研究の意義

「1.(1)(2)」で言及した通り、現在、日本をはじめ中国や韓国といった漢字圏においては、左利き者の書字教育に関する研究や実践が満たされていない状態にある。

書字教育に関して日本と漢字圏以外の国とでの比較を行うことは、文字体系が異なったり、書字教育で取り扱う学習用具に相違点が見られたりするために難しいと捉えられやすい。しかし、「文字を書くこと」すなわち“「目の運動」と「指・手・ウデの」「筋肉運動との連動による」「総合的な運動」⁸”そのものに着目した場合、文字体系や学習用具の相違の中にも、その教育の比較研究における多くの共通項が見出されると考えられる。

左利き者の書字教育に関して検討を試みるにあたり、日本を含む漢字圏での現況を熟慮すると、その教育の水準を深化させるためには、文字体系の違いを超えての比較研究が必至となるかと推察される。

一方において、「利き手に関して明瞭な文化差が存在」し、日本等のアジアの国々に比べて左利きが多いとされる欧米⁹〔**第1章 2.**参照〕の Handwriting の教師用指導書やテキストでは、左利きの児童生徒への学習指導内容をどのように扱っているのか。イギリスとアメリカそれぞれのテキストでの、特に筆記具の望ましい持ち方に関する記述の一例に着目し、その内容を記す。

イギリスの場合、ナショナルカリキュラム〔詳細は「**第4章 1.**」及び「**2.(2)**」参照〕に準拠した教師用指導書 ①『English Key Stage 1 ages 5-7 Teacher's Resource Book』(1995) 及び ②『The Handwriting Book』(1996) (双方とも STANLEY THORNES 発行)¹⁰において、左手での望ましい筆記具の持ち方は右手での望ましい持ち方とペアにしてイラストで提示されている

⁸ 平井昌夫『国語教育学原理』(明治図書 1969) p.230

⁹ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(朝倉書店 1997) p.120. p.122.

¹⁰ 詳細は、小林比出代「教育目標から見た英・米国の Handwriting の教育と日本の書写教育」(『書写書道教育研究 第12号』1998, pp.20-29.) 及び「『The Education Reform act (1988年教育改革法)』制定以降のイギリスにおける Handwriting の教育の在り方」(『同 第14号』2000, pp.65-75.) 参照。

11. その際、左手での持ち方は、右手での持ち方を反転させた対称的な関係にある。また、両者とも用紙の置き方に関する説明も加えられている。さらに、②では、「LEFT-HANDERS」として、左利きの児童の姿勢・用紙の置き方・筆記具の持ち方等について詳細な説明を加えている¹²。

アメリカの場合も、Fayetteville Street Elementary School¹³で用いていたテキスト『HANDWRITING BASIC SKILLS and APPLICATION』（Zaner-Bloser, Inc. 1984）では、冒頭において、「Pencil Position」として左手での望ましい筆記具の持ち方を、右手での望ましい持ち方と全て対称的な関係にして、右手での持ち方と一緒にイラストで示している。また、用紙の置き方に関しても、右手書字と左手書字双方の場合について図示している。

漢字圏には見られない、欧米の英語圏ないしはアルファベット圏の国々においての左利き者をめぐる書字教育の実状を考察することによって、これからの日本における在り方を検討していく際の、何らかの手掛かりが掴めるのではないかと期待が持てる。

ただし、アメリカの場合、教育は各州の責任事項とされており、ジョージ・W・ブッシュ政権以前は、いわゆる日本での「学習指導要領」的な、全米にわたって共通する教育の指針が存在しなかったため、数多くの州各々による教育の指針が作成され、その自由度も高く、様々な在り方が推察された。しかし、2010年に、州を超えた全米共通の基準を表明する共通コア・スタンダード（Common Core State Standards : CCSS）が発表され、その導入を後押しするバラク・オバマ政権の方針もあり、現在では、全米規模での基準策定に取り組む教育改革が実施されている¹⁴。CCSSには、国語科（English Language Arts）のスタンダードが設定されているが、Handwritingについては記述がない¹⁵。CCSSにHandwritingに関する記述がない点に対して意義を唱えた上で、

¹¹ STANLEY THORNES : *English Key Stage 1 ages 5-7 Teacher's Resource Book*, (1995), 113p. (「Left hand」, 簡略な説明も附記.) STANLEY THORNES : *The Handwriting Book*, (1996), p. 9.

¹² Ibid., 11-12.

¹³ North Carolina 州の公立小学校。2001年度の End of Grade Test（1年に1回実施される児童の学力テスト）で North Carolina 州のトップ 25となる。2001(平成 13)年、信州大学及び US-Japan Foundation による「現代アメリカ研究」でのプロジェクトで訪問。

¹⁴ 西口啓太「米国の国語教育における書くことの領域の教育課程 —Common Core State Standards にみる初等・中等教育の系統性—」(『神戸大学 研究論叢 第 25 号』2019) p.13, p.15.

¹⁵ Common Core State Standards Initiative. Standard in Your State. <http://www.corestandards.org/standards-in-your-state/> (2019年12月31日閲覧)

「Handwriting に関して学習することによって脳の働きを高めることができ、この最も基礎的なこと（=Handwriting）について教えないことは、他の分野での習得の妨げになってしまう」と主張する論考もある¹⁶。こうした言及から、アメリカでは、Handwriting の学習指導そのものが CCSS から抜けている現況が明らかであり、延いては、左利き者への Handwriting の教育についても公にはほとんど考慮がなされていない状況が推測できる。アメリカにおける、左利きの児童生徒の学習指導に関しては、特別なニーズの一つとして、Special needs education（特別支援教育）の文脈の中で扱う向きも見られる¹⁷が、その場合においても CCSS に Handwriting の項目が記載されていないとの問題は残る。

本論考では、書字教育に関して国としての教育指針がある程度共通に示されており、かつ、これまでに、日本における書字教育の先行研究で比較対象とされてきてはいないが、日本の書字教育—特に左利き者の書字教育に関して—に示唆を与える可能性を予見させるイギリス、オーストラリア、フランスでの書字教育の在り方を比較研究の対象として、比較教育的な見地から左利き者の書字教育について考察を試みる。

上記の比較教育研究の内容を含め、本研究の意義を箇条書きにてまとめる。
○利き手及び左利き者の書字に関する研究を多角的に行うための基礎研究を深化することができる。

=医学（生物学・生理学）や心理学の分野における、利き手及び左利きに関する学際的文献を渉猟整理し、関係学問領域の成果を援用することができる。

○「利き手」との観点からの右手と左手の平等性に基づく、学習者（左利き者）の多様性に応じた学習指導方法を探求すること、及び、その具体的な方策に関して考究することができる。

¹⁶ Handwriting and the Common Core State Standards
<http://www.upub.net/The-Great-Debate-Writing-by-Hand-vs-Keyboarding-News.html>
(2019年12月31日閲覧)

¹⁷ Mary Grace N. Bamba (2019). RECOGNIZING SPECIAL NEEDS OF LEFT-HANDED PUPILS IN WRITING, Depedbataan.com Publications, The Official Website of DepED Division ofataan.

- 比較書字教育研究の意義に鑑みた、左利き者をめぐるアルファベット圏での書字教育の実状に関して考察することができる。
- 比較教育学の見地からの、日本における左利き者の書字教育に寄与できる観点を把握すること、及び、本研究課題に必要な分析視点を整理することができる。
- 文化的制約等乗り越えて教育を向上させる、左利き者の書字教育に関して大局的な着眼点から論究することができる。

2. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

「1.(3)」をふまえ、本研究の目的を記す。

- 利き手及び左利き者の書字に関する研究を多角的に行うための基礎研究、すなわち、医学（生物学・生理学）や心理学の分野における、利き手及び左利きに関する学際的文献を渉猟整理し、関係学問領域の成果を援用することを通して、左利き者の書字教育研究における課題の視点を明確にすること。
- 「利き手」との観点からの右手と左手の平等性に基づく、学習者（左利き者）の多様性に応じた学習指導の方法を探求し、その具体的な方策について明示すること。
- 比較書字教育研究の意義に鑑みて、左利き者をめぐるアルファベット圏での書字教育の実状を明らかにすること。
- 比較教育学の見地からの、日本における左利き者の書字教育に寄与できる観点を把握し、左利き者の書字教育研究に必要な分析視点を整理すること。
- 文化的な制約等乗り越えて教育を向上させる姿勢をふまえて、左利き者の書字教育の在り方を大局的な着眼点から展望すること。

(2) 研究の方法

本研究では、最初に、書写教育の見地だけでは解明し難い、利き手及び左利き者の書字に関する研究を多角的に行っていくための基礎的な研究として、医学（生物学・生理学）や心理学の分野における、利き手及び左利きに関する先行研究について考察する。続いて、教育及び学習者としての観点から左利き者

の書字について検討することで、「利き手」との観点から右手と左手の平等性に基づいて、左利き者が無理なく書字に臨めるように、学習者の多様性に応じた学習指導の在り方を探求することの重要性とその具体的な方策について考究する。一方、文字体系の違いを超えて遂行する比較書字教育研究の意義に鑑みながら、比較教育学の見地から、日本と同じ漢字圏である中国や韓国においての、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関して概観した上で、英語ないしはアルファベット圏の国々においての左利き者をめぐる書字教育の実状について考察する。具体的には、イギリス、オーストラリア、フランスの書字教育政策に検討を加え、史的変遷の特徴と意義を明らかにする。このことにより、日本における左利き者の書字教育に寄与できる詳細な観点を把握するとともに、本研究課題に必要な分析視点を整理することに努める。さらには、左利き者の書字教育に関する大局的な着眼から、文化的背景や社会的常識及び習慣、ないしは伝統や慣習、もしくは偏見、または多数派文化を重んじる風潮等をも包含した上での、文化的制約を乗り越え教育を向上させていくための基礎研究と位置づけたい。

本論考は3部構成から成る。最初に「**第Ⅰ部**」において「学習者研究」に重きを置き、続く「**第Ⅱ部**」において、本論考で研究対象とする国々の「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」にふれる。このことにより、教育における基礎研究の諸側面を導き、結果として「**第Ⅰ部**」「**第Ⅱ部**」全体で左利き者の書字教育に関する基礎研究となる構成になっている。

具体的には、本論考における研究の意義と目的に鑑み、課題を遂行するために、本論を「**第Ⅰ部 左利き及び左利き者の研究**」（「**第1章**」～「**第2章**」）、「**第Ⅱ部 左利き者の書字教育に関する比較研究**」（「**第3章**」～「**第5章**」）、「**第Ⅲ部 左利き者の書字教育に関する今後の展望**」（「**第6章**」～「**第7章**」）との3部構成にする。

「**第Ⅰ部**」では、はじめに、「**第1章**」において、医学（生物学・生理学）や心理学の分野での先行研究に基づき、左利き及び左利き者の書字に関する文献的考察を行う。さらには、臨床生理学（脳生理学）的な見地から左利き者の書

字に関わる試論を提起する。その上で、「第2章」において、保護者を対象とした意識調査や昨今の新聞記事、及び小学校学習指導要領での左利き者への学習指導に関する内容の変遷に鑑み、教育及び学習者との観点から左利き及び左利き者の書字に関して考察した上で、左利き者が無理なく書字する要件の一つに用紙の置き方を掲げ、具体的にその方法を提唱した日本での先行文献に関し検証する。

これらを受けて、「第II部」では、「第3章」で、日本と同じ漢字圏である中国や韓国において示される、国としての書字学習及び指導に関する教育指針を約説し、左利き及び左利き者の書字に関する漢字圏（中国、韓国、日本）での現状を確認する。その上で、「第4章」でイギリス、「第5章」で、日本の学習指導要領に相当する教育指針が存在する、イギリス以外のアルファベット圏の国における例として、オーストラリアとフランスの在り方について考察する。特に、「第4章」においては、左利き者の書字教育について検討するために肝要な視点を明確にするために、イギリスで出版された左利き者の書字教育に関する書籍（4冊中3冊が未邦訳）について和訳及び考察を試みる。

「第I部」と「第II部」を総括する「第III部」では、「第6章」において、「第4章」及び「第5章」での考察に基づき、漢字圏とアルファベット圏の国々での、左利き者への書字教育に関する比較から得られる示唆と課題の提示を大局的に行う。さらには、漢字圏とアルファベット圏各国における左利き者の書字教育に関する在り方の違いについて、日本における「文字を書くこと」に関する「伝統」「文化」の観点から試論を繰り広げる。その上で、「第7章」では、はじめに、漢字圏とアルファベット圏における文化や社会性の違いを熟考し、漢字圏における、左手書字から右手書字への変更を強いるとの古からの慣例に、東洋特有の伝統文化「書道」とそのための文具「毛筆」の存在が与えた影響に関して考究する。また、左利き者の書字学習と特別支援教育における書字学習に通底する、「利き手」との観点に立脚すると、「右手と左手は平等である」との見解、及び、最新テクノロジーを活用した、全ての人が快適に暮らせる社会の実現、すなわち「Society 5.0（ソサエティ 5.0）」の方向性に沿った試論を提案する。さらには、日本政府の、全ての人が快適に暮らせる社会の実現との方向性に則り、かつ、現代日本の教育改革で重視する、全ての人を包容した中正

で均等な質の高い教育を供する姿勢に鑑みて、左利き者の書字及びその指導に関わる研究における今後の至要な視点として、「利き手」との觀念に基づき、比較教育学と臨床生理学（脳生理学）との両面から検討する必要性についても試論を展開し、左利き者の書字教育に関する展望についてまとめる。

第 1 部

左利き及び左利き者の 研究

第 1 章

左利き及び左利き者の 医学的・心理学的考察

本章では、学際的文献を渉猟整理し、関係学問領域の成果を援用するために、医学（生物学・生理学（主として大脳生理学・神経生理学））及び心理学（主として神経心理学・発達心理学・教育心理学）の分野での先行研究に基づき、左利き及び左利き者の書字に関する文献的考察を行った上で、試論を展開する。

なお、左利きの割合、及び左利きの発生起源や大脳との関係については、医学（生物学・生理学）及び心理学分野における先行研究の内容を紹介することとし、前者を「2.」に、後者を「3.」「4.」にまとめる。

1. 「左利き」の定義と「ラテラリティ」

左利きの定義に際して、石田は、「Bent はきき手の定義として、「経験しない新な(ママ)、手を用いる仕事に着手する時、好んで用いる手」となし、R.Brain は、「もつとも(ママ)繊細で正確な仕事をなす時に用いる側の手で、実際に円滑に仕事を遂行しうる側の手」と定義しているが、いずれも好んで用いる手 **manual preference** と左右の機能的非対称性 **functional asymmetry** という考(ママ)を基礎にして定義している。一方 Roudinesco と Thiss は「左手が右手よりいつそう熟達しており(**skillful**)、この自然の傾向に対して外界よりの影響なしに左手を使う時、左きき」と定義している。」としている¹。また、馬場は、石田の定義を受けて、「前者（※Bent の定義をさす(小林注)）は“**manual preference**”による定義であり、後者（※Brain の定義をさす(小林注)）は“**skillfulness**”による定義であるが、多くの研究者は表立った定義を行うことなく、**preference** と **skillfulness** は通常一致するものと考えている場合が多いようである。」としている²。伴は、石田や馬場の定義をふまえて、「多くの研究者もこの定義（※Bent や Brain の定義をさす(小林注)）がほぼ妥当と考えている。」として、「左利きの定義として「経験しない新たな、手を用いる仕事に着手する時、好んで用いる手」という **Bent** の定義が妥当であろう。」と述べている³。本論考における「利き手」及び「左利き」の考え方は、基本的に上記の定義に基づくものとする。

¹ 石田肇「IV. 左きき **Left handedness**」(『小児の微症状 病気と健康の間』(馬場一雄・上田穰編 医学書院)1966) pp.529-530.

² 馬場一雄「左利き」(『小児内科 第28巻第10号』(東京医学社)1996) p.1447.

³ 伴貞彦「左利き者の言語中枢について(第一報) 一文献的考察一」(『神戸市看護大学短期大学部紀要 第19号』2000) p.119. p.122.

八田は、人間はおよそ左右対称に対となる身体器官を持っているが、左右両側にある各身体器官を同じ頻度で用いることは少なく、どちらか一方の側に偏って使用することが多いことを指摘した上で、「一方の側に偏ってもっぱら使用する」というこのような現象はラテラルリティあるいは偏側性と呼ばれるものであり、その最も顕著なものが手の使用、すなわちきき手である。」⁴と述べている。坂野も、「(ラテラルリティとは(小林注)、)強いて訳すれば一側性または片側化(となり(小林注))、要するにこれは、手、足、目、耳のような左右が対になっている器官、あるいはそれに類する器官の構造や機能が対称的でないことをいう。」⁵として、「左右一对の対称的な器官の間に構造的、あるいは機能的な偏りがあるとき、その現象はラテラルリティと呼ばれる。利き手はこのラテラルリティの代表的なものである。」⁶と述べている。さらに坂野は、「利き手とは、手を使う動作や操作の際に、一方の手を他方の手よりも好んで使用する傾向のことである。」⁷とした上で、利き手の診断は、「利き手を測る5項目」すなわち「①字を書く手 ②ボールを投げる手 ③絵を描く手 ④はさみを使う手 ⑤歯ブラシをもつ手」により、得点を100とマイナス100の間に分布するようにして利き手の程度を測る方法が有用であるとし⁸、この値のことを「ラテラルリティ(偏りの程度)指数」と呼んでいる⁹。伴は、坂野の定義に基づき、「一般に左利きという場合には、左右を使う割合がほぼ等しい両手利きも相当程度含んでいることになる。」¹⁰としている。

以上の論をふまえた上で、本稿における「利き手」及び「左利き」の定義は、その論考意図に鑑みて「書字する際、どちらの手を優先的に使用するか、というこのみに限定して利き手を決定」し、「書字する際、左手を優先的に使用する場合を左利きとする」との橋本の定義¹¹を用いることとする。

2. 左利きの割合

⁴ 八田武志『左ききの神経心理学』(医歯薬出版株式会社 1996) p.17.

⁵ 坂野登『かくれた左利きと右脳』(青木書店 1982) p.36.

⁶ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(朝倉書店 1997) pp.120-121.

⁷ 坂野登『かくれた左利きと右脳』(前掲書) p.36.

⁸ 坂野登『かくれた左利きと右脳』(前掲書) p.122.

坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の“性格”と“クセ”』(日本実業出版社 1998) p.14.

⁹ 坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の“性格”と“クセ”』(前掲書) p.15.

¹⁰ 伴貞彦「左利き者の言語中枢について(第一報)一文獻的考察一」(前掲書) p.120.

¹¹ 橋本愛『書字における利き手の差に関する研究』(上越教育大学修士論文 2003) p.3.

左利きの発現頻度は1～22%の広範囲にわたって報じられているが、イギリス・中国・イスラエルの調査でいずれも約10%の数値が報告されていることから、一般的には民族にかかわらず約10%と考えられている¹²。伊田は、「欧米では、現在、左利きの割合を10%程度とするのが一般的である」とした上で、「台湾や韓国、インド、日本などのアジアの国々では左利きの割合は低い。日本では3～4%と推定されている。利き手には明瞭な文化差が存在するのである。」と述べている¹³。久保田も、5,688人を対象とした利き手のアンケート調査から、書字の場合、98%の人が右手で書き、2.6%の人が左手で書くとの結果をふまえ、「欧米の調査にくらべて、(日本では(小林注))左利きの割合が非常に少ないのが特徴である。日本人で左手で字を書く人が圧倒的に少ないのは、家庭でのしつけによって矯正されるためである。」と結論づけている¹⁴。小川は、日本人の利き手の世代間比較をした Hatta and Kawakami(1994)を受けて、「過去20年間に左手利きは、男女ともに1.9%増加し、それぞれ6.2%と4.2%であったということである。〔中略〕つまり、現在の世の中は左手利きの者を許容する社会になってきていることを示していると考えられる。」としている¹⁵。

3. 左利きの発現起源と種類

酒井は、「左利きの発現起源」を解明するための仮説として、「自然淘汰説」「慣用説」「胎児の位置による説」「視覚の相違による説」「左右頸動脈における血液量の相違による説明」を紹介し、「左右頸動脈における血液量の相違による説明」が最も有力な右手利きの説明であるとしている¹⁶。八田は、「左利きが生まれるメカニズム」について提唱した新しい考え方として、「遺伝説」「脳損傷説」「脳梁発達説」「脳内ホルモン説」を紹介し、「脳内ホルモン説」すなわち1985年に発表された Geschwind の理論が、「最近のラテラルリティ研究の成果のうちで最も影響力の大きい、かつ包括的な理論」としている¹⁷。この理論では、ホルモンの関与と書き手の発現について論じた上で、「人口の70%は右き

¹² 伴貞彦「左利き者の言語中枢について(第一報)―文献的考察―」(前掲書) p.120.

馬場一雄「左利き」(前掲書) p.1447. 坂野登『かくれた左利きと右脳』(前掲書) p.35.

¹³ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(前掲書) p.120.

¹⁴ 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』(紀伊國屋書店 1982) p.134.

¹⁵ 小川嗣夫「利き手に関する研究」(『人間文化研究(京都学園大学人間文化学会紀要)』1999) p.35.

¹⁶ 酒井清「児童における利き手の意義と矯正の指導」(『明星大学部紀要』1984) p.63.

¹⁷ 八田武志『左ききの神経心理学』(前掲書) p.63.

きで言語は左脳がその機能を担っている「標準的ラテラリティ(Standard Dominance)」で、残りの30%は左ききで右脳あるいは左右両方の脳が言語機能に関係している「変則的ラテラリティ(Anoumalous Dominance)」である。後者は遺伝によることはわずかであり、妊娠の中～後期の非遺伝的な要因、つまり環境要因によって生じる。」としている¹⁸。

なお、左利きは2種に大別されている。馬場は、「いわゆる通常型の左利き(ordinary left handedness)〔中略〕とは別に、病的左利き(pathological left handedness)が存在することが、古くから知られている。ここにいう病的左利きとは胎児期や新生児期に左半球が障害されたために、本来右利きの個体が左利きとなってしまった場合をいう(Sazt)。」¹⁹、伊田は、「左利きの一部には、遺伝的には右利きであったが、右手の運動を担う左大脳半球に発達過程の初期に微細な損傷を受けたために、左利きに変わってしまった者がいる〔中略〕。こうして生まれた左利きを病理的左利きという。」²⁰、前原は、「病的左手利きとは、本来は右手利きでありながら、脳の障害により、優位性が変化したためにできた左手利きのことです。」²¹と説明している。

4. 利き手と大脳との関係

利き手及び左利きと大脳との関係について、医学(生物学・生理学)・心理学分野における先行研究の結果を以下に列挙する。なお、本項で参照した文献は次の通りである。

- 大井学「利き手の発達と指導についての試論」
(『乳幼児保育研究』(京都大学乳幼児保育研究会編) 1976)
- 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』(紀伊國屋書店 1982)
- 坂野登『かくれた左利きと右脳』(青木書店 1982)
- 八田武志『左ききの神経心理学』(医歯薬出版株式会社 1996)
- 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(朝倉書店 1997)
- 坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の“性格”と“クセ”』(日本実業出版 1998)

¹⁸ 八田武志『左ききの神経心理学』(前掲書) p.64.

¹⁹ 馬場一雄「左利き」(前掲書) p.1447.

²⁰ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(前掲書) pp.123-124.

²¹ 前原勝矢『右利き・左利きの科学 利き手・利き足・利き眼・聞き耳…』(講談社 1989) p.48.

- 伴貞彦「左利き者の言語中枢について(第一報) —文献的考察—」
(『神戸市看護大学短期大学部紀要 第19号 2000])
- クリス・マクマナス著 大貫昌子訳『非対称の起源 偶然か、必然か』
(講談社 2006)
- 八田武志『左対右 きき手大研究』(化学同人 2008)
- 八田武志『「左脳・右脳神話」の誤解を解く』(化学同人 2013)

○大脳の側頭平面(=ウェルニッケの感覚性言語野・ことばの意味の理解に関係する領域)は、左脳と右脳で大きさが違い非対称である。従って、この場所で営まれることばを理解する機能にも左右差が出る。また、側頭平面の非対称性は人間の胎児にも認められることから、非対称性は生まれつき遺伝的に起こっていると考えられる。この左右の脳の形は利き手によっても異なり、左右差のある脳を持つ者は右利きに多く、左右差のない脳を持つ者は左利きに多い。つまり、右利きの大多数が側頭平面は左脳で広いのに対し、左利きでは側頭平面が左脳で広いことも右脳で広いこともある。

○利き手と大脳優位性(側性化)の関係について、言語機能に関しては、右利きの場合、左半球が言語優位の人95~96%・右半球の人4~5%・両半球の人0%と、圧倒的に左半球に側性化している。一方、左利きの場合、左半球が言語優位の人61~70%・右半球の人15~19%・両半球の人15~20%と、やはり言語機能が左半球にある割合は高いものの、言語機能が右半球にあったり両半球にまたがっていたりする割合もかなり高く、右利きとは明らかに異なる脳の機能体制を持つ者が相当数いる。右利きには左脳の言語優位が多いが、左利きには左脳優位の人と右脳優位の人が含まれることがわかる。

○このように、左利きには、①右利きとは反対に右脳に言語中枢があるタイプ
②右利きと同様に左脳に言語中枢があるが、左脳は言語中枢、右脳は非言語中枢という分業体制が右利きほどはっきりしないタイプの2種類がある。さらに、言語機能の障害である失語と利き手との関係や、左脳・右脳障害の発生率及びその回復状況と利き手との関係から、左利きの言語機能はどちらかの脳に完全には分化しておらず両方の脳で行われている、すなわち左利き者の言語脳は未分化の場合があると考えられる。左利き者は、右利き者と比

べて言語機能が片側半球に偏在している程度が弱く、左利き者の言語処理には両半球のかかわりが強いともいえる。

○右脳は空間関係の認知や、認知された情報に基づいて手で処理する機能に優れている。また、利き手でない手の方が空間情報の処理に優れている。よって、手からの体性感覚の情報を使う作業では、右利き者は「右脳—左手」の方が「左脳—右手」より優れている。左利き者ではこの逆になる。なお、右半球は非言語・空間言語に優れてはいるが、これは左半球に比べて相対的に優れるという意味であり、左半球に空間能力がないという意味ではない。同様に右半球にもある程度の言語能力はある。

○以上の先行研究をふまえると、右脳と左脳で分業があるため手の使い方には左右差が存在することから、手を使う際は右と左の特徴を使いわけの方がよいと考えられる。利き手は言語を媒介する機能・ことばで考えたことを実現する機能・単純に掴む／摘む／握ることから書くことまでの機能に、非利き手は手探り・空間認知、さらにそれを手がかりとして実現する機能に使うとの方向性が導き出される。

5. 順手と逆手 —Levy の仮説から—

左利きの人々の言語脳は約 60%が左脳で、約 40%が右脳もしくは双方にまたがっているが、右利き者もまれに右脳が言語脳になることが報告されている²²。Levy 他は、書字の際に順手と逆手とがあることに着目し、書字行為における 2 種類の手の使い方（手首の曲げ方）と脳機能との関係についての仮説を報告している²³。Levy 他は、左利きの順手書字者の言語脳は右であるが、左利きの逆手書字者の言語脳は左、また、右利きの順手書字者の言語脳は左であるが、まれに見る右利きの逆手書字者の言語脳は右、つまり、順手で書字する人の言語機能はその人の非きき手側の脳半球にあり、逆手の人の言語機能はきき手側

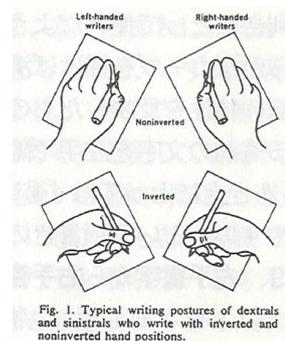


図 1 順手(上段)と
逆手(下段)

Levy, J., and Reid, M.
: Variations in
Writing Posture
and Cerebral
Organization.; 337p.

²² 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』（前掲書）p.151

²³ Jerre Levy and Marylou Reid : Variations in Writing Posture and Cerebral Organization, *Science*, 194, (1976), 337-339.

の大腦半球にあると指摘した。

この見解に対して坂野は、「そのなかで興味深いのは、〔中略〕強い左利き(=「手首をまげずに書く左手書き」と記述、小林注)の利き脳は分化しているのにたいし、弱い左利き(=「手首をまげて書く左手書き」と記述、小林注)の利き脳はよく分化していない(ことである(小林注))〔中略〕。手首をまげる左手利きは、普通の左利きに比べて、〔中略〕利き脳の未分化(であると(小林注))している。とにかく、字を書く際の手首のまげ方が、利き脳の部位と分化の程度を示す可能性をもっているという最新の知見は、非常に興味深いものである。ただしこれは、左利きを右利きに転換するとか、手首のまげ方を含めて、書き方を強制するという傾向が少ないアメリカでみられる事象なので、日本でこの方法を応用する際には、かなりの注意が必要であろう。」と述べた上で、「左手で文字を書くときの手首のまがり方によって、言語の利き脳を推定する可能性はありそうである。もちろん、この説を否定する資料もでてきている。」と指摘する²⁴。

八田は、Levy の仮説について「どの程度手首を歪めれば逆手と判定するかなど細かい点が不明であることや、書字の方法がなぜ言語機能を反映するかについての説明が曖昧であるといった問題も含んでいる。」とし、Levy の見解への否定的知見を4例紹介した上で、「書字の方法と言語脳との関係は Levy がいうようなものではなさそうである。」と結論づけている²⁵。また、「わが国では書字の姿勢とラテラリティを扱った研究はまだ公刊されていないように見受けられる」とも指摘する²⁶。

書字行為における順手・逆手(手首の曲げ方)と脳機能との関係について諸説ある現在、左利き者の望ましい筆記具の持ち方を検討するにあたっては、例えば逆手を順手に変更させる等といったことは行わず、順手か逆手か各自の構えやすさを尊重し、両者における望ましい持ち方を考察する必要があるだろう。

6. 幼児期の利き手

²⁴ 坂野登『かくれた左利きと右脳』(前掲書) pp.93-97.

²⁵ 八田武志『左ききの神経心理学』(前掲書) pp.120-122.

²⁶ 八田武志『左ききの神経心理学』(前掲書)によると、日本における逆手での書字の割合は欧米に比べ著しく少なく(p.123.)、利き手を問わず逆手で書字する日本人は0.046%にすぎないとしている(p.118.)。

子どもの成長過程における利き手の発達に関しては、Gesell 他によって調査・発表されている²⁷。これを受けて八田は、「左右の手の使用は、2～3歳頃にどちらの手も同じように用いる時期があり、それが4～6歳頃にどちらか一方の手の使用に移行し、7歳以降はそのままで変更がない」とし²⁸、坂野は、「利き手は8歳頃に安定してくるという。これは脳のなかの前頭葉のはたらきが質的に変化する時期でもある。」としている²⁹。さらに坂野は、「利き手が8歳頃に安定するまでには、何度も両手利きがでてきたり、利き手が逆に入れかわるという時期を経るのであって、このような変化が知的発達にともなって起きる〔中略〕。いわば利き手の不安定さが、知的発達にとって重要な指標であったわけである。」と述べ³⁰、亀口も、「四才以前における一時的な左手への移行を、完全な左利きへの前兆として心配する必要はない。」としている³¹。また、大井は、「Annett(1970)は3歳半から15歳を対象とした研究において、語彙の少ないものでは左手のスキルが劣ることをみだし、言語能力の成長にとっては左手のスキルが重要だとのべている。」とした上で、「右一側から両側面性への移行という現象を大脳の右半球の成熟からとらえなおす(Steffen 1975)ならば、その時期に左手の活動を促進することは当然であるし、左手への禁止的な働きかけが発達を否める危険性は高い。」と述べている³²。

7. 利き手への社会的・文化的影響

大井は、「利き手の形成には〔中略〕、子ども自身の活動や両親と保育者の訓練の果たす役割も決して無視はできない」とし³³、酒井は、「左利きが望ましくないとされるのは手の左利きであり、脚や目の利きはほとんど問題視されていない。とすれば手の左利きは手作業における不都合の故であり、人間の生活での不利がその主たる理由であろう。」とする³⁴。「序章」からもわかるように、特に日本においては左利きに対する社会的・文化的な影響が大きいと考えられ

²⁷ Gesell, A., and Ames, L. B. : The Development of Handedness, *The Journal of Genetic Psychology*, 70, (1947), 155-175.

²⁸ 八田武志『左ききの神経心理学』(前掲書) pp.171-172.

²⁹ 坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の「性格」と「クセ」』(前掲書) 14p.

³⁰ 坂野登『かくれた左利きと右脳』(前掲書) 217p.

³¹ 亀口憲治「利き手の理論とその指導」(『教育と医学』(教育と医学の会編)1976) 327p.

³² 大井学「利き手の発達と指導についての試論」(前掲書) 66p.

³³ 大井学「利き手の発達と指導についての試論」(前掲書) 75p.

³⁴ 酒井清「児童における利き手の意義と矯正の指導」(前掲書) 67-68pp.

る。これは、「第1章 2.」で記した通り、久保田が「欧米の調査にくらべて、（日本では(小林注)) 左利きの割合が非常に少ないのが特徴である。日本人で左手で字を書く人が圧倒的に少ないのは、家庭でのしつけによって矯正されるためである。」と指摘し³⁵、伊田が「アジアの国々では左利きの割合は低」く「利き手には明瞭な文化差が存在する」こと、そして、「このような社会・文化的圧力は、思想や教育の変化とともにその強さを変える。一般に保守的な時代や国、民族ほど左利きは少ない。〔中略〕欧米に比べて日本などのアジアの国々に左利きが少ないのも、保守的な社会ゆえとされる。」と述べた上で、「利き手の矯正の対象となりやすいのは、食事のときの手（箸、フォーク、ナイフなど）と字を書く手である。日本に左利きの少ないことは字を書く手で明瞭に示される。〔中略〕この違いの主な要因は社会・文化的圧力にあると考えられる」と言及している³⁶ことから明らかである。この点について前原は、「矯正」への社会的圧力が書字と箸の使用とに集中していることを受け、「書字と食器に対する習慣の強さは、東洋文化の特徴といえるかもしれませんが。しかしこの習慣の強さの根本には、思想の違いというよりも食器や文具の違いにあると考えられます。」と述べている³⁷。

8. 書字における右手の優位性

前項での考察にあわせ、本項では、各文献で指摘する書字活動を右手で行うことの優位性を、硬筆で書字する場合に限定してまとめてみる。

伊田は、「漢字の筆順や筆使いは右手で書きやすく工夫されている。左側から右側へと点画を書いていくと、右手ではすでに書いた部分を見ながら書き進めることができるが、左手では手が邪魔になって見にくい。左手で横画を左から右へ、右上がりに書こうとすると筆を押す形になってやりにくい。やりやすく書くと右下がりのきたない字になる。〔中略〕このような右手用の書き方が、左手で字を書く者を減少させる要因の1つと考えられる。漢字はアルファベットに比べて左手と右手の間の書きやすさの違いが大きい。日本などの漢字を使う国に左手で字を書く者が少ないのは、この相違によるものとの指摘がある。」と

³⁵ 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』（前掲書）134p.

³⁶ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』（前掲書）p.120. pp.122-123.

³⁷ 前原勝矢『右利き・左利きの科学 利き手・利き足・利き眼・聞き耳…』（前掲書）p.62.

述べている³⁸。また、亀口は、「この左から右への書字の方向は、明らかに右手で書く場合に好都合である。〔中略〕ペンは押すよりも引く力の方が書きやすいように作られている〔中略〕。(左利きの書字に関しては(小林注))鏡映文字、つまり、文字を鏡にうつしたように左右逆に書く〔中略〕。というのは、手の動作としては「押す」よりも「引く」方がスムーズだからである。つまり、文字そのものが、もともと右利きにとって便利なように作られている。左手にとっての書きやすさと言うことを前提にして考えれば、むしろ鏡映文字の方が適しているのである。」³⁹とし、八田も、「手書きのときの線の運動がアルファベットでは滑らかなカーブを描けば済むのに対して、日本の表記では漢字でのように押す運動と引く運動が混在するという表記の特性を反映したもののように思われる。」と指摘する⁴⁰。さらに副次的な点として、「横書きも縦書きも左手で書くとすれば、書こうとする直前の文字を左手で隠しつつ次の文字を書くことになるし、書いた文字を擦り汚しつつ進むことにもなる。細かくみる人は、右手の子に比べ書くときに手を伸ばすよりも、むしろ腕を曲げることとなり疲労しやすいともいう。」との指摘⁴¹や、「右ききにとっては「書いたあとをこすらないですむ」「書き終わった部分が見える」「書類を参照するときめくりやすい」という横書きの利点も、左ききにとっては欠点としかいいようがありません。」との指摘もある⁴²。

9. 左手書字から右手書字への「矯正」の是非

以上をふまえて、医学(生物学・生理学)・心理学の見地から、左手書字から右手書字への「矯正」の是非について考察する。

(1) 幼児期における左手書字から右手書字への「矯正」

「第1章 6.」にまとめたように、子どもの発達の早期に左利きの傾向が現れるのは自然なことである。子どもの利き手の「矯正」の是非については様々な見解があるが、幼児期から小学校入学時頃までの利き手に関しては、子ども

³⁸ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(前掲書) pp.124-126.

³⁹ 亀口憲治「利き手の理論とその指導」(前掲書) pp.325-326.

⁴⁰ 八田武志『左ききの神経心理学』(前掲書) pp.119-120.

⁴¹ 酒井清「児童における利き手の意義と矯正の指導」(前掲書) pp.67-68.

⁴² フェリシモ左きき友の会&大路直哉『左ききでいこう! 一愛すべき21世紀の個性のために』(フェリシモ 2000) p.74.

の発達段階を把握した上で利き手の不安定さは当然のことと捉え、その時々でのありのままの姿を受け入れていくことが必要だと考える。幼児期における左手から右手への「矯正」に関して、例えば、鈴木他は、右手書字を習慣とする左利き右半球性失語の例として、ブローカ失語にジャルゴン失書を伴った左利き右半球性失語の、日本における第1例目を報告している⁴³。症例は、69歳男性が右前頭頭頂葉の脳梗塞後に自発語がほとんどない（ブローカ失語）のとは対照的に、自発書字では漢字単語は意味をとれるが、仮名は全く意味のとれないジャルゴン失書を示したものである。本例は、生来左利きだったが幼時期に右利きに「矯正」され書字は右手で獲得していたため、書字の運動記憶心像が左半球優位に形成されたが、右半球病変により言語機能が障害され右半球の統制を失った結果、ジャルゴン失書を呈したと考えられている。また、山鳥は、利き手は左であるが書字のみ右手の57歳男性に生じた失書の例として、書字に関与する左半球と右半球の連合機能を阻害した結果、口頭で異常を生じない音声系列が正確な文字系列に転換できないという症例について報告している⁴⁴。

一方、大井は、「早期の矯正については賛否両論がありまだ定説というものはないのである」としながらも Hildreth の論(1950)を紹介している⁴⁵。Hildreth は、利き手の変更に関して注意すべき14の項目を挙げ、これらを前提条件とするならば変更も不可能ではないとする⁴⁶。しかし、この項目の1つに、対象の子どもの年齢が6歳以下であることが挙げられていることから、これまでの考察をふまえると賛同しかねる論と捉えることができる。

また、小枝他は、普通小学生へのアンケート調査から、幼児期に左利きから右利きに変わった児童は仮名の誤りが少なく、また、左利きのままの児童と右利きから左利きに変わった児童に、学習能力障害等の発達障害児に認められる仮名の誤りが多かったことから、左利きの幼児に対し利き手の「矯正」は試みてもよいとしている⁴⁷。これに対して林他は、4歳11ヶ月の女兒の症例として、

⁴³ 鈴木匡子 山鳥重 遠藤佳子 藤井俊勝「ジャルゴン失書を呈した右利き右半球性ブローカ失語の1例」(『臨床神経学 第37巻第5号』(日本神経学会編)1997) pp.383-386.

⁴⁴ 山鳥重「左利きに生じた純粋失書」(『失語症研究 日本失語症学会誌』(日本失語症学会編)1981) p.49.

⁴⁵ 大井学「利き手の発達と指導についての試論」(前掲書) p.77.

⁴⁶ Hildreth, G: The Development and Training of Hand Dominance, *The Journal of Genetic Psychology*, 76, (1950), 101-144.

⁴⁷ 小枝達也 竹下研三「利き手の矯正と書字の誤り」(『脳と発達 第20号第3巻』(日本小児神経学会編)1988) p.13.

右側優位の麻痺による左利き状態を右手使いに「矯正」する過程で鏡像文字が憎悪した例を報告している。強引に右手での書字に「矯正」したところ、もともと認められた鏡像書字がより目立つ上、書字自体を嫌がりだし文字学習への意欲を失ったが、利き手の「矯正」を中止したところ書字は全面的に左手書きになり、文字数も増加したというものである⁴⁸。林他はこの結果から、「小枝らはアンケート調査と作文の検討により左利きの矯正は試みても良いと結論しているが、利き手の矯正中の状態については検討されていない。脳性麻痺児（とくに左半球優位の障害のための右手の麻痺を認める患者）の利き手の矯正には、〔中略〕視覚認知障害や書字方向の障害を助長する恐れがあり、控えるべきではないかと考えた。」と結論づけている⁴⁹。

坂野が指摘する通り、小学校入学前後頃までの利き手の強制的な変更は、「左利き傾向が出現することの生物学的な意味を無視したことになり、子どもの知的発達にとっての障害になることが予想される。」⁵⁰ことになる。坂野はまた、「小さい子どもを持っている親たちは、第一に利き手はこのように目まぐるしく変化することを知る必要がまずあるだろう。そうすれば、むやみに利き手を変えさせることの必要性のないことに気づくはずである。第二に、左利きには左利きの特徴があること、また無理に利き手を変えることに害はあっても益はほとんどないことを知ってほしい。」とも述べている⁵¹。さらに、石田も、「小児の左ききは、年齢と共に右ききに移行する可能性も多く、またたとえ左ききに発育しても「両手きき」(ambidextrous)となる傾向にあり、ことさらにその再教育ないしは矯正は運動機能の低下、言語障害などを生じうる可能性があり、放置しても、なんら問題はないものと思われる。したがって(ママ)、左手使用が少く(ママ)とも反社会的でない限りは、あまりこだわることなく、自然にまかせるのが好ましく思われる。」とし⁵²、久保田も、「言語脳が右になる人では、左利きを右利きに矯正することは、手を使う能力と言語を使う能力のいずれかを低めることになる危険があり、」「家庭で幼児を左利きを右利きに矯正する場合

⁴⁸ 林隆 市山高志 西河美希 古川漸「利き手の矯正により鏡像文字が悪化した癱性両麻痺の1例」(『脳と発達 第30巻第4号』(日本小児神経学会編)1998) p.59.

⁴⁹ 林隆 市山高志 西河美希 古川漸「利き手の矯正により鏡像文字が悪化した癱性両麻痺の1例」(前掲書) p.64.

⁵⁰ 坂野登『かくれた左利きと右脳』(前掲書) pp.220-221.

⁵¹ 坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の“性格”と“クセ”』(前掲書) p.20.

⁵² 石田肇「IV. 左きき Left handedness」(前掲書) p.532.

には、その幼児の将来において、空間認知、手使いの能力、言語脳の働きに障害のおこることを覚悟しなければならないだろう。左利きの幼児が生まれたら、利き手の矯正をすることなく、そのまま左右それぞれの手の機能発達をはかるべきである。」と言及している⁵³。利き手は、その発達段階における各人の自然な姿を尊重すべきであり、その変更に関しても、保護者や周囲の意向ではなく本人の意思を重んじるべきであると考ええる。

(2) 小学校低学年以降での左手書字から右手書字への「矯正」

次に、小学校低学年以降での左手書字から右手書字への「矯正」の是非について検討する。

馬場は、「すでに発生してしまった左利きに対しては、古い時代には人為的に右利きに変換させる訓練が行われた。しかし現在では、左利きは遺伝や左半球の障害のような生物学的な要因に基づくことがほぼ明らかになっているから、無理に右利きに変えることは有害無益であると考えられるものが多いようである。」としている⁵⁴。坂野も、「(「左利きは右利きにすべきか」との質問に対し(小林注)、) 答えはいうまでもなく否である。これは理論上の答えである。〔中略〕ここで私が理論上否という場合には、左利きが何らかの欠陥をあらわしたものであって、それを直すために(だから利き手の‘矯正’という言葉が使われるのだが)、右利きに変えなければならないという考えに対してである。〔中略〕生物学的根拠を無視して、左から右へと利き手を変換することは、害はあっても益はないであろう。」と述べている⁵⁵。さらに、八田も、「きき手の変更が脳機能の変更をもたらさない、つまり脳機能は予めプログラムされたままであり、きき手の変更によって変化しない」から、「ある人が左ききであるということは右脳が優れた手指運動機能を持ち細かい運動コントロールを巧みにできることが遺伝的にプログラムされていることになる。このような遺伝的なプログラムがあるのに、わざわざ反対の左脳に手指運動コントロールを委ねようとするのは、〔中略〕仮にうまく右手での書字や道具の使用が可能になっても、左手であればはるかに優れた機能を持てたかもしれないということになるだろう。〔中略〕き

⁵³ 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』(前掲書) p.156.

⁵⁴ 馬場一雄「左利き」(前掲書) p.1449.

⁵⁵ 坂野登『かくれた左利きと右脳』(前掲書) pp.218-219.

き手の成因から矯正を考えると、いずれの要因を考えても左ききを右ききや両手ききに直すことを推奨するわけにはいかないことになる。」と言及し、また、「きき手の変更によって手指運動の巧みさは、左右どちらの手でも十分に発達しなかった可能性があることを示唆している。」とも記している⁵⁶。

これに対し、前原は、「利き手が、脳の発達や分業の現われであることを理解すれば、矯正はその人の脳の性質に逆らう不自然な行為であり、必要がないという答えが出てきます。一方、〔中略〕自然のままが最良とは限らず、必要があれば利き手も当然適応させるべきであるという考えも成り立ちます。」「左手利きを矯正すべきか否かは、左手利き、つまり右半球優位性という脳の傾向と、社会文化的圧力とのバランスで考えるべきでしょう。左手利きは、右半球が優位であるために起こった自然現象であることは間違いありませんが、だからといって、矯正を自然に逆らう行為であり、まったく必要がないと考えるのも、社会生活をする上で無理を生じます。あまりかたくなに考えると、社会への適応を損ないかねません。」「右手利きは多数であり、社会は右手利きを前提としているのが現状です。〔中略〕必要があれば使い手を変えることは、悪いことでも、恐ろしいことでもありません。」との見解を示している⁵⁷。

しかし、医学（生物学・生理学）及び心理学の見地から考察した場合、右利きが多数派であるゆえに、右利きの方が社会生活を営む上で便利だとの理由だけで安易に利き手を変更させることには強い危惧の念を抱く。酒井が、「社会生活への適応が（左利きの（小林注））不利の主要な理由であるとするれば、社会生活の変遷に伴って左利きの不利、従って矯正の必要性も変るはずである。」と述べ⁵⁸、八田が、「設備や道具が右きき用であるための不自由さは、解決できる問題である。〔中略〕多数者が少数者の存在を認め、適切な配慮をすることで不自由さが克服できるとすれば、左ききを矯正すべき理由は存在しないことになる。」と主張する⁵⁹通りだと考える。そもそも、利き手を変更することに「矯正」との語を用いること自体に「すでに左ききはよくないもの正しくないもので、左ききは欠点があるという考え方が前提になっている。」⁶⁰との意識・風潮を汲み

⁵⁶ 八田武志『左ききの神経心理学』（前掲書）pp.178-180.

⁵⁷ 前原勝矢『右利き・左利きの科学 利き手・利き足・利き眼・聞き耳…』（前掲書）pp.64-65.

⁵⁸ 酒井清「児童における利き手の意義と矯正の指導」（前掲書）p.68.

⁵⁹ 八田武志『左ききの神経心理学』（前掲書）p.181.

⁶⁰ 八田武志『左ききの神経心理学』（前掲書）p.173.

取ることができる。利き手及びその変更に関する問題は脳のプログラムと直接かつ密接に関わるという点を理解した上で、根本的・本質的な課題について熟慮し、利き手に関する問題において本当に変えていかなければならないものは何であるのかを再考する必要がある。少数派とされる左利きの在り方を理解し、日常生活のあらゆる場面において様々な方策を講ずることが望まれる。

10. 「利き手」との観念に基づく臨床生理学的な見地からの検討

筆者は、脳生理学による科学的な研究手法を導入するのは萌芽の段階にある書写書道教育研究において、本章で述べまとめてきた、医学（生物学・生理学）や心理学の分野での先行研究から明らかにされた左利きの脳機能や認知機能に基づいて、臨床生理学的な見地から、左利き者の書字活動について臨床実験的に検証することを試みている。

その一端として、筆者は、「序章 1. (2)」に挙げた論考「利き手・非利き手での書字活動時における脳血液動態の比較 — N I R S 及び筆圧握圧計測装置による測定を通しての試論—」『書写書道教育研究 第 31 号』（（全国大学書写書道教育学会編）2017, pp.41-47. 以下「小林(2017)」. 本研究は JSPS 科研費 JP15K04419、JP15H0349801 の助成を受けている）において、利き手と非利き手それぞれでの書字活動時における脳活動の差異を、脳活動計測装置を用いて測定することにより、書字行為に際しての利き手と脳活動との関係について検証を試みた。具体的には、右利き者が右手で文字を書く場合と左手で文字を書く場合、及び左利き者が右手で文字を書く場合と左手で文字を書く場合では脳が活性化する部分にどのような違いが生じるのか考察し、非利き手での書字行為の妥当性について推考した。

当該の研究では、利き手、非利き手それぞれでの書字活動時における大脳皮質の脳血流の変化を、近赤外分光法（near - infrared spectroscopy. 以下「N I R S」）によって計測した。N I R S は、頭皮上から照射した近赤外光により、脳活動で賦活した細胞に酸素を供給するため変動する脳内の酸素化ヘモグロビン（以下「oxy-Hb」）と脱酸素化ヘモグロビン（還元ヘモグロビン. 以下「deoxy-Hb」）それぞれの濃度の変化を多点で測定し、その血流変化を脳表面に沿って画像化する方法である。N I R S による実験は、被験者に身体的な制

約を課さない上に、曇天時の太陽光より弱いとされる近赤外光を用いることで、人体に無害な安全性の高い測定が簡便に行える。

NIRSによって、利き手と非利き手各々での書字活動時における脳活動でのヘモグロビン濃度を光トポグラフィ装置で測定し、課題（タスク）に伴う脳血流の変化を oxy-Hb を用いて解析することとに合わせて、筆圧握圧計測装置で、筆圧、指に加わる握圧値、文字を書く所要時間も測定し、両者からの総合的な考察も試みた。

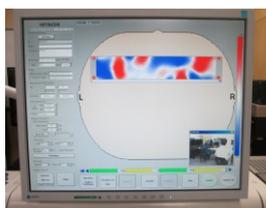


図1 光トポグラフィ



図2 光トポグラフィ装置 ETG-4000

NIRSによる実験では、鉛筆で平仮名五十音を書くタスクを課した。漢字もしくは文章を課した場合、その内容からイメージが起こったり感情が関わったりしてしまう可能性があり、本実験では、書写することに特化した単純作業の方がよいと考えたためである。

NIRSによる実験結果から、利き手が右手か左手かの別を問わず、利き手で書字活動を行った時の方が、右側頭部及び左側頭部の賦活が大きいことが明らかになった。ただし、前頭部については、非利き手で書いている時の方が、わずかな差ではあるが oxy-Hb が高くなる。前頭部は、高次の思考や判断等を司る前頭葉が位置する部位である。重要な機能を持つ部位 前頭部におけるこの結果について専門領域からの解明が必要とは考えられるが、以下の推論は導き出せた。

一般の学習活動においては、無意識のうちに望ましい文字が書ける（望ましい文字が書けることが自動化している）方がよい。学習活動時に前頭部が活発であってほしいのは思考を伴う学習活動本体に対してであって、書字活動自身は自動化されていることが望ましい。よって、通常の手書き活動にあたっては、前頭部は活性化しない方がよい、前頭部での oxy-Hb は下がっている方がよいと考えられる。

今回の実験のように、書写することに特化した単純作業において、非利き手

での書字活動時に前頭部が活発であることは、学習活動が有機的になされるためには理想的でない。前頭部は、望ましい文字が書けることに対して活性化されない方がよいのである。このように、脳生理学、脳活動の観点から検証考察すると、非利き手での書字は望ましいものではないと推考できる。

筆者は、小林(2017)に続き、NIRSによる脳活動でのヘモグロビン濃度を、前額部の計測専用開発された携帯型の小型光トポグラフィ装置で測定することによって、小林(2017)に関する解釈の信憑性と客観的な指標を確認するとともに、本実験の考察に必要な分析視点を整理することに努めた(「利き手・非利き手の違いによる書字活動時での脳血液動態の差異 —「ウェアラブル光トポグラフィ」を用いたデータ蓄積—」第34回全国大学書写書道教育学会にて口頭発表(2019)⁶¹。本研究はJSPS科研費JP15K04419の助成を受けている)。その結果、小林(2017)における推論を確認支持できる内容、及び、小林(2017)での分析を補充するために必要だと考えられる視点を、次のようにまとめることができる。

- 右利き書字者かつラテラリティ係数(Laterality Quotient. 以下「LQ」。「第1章1.」参照)も「右利き」、ないしは左利き書字者かつLQも「左利き」とされる被験者は、共通して、非利き手で書いている時に全体的にoxy-Hbが高まる。
- 右利き書字者のデータは特徴や傾向が近似する。
- 左利き書字者のデータには個々人の多様性が存在し、様々なパターンがある。
- 脳生理学の見地による実験では、書字に関しての分析でも、「右利き書字者」「左利き書字者」の二分類ではなく、LQが「右利き」「左利き」「両手利き」のいずれかを考慮する必要があり、かつ、LQで「両手利き」と判断された者がどちらの手で書字するかに基づく分類を要する。
- LQで「左利き」と判断され、実際に硬筆書字は左手で行うが、毛筆のみ常時右手で扱う左利き書字者について考慮する必要がある。

⁶¹ 当該稿での実験及び考察に関しては、右手で書字する者を「右利き書字者」、左手で書字する者を「左利き書字者」と表記した。

しかし、これらの実験でのデータは限られた人数でのものであり、その実験結果については未だ断定ができず、現段階ではあくまでも事例の一つにとどめている。今後の更なるデータの蓄積と多角的な分析から、実験結果の解釈の客観性、信憑性を高める必要がある。

ただし、この研究を通して、脳生理学からの科学的な根拠をもとに、書字に関しては「“右手”“左手”」といった概念ではなく、「“利き手”“非利き手”」との認識が不可欠であることは推考できた。「右手」「左手」との捉え方ではなく、「利き手」「非利き手」との観念に基づいた書字及びその指導が重要である。

当該の研究では、NIRSによって、右側頭部、左側頭部、前頭部の oxy-Hb を測定することからの論考を試みたが、教育研究、特に書写書道教育研究において脳生理学による科学的な研究手法を導入するのは寡少であり、まだ萌芽の段階にある。これからは、他領域の研究を俯瞰しながらデータの蓄積に努め、利き手に関して各人の脳機能が活かされる書字活動の在り方について講究していきたい。

次章では、本章で確認した先行研究の知見を基に、左利き及び左利き者の書字に関する社会や学校教育における受けとめ方、並びに、左利き者の書字に有効な具体的方策について、教育及び学習者としての観点から考察する。

第 2 章

左利き及び左利き者の 書字に関する考察

「第1章」における医学（生物学・生理学）的・心理学的な見地からの考察をふまえ、本章では、左利き及び左利き者の書字に関しての社会や学校教育における受けとめ方、さらには、左利き者の書字に有効な具体的方策について、教育及び学習者としての観点から考究する。

1. 日本における左利きに関する社会的意識 — 書字の側面から —

(1) 保護者を対象とした意識調査の結果から

安藤他¹は、青森市内の幼稚園・保育園に通う5～6歳児の保護者175名（有効回答133件・回収率76.0%）を対象に、左利きに関する意識調査を実施した。その結果、左利きに関して「両手が使えて得」「個性的」等ポジティブなイメージが全体の55.8%を占めた一方で、左利きの子どもを持つ保護者30人のうち「右に直した」16人・「直さなかった」14人、更には、右利きの子どもを持つ保護者103人中「もし子どもが左利きだったら直す」59.2%・「直さない」40.8%と、先の傾向は必ずしも自分の子どもは「矯正」しないことに結びつかないとした。また、その要因は、「直す」「直した」項目として「鉛筆」（24.9%）・「箸」（21.5%）・「はさみ」（16.0%）が多数だったことから、生活にかかわる道具・設備の殆どが右利き用であることや、書字など学習生活への適用及び「世間体」等、左利きに関する社会的・文化的圧力が未だ強いことによるとした。

本調査は1995(平成7)年に実施されたものであり、また特定の地域における調査結果でもある。しかし、この傾向は年代や地域性に関係なくみられるものである。その資料を以下に提示する。

(2) 昨今の新聞記事から

朝日新聞(全国版朝刊)2004(平成16)年7月24日号に、左利きの男児(5歳)を持つ保護者からの投書をきっかけとした「左利きは生活しにくい？」との特集が組まれた。投書の内容は、書字学習を始めた際、保育園の先生から右手に変えさせたいか問われた上、親の希望で書字は右手にしている園児がいたり、入学予定の小学校に「書字は絶対右手で」という先生がいたりするため、早い

¹ 安藤悦子 兼成恵利子 鎌田美穂 前田優子 町屋香奈子 山本春江「左利きに関する親の意識調査」(『小児保健研究 第56巻第2号』(日本小児保健協会編)1997) p.169.

うちに右手にした方がいいか悩んでいるというものである。

一方、同紙 1992(平成 4)年 1 月 15 日号の投書欄には、「左利き 社会で不利？」と題した投書が寄せられている。左利きの女兒(4 歳)に対し、周囲から「左利きは社会で不利」等といわれ、保健師からも左利きを否定された上、書字だけは右に変えさせた友人もおも思案しているとの内容に対し、同紙 1992(平成 4)年 2 月 13 日号に「変える？変えない？左利き 「社会で不利？」に反響 100 通」との特集が設けられた。内容は、左利きの子は親が右手に変えるべきかとの問いに対して、「不要」 58 通、「毛筆など一部は右利きか両利きにすべき」 37 通、「できるなら全部右に」 5 通であったこと、しかし、実際には「全く変えさせられなかった、変えさせなかった」が 27 通あり、また、「変えさせるべきだ」との声が集中したのは毛筆・書字全般・箸だったというものである。

上記 2 つの記事は 12 年以上の年月を隔てているにもかかわらずその内容に大きな違いがなく、更には、先述の安藤他の調査結果とも大差ない。以上から、昨今の左利きに対する社会一般的な意識は、安藤他の調査結果に代表されると推測できる。また、その中でも書字に関しての疑問や不安は大きな比重を占めると考えられる。

上記最初の投書に関する記載から 27 年を経た同紙 2019(令和元)年 9 月 4 日号には、同年 7 月 14 日号に掲載された小学校長の投書「箸も鉛筆も正しい持ち方こそ」をきっかけに寄せられた 4 通の投書が、「どう思いますか 箸や鉛筆の持ち方」との表題で紹介された。うち 2 通における一部をそれぞれ抜粋する。

〔前略〕私は左利きで、小学校の書写の時間、右手で墨をすることができませんでした。当時左利きは矯正すべきだと考えられていて、担任の先生は毎回、黙ってすずりを右側に移しました。それが私にとってどれほどみじめなことだったか。〔以下略〕

(70 歳男性)

かなり複雑な気持ちで、小学校長の投稿を読みました。私は物心ついた頃から左利き。父は「一人一人違っていい」という方針だったので、右利きに矯正されませんでした。教師や友達にはいじめられましたが耐えました。〔以下略〕

(87 歳女性)

この二人の投稿者のうち、前者の小学校時代が昭和 30 年代前半～中頃、後

者の小学校時代が昭和 10 年代中頃～後半に相当し、それぞれの文面から、左利きや利き手をめぐる当時の実状が読みとれる。さらには、箸や鉛筆の持ち方に関する各人の現在の考えを記すにあたり、その前段として左利きにまつわる経験や思いを述べることに自身に、各投稿者の就学当時と現代では左利きや利き手をめぐる状況が異なっているとはいえ、書字と利き手に関わる社会的な情勢には、根本のところでは依然として大差がない状況も汲みとれる。

2. 小学校学習指導要領における左利きの児童への学習指導に関する内容の変遷

文部省／文部科学省発行・告示の『小学校学習指導要領』（『昭和 22 年度（試案） 学習指導要領 国語科編』（昭和 22.12.20 発行）・『昭和 26 年(1951)改訂版 小学校学習指導要領 国語科編（試案）』（昭和 26.12.15 発行）・『昭和 33 年改訂 小学校学習指導要領』（昭和 33.10.1 告示）・『小学校学習指導要領』（昭和 43.7.11 告示）・『小学校学習指導要領』（昭和 52.7.23 告示）・『小学校学習指導要領』（平成元.3.15 告示）・『小学校学習指導要領』（平成 10.12.14 告示）・『小学校学習指導要領』（平成 20.3.28 告示）・『小学校学習指導要領』（平成 29.3.31 告示））において、左利きの児童の学習指導に関する内容は、昭和 26 年版『小学校学習指導要領』に「左ぎきの児童は、むりに右手で書かせない。左ぎきが正常な児童は、左手で書かせてもよい。」と記されている²のみである。他の版に左利きの児童の学習指導に関する内容の記述は見当たらない。

3. 学校教育における左利き及び左利き者の書字の受けとめ方

日本の学校教育において、左利きの児童生徒及びその書字教育はどのように行われてきているか。以下に松田の見解³を引用する。

昭和四十六年というのは、書道(ママ)が小学校の正課として採用されることになって、三年生から習字(ママ)が教えられるようになった年です。

それまで鉛筆を左手にもって字をかいていた子どもが、右手で筆をもつよう

² 同書 p.99.「第 3 章 国語科学習指導の計画 第 5 節 第一学年の国語科学習指導はどう進めたらよいか 7 書くこと(書き方)の学習指導はどうしたらよいか」の「6」

³ 松田道雄「左利き友の会」始末記』（『暮らしの手帖 第 2 世紀』（暮らしの手帖社）1975） pp.174-177.

に矯正(強制)され、全国的に被害があらわれはじめたので「左利きの会」(※精神科医・箱崎総一氏が中心となり昭和46年(1971年)に創設した会。箱崎の文献〔詳細後述〕では「左利き友の会」と記される(小林注))の賛同者もおおかったのでしょう。〔中略〕

『(※以下「左利き友の会」での考えを要約し、政府に出そうとした陳情書の一部(小林注)) 今日のがわ国における初等教育の実態を例にとって見ますと、左利き児童に対する考慮は全く払われていないというのが現状です。殊に、小学校三年より正課として採用されている書道教育(ママ)は、すべて右利き児童を対象として実施されています。その結果として、少数者である左利き児童は、右利きになるための矯正をよぎなくされ、その結果さまざまのストレスを発生させることとなります。』

〔中略〕(※「左利き友の会」の月刊誌「左利きニュース」に殆ど毎号挙がる左利き者の訴えは(小林注))その被害が初等教育に集中しているのが特徴です。

(※戦前に中学時代を過ごした年輩の男性が、書道の授業で「日本国語文字は左手で書く様にはできていない」と担任に殴られたとの投書を紹介し(小林注))それとおなじことが今日、民主主義のいわれている時代にもおこっています。横浜のある中学生はいいます。

「僕は現在中学一年生です。ほとんどのことは左手ですませています。はさみと書道だけは右手を使っています。しかし、書道は右手で書いているのではなくて、書かされているのです。だから、僕は書道が大嫌いです。〔中略〕」

〔中略〕左利きにもいろいろ程度があって、〔中略〕どうしても右手ではうまくいかない左利き、というものがあることを知るべきです。〔中略〕書き方が正課であるということは、特別の左利き用の筆法をおしえないかぎり、右手で筆をもつように強制していることになるのです。〔中略〕左利きの子どもを、左利きのまま書道をやらせることは、先生にはめんどうなのです。一律に右利きにして、右利きに都合のいい書き方でかかせるほうが先生にはらくなのです。先生がらくをするために左利きの子どもに、ノイローゼになるほど苦しませ、あげくは書き方は大嫌いという人間にそだてあげていいものなのでしょうか。〔以下略〕

ここに記されている内容は、昭和43年版『小学校学習指導要領』が施行さ

れていた当時の、毛筆書写の学習指導の在り方に対する批判である。しかし、現在の書写教育が抱える左利きの児童生徒への学習指導に関しての課題も、基本的に上記の内容と違いがないのではなかろうか。管見によると、書写書道教育の分野において、非利き手で書字させる指導の是非や左利きのための書字指導に関して検討し研究を重ねる機会は今まで非常に乏しかった。久保田の「これまでの学校教育において、左手の教育が重要視されていないことは驚くべきことである。右脳が言語脳であった左利きの子どもに、右手で字を書くことを強要するのは、子どもの人間性を無視した教育といえる。空間認知の能力を無視し、使いにくいだけでなく働きのおとる手を使わせることになるからである。」との指摘⁴、及び、伊田の「学校教育は字を書く手を矯正する上できわめて重要な役割を演じてきたと考えられる。〔中略〕日本に左利きが少ないのは、現在も残る、字を書く手の矯正の二次的効果によるものなのかもしれない。」との指摘⁵には弁解の余地がない。

「序章 1.」「第1章 7.」で述べた通り、利き手にまつわる問題の中で最も関心が集まるのは書字及びその教育に関してであるにもかかわらず、今現在その在り方は明確でない。換言すれば、左利きの書字とその学習指導の在り方が不明確であるがために、何時になっても「右手に変えさせて書字させるべきか」といった不安や疑問は消えることがない。左利きの児童生徒の書字教育に関する課題に取り組むことはこの教育に携わる者の責務である。

これまでに考察してきた医学（生物学・生理学）及び心理学の分野での諸論文に立脚した際、書字という行為のために左利きを右利きに変更させなければならない決定的な論拠は皆無である。もし、利き手を「矯正」することの第一の理由が、これまでの書字もしくはその教育、すなわち「書写」「書道」及びその教育の在り方にあるならば、それは由々しき問題であろう。“左手で書字する児童生徒を右手に「矯正」させるのは、教師（指導者）側の勝手な言い分もしくはその学習指導の在り方を模索しようとしめない怠慢ゆえのこと”といった類の批判に対する根元的な説明はできないのが実状である。先述の松田の指摘を

⁴ 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』（前掲書） pp.154-155.

⁵ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』（前掲書） pp.124-126.

真摯に受けとめなくてはならない。

確かに、言語を問わず大抵の文字や書式は右手で書くことを前提としており、右手の方が文字を無理なく構成できる上に字形も整えやすい。特に日本の文字は、漢字の場合整った楷書の横画は右上がりになる傾向があり、また、平仮名の場合は右回転の線を主軸とする文字が多いことから、左手で書字することにはある種の不便さが伴うことは否めない。こういった書字における右手の優位性を根拠として、左利き者も書字の場面だけは右手を使うべきとする論もある。しかし、医学（生物学・生理学）的・心理学的な論拠を押しつけてまで右手で書字しなければいけない必然性は存在しない。書字における右手の優位性を唱えて左利き者を右手での書字に変更させることは、あまりに短絡的ではないだろうか。実際に、筆者が2005(平成17)年度に担当した授業（高等学校芸術科書道）の受講者206名中、硬筆・毛筆の片方もしくは双方を左手で使用する生徒10名にアンケート調査を行ったところ、2名の生徒が「右手で書字する時の感覚は、文字を書くのではなく絵を描く時の感覚と同じである」と答えた⁶。このような児童生徒に対して、脳と利き手との関連性を考慮せず、右手で書字することの利点のみを優先させた結果、文字学習の場面において、文字を「文字」としてではなく「絵を描く時の感覚」で対処させなければならないことの方がより深刻な問題であると考えられる。書字における右手の優位性を利き手変更の第一の理由としてきたことが、書写書道の学習指導における教育現場での混乱を引き起こす要因となっていたのかもしれない。文字は右手で書きやすい構造や運筆になっていることへの理解を促すために、試みに右手での書字を体感させてみるの一案であるが、それをきっかけに右手での書字の定着を強要するのは避けるべきである。

左利きの児童生徒への書写指導において最も重視すべきことは、字形・筆順・運筆といった文字の有りようではなく、「左利きである」という児童生徒の実態である。右利きの論理を押しつけた、文字の構造や運筆ありきの書写教育ではなく、まず、左利きであることを尊重し、左利きの児童生徒が無理なく書字に臨めるよう、左利き者の立場に立った書字及びその教育の在り方を探求してい

⁶ 1名は硬筆のみ左手、もう1名は硬筆・毛筆ともに左手を用いる。なお、2名とも硬筆での書字は逆手で行う。

くことが必要である。その第一歩として、左利き者のための、左手での望ましい筆記具の持ち方をはじめ、左利き者に有用な書字学習の在り方について検討することは必須であり、また、それらに関する具体的な方策が右手での場合と同様に明示されるべきだと考える。

4. 左利き者に有効な具体的方策に関する検証

一 『左きき書道教本』における紙の置き方を参考に一

1972(昭和 47)年、当時の日本の学校教育における、左利きの児童生徒に対する書字教育の実態に苦言を呈して、具体的な施策の提唱を試みた文献がある。前項「3.」の引用中に既述の箱崎総一が編纂した『左きき書道教本』(左利き友の会 1972)である。本書冒頭 pp. 1 - 3 に記された「はしがき」を抜粋する。

がんらい書道は、わが国に古くからある伝統芸術ですので、その筆法や運筆の手じゅんなどについては多くのきめごとがあります。たとえば、左手で筆を持ってはいけないというのもその一つです。

そのために書道を習うさいや、ペン字を習うさいにはほとんどの場合、左利きの人達は全部右手で書くように無理に矯正されてしまうのが従来までの方法でした。

左利きの人を右利きに矯正することでさまざまなストレスが発生してきます。ことに小学生ではこのストレスの程度がはげしく起こってきます。〔中略〕そこで左利き友の会では左利きの人達が自由に書道を習うことができるように“左きき書道教本”を編纂いたしました。

昭和四十六年からまた書道が小学校の正課として採用されることになりました。かえり見ますと、戦前の小学校教育では書道の授業のさい左利きの児童はぜんぶ矯正をうけたのです。つまり戦前の書道の時間は、左利きの児童にとっては血のにじむような矯正訓練の場であったわけです。そのようなことから多くの児童は字を書くことや書道を習うことが嫌になってしまったのです。このような悪夢をもう一度繰り返さないために本会では左手でも立派に書道を練習することができる方法について研究を重ねました。そして一応、左利き筆法についての結論に近いものをえましたので、とりあえず“左きき書道教本”として出版するはこびになりました。〔以下略〕

続けて、「補章 2、書道教育と左きき筆法」（本書 p.18-20.）も抜粋する。

左利き友の会ではこの左きき筆法を発表する前にいくつかの書道団体や、書道家の方たちに左手で書道を学ぶという点について質問をしてみました。しかしその返答は残念ながら例外なく冷たい返事しか返ってきませんでした。その返答はだいたい次のようなものでした。

「左手で書いた書家は誰もいなかった。」

「左手を矯正して書道を教えている。」

「左手で筆を持つことなど出来るはずがない。」

いずれにせよこのような態度が現代日本の左利き筆法に対する反応なのです。左利きを矯正するのは子供に悪い結果を与えます。そのことは医学的にも、心理学的にも証明されています。それなのに書道の世界だけはいぜんとして右手でしか習字を教えないのです。しかしそれも当然のことかも知れません。いまだかつて左きき筆法などは存在したことがなかったからです。誰も左手で筆の字を書けるとは想像もできなかったからです。

しかしこれからはわが国の書道界のなかにも「左きき筆法」について理解を示してくれる書家の方たちが出現してくれると思いますし、われわれはそのことを強く希望しています。

昭和四六年(ママ)から小学校三年生には正課としての書道の時間がスタートいたしました。もし左利き筆法が普及しなければ義務教育の名のもとに左利きは矯正されることになります。そこでわれわれはこのような形で発表する「左きき筆法」を世の中に送り出そうとしているのです。

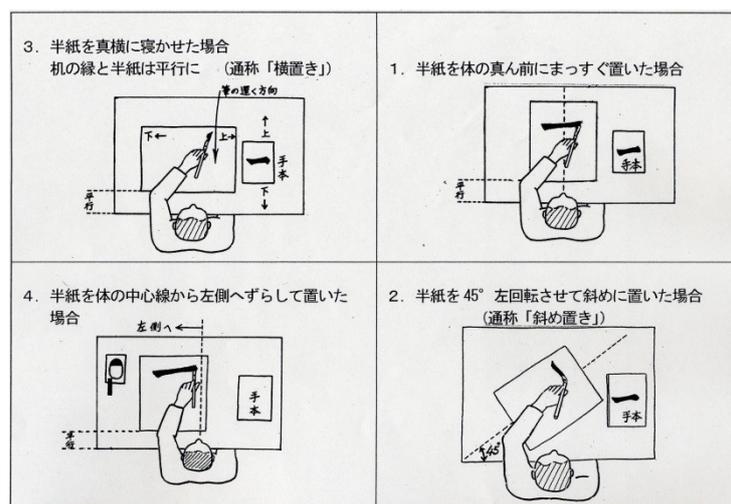
本書では、左利き者にとって文字が書きやすくなるための方策を具体的に問われた時、可能性の一つとして、書字活動時における用紙の置き方に関する工夫が考えられるとしている。

本項では、『左きき書道教本』を、左利き者が無理なく書字するための要件の一つとして書字者に対する用紙の置き方を挙げ、その方法を具体的に提唱した文献として捉え、詳細な検証を試みる。本書は、毛筆による書字を前提とした左利き者の執筆法や運筆等の指導法に関する解説が大半を占めるが、用紙の置き方に関する解説は、毛筆による書字の場合のみならず、硬筆による書字の場合にもそのまま適用できると推察できる。

(1) 『左きき書道教本』における左手書字のための用紙の置き方

再三述べてきた通り、文字の構造や書き方は右手での書字に対して優位につくられている。中でも、漢字の基本線となる横画での、右手書字と左手書字との特徴の違いは顕著である。右手で書く横画は、右の手指が紙面上を右方に移動することによって引かれる線だが、左手で書く横画は、大概の場合右手で引いて書く線とは反対に、左手で右の方に押すことによって書かれる線である。書字者の正面に用紙を置いた場合、右手で右に引く線は無理なく書ける（引ける）が、左手では左から右に押して書くため真横への線は書きにくい。また、先述「1.」の左利きの授業受講者に対するアンケート調査では、左から右へ押すように書くと用紙に穴が空いてしまったり、必ず小指が汚れたりするといった副次的な困難点も指摘されている。

箱崎は、左手書字の特性を考慮した上で、左手書字に特有な、左から右への横画に関する問題を合理的に解決する方策として、用紙の置き方に関し、下図に示すような ①「斜めがき筆法」②「横がき筆法」③「正座筆法」の3種を提唱した。



【右下】「斜めがき筆法」 【左上】「横がき筆法」 【左下】「正座筆法」

箱崎総一編『左きき書道教本』（前掲書）pp. 30-36.

「斜めがき筆法」とは、用紙を机の縁から約45度左方向へ傾けて書字する方法である。この方法では、左手で左から右へと真横に押して書く横画が斜めに引く線へと変化するため非常に書きやすくなる。箱崎は、小筆を使用して細字を書く際や横書きに適しているとしている。

「横がき筆法」とは、用紙を 90 度右回転させる、つまり用紙を横に寝かせた上で、机の縁と用紙の位置が平行になるように置いて書字する方法である。この方法で書字すると、書かれた文字は横に寝た形になる。しかし、左手で左から右へ線を引く際に起こる、左手が体の前を横切る現象は回避でき、左手の動作を自由にすることができる。また、左から右へ押す線が上から下へ引く線に変化し、上下に引かれた線は右から左へ引く線に変化するため、左手書字にとって大変書きやすくなる。箱崎は、万年筆で書字するのに便利であるとしている。

「正座筆法」とは、右手書字の場合と同様に用紙と机の縁との角度を 90 度にした上で、用紙を書字者の体の中心線から左側へずらす方法である。体の正面に用紙を置いた場合、左手で持つ筆記具の軸を右側に傾けることは困難だが、この方法によると、用紙を左側に寄せたことで、筆記具の軸を右側に傾斜させやすくなる。すなわち、左手書字において、机の正面に用紙を置く場合には左から右へ押して書いた線が、机の左側に用紙を置くことによって、左から右へ線を引くことが可能となるのである。箱崎は、毛筆で大きな字を書く際に文字が曲がらないことや、姿勢を正しくできることを利点として挙げている。

なお、本書の最後には「補章」として「ペン字の左利き筆法」について記載がなされている。ここで箱崎は、硬筆による左手書字では左から右へペンを押すように書くことから、右回転の文字が多い平仮名よりも、左回転の文字が多い英文の方が書きやすいとし、硬筆による左手書字には「斜めがき筆法」が便利であると述べている。

以上の論を受けて、宮前他は、利き手の欠損等により非利き手を利き手として使うための「利き手交換訓練」の視点から、右利きの健常者 30 名に 1 ヶ月間左手書字の練習を実施した中で、用紙の置き方に関して、箱崎が紹介した 3 種類の置き方に、用紙を真っ直ぐに体の正中に置く方法を加えた 4 種類の位置で書字を試みさせた。その結果、真っ直ぐ正中に置くのが書きやすいとする者が全体の 3 分の 1 を占め、残りは他のいずれかの方法を好んだことから、「指導者はこれら 4 方法を意識しておき、患者に最も良いものを選ばせるための選択肢を提供することが大切となろう。」と結論づけている⁷。また、末松は、「この

⁷ 宮前珠子 佐々木光子「書字の利手交換」(『第 13 回日本作業療法学会論文集』(日本作業療法

三筆法を追試し、右片麻痺患者の左手書字練習に採用して、好結果を得ている。」とした上で、「どの方法がよいか、それぞれ個人差があるので、好みの筆法を練習すればよい。」と述べている⁸。

書写教育の見地から左利きの児童生徒への書字指導の在り方を考えたとき、宮前他や末松の検証は、分野は異なれども有意なものと捉えることができる。箱崎が提唱する用紙の置き方を児童生徒に提示して、各自に適した用紙の置き方をそれぞれ選択させてみることは、左利き者への書字の学習指導において大切な事項となろう。ただし、文字学習といった観点から3種の用紙の置き方を考察した場合、「横がき筆法」には文字構造や字形の把握・認識等といった側面に難点があることから、書字の学習指導においては、「横がき筆法」を用紙の置き方の選択肢に含めない方がよいと考えられる。

(2) 左手毛筆書写での半紙の置き方と字形の関係に関する分析

書字活動、特に毛筆による書字は、左利き者にとって最も大きな関心事の一つと推察できる。

古来毛筆によって書き継がれてきた漢字と仮名は、毛筆特有の機能によって文字の骨格を形成してきた。従って、漢字及び仮名文字の基本的な原理は、毛筆を使用してみることで理解が促されると考えられる。しかし、これまでの毛筆書写の学習は、右手書字が前提となって展開されてきたと言っても過言ではない。左手書字者にとって、右手書字者と同様、毛筆書写の学習がより有効に機能することで、望ましい書写技能が習得できるような学習指導の在り方を検討することが必須となる。

本項では、先述の3種の紙の置き方の、毛筆書写における有用性について考察する。

① 調査内容と分析方法

左手毛筆書字に関する検証にあたっては、本来ならば左手書字者のみを対象として調査分析を行うべきである。しかし、データ分析に十分な人数の調査対

士協会編) 1979) p.13.

⁸ 末松孝「左手による書字練習 合理的な三筆法の紹介」(『理学療法と作業療法 第7巻第2号』(医学書院) 1977) pp.107-108.

象者を集めることが困難なため、本論考では、仮に右手書字者が左手での書字を試行するといった暫定的な調査方法を用いて考察を試みる。

また、暫定的な調査対象者の負担を極力軽減し、かつ「国語科書写」の学習において左手書字者に有効な指導方法を模索するとの観点から、以下の方法により調査分析を試みる。

1 調査対象者には、

- i. 毛筆の構え方及び執筆法は、現行の文部科学省検定済中学校書写用教科書に明示されているもの（大筆…懸腕法で単鉤法もしくは双鉤法、小筆…提腕法もしくは枕腕法で単鉤法もしくは双鉤法）を鏡像にして左手へ持ち替えた形態とすること。
- ii. 半紙の置き方は、a.体の真ん中に真っ直ぐ置く方法 b.「斜めがき筆法」 c.「横がき筆法」 d.「正座筆法」の4種とし、a→b→c→dの順番で書写し比較することを確認して、指定の執筆法と半紙の置き方を固定統一する。

2 大筆では半紙を4等分割（4つ折）した枠内に単体文字を、小筆では半紙を4等分した行に縦書き及び横書きの書式で文章を書写する。なお、調査対象とする文字（以下「課題文字」）は、分析考察に必要な要素を備えた平易なものを少数用いることとする。

- i. 大筆大字に関する調査で用いる課題文字は、日本で日常的に用いる文字が持つ基本的な点画要素（はね・折れ・曲がり・反り・払い）を備えた漢字5字と仮名の特徴である右回転を主軸とした平仮名4字、及び左回転の平仮名1字の計10字とする。調査に先立ち、基本線である横画と縦画も試書する。

なお、課題文字10字の具体的な選出理由と本調査での着目点は次の通りである。

①「北」…拙稿⁹及び「手書き漢字字形の多様性に関する基礎研究」の

⁹ 小林比出代「硬筆筆記具の執筆法と字形の関係における分析的研究」(『書写書道教育研究 第19号』2005) pp.75-84.

「横画からのはね」に関する分析結果¹⁰を受けて、5画目のはねに着目。

- ②「月」…拙稿³及び「文字を書くことに関するアンケート 集計結果」から「日」に関する分析結果¹¹を参照して、2画目の転折部（折れ）とはねに着目。
- ③「式」…反りを持つ平易な漢字として、5画目に着目。
- ④「光」…拙稿³を受けて、5画目の左払いと6画目の曲がりに着目。
- ⑤「近」…拙稿³及び「手書き漢字の右はらいの運筆における研究」の「右払いの運筆」¹²に関する分析結果を受け、二節払いの出現率が高くかつ個人内変動がない割合の高い文字の例として、最終面の右払いに着目。
- ⑥「の」「り」…拙稿³及び「横書き書字における平仮名の字形的損傷について」¹³での分析結果を受けて、はね（字源となる漢字の終筆部）の方向が転じた右回転の平仮名として、終筆部（払い）に着目。
- ⑦「ろ」…拙稿³及び「横書き書字における平仮名の字形的損傷について」での分析結果を受けて、縦書きの中で生成された「関係ストローク」が残存し、かつ横書きによって「関係ストローク」に損傷を生じる右回転の平仮名として、終筆部（払い）に着目。
- ⑧「つ」…拙稿³及び「横書き書字における平仮名の字形的損傷について」での分析結果を受けて、払い（字源となる漢字の終筆部）の方向が転じ、かつ横書きによって終筆部の変形が目立つ右回転の平仮名として、終筆部（払い）に着目。
- ⑨「ん」…拙稿³を受け、右回転の平仮名に対する左回転の平仮名の例として、終筆部（払い）に着目。

ii. 小筆を用いた縦書き・横書き（縦方向・横方向の書字運動）の相違に関

¹⁰ 堀千鈴・押木秀樹「手書き漢字字形の多様性に関する基礎研究」（『書写書道教育研究 第11号』1997）p.19.

¹¹ 全国大学書写書道教育学会・創立10周年記念事業実行委員会「文字を書くことに関するアンケート 集計結果」（『書写書道教育研究 第10号』1996）pp.122-127.

¹² 小柴良介「手書き漢字の右はらいの運筆における研究」（『書写書道教育研究 第13号』1999）pp.22-27.

¹³ 小竹光夫「横書き書字における平仮名の字形的損傷について」（『書写書道教育研究 第18号』2004）pp.41-50.

する調査において対象とする文章は、大筆大字での課題文字 10 字を単純に羅列したものとする。(よって文章としては意味を持たない。)

- 3 調査は、2005(平成 17)年度に筆者が担当した授業(高等学校芸術科書道)の受講者中、高校 2 年生 52 名(右手書字者 50 名・左手書字者 2 名)を対象に実施する。また、調査の時期は 2005(平成 17)年度末(2 月)とする。

年度末に高校 2 年生を対象として本調査を行った理由は、当該学年の書道選択者は、義務教育段階(小中学校)での国語科書写の学習を修了し、かつ高等学校芸術科書道に関しても「書道Ⅰ」及び「書道Ⅱ」の全内容を履修しており、毛筆の扱いに慣れ親しんでいることから、通常用いない手での毛筆書写への試みも、他者の場合に比べて比較的難色を示さずに取り組める可能性が高いと推測したことによる。

- 4 調査対象者には、文字の基本点画に関する筆使いについて改めて確認(毛筆書写の基本点画を示したプリントを配布し、筆者の示範を視写)し、各課題文字のポイントとなる要素を認識させた上で、字形が整っていて読みやすい(=書写的な観点から見て望ましい)楷書で書くように指示する。ただし、課題文字は明朝体活字で提示し、毛筆での文字例は示さない。

- 5 調査対象者へのアンケートから、左手毛筆書写の際書きやすく感じた半紙の置き方とその理由、及び書きにくく感じた半紙の置き方とその理由について集約し、考察を試みる。また、4 種それぞれの半紙の置き方で書写した課題文字における各点画要素の用筆や形状・字形には、大筆大字単体・小筆縦書き・小筆横書きの別でどのような違いが生じたか分析を試みる。

② 左手毛筆書写での半紙の置き方と字形の関係に関する調査結果 及び比較考察

表 1 4 種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた割合

※表中 a: 体の真ん中に真っ直ぐ b: 斜め置き c: 横置き d: 左側

○ = 書きやすい × = 書きにくい /

◎: 50%以上 ●: 30%以上 50%未満 ▲: 10%以上 20%未満 △: 10%未満

	一	丨	北	月		式	光		近	の	り	ろ	つ	ん		
	横画	縦画	横画↓はね	はね	折れ	反り	曲がり	左払い	右払い	右回転↓払い	右回転↓払い	右回転↓払い	右回転↓払い	左回転↓払い	縦書き	横書き
				○ ×	○ ×		○ ×	○ ×								
a	△ ◎		●		▲		▲ ●		▲ ●	▲		▲		▲		▲
b	●	●	● ●	▲ ●	●	▲ ●	●	●	●	▲ ●	●	▲ ●	▲ ●	▲ ●	▲ ●	▲ ●
c	▲ ●		●	● ●		● ●	▲ ●	▲ ●	● ●	● ●	● ●	● ●	● ●	● ●	▲ ◎	●
d	◎ △	● ▲	● △	▲	▲	● △	● ▲	●	● ▲	● ▲	● ▲	● ▲	● ▲	● ▲	● ▲	● ▲

表2 4種それぞれの置き方を「書きやすい」・「書きにくい」と感じた理由

[特徴的なものを抜粋]

	真っ直ぐ		斜め置き		横置き		左側	
	書きやすい	書きにくい	書きやすい	書きにくい	書きやすい	書きにくい	書きやすい	書きにくい
横画		筆を“押す” ので。 線に手腕が 被る。		手元が隠れ て見えな い。	縦画と同じ 感覚。	「一」との 文字と考 えれば不 自然。	筆を“引く” ので。 書く線が見 える。	
反り		変な摩擦が ある。 手が覆い被 さる。		反り具合が 不明。 筆が毛羽立 つ。		どれ位反れ ばいいかわ からない。	手の中に戻 すだけ。 線が見え る。	
左払い				斜め上に手 を動かした りにくい。		上方向には 払いにく い。 不自然。	自然に手が 動く。	体から一番 遠い。 体から離れ る。

右払い		筆を押す形になる。 腕が苦しい。		腕を動かすにくい。 摩擦がある。	縦線を抜く感覚。 手前に引くだけ。	右払いの特徴がつかめない。	自分の方へ引くことになる。	
右回転		回転が苦しい。 手元が見えない。	手が滑らかに動く。 払いやすい。	筆を“押す”ため。 手元が見えない。	他の用筆に変わる。	不自然な筆使いになる。	腕を抜く方向が自然。 線が見える。	左からさらに左は書きにくい。
左回転		手がつまつた感じ。				本来の形がわからなくなる。	体に向かって筆を運べる。	
縦書き	一直線に並ぶ。	筆を押すのは不自然。		字の向きがわからなくなる。	書いているところが見える。	何を書いているのかわからない。	左手の前で書きやすい。自然。	全体的に体から離れる。
横書き	全体像が見える。	押す形は不安定。		文字が傾く。	縦書きになる。	頭が混乱する。	動かしやすい。	左側の字が速い。

表3 4種それぞれの置き方での各基本点画における

望ましい用筆・形状・方向の出現率〔特徴的なものを抜粋〕

※表中 a：真つ直ぐ b：斜め置き c：横置き d：左側

◎：100～90% ○：89～80% ●：79～60% △：40～21% ×：20～0%

[単体] 点画要素	a	b	c	d
横画・始筆部の角度	△			
・始筆部と終筆部との角度の変化	△	△	△	△
縦画・始筆部の角度		△		
・終筆部の角度	×	△	△	×
・始筆部と終筆部との角度の変化	×	×	△	×

[単体] 点画要素	a	b	c	d
右回転〈の〉・払いの用筆	×	×		◎
・穂先をまとめながら払う	○	×	×	○
・左斜め下に払う	◎	×	×	◎
〈り〉・払いの用筆	○	○	◎	◎
・穂先をまとめながら払う	●		●	○

横画からのはね・三角形		△	●	●
・真上に はねる	●	●	○	○
・一旦筆をとめ てはね出す	●	●	◎	◎
折れ・折れの用筆	○	○	◎	○
・折れ前後の縦画と横 画の太さの変化		△	×	
・角度が90°	●		●	
はね・はねの用筆	◎	◎	○	◎
・三角形			△	●
反り・一気に運筆	●	○	◎	◎
・反りの形状	○	○	○	◎
左払い・払いの用筆	●	○	◎	◎
・穂先をまとめながら払う		△	△	
曲がり・曲がりの用筆	○	●	●	◎
右払い・二節払い	●	●	●	○
・文字より右払いの 右端が長い	◎	◎	○	◎
・三角形	●		△	
・水平方向に払う	○			●
・右払い直前まで徐々に 太さが増す	△	△	△	

〈つ〉・払いの用筆	◎	○	◎	◎				
・穂先をまとめなが ら払う	●		△	●				
・左斜め下に払う			●					
・右回転曲線部が 丸みの用筆	○	◎	◎	◎				
左回転・右斜め上に抜く	○	●		○				
・穂先をまとめなが ら抜く	●		△	●				
・山部転折部が折れの用筆	●			●				
[書式別]点画要素	縦書き				横書き			
	a	b	c	d	a	b	c	d
横画からのはね・はねの用筆	◎	○	○	○	○	○	○	●
折れ・折れの用筆	○	○	○	○	●	●	●	●
はね・はねの用筆	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
反り・反りの用筆	◎	●	●	○	○	○	○	◎
左払い・払いの用筆	●	●	○	●	●	●	○	●
曲がり・曲がりの用筆	●	●	●	●	●			
右払い・二節払い		△	×		△	△	×	
・文字より右払いの 右端が長い	◎	◎	○	○	◎	○	○	◎
〈の〉・払いの用筆	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	○
・左斜め下に払う	●	●	●	○		●	●	●
〈り〉・払いの用筆	◎	◎	○	○	○	●	○	●
〈つ〉・右回転曲線部が 丸みの用筆	●	○	○	●	●	●	●	○

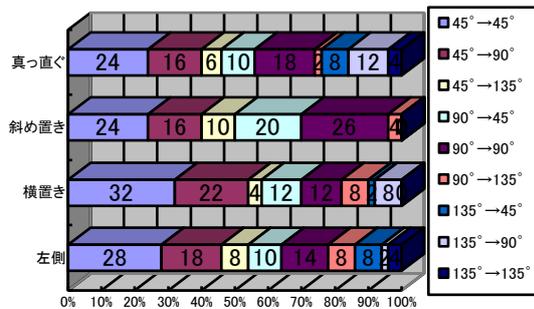
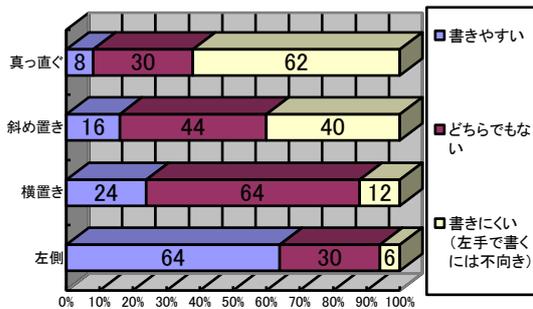
左回転・右斜め上に抜く	●	●	●	○	●	●	●	◎
・山部転折部が折れ の用筆	●		△	●			△	

[※以下特徴的なデータを抜粋]

②-1 横画に関する分析結果 [注：傾向が顕著に現れた要素である]

グラフ1 「一」(横画) (%)

グラフ2 「一」始筆→終筆 (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○半紙を体の真ん中に真っ直ぐ置いた場合、「書きやすい」8%・「書きにくい」62%と書きにくさが高い数値を示す。

○一方、左側に置いた場合は、「書きやすい」64%・「書きにくい」6%と真っ直ぐ置いた場合とは正反対の数値を示す。

○斜め置きは、真っ直ぐ置いた場合と同様な傾向を示す。

○横置きでは、「どちらともいえない」が64%と曖昧な感覚を示す割合が高い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き…○縦画と同じ感覚で書ける。

(←※他の要素に変わり、プラス評価がなされている。)

左側…○体の左側から中心に向けて筆を引くので書きやすい。

○左腕が自然によく動く範囲にある。

○自分が書いている線を見ながら書ける。筆の動きが見える。

[書きにくい]

真っ直ぐ…○右に書いていくにつれて書きにくくなる。

○筆を押すので手が突っ張る。書く時に抵抗（摩擦）が生じる。

○書いている線が自分の腕や手に隠れて見えない。

斜め置き…○手元が腕で隠れて見えない。

横置き…○「一」という漢字を意識したときに不自然である。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

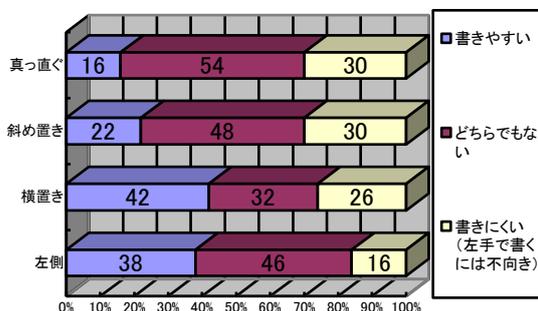
○始筆部の角度は、4種ともに半数前後が45°の角度になる。

○終筆部の角度に関しては、半紙の置き方による違いは見られない。

○始筆部と終筆部との角度の変化を見ると、4種ともに「始筆部45°→終筆部45°」が2～3割となり、最も高い割合となる。しかし、真っ直ぐの場合は「90°→90°」「45°→90°」も2割弱を占め、また、他の置き方ではほとんど見られない「135°→90°」「135°→45°」も1割前後を占める。横置きでは、真っ直ぐの場合や斜め置きではほとんど見られない「90°→135°」が1割弱存在する。左側の場合も横置きと同じ傾向にあるが、真っ直ぐの場合に見られる「135°→45°」も1割弱存在する。

②-2 縦画に関する分析結果

グラフ3 「|」（縦画）（%）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、横置きが42%・左側が38%と、真っ直ぐ及び斜め置きの場合の倍近い率になる。

○「書きにくい」の割合は、左側が16%と若干低いですが、他3種は大差がない。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた

理由

[書きやすい]

横置き…○縦線の感覚でなく横線の感覚で書ける。

(←※本来の縦画ではなく、他の要素と化してプラス評価に転じている。)

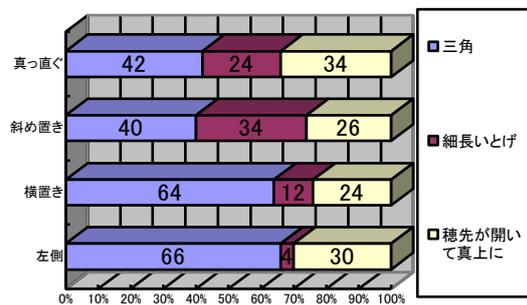
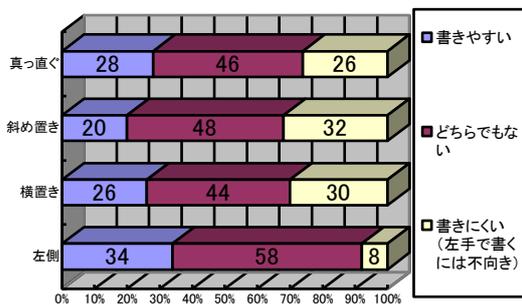
[書きにくい]

横置き…○全く違う文字（横棒）を書いているようで違和感がある。

②-3 「横画からのはね」に関する分析結果〔注：傾向が顕著に現れた要素である〕

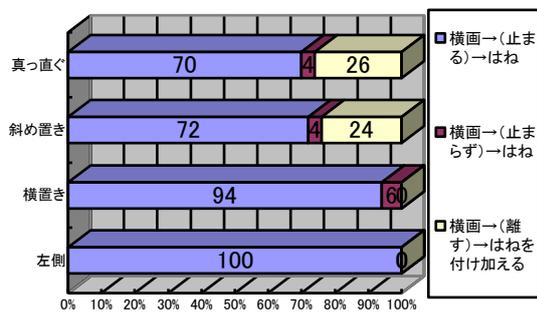
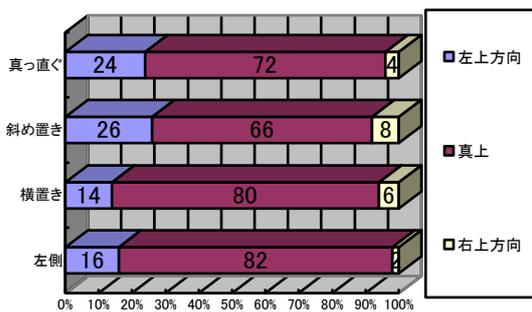
グラフ4 「北」（最終画 はね）（%）

グラフ5 「北」最終画・横画からのはねの形（%）



グラフ6 「北」最終画・横画からのはねの方向（%）

グラフ7 「北」最終画・横画からのはねの書き方（%）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、左側の場合が34%と若干高めである。

○一方、「書きにくい」の割合は、左側の場合のみ8%とかなり低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

左側…○手の動きが自然である。

○筆の動きや自分の書いている字がよく見える。

[書きにくい]

横置き…○真横にはねる感覚が不自然。はねが横棒と同じ感覚。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○望ましい三角の形になる割合は、左側の場合で7割弱、横置きで6割強に上るのに対し、真っ直ぐの場合と斜め置きでは4割程度にとどまる。

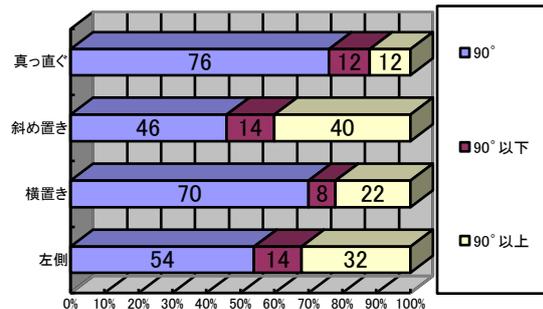
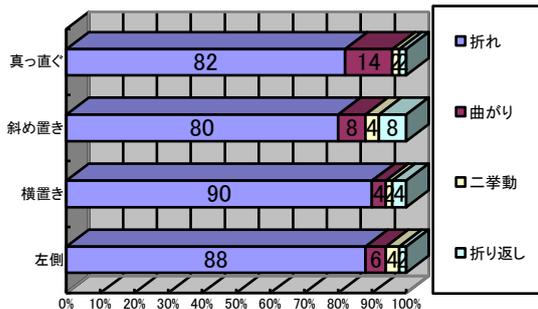
○真上にはねる割合は、左側の場合が8割強、横置きが8割と高い数値を示す。

○横画からはねへの用筆は、左側の場合10割がいったん筆をとめてからはね出す、いわゆる望ましい用筆であるのに対し、真っ直ぐの場合と斜め置きでの2～3割は、横画部分で筆を引き上げ、改めて筆を入れ直してはねを加えている。

②-4 転折部(折れ)に関する分析結果 [注：傾向が顕著に現れた要素である]

グラフ8 「月」2画目(折れ)(%)

グラフ9 「月」2画目 横画と縦画の角度(%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、斜め置きが12%と低めである。

○「書きにくい」の割合は、斜め書きが36%と高めな一方、左側は10%と低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き…○左側に曲げるので曲げやすい。左に向けて上手く引ける。

左側…○筆を安定させやすい。筆が自然に進む。

○しっかりと角がつくれる。折れをコントロールできる。

[書きにくい]

斜め置き…○紙が斜めだと折れる度合いがわからない。折れの方向がわからない。不自然な方向に折れて書きにくい。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

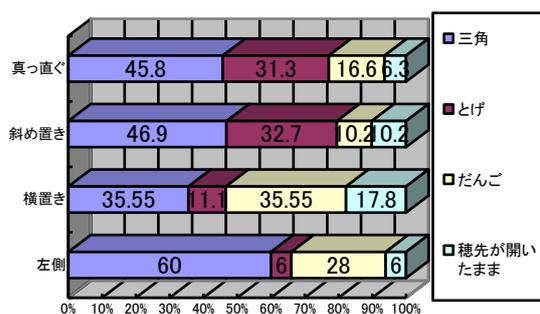
○斜め置きでは、曲がりになる割合と折れる部分で筆を入れ直す割合がそれぞれ1割弱となる。

○転折部前後で、横画より縦画の方が太くなる割合は、横置きの場合2割にしかなかった。反面、横置きでは、6割弱が横画と縦画の太さが同一となり、また、横画より縦画の方が太くなる割合も3割弱に上る。

○折れの角度が90°以上の鈍角になる割合は、斜め置き・左側で4割近くに上る。

②-5 はねに関する分析結果

グラフ10 「月」はねの形（用筆「はね」中）（%）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、横置きが12%と低めである。

○「書きにくい」の割合は、横置きが42%と高めである一方、左側は12%と低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きにくい]

横置き…○強引に筆を“押す”感じで動かさないと書けない。

○左下から右上への動きは不自然な感じがする。

○普段この方向にはねる文字はないので難しい。

○はねのところで勢いよく筆がひっくり返る。毛先が開いてしまう。

(←※横置きでは普通であれば書きにくい箇所が他の要素に変化する
 ことで書きやすく感じるパターンも多い中で、横置きがマイ
 ナスに作用する好例である。)

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

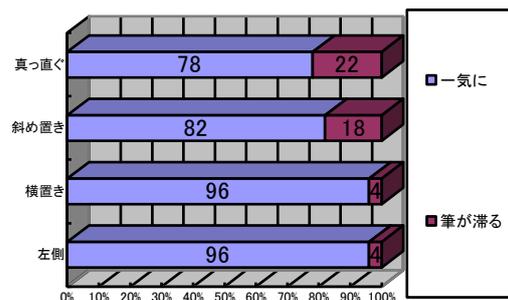
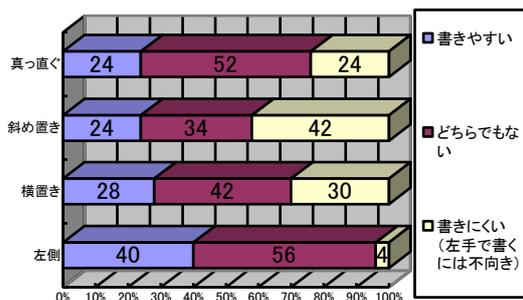
○横置きでは、1割が「月」の2画目終筆部（はね）を止めている。

○左側の場合の6割が、はねは望ましい三角の形になる。一方、横置きでは、
 三角形と丸い団子状になる割合がそれぞれ3割強を占め、穂先が開いて同一
 の太さではねる割合は2割弱に上る。

②-6 反りに関する分析結果 [注：傾向が顕著に現れた要素である]

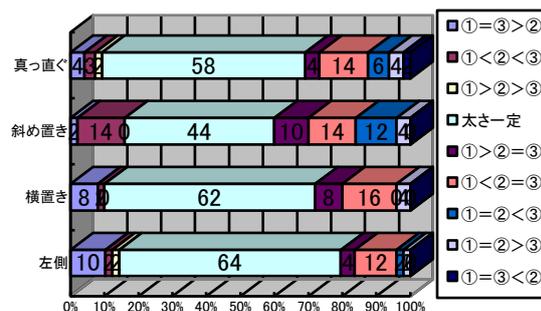
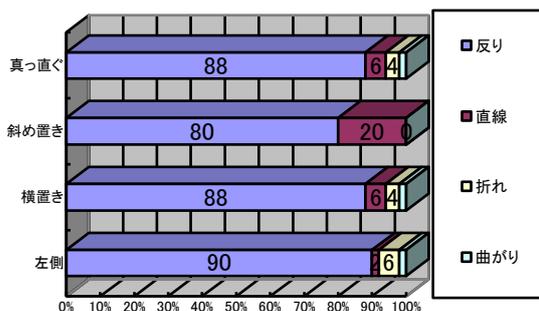
グラフ11 「式」(5画目 そり) (%)

グラフ12 「式」5画目 用筆 (%)



グラフ13 「式」5画目 (反り) (%)

グラフ14 「式」5画目 太さ (始①→中②→終③) (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、左側の場合が40%と高い。

○「書きにくい」の割合は、左側の場合が4%とかなり低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

左側…○左手に近いところで反るので書きやすい。自分の体に近くて安定する。

○外側にある手を中心に戻してくるだけなので引きやすい。

○穂先が見える。

[書きにくい]

真っ直ぐ…○変な摩擦があつてスムーズに書けない。

○手が覆いかぶさってしまい自分の引いた線が見えない。

斜め置き…○反り具合がわからない。

○手が覆いかぶさってしまい自分の引いた線が見えない。

○筆先が毛羽立ってくずれてしまう。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

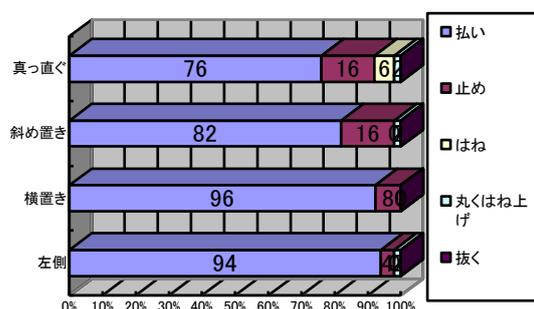
○左側・横置きでは一気に運筆されている割合が10割近いが、真っ直ぐ・斜め置きでは2割前後が運筆にとどこおりを見せる。

○真っ直ぐ・横置き・左側ともに反りの形状をとる割合は9割前後に上る。しかし、斜め置きでは、反りは8割にとどまり、直線となる割合が2割に及ぶ。

○線の太さの望ましい変化（送筆部で線が細くなる）が現れる割合はどの置き方でも一様に低い。

②-7 左払いに関する分析結果

グラフ15 「光」5画目（左払い）（%）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

- 「書きやすい」の割合は、横置きが10%・斜め置きが20%と低くなる。
- 「書きにくい」の割合は、横置きが38%・斜め置きが30%と若干高くなる。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きにくい]

横置き…○上方向には（上に向けては）払いにくい。上方向には筆を持っていかれない。

○普段ではやらない動きなので書きにくい。下から上に書く形になる。

○摩擦が起こる。

（←※横置きがマイナスに働く（不自然な筆の動きを実感させる）

好例である。）

左側…○体から一番遠く書きにくい。

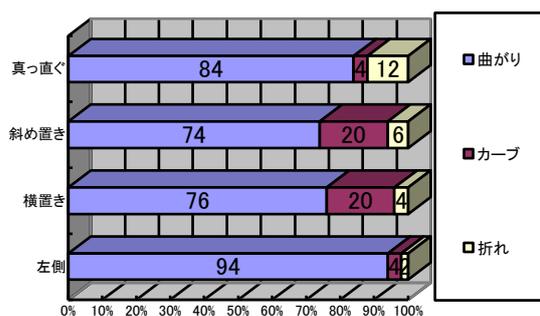
iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○左払いが止めとなる割合は、左側・横置きで1割にも満たないのに対し、真っ直ぐ・斜め置きでは2割弱に上る。

○斜め置きと横置きの場合、左払いを払いとする用筆のうちの6割以上は穂先が開いたままの形状になる。

②-8 曲がりに関する分析結果

グラフ 16 「光」最終画 曲がり部 (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、斜め置きが 10%・真っ直ぐの場合が 18%と低い。

○「書きにくい」の割合は、斜め置きが 36%・真っ直ぐの場合が 32%と高い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き…○曲がる部分が唯一縦線になるから書きやすい。縦に曲がってくるだけなので書きやすい。

(←※本来の筆使いが特有なものに化す好例である。)

○筆が自分に向かってくる方が書きやすい。

左側…○左手を左から中央に動かすので書きやすい。自分に近づいてくる方が書きやすい。

[書きにくい]

斜め置き…○斜めはうまくカーブできない。

○ちょうど曲がる時に筆を持つ手が字に覆い被さって見えなくなる。

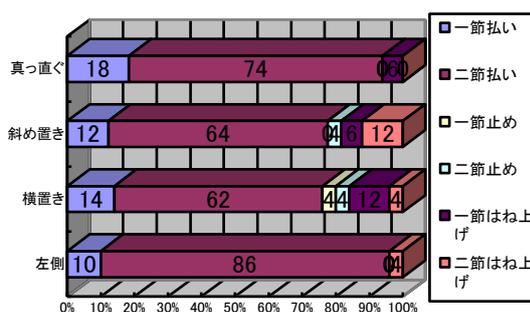
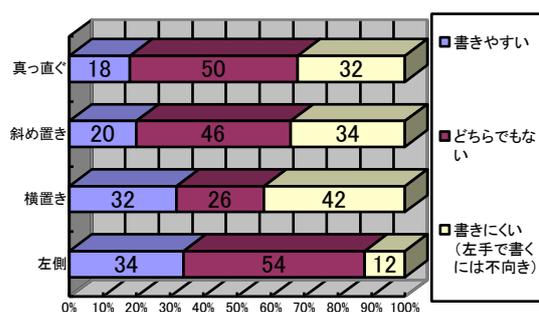
左側…○(横置き同様に「体の近くに引っ張る」でも)逸れた所から引っ張ってくるのは書きにくい。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

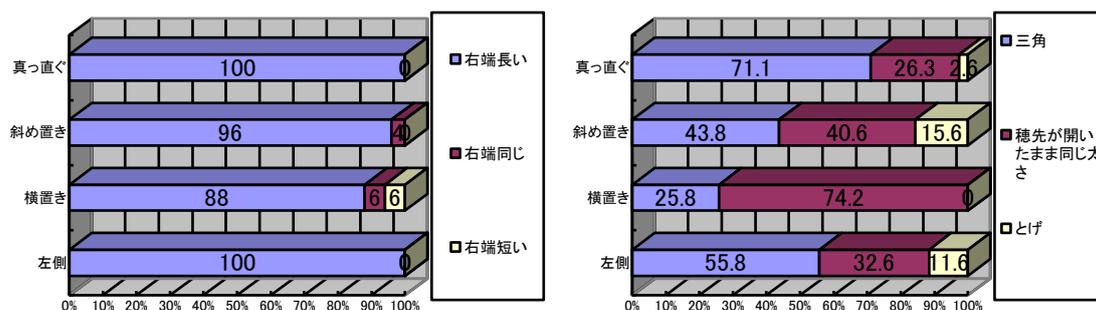
○曲がり部が曲がりの用筆になる割合は、斜め置き・横置きで7割強にとどまる。一方、真っ直ぐの場合は、他の3種ではほとんど見られない折れ用の筆が1割弱現れる。

②-9 右払いに関する分析結果 [注：傾向が顕著に現れた要素である]

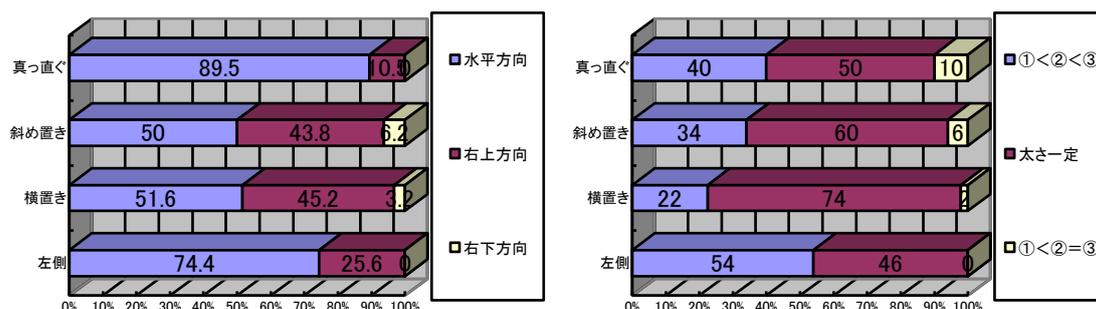
グラフ 17 「近」(最終画 右払い) (%) グラフ 18 「近」最終画(右払い) (%)



グラフ 19 「近」最終画 右端の位置 (%) グラフ 20 「近」右払いの形 (グラフ 20「二節払い」中) (%)



グラフ 21 「近」右払いの方向 (グラフ 20「二節払い」中) (%) グラフ 22 「近」最終画 太さ (始①→中②→終③) (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

- 「書きやすい」の割合は、真っ直ぐの場合が 18%・斜め置きが 20%と低い。
- 一方、「書きにくい」の割合は、左側が 12%とかなり低いのに対し、斜め置き 34%・真っ直ぐ 32%と高い。
- しかし、横置きは「書きやすい」の割合が高めであるにもかかわらず、「書きにくい」の割合も 42%と、他の3種に比べて高い値となっている。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き…○縦に引くだけだから書きやすい。

縦に払う（抜く）感覚で書ける。下に払うような感覚で書ける。

(←※他の要素に変わりプラス評価に転じる好例である。)

○体に向けて引っ張る感じは書きやすい。手前に引いてくるのは楽に感じる。抵抗感がない。

左側…○自分の方へ引いてくる方が書きやすい。最後の払いで自分の所に引っ

張れる。

[書きにくい]

真っ直ぐ…○上体の中心から右方向へ過ぎた所まで筆が動くのは書きにくい。

腕が自由に動かせる範囲が狭い。線を長く引いていくにつれて筆が動かしにくくなる。

○筆を押し形になるから。抵抗感（摩擦）がある。

横置き…○右払いの特徴をつかめない。下に向かって右払いのように書くのは難しい。

○どのように筆を運べばよいかわからない。払いの方向がよくわからない。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○左払いの望ましい用筆（二節払い）が現れる割合は、左側の場合9割弱に上る。しかし、真っ直ぐの場合は7割強、斜め置き・横置きでは6割強にとどまる。代わって、真っ直ぐ・横置きでは一節払いが2割弱現れ、横置きでは一節はね上げも1割強現れる。

○右払いの右端の位置と、払い以外の文字の右端の位置とを比較すると、真っ直ぐ及び左側の場合10割、斜め置きでは10割近くが、文字より払いの右端の方が長くなるのに対し、横置きでは文字の右端と同じ位置（長さ）になる割合、及び文字の右端より左方になる（短くなる）割合が1割弱ずつ存在する。

○二節払いの用筆中、望ましい形状（三角形）となる割合は、真っ直ぐの場合7割強、左側の場合も6割弱に上るのに対し、斜め置きでは4割強、横置きに至っては2割強にしか及ばない。一方、穂先が開いたまま同一の太さで払う割合は、横置きでは7割強に上る。また、斜め置き・左側の場合、他の2種ではほとんど見られない、細くとがった形状の払いも1割強現れる。

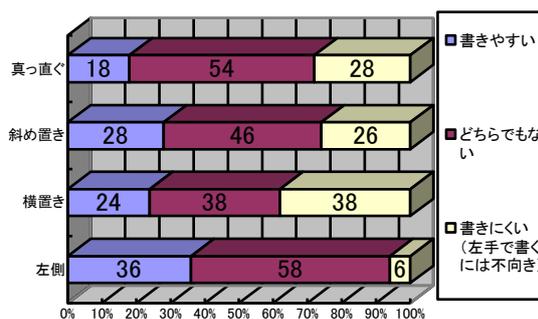
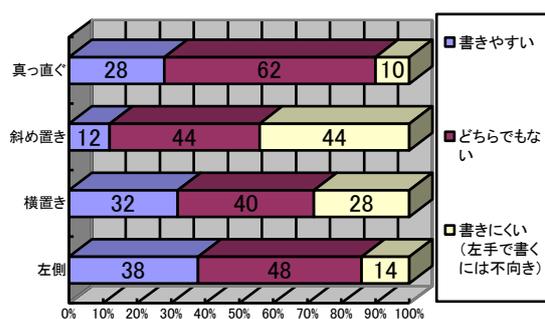
○二節で払う用筆において水平方向に払う割合は、真っ直ぐの場合9割弱、左側の場合も7割強であるのに対し、斜め置き・横置きでは5割程度にとどまる。反面、斜め置き・横置きでは、真っ直ぐ及び左側の場合に1～2割しか現れない、右上方向への払いが5割弱現れる。また、真っ直ぐ及び左側の場合には全く見られない右下方向への払いも1割弱存在する。

○しんによりの、右払い直前までの右斜め下方向への運筆において、望ましい太さの変化（徐々に太さを増していく）となる割合は、左側の場合5割強だが、真っ直ぐの場合では4割、斜め置きでは3割強、横置きに至っては2割強しかない。代わって、太さが一定となる割合は、真っ直ぐの場合5割、斜め置きが6割、横置きでは7割強となる。

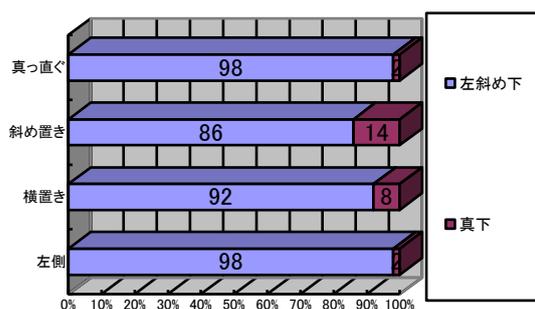
②-10 右回転の文字に関する分析結果

〔注：「の」「つ」「り」において傾向が顕著に現れた〕

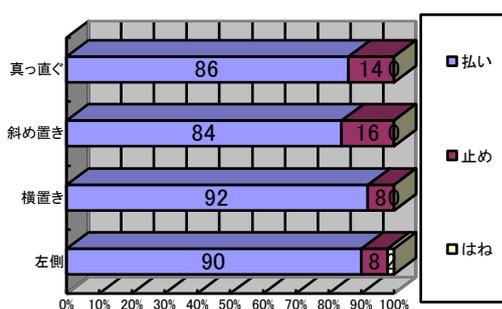
グラフ 23 「の」(右回転→払い)(%) グラフ 24 「り」(二画目 払い)(%)



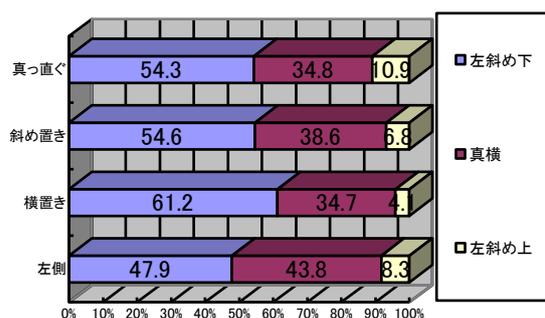
グラフ 25 「の」終筆部の方向 (%)



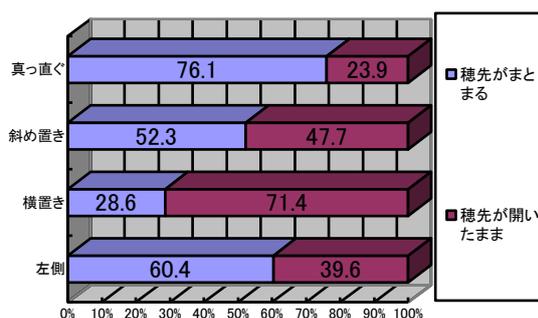
グラフ 26 「り」終筆部(払い)(%)



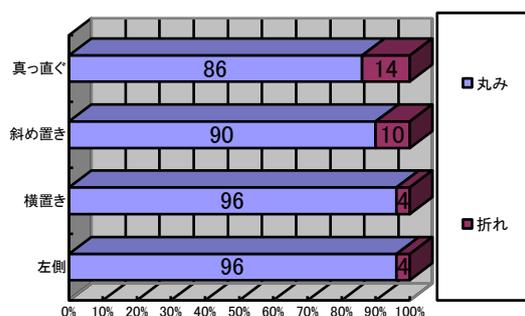
グラフ 27 「つ」払いの方向(用筆「払い」中)(%)



グラフ 28 「つ」払いの用筆(用筆「払い」中)(%)



グラフ 29 「つ」右回転曲線部（丸み）（％）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

の：○「書きやすい」の割合は、左側の場合が36%と高い。

○「書きにくい」の割合は、左側の場合が6%とかなり低い。

☆後述する「ん」の場合と同じ傾向を示す。

り：○「書きやすい」の割合は、斜め置きが12%と低い。

○一方、「書きにくい」の割合は、斜め置きが44%とかなり高い。

○しかし、横置きは「書きやすい」の割合が高めな反面、「書きにくい」の割合も28%と、「書きやすい」「書きにくい」の割合がほぼ同じになる。

つ：○「書きやすい」の割合は、左側の場合が40%と高い。

○一方、「書きにくい」の割合は、左側の場合が16%と低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き…〈り〉○横払いの感覚。左払いのようになる。

(←※他の要素に変わったことによるプラス評価とマイナス評価の好例である。)

〈ろ〉○手元がきちんと見える所で右から左への動きは書きやすい。

〈つ〉○右手で書くときの「し」に似ている感じで書きやすい。「し」を書く感覚で書ける。

(←※他の要素に変わったことによるプラス評価とマイナス評価の好例である。)

左側…〈の〉○払うときに腕を抜く方向が自然。

○手元が見えるのでうまく払える。

〈つ〉 ○払う部分がきちんと見える。

[書きにくい]

真っ直ぐ… 〈の〉 ○払いの準備段階の部分にふくらみがなく手（筆）が動かない。回転が苦しい。

○毛先が開いてしまう。

○手元が見えにくく筆の動きがわからない。

〈り〉 ○窮屈な感じがする。

〈つ〉 ○手元が見えない。

斜め置き… 〈の〉 ○腕が回りにくい。

○筆を押す形になる。

○穂先を整えておくのが困難。

〈り〉 ○どこまで伸ばしていいのかわからず間延びしてしまう。

○手元が全く見えないので筆の動きがわからない。

横置き… 〈の〉 ○上下の感覚がわからない。

○回転中ほとんど先が見えない。

○毛先が開いてしまう。

〈り〉 ○上に払うことになってしまい書きにくい。

（←※他の要素に変わったことによるプラス評価とマイナス評価の好例である。）

〈つ〉 ○上方向に線を引っ張りにくい。上に向かって（払う）ので難しい。

○線を押しやるようにして書かざるを得ない。筆が進まず押す形になる。

（←※他の要素に変わったことによるプラス評価とマイナス評価の好例である。）

○手元が見えない。

左側… 〈り〉 ○左からさらに左は書きにくい。

○自分の体から遠い所で書いている感じがする。

〈ろ〉 ○外の方には払いにくい。払うというより止まってしまう。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点面の形状及び用筆に関する分析

〈の〉○払いの用筆中、穂先をまとめながら払ういわゆる望ましい用筆の割合は、斜め置き・横置きでは4割程度にとどまる。一方、穂先が開いたまま同一の太さで筆を払う割合は、斜め置き・横置きでは6割程に上る。

○終筆部の方向は、斜め置き・横置きでは1割前後が真下となる。

(←※斜め置き・横置きは、感想に反して、実際は終筆が回転の後に回りきった形で払えていない。)

〈り〉○終筆部は、真っ直ぐ・斜め置きでは8割強が払いの用筆となり、2割弱が止めの用筆となる。

○払いの用筆中、穂先をまとめながら払ういわゆる望ましい用筆の割合が、斜め置きでは5割にとどまる。一方、穂先が開いたまま同一の太さで筆を払う割合は、斜め置きでは5割に上る。

〈つ〉○終筆部は、真っ直ぐ・斜め置きでは1割前後が止めの用筆となる。

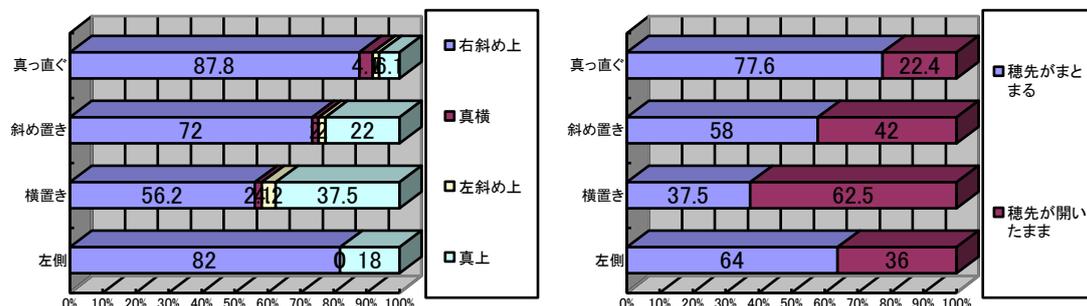
○終筆部の方向は、左斜め下の、いわゆる望ましい方向に払う割合が、左側の場合は5割に満たず、真横に払う割合とほぼ同率になる(4割)。

○払いの用筆中、穂先をまとめながら払ういわゆる望ましい用筆の割合は、斜め置きでは5割程度、横置きに至っては3割に満たない。一方、横置きでは、穂先が開いたまま同一の太さで筆を払う割合が7割を超える。

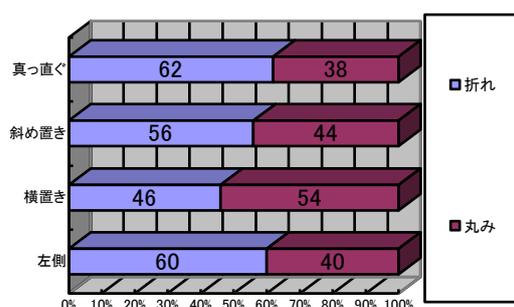
○右回転曲線部は、真っ直ぐ・斜め置きのほぼ1割が折れ用の用筆となる。

②-11 左回転の文字に関する分析結果〔注：傾向が顕著に現れた要素である〕

グラフ 30 「ん」 抜く方向 (用筆「抜く」中) (%) グラフ 31 「ん」 終筆部の用筆 (用筆「抜く」中) (%)



グラフ 32 「ん」 山部転折部（折れ）（％）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、左側の場合が 38% と高い。

○「書きにくい」の割合は、左側の場合が 16% と低い。

（←※「の」の場合と同じ傾向である。）

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

左側…○体の方に向かって筆を運んでくるので書きやすい。

○ひじに余裕があって書きやすい。

○手元がよく見える。

[書きにくい]

真っ直ぐ…○手がつまったようになる。

横置き…○「ん」を書いている感じがしない。

○「ん」の形通りに書けない。

○払いの方向が大変。右側にははね上げられない。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

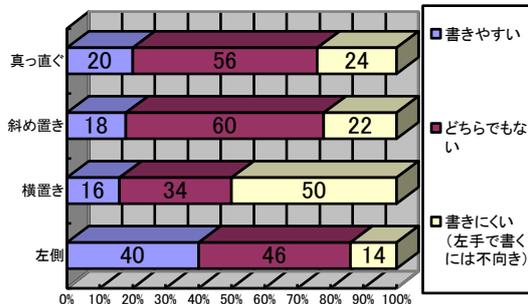
○終筆部の方向は、右斜め上の、いわゆる望ましい方向に抜く割合が、斜め置きでは 7 割強、横置きでは 6 割弱にしか及ばない。一方、斜め置きでは 2 割以上、横置きでは 4 割弱が真上に抜いている。

○払いの用筆中、穂先をまとめながら払ういわゆる望ましい用筆の割合は、横置きの場合 4 割に満たない。一方、横置きでは、穂先が開いたまま同一の太さで筆を払う割合が 6 割を超える。

○山部転折部は、斜め置き・横置きでは、折れと丸みの割合がほぼ半々になる。

②-12 縦書きに関する分析結果〔注：傾向が顕著に現れた要素である〕

グラフ 33 課題文 縦書き (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

○「書きやすい」の割合は、左側の場合が40%と高い。

○一方、「書きにくい」の割合は、左側が14%と低いのに対し、横置きは50%とかなり高い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

左側…○文字全体が左手の前であって縦で書きやすい。

○連綿を書くときのように次の文字に入りやすい。

○脇が締まる感じで安定する。

○腕が邪魔にならずに書ける。全体像が見えやすい。

[書きにくい]

真っ直ぐ…○左から右に筆を押す形はやはり不自然。右側に動かしにくい。

○書いている字が見えにくく筆がふらつく。

斜め置き…○字の向きが一瞬わからなくなる。

○書いている字が見えにくく筆がふらつく。

横置き…○何を書いているのかわからなくなる。字の形がわからない。感覚がつかめない。

○書式の観点から見て、全体が右→左というのは書きにくい。

横になるのに右から左へ動くから。

左側…○全体的に体から離れているので。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点面の形状及び用筆に関する分析

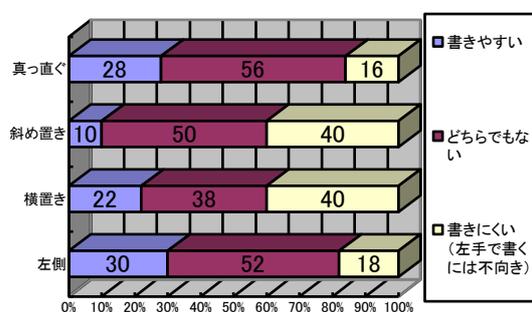
- 曲がり部に関して、縦書きの場合、紙の置き方にかかわらず、一律望ましい用筆（曲がり）となる割合が低くなる（7割前後）。4種とも、曲がりに代わってカーブもしくは折れになる割合が単体の場合より高くなる（1～2割）。
- 左払いは、特に、斜め置き・左側での単体の場合との差は大きい。斜め置きの場合、単体では見られなかった、はねの用筆が2割弱出現する。また、左側の場合、止めになる割合が単体の3倍以上（1.5割）になる。
- はねに関しては、斜め置きの縦書きで1割弱がカーブとなる。これは他の場合には見られない傾向である。
- 反りでは、斜め置き・横置き・左側の縦書きで、反りの用筆となる割合が低くなる（7～8割）。代わって、直線になる割合が高くなり（1～2割）、横置き・斜め置きでは、他の場合ではほとんど見られない折れの用筆も出現する（1～2割）。
- 右払いでは、半紙の置き方にかかわらず、単体ではほとんど見られない二節はね上げの割合が一様に高くなる。特に、横置きの場合、その率は6割弱にまで上り（因みに、単体では1割に満たない）、他の場合との差が著しい。また、横置き・斜め置きの縦書きでは、他の場合にはほとんど見られない二節引き抜きの用筆が出現する（横置きで1割強～2割弱、斜め置きで1割弱）。
- 右払いの右端の位置と、払い以外の文字の右端の位置との比較において、斜め置きの縦書き・横置きの縦書きの場合、文字より払いの右端が長くなる割合は8割強と、他の場合に比べて低い割合を示す。
- 「の」の終筆部の方向は、真っ直ぐ・斜め置き・横置きの縦書きの場合、斜め下となる割合が低い（7割程度）。先の3種とも真下になる割合が高く（1割～2割強）、真っ直ぐの場合はさらに1割が真横となる。
- 「り」の終筆部が払いになる割合は、真っ直ぐの縦書きの場合に最も高い（10割近く）。一方、横置きの縦書きでは、払いの割合が8割強にとどまり、はねる割合が1割強に及ぶ。
- 「ろ」の右上転折部に関して、横置きの縦書きの場合は3割弱が丸みとなり、

折れにならない割合が最も高い。

- 「ろ」の右回転曲線部は、半紙の置き方にかかわらず、丸みになる割合が低い。特に、斜め置き及び横置きでの場合は2割強が折れになる。
- 「つ」の右回転曲線部は、真っ直ぐの縦書き・左側の縦書きの場合に丸みとなる割合が低く（6割強～7割弱）、3割強～4割弱が折れとなる。
- 「ん」の終筆部の方向は、横置きの縦書きの場合、右斜め上になる割合が低く（7割弱）、2割強が真上となる。
- 「ん」の山部転折部が折れになる割合は、縦書き・横書き問わず横置きの場合に断然低い（3割強）。7割弱が丸みになる。

②-13 横書きに関する分析結果 [注：傾向が顕著に現れた要素である]

グラフ 34 課題文 横書き (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

- 「書きやすい」の割合は、斜め置きが10%と低い。
- 一方、「書きにくい」の割合は、斜め置き・横置きともに40%とかなり高い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

真っ直ぐ…○全体像が見えやすい。

横置き…○縦書きになるからつながりを持って書ける。

左側…○右側に動かしやすい。腕が動かしやすい。

[書きにくい]

真っ直ぐ…○左から右に線を引くのが押す形になって不安定。

○自分の真ん中を經由するので書きにくい。

斜め置き…○上に向かって払うような字は総じて書きにくい。

形がくずれて筆の払いがうまくできない。

○文字が斜めになってしまう。

○字が見えにくくて書きにくい。

横置き…○何を書いているのかわからなくなる。頭がこんがらがってしまう。

○字の特徴がつかめない。はね・払いが書きにくい。

左側…○紙を左に置くと一番左の字が遠い。

○脇が締まらなくて安定しない。

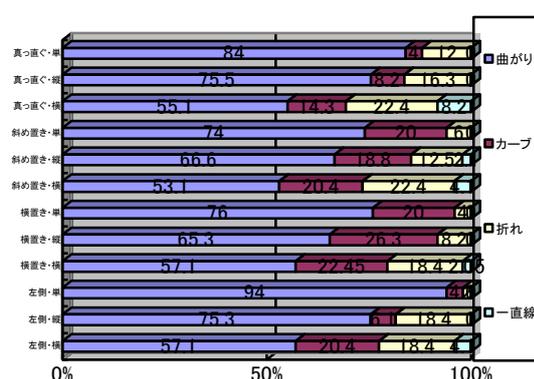
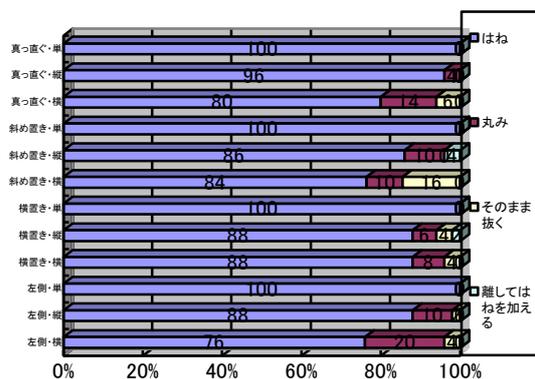
○紙を左へずらすと払いなどがコントロールできない。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○横画からののはねに関して、真っ直ぐ・左側・斜め置きでの横書きは、はねの用筆の割合が8割前後と、他の場合（9割弱～10割）に比べて低くなる。

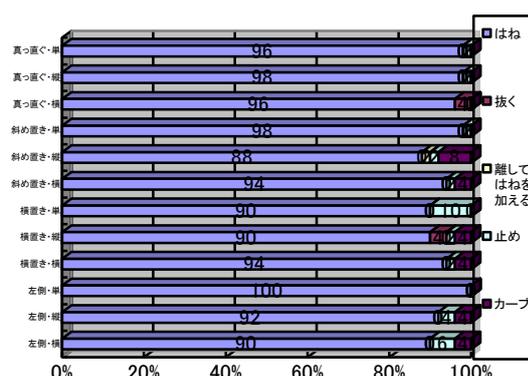
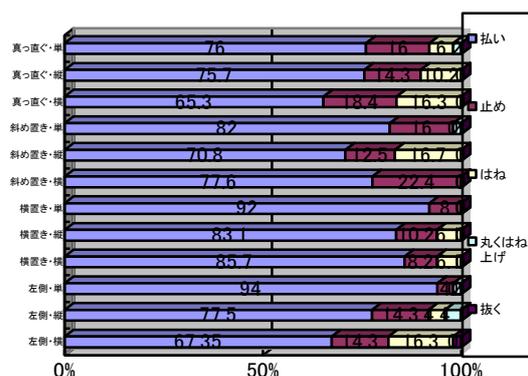
○曲がり部に関しては、半紙の置き方にかかわらず、横書きの場合、一律望ましい用筆（曲がり）となる割合がかなり低くなる（5割強）。代わって、カーブもしくは折れになる割合がそれぞれ2割程度となる。

グラフ 35 「北」最終画（はね）（%） グラフ 36 「光」最終画 曲がり部（%）

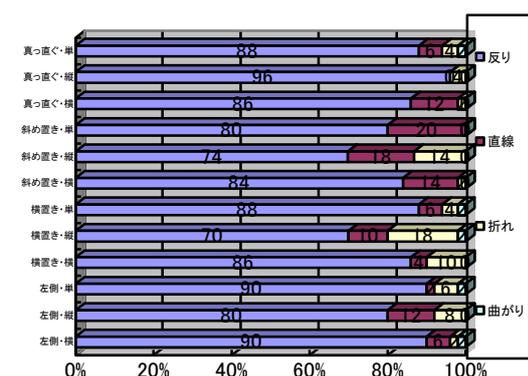
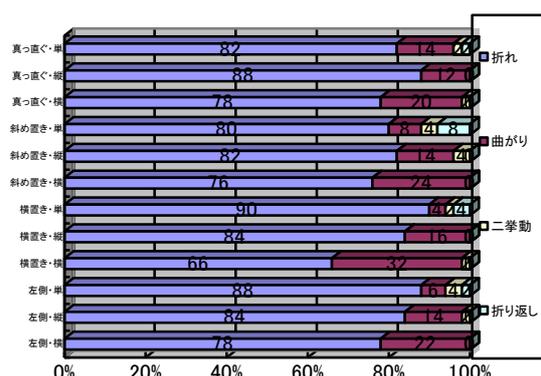


○左払いは、真っ直ぐ・斜め置き・左側の横書きで払いの用筆になる割合が低くなる（7割程度）。この傾向は縦書きの場合と同じである。しかし、斜め置きの場合は、縦書きで2割弱出現したはねの用筆が、単体同様皆無である。一方、左側での単体の場合との差は縦書き以上に大きい。左側の場合、縦書き同様、止めになる割合が単体の3倍以上（1.5割）である上に、単体では0、縦書きでもほとんど見られないはねの用筆が2割弱も出現する。

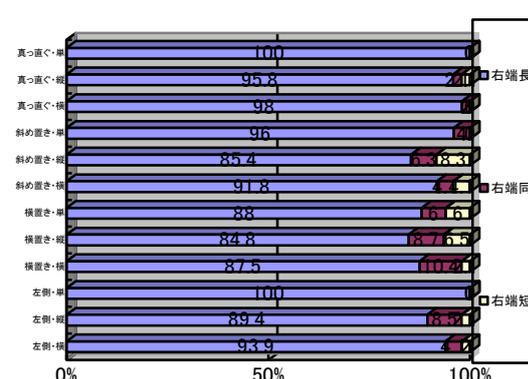
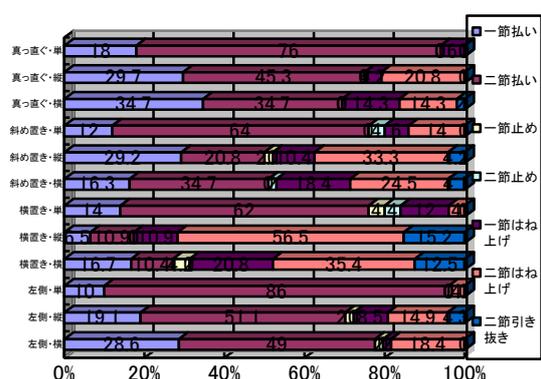
グラフ 37 「光」 5 画目（左払い）（％） グラフ 38 「月」 2 画目（はね）（％）



グラフ 39 「月」 2 画目（折れ）（％） グラフ 40 「式」 5 画目（反り）（％）



グラフ 41 「近」最終画（右払い）（％） グラフ 42 「近」最終画 右端の位置（％）



○ 転折部は、半紙の置き方にかかわらず、横書きの場合、一律望ましい用筆（折れ）となる割合が低くなる（7割弱～8割弱）。代わって、曲がりになる割合が高くなり（2割程度）、横置きに至っては3割以上となる。

○ 右払いでは、縦書きの場合と同様、半紙の置き方にかかわらず、単体ではほとんど見られない、二節はね上げの割合が高くなる。また、二節引き抜きの用筆も、横書き・斜め置きの場合に、縦書きとほぼ同じ割合出現する。なお、

縦書きの斜め置き・横置きに1割強現れた一節はね上げが、横書きでは2割近くに増加する。

○右払いの望ましい用筆（二節払い）が最も高い割合で出現するのは、半紙を真っ直ぐに置いた横書きの場合である（3.5割）。一方、二節払いの割合が最も低いのは横置きの縦書きである（0.6割）。

○右払いの右端の位置と、払い以外の文字の右端の位置との比較において、横置きの横書きの場合は、斜め置きの縦書き・横置きの縦書きの場合に次いで、文字より払いの右端が長くなる割合が低い（9割弱）。

○「の」の終筆部が払いになる割合は、斜め置き及び左側の横書きのみ9割に満たず、止めや払いの用筆になる割合が他の場合より高い。

○「の」の終筆部の方向は、半紙の置き方にかかわらず、斜め下となる割合が縦書きの場合以上に低い。特に、真っ直ぐの場合は5割強にしか及ばない。代わって、真横の割合が3割と、他の場合に比べてかなり高くなる。左側の横書きでは、左斜め上に払い上げる率が他の場合に比べて高い（1割）。

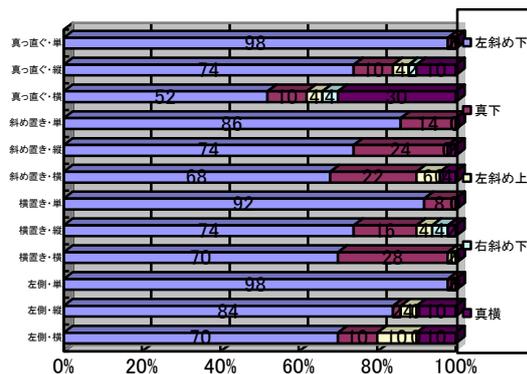
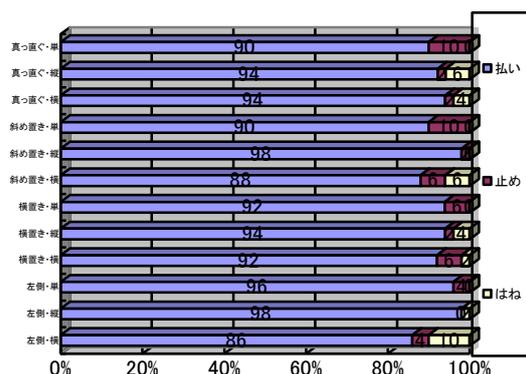
○「り」の終筆部が払いになる割合は、半紙の置き方にかかわらず、横書きの場合一様に低い（7～8割）。

○「つ」の終筆部が払いになる割合は、真っ直ぐ・斜め置き・左側の横書きの場合低い。（8割強～9割弱）。

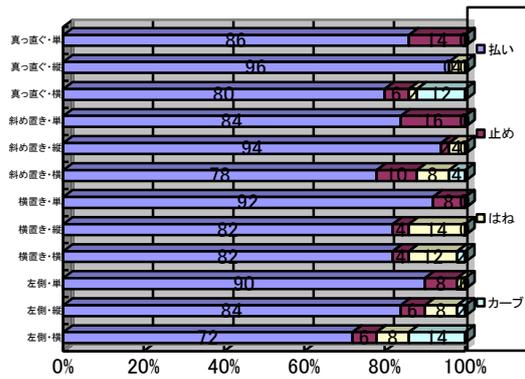
○「ん」の終筆部が抜く用筆になる割合は、半紙の置き方にかかわらず、横書きの場合一様に低い（8～9割）。

○「ん」の終筆部の方向は、真っ直ぐ・斜め置き・横置きの横書きの場合、右斜め上になる割合が低く（7割～7割強）、1割～2割弱が真上となる。

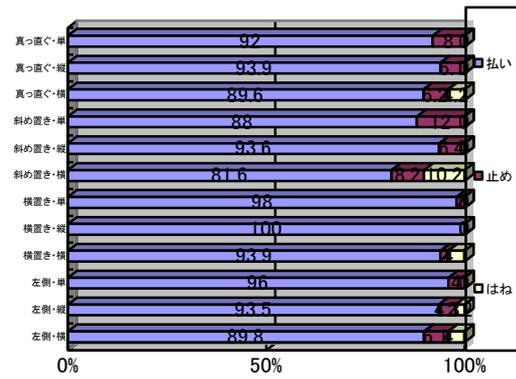
グラフ 43 「の」終筆部（払い）（%） グラフ 44 「の」終筆部の方向（%）



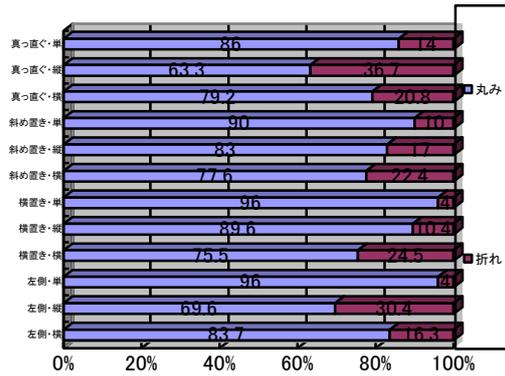
グラフ 45 「り」終筆部（払い）（％）



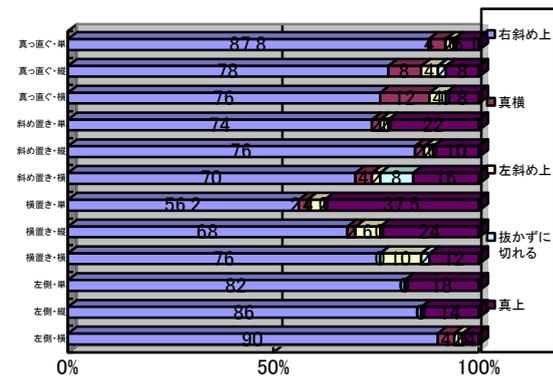
グラフ 46 「つ」終筆部（払い）（％）



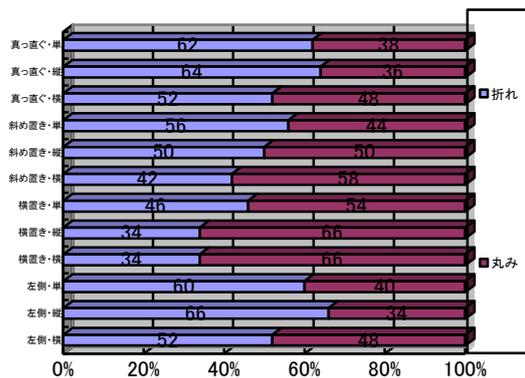
グラフ 47 「つ」右回転曲線部（丸み）（％）



グラフ 48 「ん」抜く方向（％）



グラフ 49 「ん」山部転折部（折れ）（％）



(3) 左手毛筆書写に際しての半紙の置き方と字形の関係に関する考察

左手書字者に旧来の右手での筆使いを理解習得させるのか。それとも、左手での筆使いを新たに考え提示するのか。先述の通り、書写教育において毛筆を用いるのは、毛筆が文字の基本的な要素・形・動き等を学習するために有効な学習道具であると考えたことによる。左手書字者が毛筆により文字学習を行う

ために、まずは古来行われてきた筆使いをふまえた上で、左手書写によりそれを習得するためにはどのような方策が効果的かを検討し検証することが必須となる。その具体的な一方法として、半紙の置き方に関する考慮は、左手毛筆書写の際有効に働く要件になるとの見解に基づき、本論考ではその検証を試みた。

その結果、左手書字者が毛筆によって効果的な書写学習を行う要件として、半紙の置き方に関する配慮は有用な一方策となり得ることが明らかになった。中でも、体の中心から左側へずらす置き方は有効に働く可能性が総じて高い。ただし、要素によっては適する置き方が異なるので注意を要する。

一方、横置きには、別の（もしくは不自然な）要素や用筆に変化してしまう・字形の理解や把握が困難になる等との特有な問題が生じる。従来行われてきた筆使いや字形を習得する際、横置きには無理があると言える。書写学習延いては文字学習といった観点から3種の半紙の置き方を考察した場合、横置きには文字構造や用筆・字形の認識等といった側面に難点があることから、書写学習においては、横置きを半紙の置き方の選択肢に含めない方がよいと考えられる。

表 4 横置きにおいて「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由とその要因

点画要素	横置きにおける「書きやすさ」(E) と「書きにくさ」(D)
横 画	E : 「縦画と同じ感覚」「横線より縦線の方が書きやすい」 …他の要素に変化してプラス評価 D : 「“一” という漢字を意識したときに不自然」 …他の要素に変化してマイナス評価
縦 画	E : 「縦線の感覚でなく右から左への横線の感覚で書ける」 …他の要素に変化してプラス評価 D : 「全く違う文字を書いているようで違和感がある」 …他の要素に変化してマイナス評価
は ね	D : 「強引に筆を“押す” 感じで動かさないと書けない」「左下から右上への動きは不自然」 …（左手では書きにくい部分が横置きによって他の要素・用筆に

	変化し書きやすく感じるパターンが多い中で) 横置きによって 変化した用筆がマイナスに働く例
左払い	D:「上方向には払いにくい」 …(「はね」同様) 横置きによる不自然な筆の動きを実感する例
曲がり	E:「曲がる部分が唯一縦線になる」 …本来の筆使いが特有なものに変化してプラス評価
右払い	E:「縦に引くだけだから」「下に払うような感覚で書ける」 …他の要素に変化してプラス評価 D:「右払いの特徴をつかめない」 「下に向かって右払いのように書くのは難しい」 …他の要素に変化してマイナス評価
右回転	E:〈り〉「“横払い”(左払い)の感覚」 〈つ〉「“し”を書く感覚」 …他の要素に変化してプラス評価 D:〈り・つ〉「上方向に払うことになる」「筆を押しやるようになる」 …他の要素に変化してマイナス評価

なお、左手毛筆書字には、【表5】のように、半紙の置き方に関係なく、左手毛筆書写特有な共通の困難点も存在する。各点画要素における毛筆従来の筆使いを会得するためには、半紙の置き方に合わせて、どのような手立てが有効であるか検討考察することを今後の課題としたい。

表5 半紙の置き方に関わらない左手書字に共通な困難点

点画要素	左手書字における共通課題
単体・反り	線の太さの望ましい変化(送筆部で線が細くなる)が現れにくく、太さが一定。
縦書き/横書き・曲がり	望ましい用筆(曲がり)になりにくく、カーブもしくは折れになる。
縦書き・右払い	単体ではほとんど見られない二節はね上げの割合が著しく高くなる。

横書き・折れ	望ましい用筆（折れ）になりやすく、曲がりになる。
横書き・右回転	〈の〉 終筆部の方向が斜め下になる割合が低い。 （縦書き左側以外3種にも同一傾向） 〈り〉 終筆部が払いになる割合が低い。
横置き・左回転	〈ん〉 終筆部が抜く用筆になる割合が低い。

(4) 左手硬筆書写での用紙の置き方と字形の関係に関する分析

① 調査内容と分析方法

本項においても、前々項「(2) ①」での調査方法と同様に、仮に右手書字者が左手での書字を試行するといった暫定的な調査方法を用いて考察を試みる。また、暫定的な調査対象者の負担を極力軽減し、かつ「国語科書写」の学習において左手書字者に有効な指導方法を模索するとの観点をふまえ、以下の方法により調査分析を試みる。

1 調査対象者には以下の2点を確認し、硬筆筆記具（鉛筆かシャープペンシル）の持ち方と用紙の置き方を統一する。

- i. 左利きの順手書字における望ましい硬筆筆記具（以下「筆記具」）の持ち方は、右利きの順手書字の望ましい筆記具の持ち方¹²を反転させた、右手の場合と対称的な関係にあるものと推測することができる。以上から、左利きの順手書字における望ましい筆記具の持ち方を次のように仮定し、本調査での持ち方とする。

○筆記具に接する指の位置：親指＝第一関節より先の中央部

示指1＝第一関節より先の中央部

示指2＝第三関節から第二関節の間 中指

○机に接する指と形状：中指／薬指／小指をそろえた状態で軽くまるめ、小指が机に接する。

○指が接する筆記具の位置：示指1＝筆記具の先端部（鉛筆の場合、削り際のやや上）

親指＝示指より先端部から離れた位置

○角度：前方から見て、右側へ20度程度。側方から見て、書字者側から60度程度。

筆記具の先端部は示指（上部）・親指（右斜め下）と中指（左斜め下）の3点で支持され、親指・示指・中指の三指と筆記具との接触点を結んだ形が正三角形になる。

¹ 押木秀樹・近藤聖子・橋本愛「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」(『書写書道教育研究 第17号』2003) p.14.

² 小林比出代「新しい筆記用具が指向する方向性の分析」(『同 第18号』2004) p.24.

- ii. 用紙の置き方は、a.体の真ん中に真っ直ぐ置く方法 b.「斜めがき筆法」
c.「横がき筆法」 d.「正座筆法」の4種とし、a→b→c→dの順番で、
それぞれ2cm四方の枠内に書写し比較すること。

2 調査対象とする文字（以下「課題文字」）は、分析考察に必要な要素を備えた平易なものを少数用いる。

- i. 単体で書写する課題文字は、「第2章 4.(2)」と同一の、日本で日常的に用いる文字が持つ基本的な点画要素（はね・折れ・曲がり・反り・払い）を備えた漢字5字と仮名の特徴である右回転を主軸とした平仮名4字、及び左回転の平仮名1字の計10字とする。調査に先立ち、基本線である横画と縦画も試書する。なお、課題文字10字の選出理由と本調査での着目点は、「第2章 4.(2)」に示した通りである。
- ii. 縦書き・横書き（縦方向・横方向の書字運動）の相違に関する調査において対象とする文章も、「第2章 4.(2)」と同一の、課題文字10字を単純に羅列したものとする。（よって文章としては意味を持たない。）

3 調査は、2006(平成18)年4月、筆者が担当した授業（高等学校芸術科書道）の受講者中、高校3年生35名（全員右手書字者）を対象に実施。本調査の対象者を高校3年の書道選択者とした理由は、「第2章 4.(2)」に記した理由と同一である。

〔注：「第2章 4.(2)」の毛筆書写に関する調査は、2005(平成17)年度末（2月）、すなわち2006(平成18)年2月に当時の高校2年生（「書道Ⅰ」及び「Ⅱ」を履修）右手書字者50名・左手書字者2名を対象に実施した。本項の調査において調査対象とした生徒は全員「第2章 4.(2)」での調査対象者でもある。〕

4 調査対象者には、文字の基本点画を改めて確認（各基本点画を示したプリントを配布、筆者の示範を視写）し、各課題文字のポイントとなる要素を認識させた上で、字形が整っていて読みやすい（＝書写的な観点から見て望ましい）楷書で書くように指示する。ただし、課題文字は明朝体活字で提示し、

硬筆書写での文字例は示さない。

5 調査対象者へのアンケートから、左手硬筆書写の際書きやすく感じた用紙の置き方とその理由、及び書きにくく感じた置き方とその理由について集約し考察する。また、4種それぞれの用紙の置き方で書写した課題文字における各点画要素の用筆や形状・字形には、単体・縦書き・横書きの別でどのような違いが生じたか分析を試みる。

② 左手硬筆書写での用紙の置き方と字形の関係に関する調査結果
及び比較考察

表1 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた割合

※表中 a: 体の真ん中に真っ直ぐ b: 斜め置き c: 横置き d: 左側

○=書きやすい ×=書きにくい /

◎:50%以上 ●:30%以上 50%未満 ▲:10%以上 20%未満 △:10%未満

	一	丨	北	月		式	光		近	の	り	ろ	つ	ん	縦書き	横書き
	横画	縦画	横画↓はね	はね	折れ	反り	曲がり	左払い	右払い	右回転↓払い	右回転↓払い	右回転↓払い	右回転↓払い	左回転↓払い		
	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×	○ ×		
a	●	● △		● ▲	△ ▲	▲ ▲		● ▲	▲	● ▲	▲ ▲	▲	● ▲		▲	
b	●	▲ ●			▲ ●	▲ ●	△ ●	▲		▲ ▲		▲ ▲	● ▲	▲ ●	▲ ●	△ ●
c	●		▲	◎	▲ ●	●		●	● ●		◎	△ ●	●	●	△ ◎	▲ ◎
d		●	●			▲	● ▲	▲ ▲				△				▲ ▲

表2 4種それぞれの置き方を「書きやすい」・「書きにくい」と感じた理由

[特徴的なものを抜粋]

	a 真っ直ぐ		b 斜め置き		c 横置き		d 左側	
	書きやすい	書きにくい	書きやすい	書きにくい	書きやすい	書きにくい	書きやすい	書きにくい

縦画		腕が体に近すぎる。		紙に運動して字が斜めになる。不自然。			脇が締まる。左手が自由に動く。	
はね				体が邪魔する。はねる方向がつかめない。	外側から内側に向かうので手が安定する	はねる方向がわからない。不自然。	手が体と交叉しなくてすむ。楽に書ける。	
折れ	体と正対している。	直角に曲げにくい。		直角に曲がらない。	手元が見える。	縦から横の動きは不安定。絵を描く感覚。	手元が見える。	
反り			真っ直ぐ手を下ろすだけなので。	手元が見えない。つまった感じになる。	手元が見える。	直線的になる。右から左への線になる。	体に引きつけるので。手元が見える。	
曲がり		手が邪魔になっ て見え ない。		自分の手が邪魔で見えない。	手元が見える。右→左→下へと引くから。		手元が見える。体と腕の間に空間がある。	
右回転	体と正対して左右均等の動きをする。	払いにくい方向になる。	手元に引きつける。丸みを出しやすい。	下から上への払いは書きにくい。		左斜め上方向には払いにくい。不自然。	最も右の部分も体の左側にあり体勢が楽。	体から離れていく。払いにくい方向。

縦書き						字を書く感 覚がない。 行の中心が とれない。		
横書き						字を書く感 覚がない手 元が見えな い。		左にいくほ ど手がきつ くなる。

表3 4種それぞれの置き方での各基本点画における

望ましい用筆・形状・方向の出現率〔特徴的なものを抜粋〕

※表中 a: 真つ直ぐ b: 斜め置き c: 横置き d: 左側

◎: 100~90% ○: 89~80% ●: 79~60% △: 40~21% ×: 20~0%

[単体]点画要素	a	b	c	d
横画からのほね・真上に はねる		●	●	
折れ・折れ用の用筆	○	○	◎	◎
・角度が90°	●			●
はね・はね用の用筆	◎	◎	◎	◎
反り・一気に運筆	○	●	●	○
・反りの形状				●
左払い・払い用の用筆	●	○	●	○
曲がり・曲がりの用筆	△	△		
右払い・二節払い	●	△	△	●
・文字より右払いの 右端が長い	●	●	●	○
・水平方向に払う	△	×	×	●
・斜線部角度が $10^\circ < x \leq 20^\circ$	△	△	△	△

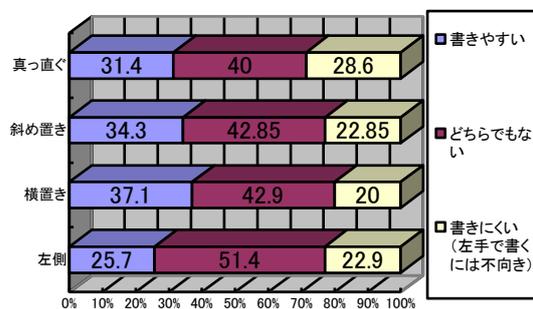
[単体]点画要素	a	b	c	d				
左回転・抜く用筆	○	○	○	◎				
・右斜め上に抜く	●			●				
・山部転折部が折れ用の用筆	●	●		●				
[書式別]点画要素	縦書き				横書き			
	a	b	c	d	a	b	c	d
横画からのほね・はね用の用筆	○	◎	○	◎	○	○	◎	○
折れ・折れ用の用筆	◎	◎	○	◎	◎	◎	○	◎
・角度が90°	○		●	●				●
はね・はね用の用筆	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○
反り・反りの用筆			△	●		△		●
左払い・払い用の用筆	○	●	●	○	○	●	○	●
曲がり・曲がりの用筆			△	●	△	△	△	

右回転〈の〉・払いの用筆	○	○	◎	○	右払い・二節払い			△	●		△		
・左斜め下に払う	●	◎	◎	●	・文字より右払いの 右端が長い	●			●	○	●	●	○
〈り〉・払いの用筆	●	●	○	◎	右回転〈の〉・払いの用筆	◎	◎	◎	◎	●	○	○	◎
〈ろ〉・払いの用筆	●	●	○	●	・左斜め下に払う	●	●	●	○	○		●	○
・左斜め下に払う	×				〈り〉・払いの用筆	●	●	●	○		●	●	○
・右回転曲線部が 丸みの用筆	●		●	●	〈ろ〉・左斜め下に 払う		△	●				●	
〈つ〉・払いの用筆	○	○	○	◎	〈つ〉・曲線部が 丸みの用筆	●	●		●		△		●
・左斜め下に払う	●	●	●	●	左回転・右斜め上に抜く	●	●	●	●	●	○		●
・右回転曲線部が 丸みの用筆	●		●	●	・山部転折部が折れ の用筆	●	●		○	●	●		●

〔※以下特徴的なデータを抜粋し、本項での硬筆のデータ（＝「硬」）を、前項での毛筆のデータ（＝「毛」）と比較しながら分析する。〕

②-1 横画に関する分析結果

グラフ1 「一」（横画）（％）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

毛筆では、半紙を体の真ん中に真っ直ぐ置いた場合、「書きやすい」8％・「書きにくい」62％と書きにくさが高い数値を示し、左側に置いた場合は、「書きやすい」64％・「書きにくい」6％と真っ直ぐ置いた場合とは正反対の数値を

示す。また、毛筆の斜め置きは、真っ直ぐ置いた場合と同様な傾向を示し、横置きでは、「どちらともいえない」が64%と曖昧な感覚を示す割合が高い。毛筆の場合に示されるこうした顕著な特徴に対し、硬筆では、4種の置き方による大きな差異が見受けられない。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き… [毛] ○縦画と同じ感覚で書ける。

(←※横画が他の要素に変わってプラス評価となる。)

左側… [毛] ○体の左側から中心に向けて筆を引くので書きやすい。

○自分が書いている線を見ながら書ける。筆の動きが見える。

[書きにくい]

真っ直ぐ… [毛] ○筆を押すので手が突っ張る。書く時に抵抗（摩擦）が生じる。

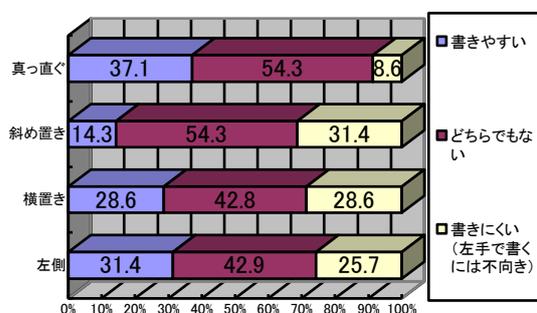
○書いている線が自分の腕や手に隠れて見えない。

斜め置き… [毛] ○手元が腕で隠れて見えない。

横置き… [毛] ○「一」という漢字を意識したときに不自然である。

②-2 縦画に関する分析結果

グラフ2 「|」(縦画)(%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆では、真っ直ぐ・左側の場合での「書きやすい」の割合が高く、真っ直ぐの場合の「書きにくい」の割合は低い。一方、毛筆では、横置き・左側の場

合での「書きやすい」の割合が高い。「書きにくい」の割合は、左側の場合に若干低くなるが他の3種に大差はない。なお、真っ直ぐの場合は、硬筆と毛筆で反対の数値を示す。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き… [毛] ○縦線の間でなく横線の間で書ける。

(←※本来の縦画ではなく、他の要素と化してプラス評価になる。)

[書きにくい]

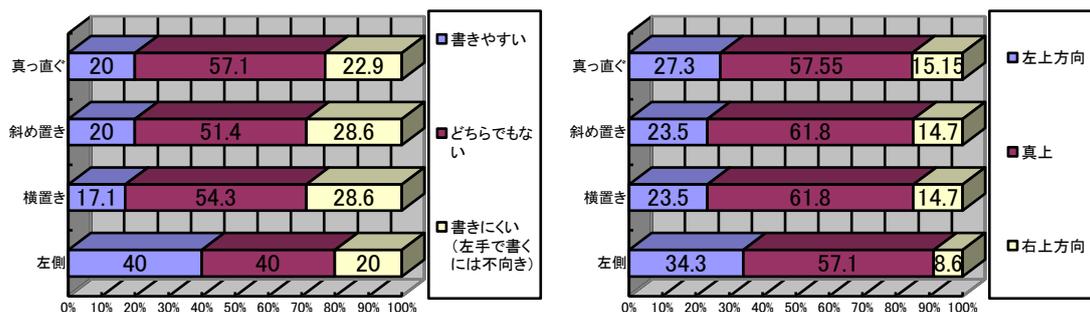
真っ直ぐ… [硬] ○腕が体に接近しすぎる。

斜め置き… [硬] ○用紙が斜めなので文字も連動して傾いてしまう。

横置き… [硬・毛] ○全く違う文字(横棒)を書いているようで違和感がある。

②-3 「横画からのはね」に関する分析結果

グラフ3 「北」(最終画 はね) (%) グラフ4 「北」横画からのはねの方向(用筆「はね」中) (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆・毛筆ともに「書きやすい」の割合は左側の場合が高く、「書きにくい」の割合は左側の場合が低い。特に、毛筆の左側の場合「書きにくい」とする割合がかなり低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

左側… [硬・毛] ○手の動きが自然である。

[毛] ○筆の動きや自分の書いている字がよく見える。

[書きにくい]

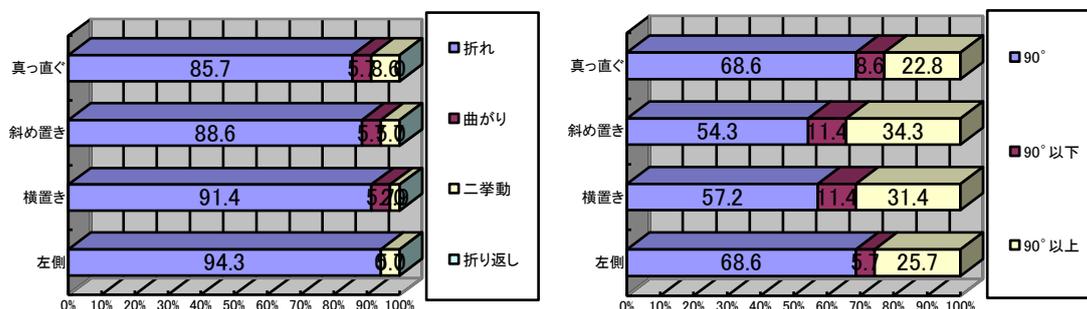
横置き… [毛] ○真横にはねる感覚が不自然。はねが横棒と同じ感覚。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

毛筆では、左側・横置きの場合望ましい方向（真上）にはねる割合が高い数値を示す。一方、硬筆の場合は真上にはねる割合が一律低くなり、毛筆では低い割合を示す右上方向へはねる率が上がる。

②-4 転折部(折れ)に関する分析結果

グラフ5 「月」2画目(折れ)(%) グラフ6 「月」2画目 横画と縦画の角度(%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆では、斜め置き・横置きでの「書きやすい」の割合が低く(ともに17.1%)、「書きにくい」の割合が高い(各31.4%・34.3%)。また、真っ直ぐの場合、「書きにくい」の割合が低い(5.7%)。一方、毛筆では、斜め置きでの「書きやすい」の割合が低めであり(12%)、「書きにくい」の割合は高めである(36%)。また、左側の場合、「書きにくい」の割合が低い(10%)。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き… [毛] ○左側に曲げるので曲げやすい。左に向けて上手く引ける。

左側… [毛] ○筆を安定させやすい。筆が自然に進む。

○しっかりと角がつかることができる。折れをコントロールでき

る。

[書きにくい]

斜め置き… [硬・毛] ○不自然な方向に折れて書きにくい。

[硬] ○直角に曲げることができない。

[毛] ○紙が斜めだと折れる度合いがわからない。折れの方がわからない。

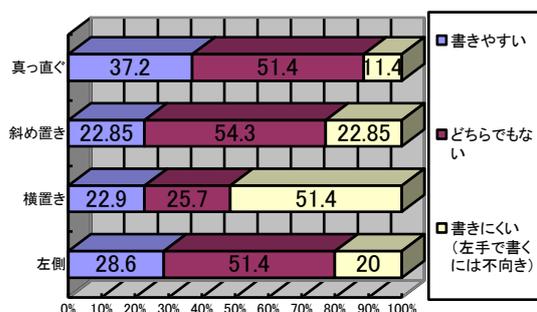
iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○折れの用筆に関しては硬筆・毛筆で同じ傾向を示す。双方とも左側・横置きで望ましい用筆（折れ）が出現しやすい。

○折れの角度が 90° 以上の鈍角になる割合は、硬筆の場合斜め置き・横置きで高くなり、毛筆では斜め置き・左側の場合に高くなる。

②-5 はねに関する分析結果

グラフ7 「月」(2画目 はね) (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆・毛筆ともに、横置きで「書きやすい」の割合が低く、「書きにくい」の割合が高い。一方、真っ直ぐ・左側の場合は「書きにくい」の割合が低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きにくい]

横置き… [硬・毛] ○普段この方向にはねる文字はないので難しい。はねる方向がわからない。

○左下から右上への動きは不自然な感じがする。

[毛] ○強引に筆を“押す”感じで動かさないと書けない。

○はねのところでは勢いよく筆がひっくり返る。毛先が開いてしまう。

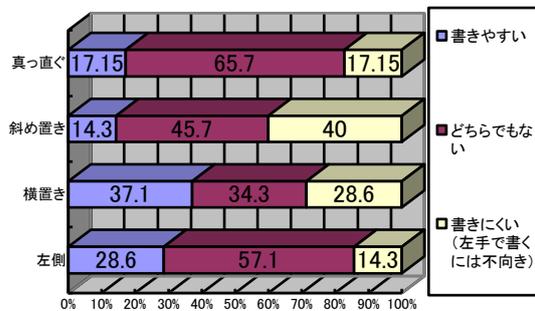
(←※横置きでは、普通なら書きにくい箇所が他の要素に転じることで書きやすいように感じるパターンが多い中で、はねに関しては、他の要素への変化が逆にマイナスに働く。)

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

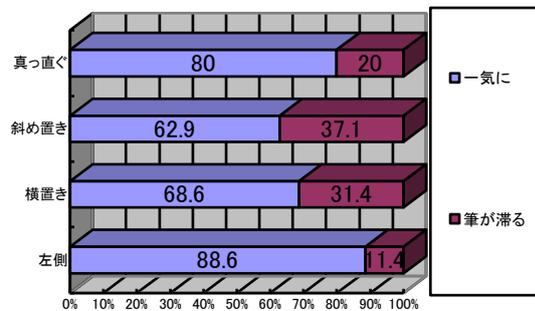
硬筆では、全ての置き方で10割が望ましい用筆（はね）になるのに対し、毛筆では、横置きの1割が止めの用筆になる。

②-6 反りに関する分析結果

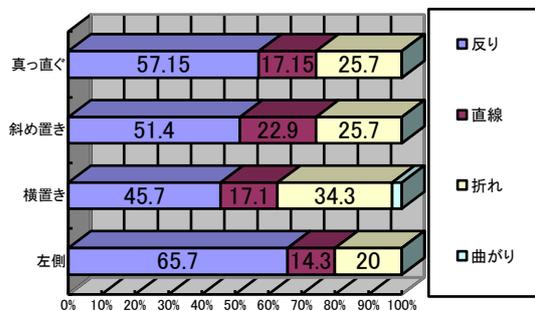
グラフ8 「式」(5画目 そり) (%)



グラフ9 「式」5画目 用筆 (%)



グラフ10 「式」5画目 (反り) (%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆・毛筆で類似した傾向を示し、「書きにくい」の割合は左側の場合でかなり低い。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

〔書きやすい〕

左側…〔硬・毛〕○左手に近いところで反るので書きやすい。自分の体に近くて安定する。

○外側にある手を中心に戻してくるだけなので引きやすい。

〔硬〕○手元が見える。

〔毛〕○穂先が見える。

〔書きにくい〕

真っ直ぐ…〔硬・毛〕○手が覆いかぶさってしまい自分の引いた線が見えない。

〔毛〕○変な摩擦があってスムーズに書けない。

斜め置き…〔硬・毛〕○手が覆いかぶさってしまい自分の引いた線が見えない。

〔毛〕○反り具合がわからない。

○筆先が毛羽立ってくずれてしまう。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○毛筆の場合、左側・横置きでは一気に運筆されている割合が10割近いが、真っ直ぐ・斜め置きでは2割前後が運筆に滞りを見せる。一方、硬筆では、毛筆の場合に比べて4種とも一気に運筆される割合は下がる。中でも斜め置き・横置きでは3～4割が滞りを見せる。

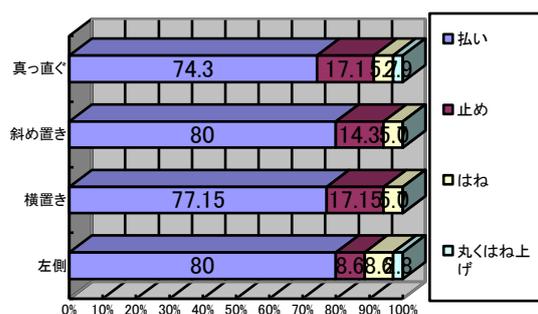
○毛筆の場合、真っ直ぐ・横置き・左側ともに望ましい形状（反り）をとる割合は9割前後に上る。しかし、斜め置きでは反りが8割にとどまり、直線となる割合が2割に及ぶ。これに対し、硬筆では、総じて毛筆の場合より反りの形状が出現しにくく、特に横置きではその割合が半数に満たない。代わって、直線ないしは折れになる割合が高くなる。

②-7 左払いに関する分析結果

i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆と毛筆の傾向は類似しており、「書きやすい」の割合は横置き・斜め置きが低く、「書きにくい」の割合は横置き・斜め置きが高くなる。

グラフ 11 「光」 5 画目（左払い）（%）



ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きにくい]

横置き… [硬・毛] ○普段ではやらない動きなので書きにくい。下から上に書く形になる。

[毛] ○上方向には（上に向けては）払いにくい。上方向には筆を持っていかれない。

○摩擦が起こる。

（←※横置きがマイナスに働く（不自然な筆の動きを実感する）結果となる。）

左側… [硬・毛] 体から一番遠く書きにくい。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

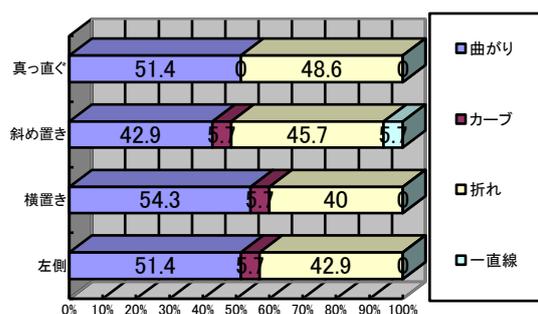
毛筆の場合、左払いが止めとなる割合は、左側・横置きで1割に満たないのに対し、真っ直ぐ・斜め置きでは2割弱に上る。硬筆の場合も同じ傾向を示すが、左側・横置きで止めになる割合は毛筆の場合よりも高くなる。

②-8 曲がりに関する分析結果

i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

「書きやすい」の割合が、硬筆では斜め置き・横置き・真っ直ぐの場合に低く、毛筆では斜め置き・真っ直ぐの場合に低い。これに対し、「書きにくい」の割合は、硬筆・毛筆ともに斜め置き・真っ直ぐの場合に高い。

グラフ 12 「光」最終画 曲がり部 (%)



ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き… [硬・毛] ○曲がる部分が唯一縦線になるから書きやすい。縦に曲がってくるだけなので書きやすい。

(←※本来の用筆が特有なものに化すことになる。)

○筆が自分に向かってくる方が書きやすい。

左側… [硬・毛] ○左手を左から中央に動かすので書きやすい。自分に近づいてくる方が書きやすい。

[書きにくい]

真っ直ぐ… [硬] ○手が邪魔になって文字が見えない。

斜め置き… [硬・毛] ○ちょうど曲がる時に鉛筆もしくは筆を持つ手が字に覆い被さって見えなくなる。

[毛] ○斜めはうまくカーブできない。

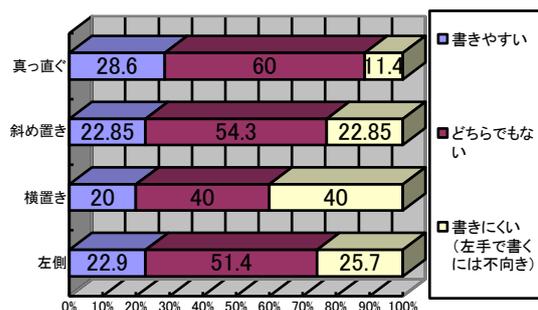
左側… [毛] 横置きと同様に“体の近くに引っ張る”用筆でも、逸れた所から引っ張ってくるのは書きにくい。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

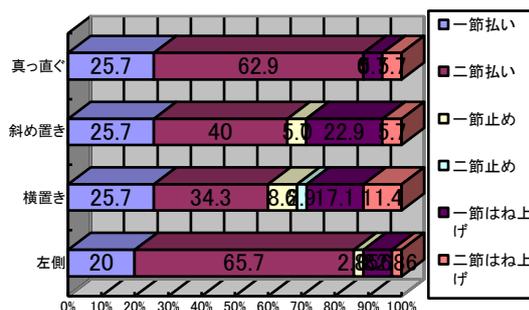
硬筆では、曲がり部が折れの用筆に転じる割合が一律高くなり、斜め置きでの曲がりの用筆は半数に満たない。これに対し、毛筆の場合、望ましい用筆(曲がり)になる割合は高くなるが、斜め置き・横置きでは7割強にとどまる。また、真っ直ぐの場合、毛筆での他の3種にはほとんど見られない折れの用筆が1割弱出現する。

②-9 右払いに関する分析結果

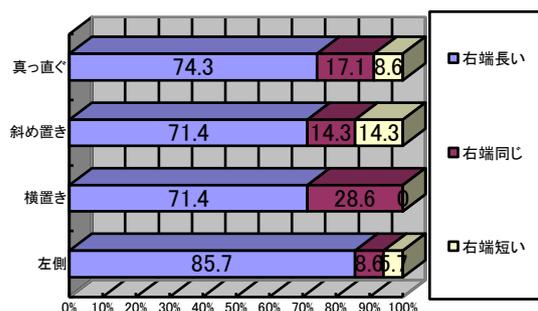
グラフ 13 「近」(最終画 右払い)(%)



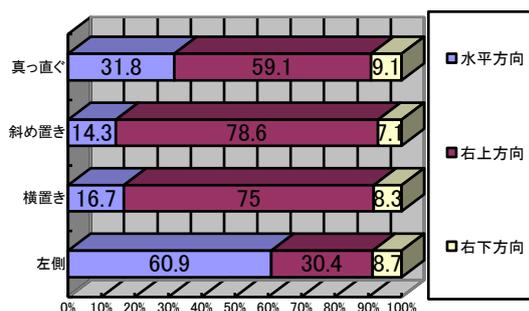
グラフ 14 「近」最終画(右払い)(%)



グラフ 15 「近」最終画 右端の位置 (%)



グラフ 16 「近」右払いの方向(グラフ 15「二節払い」中)(%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆の場合、「書きやすい」の割合には大差がないが、「書きにくい」の割合は横置きで高くなり、真っ直ぐの場合に低くなる。一方、毛筆の場合、「書きやすい」の割合は、真っ直ぐ・斜め置きが低い。また、「書きにくい」の割合は、左側がかなり低く、斜め置き・真っ直ぐの場合が高い。横置きでは「書きやすい」の割合が高めであるにもかかわらず、「書きにくい」の割合も他の3種に比べて高い値となっている。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き… [毛] ○縦に引くだけだから書きやすい。縦に払う(抜く)感覚で書ける。

○体に向けて手前に引いてくるのは楽に感じる。抵抗感がない。

(←※他の要素に変わりプラス評価となる。)

左側… [毛] ○自分の方へ引いてくる方が書きやすい。最後の払いで自分の所に引っ張れる。

[書きにくい]

真っ直ぐ… [毛] ○上体の中心から右方向へ過ぎた所まで筆が動くのは書きにくい。

腕が自由に動かせる範囲が狭い。線を長く引いていくにつれて筆が動かしにくくなる。

○筆を押す形になるから。抵抗感（摩擦）がある。

横置き… [硬・毛] ○下に向かって右払いのように書くのは難しい。

[毛] ○右払いの特徴をつかめない。どのように筆を運べばよいかわからない。

○払いの方向がよくわからない。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○毛筆の場合、右払いの望ましい用筆（二節払い）が現れる割合は、左側の場合で9割弱に上る。しかし、真っ直ぐの場合は7割強、斜め置き・横置きでは6割強にとどまる。代わって、真っ直ぐ・横置きでは一節払いが2割弱現れ、横置きでは一節はね上げも1割強現れる。これに対して、硬筆の場合は、二節払いの出現率が4種ともに低くなる。全ての置き方で一節はね上げもしくは二節はね上げの割合が高くなり、その傾向は斜め置き・横置きで顕著に現れる。

○右払いの右端の位置と、払い以外の文字の右端の位置とを比較すると、毛筆では、真っ直ぐ及び左側の場合は10割、斜め置きでは10割近くが、文字より払いの右端の方が長くなるのに対し、横置きでは文字の右端と同じ位置（長さ）になる割合、及び文字の右端より左方になる（短くなる）割合が1割弱ずつ存在する。一方、硬筆での、右端が長くなる割合は一律低くなり、特に斜め置きでの右端が短くなる割合は著しい。

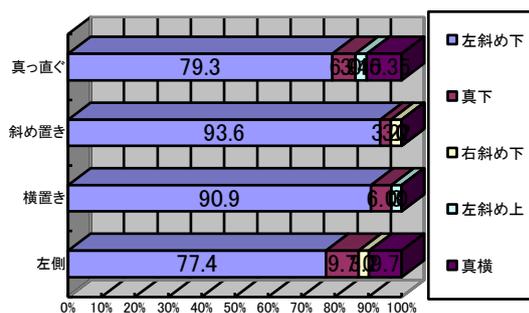
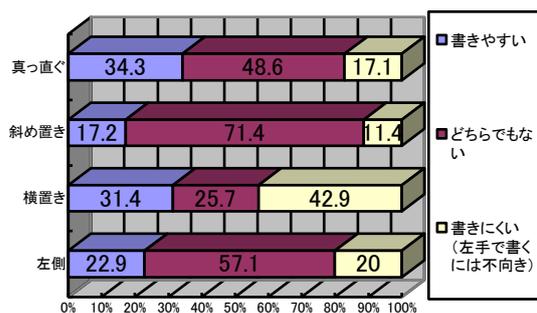
○二節で払う用筆において望ましい方向（水平方向）に払う割合は、毛筆では、真っ直ぐの場合9割弱、左側の場合も7割強であるのに対し、斜め置き・横置きでは5割程度にとどまる。反面、斜め置き・横置きでは、真っ直ぐ及び左側の場合に1～2割しか現れない、右上方向への払いが5割弱現れる。ま

た、真っ直ぐ及び左側の場合には全く見られない右下方向への払いも1割弱存在する。硬筆では、水平方向に払う割合が更に下がり、斜め置き・横置きではほとんどが右上方向＝はね上げる用筆となる。また、特に真っ直ぐの場合、毛筆との差が著しい。

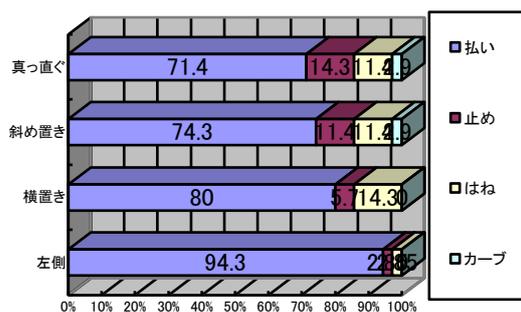
○斜線部の傾斜角度は、硬筆の方が毛筆よりもばらつきが激しい。硬筆の場合、ほとんど傾斜しない割合も増加する。

②-10 右回転の文字に関する分析結果

グラフ 17 「の」(右回転→払い)(%) グラフ 18 「の」終筆部の方向(用筆「払い」中)(%)



グラフ 19 「り」終筆部(払い)(%)



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

の：毛筆では、左側の場合に「書きやすい」の割合が高く、「書きにくい」の割合が低い。これは後述する左回転の平仮名「ん」と同じ傾向である。硬筆では、毛筆に比べて左側の場合の書きやすさが若干低くなる。また、斜め置きでの書きにくさはかなり低くなり、横置きでは高くなる。

(←※「り」「ろ」「つ」の硬筆での書きやすさ・書きにくさは、「の」と類似した傾向を示す。)

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

横置き…〈り〉[毛] ○横払いの感覚。左払いのようになる。

(←☆他の要素に変わったことによるプラス評価とマイナス評価 (次ページ★参照))

〈ろ〉[硬・毛] ○手元がきちんと見えているところで右から左への動きは書きやすい。

〈つ〉[毛] ○右手で書くときの「し」に似ている感じで書きやすい。「し」を書く感覚で書ける。

(←☆他の要素に変わったことによるプラス評価とマイナス評価 (次ページ★参照))

左側…〈の〉[硬] ○文字の中で一番右になる部分でも体の左側にあるので体勢が楽。

[毛] ○払うときに腕を抜く方向が自然。

○手元が見えるのでうまく払える。

〈つ〉[毛] ○払う部分がきちんと見える。

[書きにくい]

真っ直ぐ…〈の〉[硬] ○払いにくい方向になる。

[毛] ○払いの準備段階の部分にふくらみがなく手(筆)が動かない。回転が苦しい。

○毛先が開いてしまう。 ○手元が見えにくく筆の動きがわからない。

〈り〉[毛] ○窮屈な感じがする。

〈つ〉[硬・毛] ○手元が見えない。

斜め置き…〈の〉[毛] ○腕が回りにくい。

○筆を押す形になる。

○穂先を整えておくのが困難。

〈り〉[硬・毛] ○手元が全く見えないので鉛筆・筆の動きがわからない。

[硬] ○下から上への払いは書きにくい。

[毛] ○どこまで伸ばしていいのかわからず間延びしてしまう。

横置き…〈の〉[硬・毛] ○上下の感覚がわからない。

○斜め上方向には払いにくい。

○不自然

(←★他の要素に変わったことによるプラス評価と
マイナス評価 (前ページ☆参照))

[毛] ○回転中ほとんど先が見えない。

○毛先が開いてしまう。

〈り〉[硬・毛] ○上に払うことになってしまい書きにくい。

(←★他の要素に変わったことによるプラス評価
とマイナス評価 (前ページ☆参照))

〈つ〉[毛] ○上方向に線を引っ張りにくい。上に向かっている(払う)
ので難しい。

○線を押しやるようにして書かざるを得ない。筆が進まず
押す形になる。

(←★他の要素に変わったことによるプラス評価とマイ
ナス評価 (前ページ☆参照))

○手元が見えない。

左側…〈り〉[硬・毛] ○左からさらに左は書きにくい。払いにくい方向になる。

○自分の体から遠い所で書いている感じがする。文字が体
から離れていってしまう。

〈ろ〉[硬・毛] ○外の方には払いにくい。払いではなく止まってしまう。

iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

〈の〉毛筆での終筆部の方向は、真っ直ぐ・左側の場合のほぼ10割が望ましい方向(左斜め下)になるのに対し、斜め置き・横置きでは1割前後が真下となる。横置きの場合、感想に反して実際のところは終筆が右回転の後で回りきった形に払えていないことがわかる。一方、硬筆では、真っ直ぐ・左側の場合に左斜め下以外の方向へ払う割合が高くなり、特に真横に払う割合が増加する。

〈り〉毛筆での終筆部は、左側・横置きでの9割が、真っ直ぐ・斜め置きでの8割強が望ましい用筆（払い）となる。一方、硬筆の場合は、真っ直ぐ・斜め置き・横置きではねの用筆がそれぞれ1割強出現するために、払いの用筆になる割合は、前述の3種で一律に下がる。

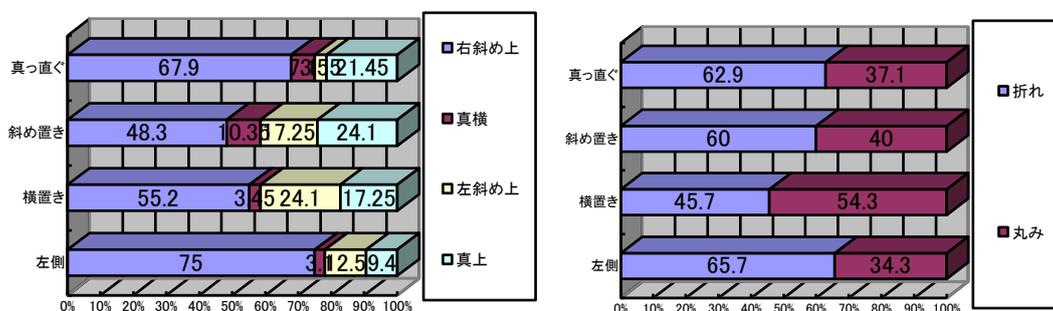
〈つ〉○毛筆での終筆部は、左側・横置きのほぼ10割が、真っ直ぐ・斜め置きの9割前後が望ましい用筆（払い）となる。これに対し、硬筆では、横置きでの止め・はねの用筆の割合が高くなり、払いは8割強にとどまる。

○硬筆での終筆部の方向は、4種ともに6～7割が望ましい方向（左斜め下）に払う。これに対し、毛筆では、左斜め下に払う割合が一律下がる。左側の場合は5割に満たず、真横に払う割合とほぼ同率になる（4割）。

○右回転曲線部は、毛筆の場合4種とも9割前後が望ましい用筆（丸み）になる反面、硬筆の場合は6割前後にしか上らない。硬筆の場合に右回転曲線部が折れとなる割合が上がるのは、「ろ」にも見られる現象である。

②-11 左回転の文字に関する分析結果

グラフ 20 「ん」 抜く方向（用筆「抜く」中）（%） グラフ 21 「ん」 山部転折部（折れ）（%）



i. 4種それぞれの置き方で「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

左側の場合、「書きやすい」の割合が高く「書きにくい」の割合が低いのは、硬筆・毛筆に共通する傾向であり、右回転の平仮名「の」の場合と同じ特徴でもある。また、硬筆での左側の場合、毛筆での左側の場合ほど「書きやすい」

が高く「書きにくい」が低い割合でないことも、「の」と共通する特徴である。

ii. 4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

左側… [硬・毛] ○手元がよく見える。

[毛] ○体の方に向かって筆を運んでくるので書きやすい。

○ひじに余裕があって書きやすい。

[書きにくい]

真っ直ぐ… [毛] ○手がつまったようになる。

横置き… [硬・毛] ○「ん」を書いている感じがしない。

○「ん」の形通りに書けない。

[毛] ○払いの方向が大変。右側にははね上げられない。

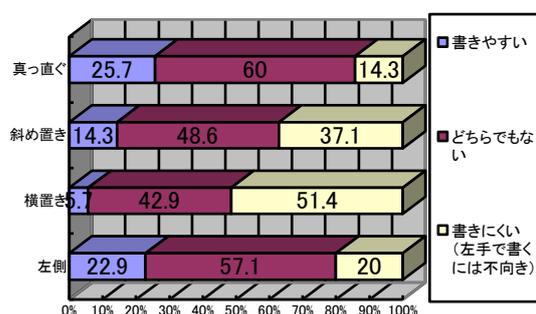
iii. 4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

○終筆部の方向に関しては、毛筆の場合、望ましい方向（右斜め上）に抜く割合が斜め置きで7割強、横置きでは6割弱にしか及ばない。一方、斜め置きでは2割以上、横置きでは4割弱が真上に抜いている。硬筆の場合も、毛筆の場合と同様な傾向を示すが、4種ともに右斜め上に抜く割合は低くなり、代わって左斜め上に抜く割合が高くなる。特に斜め置きでは、毛筆の場合との差が顕著になる。

○山部転折部の用筆については、硬筆・毛筆でほぼ同一の傾向を示す。横置きでは折れと丸みの割合がほぼ半々になる。

②-12 縦書き・横書きに関する分析結果

グラフ 22 課題文 縦書き (%)



i. — a 縦書きにおいて4種それぞれの置き方が「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆と毛筆で類似した傾向を示し、「書きやすい」の割合は左側の場合が高く、「書きにくい」の割合は左側の場合が低い一方、横置きがかなり高い。ただし、硬筆で真っ直ぐの場合は、毛筆で真っ直ぐの場合より「書きやすい」が高くなり「書きにくい」が低くなる。

ii. — a 縦書きにおいて4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

[書きやすい]

左側… [硬・毛] ○文字全体が左手の前であって縦で書きやすい。

○腕が邪魔にならずに書ける。全体像が見えやすい。

[毛] ○連綿を書くときのように次の文字に入りやすい。

○脇が締まる感じで安定する。

[書きにくい]

真っ直ぐ… [毛] ○左から右に筆を押す形はやはり不自然。右側に動かすにくい。

○書いている字が見えにくく筆がふらつく。

斜め置き… [硬・毛] ○書いている字が見えにくい。

[毛] ○字の向きが一瞬わからなくなる。

横置き… [硬・毛] ○何を書いているかわからなくなる。字の形がわからない。

○感覚がつかめない。字を書く感覚がない。

[硬] ○行の中心がとれない。

[毛] ○書式の観点から見て、全体が右→左というのは書きにくい。

○横になるのに右から左へ動くから。

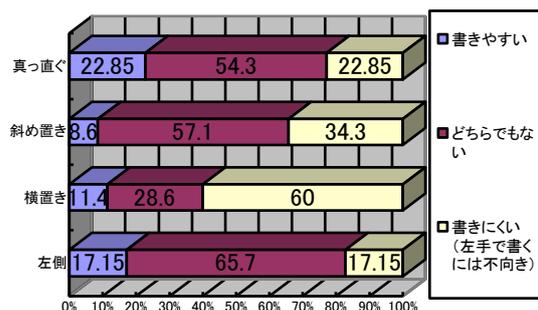
左側… [硬・毛] ○全体的に体から離れているので。

i. — b 横書きにおいて4種それぞれの置き方が「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた比率

硬筆と毛筆で同様な傾向を示し、「書きやすい」の割合は斜め置きが低く、「書きにくい」の割合は斜め置き・横置きでともに高くなる。特に、硬筆で横置き

の場合「書きにくい」の割合は顕著になる。

グラフ 23 課題文 横書き (%)



ii. 一 b 横書きにおいて4種それぞれの置き方を「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由

【書きやすい】

真っ直ぐ… [硬・毛] ○全体像が見えやすい。

横置き… [毛] ○縦書きになるからつながりを持って書ける。

左側… [毛] ○右側に動かしやすい。腕が動かしやすい。

【書きにくい】

真っ直ぐ… [硬・毛] ○自分の真ん中を経由するので書きにくい。

[毛] ○左から右に線を引くのが押す形になって不安定。

斜め置き… [硬・毛] ○文字が斜めになってしまう。

○字が見えにくくて書きにくい。

[毛] ○上に向かって払うような字は総じて書きにくい。形がくずれて筆の払いがうまくできない。

横置き… [硬・毛] ○何を書いているのかわからなくなる。頭がこんがらがってしまふ。文字を書くという感覚がない。

[硬] ○手元が見えない。

[毛] ○字の特徴がつかめない。

○はね・払いが書きにくい。

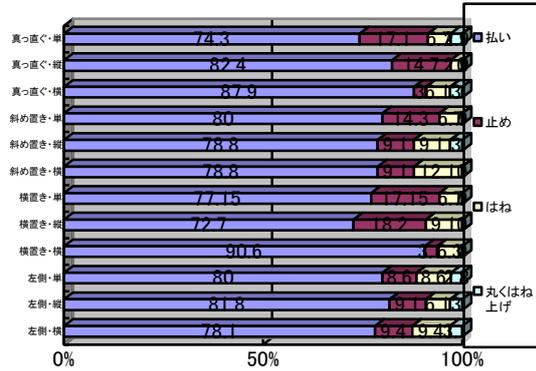
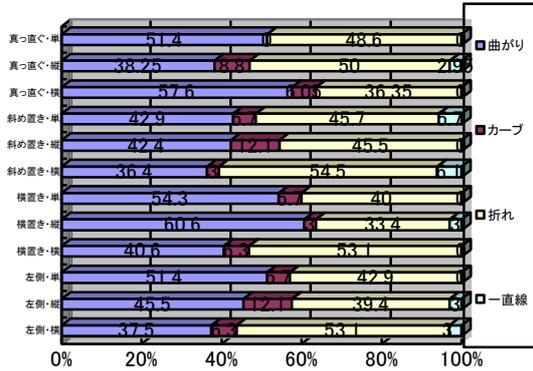
左側… [硬・毛] ○紙を左に置くと一番左の字が遠い。左側にいくほど手がきつくなる。

[毛] ○脇が締まらなくて安定しない。

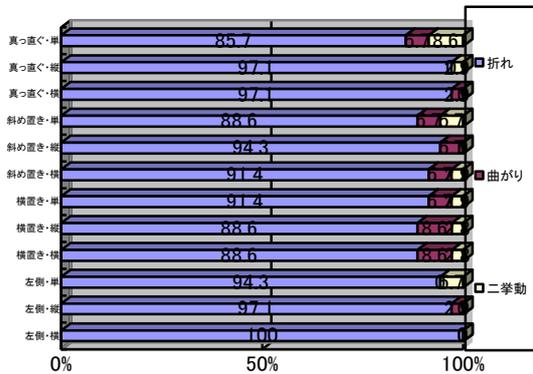
○紙を左へずらすと払いなどがコントロールできない。

iii. 縦書き・横書きにおける4種それぞれの置き方での基本点画の形状及び用筆に関する分析

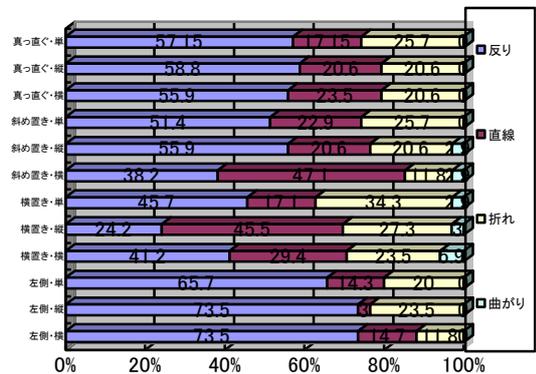
グラフ 24 「光」最終画 曲がり部 (%) グラフ 25 「光」5画目 (左払い) (%)



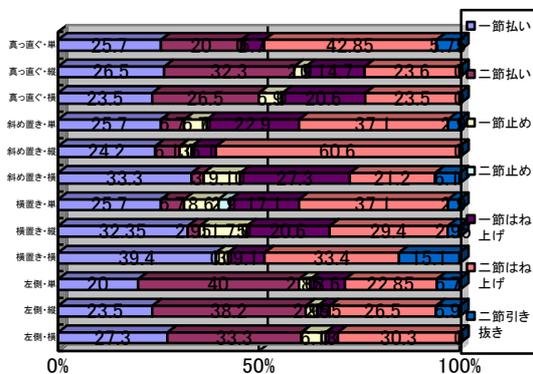
グラフ 26 「月」2画目 (折れ) (%)



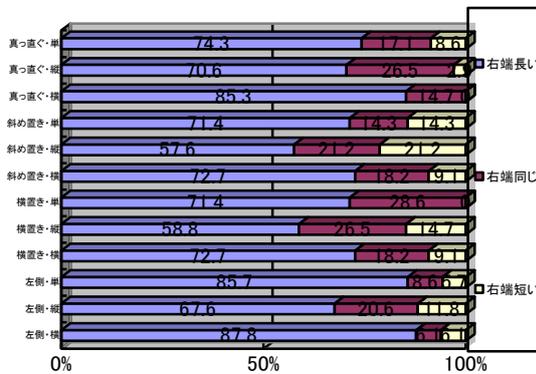
グラフ 27 「式」5画目 (反り) (%)



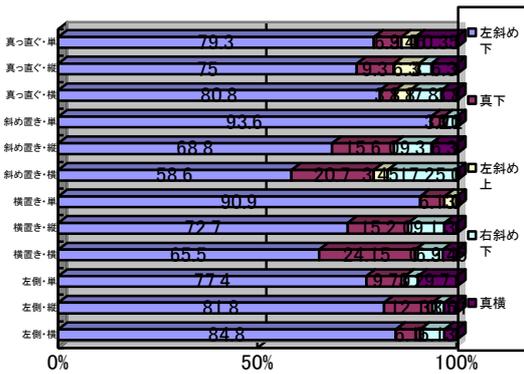
グラフ 28 「近」最終画 (右払い) (%)



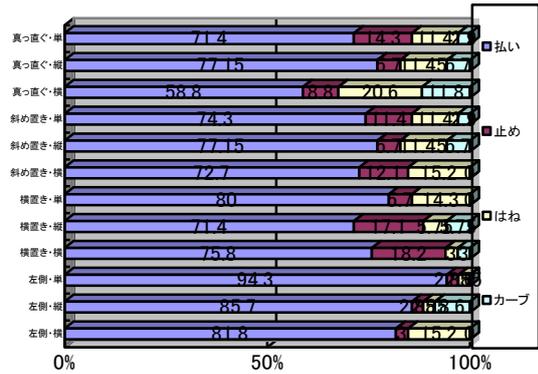
グラフ 29 「近」最終画 右端の位置 (%)



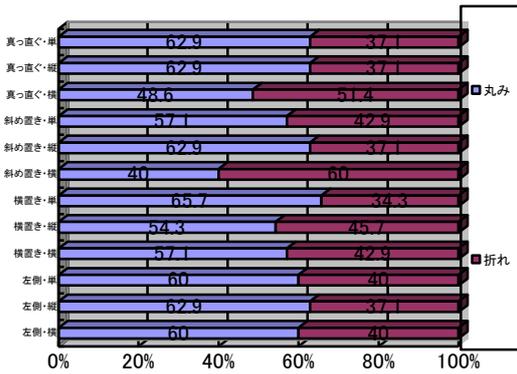
グラフ 30 「の」終筆部の方向（用筆「払い」中）（％）



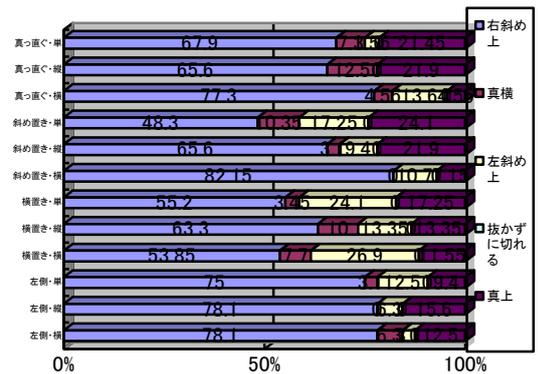
グラフ 31 「り」終筆部（払い）（％）



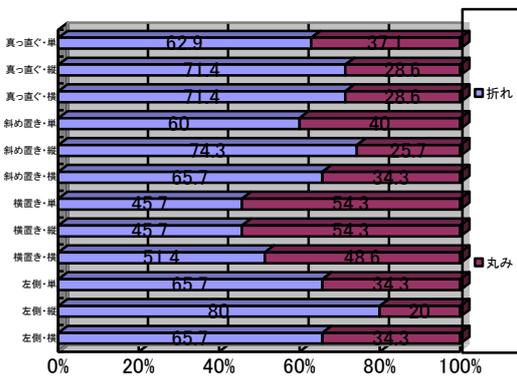
グラフ 32 「つ」右回転曲線部（丸み）（％）



グラフ 33 「ん」抜く方向（用筆「抜く」中）（％）



グラフ 34 「ん」山部転折部（折れ）（％）



○曲がり部は、毛筆の場合、縦書き・横書きの違い及び半紙の置き方にかかわらず、単体に比べて望ましい用筆（曲がり）になる割合が低くなる。この傾向は、横書きの場合にかなり強まる。また、硬筆の場合、毛筆に比べて曲がりの出現率は一律低くなり、折れに転じる割合が著しく高くなる。

○左払いは、毛筆で縦書きの場合、特に斜め置き・左側での単体の場合との差が大きい。また、横書きの場合は、真っ直ぐ・斜め置き・左側の横書きで望

ましい用筆（払い）の用筆になる割合が低くなる。これは縦書きの場合と同じである。硬筆の場合は、真っ直ぐと横置きでの用紙の置き方による差異が大きい。

- はねに関しては、毛筆の場合、斜め置きの縦書きで1割弱がカーブとなる。これは他の場合には見られない傾向である。硬筆の場合、単体では100%がはねの用筆となるが、縦書き・横書きでその率が下がり、止めの割合が高くなる。ただし、斜め置き・横置きの横書きでは抜く用筆の割合が高くなる。
- 転折部は、毛筆での横書きの場合、半紙の置き方にかかわらず、望ましい用筆（折れ）になる割合が一律低くなる。代わって、曲がりの割合が高くなり、横置きに至っては3割以上となる。一方、硬筆の場合は毛筆ほどの差異がない。
- 反りでは、毛筆の場合、斜め置き・横置き・左側の縦書きで、望ましい用筆（反り）となる割合が低くなり、代わって、直線になる割合が高くなる。横置き・斜め置きでは、他の場合ではほとんど見られない折れの用筆も出現する。硬筆の場合では、反りになる割合がさらに下がり、特に真っ直ぐ・斜め置き・横置きでの差は激しい。また、折れの用筆が出現する割合も毛筆の場合に比べて著しく上がる。
- 右払いでは、毛筆の場合、半紙の置き方にかかわらず、単体ではほとんど見られない二節はね上げの割合が一様に高くなる。特に、横置きの場合その率は6割弱にまで上り、他の場合との差が著しい。また、横置き・斜め置きの縦書きでは、他の場合にはほとんど見られない二節引き抜きの用筆が出現する。一方、硬筆の場合、縦書き・横書きの別にかかわらず、斜め置き・横置きでは二節払いがほとんど見られず、一節もしくは二節はね上げの割合が高くなる。
- 右払いの右端の位置と、払い以外の文字の右端の位置との比較において、毛筆では、斜め置き及び横置きでの縦書きの場合、文字より払いの右端が長くなる割合は他の場合に比べて低い割合を示す。横置きの横書きの場合は、斜め置きの縦書き・横置きの縦書きの場合に次いで、文字より払いの右端が長くなる割合が低い。硬筆では、全ての場合において、右端が長くなる割合が毛筆より下がるが、その中でも縦書きの場合での割合は特に低くなる。

- 「の」の終筆部の方向は、毛筆では、真っ直ぐ・斜め置き・横置きの縦書きの場合、望ましい方向（左斜め下）になる割合が低い。先述の3種とも真下になる割合が高く、真っ直ぐの場合はさらに1割が真横となる。さらには、横書きの場合、終筆部の方向が左斜め下となる割合は縦書きの場合以上に低い。特に、真っ直ぐの場合は5割強にしか及ばない。一方、硬筆では、斜め置き・横置きで、単体と縦書き・横書きとの差が大きい。
- 「り」の終筆部が望ましい用筆（払い）になる割合は、硬筆・毛筆とも左側の単体の場合に出現率が高くなる。また、硬筆も毛筆も、紙の置き方にかかわらず、横書きの場合に払いとなる割合が一様に低くなる。
- 「つ」の右回転曲線部は、毛筆で真っ直ぐの縦書き、及び左側の縦書きの場合に望ましい用筆（丸み）となる割合が低く、3割強～4割弱が折れとなる。硬筆では丸みとなる割合が一律に低くなり、中でも斜め置き・真っ直ぐの、横書きでの割合は甚だしい。
- 「ん」の終筆部の方向は、毛筆での横置きで縦書きの場合に望ましい方向（右斜め上）になる割合が低く、2割強が真上となる。また、真っ直ぐ・斜め置き・横置きの横書きの場合、右斜め上になる割合が低く、1割～2割弱が真上となる。硬筆では、横置きで右斜め上に抜く割合が一律低くなり、中でも斜め置きの単体の場合は著しく低い。
- 「ん」の山部転折部が望ましい用筆（折れ）になる割合は、硬筆・毛筆とも書式を問わず横置きの場合に低くなる。

（5）左手硬筆書写に際しての用紙の置き方と字形の関係に関する考察

本章「(2)」及び「(3)」の検証結果からは、左手書字者が毛筆によって効果的な書写学習を行う要件として、半紙の置き方に関する配慮は有用な一方策となり得ることが明らかになった。中でも、半紙を体の中心から左側へずらす置き方は有効に働く可能性が総じて高いと考えられる。ただし、要素によっては適する置き方が異なるので注意を要する。

以上の考察を受けて、本項では、用紙の置き方の違いによる、左手硬筆書写への有用性に関して検証を試みた。その結果、4種の置き方それぞれでの各基本点画に現れる形状・用筆の特徴は、多くの場合、硬筆と毛筆で類似した傾向

を示し、硬筆の場合も、用紙を体の中心から左側へずらす置き方は、各点画要素が安定して書ける割合が総じて高いことが明らかとなった。以上より、個人差はあれ、左手硬筆書字にとっても、用紙を左側へずらす置き方は有効に働く可能性が高いと推測できる。

一方、横置きは、硬筆・毛筆ともに、手（筆記具）の動きが右から左ないしは上から下になる（＝引く線に転じる）ことに伴って、書きやすく感じる割合が高くなる傾向にある。しかし、毛筆の場合と同様、横置きには、別の（もしくは不自然な）要素や用筆に変化してしまう・字形の理解や把握が困難になる等といった特有な問題が生じる（[表4]参照）。また、横置きによって書かれた点画要素や字形には、通常の手書きでは出現し得ない形状や用筆が出現する割合が高い。このことから、従来行われてきた字形や用筆を習得する際、横置きには無理があると考えられる。書写学習においては文字学習といった観点から4種の半紙の置き方を考察した場合、横置きには文字構造や用筆・字形の認識等といった側面に難点があることから、書写学習においては、横置きを用紙の置き方の選択肢に含めない方がよいと考えられる。

表4 横置きにおいて「書きやすい」もしくは「書きにくい」と感じた理由とその要因 (硬：硬筆 毛：毛筆)

点画要素	横置きにおける「書きやすさ」(E)と「書きにくさ」(D)	
横画	毛	E:「縦画と同じ感覚」「横線より縦線の方が書きやすい」 …他の要素に変化してプラス評価
	毛	D:「“一”という漢字を意識したときに不自然」 …他の要素に変化してマイナス評価
縦画	毛	E:「縦線の感覚でなく右から左への横線の感覚で書ける」 …他の要素に変化してプラス評価
	硬毛	D:「全く違う文字を書いているようで違和感がある」 …他の要素に変化してマイナス評価
はね	硬毛	D:「強引に筆を“押す”感じで動かさないと書けない」 「左下から右上への動きは不自然」

		<p>…左手では書きにくい部分が横置きによって他の要素・用筆に変化し書きやすく感じるパターンが多い中で、横置きによって変化した用筆がマイナスに働く例</p>
左払い	毛	<p>D:「上方向には払いにくい」</p> <p>…(「はね」同様)横置きによる不自然な筆の動きを実感する例</p>
曲がり	硬毛	<p>E:「曲がる部分が唯一縦線になる」</p> <p>…本来の筆使いが特有なものに変化してプラス評価</p>
右払い	毛	<p>E:「縦に引くだけだから」「下に払うような感覚で書ける」</p> <p>…他の要素に変化してプラス評価</p>
	硬毛	<p>D:「右払いの特徴をつかめない」</p> <p>「下に向かって右払いのように書くのは難しい」</p> <p>…他の要素に変化してマイナス評価</p>
右回転	毛	<p>E:〈り〉「“横払い”(左払い)の感覚」</p>
	硬毛	<p>〈つ〉「“し”を書く感覚」 …他の要素に変化してプラス評価</p> <p>D:〈り・つ〉「上方向に払うことになる」</p> <p>「筆を押しやるようになる」</p> <p>…他の要素に変化してマイナス評価</p>

ところで、硬筆の場合は、例えば横画での比較検証で示されるように、毛筆の場合ほど用紙の置き方に起因する大差が認められないこともある。すなわち、硬筆では、毛筆に比べて用紙の置き方の違いに伴う形状・用筆の差異が現れにくい場合があると言える。これに対して、毛筆、特に大筆では、毛筆特有の毛の動きが重視され、用筆・運筆の在り方もよりわかりやすい（見えやすい）ために、形状や字形等の違いがより明らかに現れることになる。以上の点から、毛筆での形状・用筆・字形の方が、硬筆の場合よりも、半紙の置き方の違いをより大きく反映しやすいと考えられる。

左手書字に関わる諸課題は、毛筆の場合により大きく生じやすいとも考えることができる。しかし、例えば、用紙の置き方にかかわらず、硬筆では、毛筆に比べて曲がり部での曲がりの出現率が低く、代わって折れの出現率が高くなる・毛筆での右払いが水平方向になる割合に比べて右上方向になる割合が高くなる

なる等といった、左手毛筆書写の場合には見られない、左手硬筆書字に特有な困難点も存在する（[表 5] 参照）。

表 5 左手毛筆書写の場合と比較した際の左手硬筆書写特有の困難点

点画要素	左手硬筆書写の困難点
反り	望ましい用筆（反り）の割合が低く、折れもしくは直線に転じる。
曲がり	望ましい用筆（曲がり）の割合が低く、折れの出現率が高い。
右払い	望ましい用筆（二節払い）の出現率が低く、一節はね上げもしくは二節はね上げの割合が高い。
	望ましい方向（水平方向）に払う割合が低く、右上方向に払う（＝はね上げる）割合が高い。
	右払いの右端が、払い以外の文字の右端より短くなる割合が高い。
	斜線部角度のばらつきが激しい。
右回転	曲線部が望ましい用筆（丸み）になる割合が低く、折れの出現率が高い。

また、左手書字では、[表 6] のように、4 種の紙の置き方に共通する（＝紙の置き方の違いとは関係のない）特有な困難点が存在する。[表 5] の結果及び本章「4 .」での考察とも合わせ、各点画要素に関する理解を促すためには、紙の置き方に加えてどのような方策が有益であるか検討することが、これからの課題である。

表 6 半紙の置き方の違いにかかわらず各書式に共通する困難点

	点画要素・書式	左手書字における共通課題
硬・毛	曲がり・縦書き/横書き	望ましい用筆（曲がり）になりにくく、カーブもしくは折れになる。
	右回転・横書き	〈り〉終筆部が払いになる割合が低い。
硬筆	はね・縦書き/横書き	望ましい用筆（はね）になりにくく、止めもしくは抜く用筆になる。
	右払い・縦書き	右払いの右端が、払い以外の文字の右端より短くなる割

		合が高い。
毛筆	折れ・横書き	望ましい用筆（折れ）になりやすく、曲がりになる。
	反り・単体	線の太さの望ましい変化（送筆部で線が細くなる）が現れやすく、太さが一定。
	右払い・縦書き	二節はね上げの割合が高い。
	右回転・横書き	〈の〉終筆部の方向が斜め下になる割合が低い。 （縦書き・左側以外3種にも同一傾向）
	左回転・横置き	〈ん〉終筆部が抜く用筆になる割合が低い。

（6）紙の置き方の検証が示唆する具体的方策を検証することの意義と課題

先述の通り、『左きき書道教本』は、左利き者にとって文字が書きやすくなる要件の一つに、書字活動時における紙の置き方に関する工夫を掲げ、具体的に著したものである。本章における検証から、左手書字者が毛筆及び硬筆によって効果的な書写学習を行う要件として、紙の置き方に関する顧慮は有効な一方策になると考えられる。この点は、理学療法や作業療法の分野における見解からも明白である。また、箱崎が提唱した紙の置き方の中でも、体の中心から左側へずらす置き方は、書写学習延いては文字学習との観点から、毛筆書写においても硬筆書写においても、有用に働く可能性が高いことが明らかになった。さらには、硬筆の場合よりも、毛筆、特に大筆での場合の方が、文字の形状・用筆・字形に、紙の置き方の違いが強く反映されやすいことも明確になった。このような現象から、左手書字に関わる諸課題は、硬筆の場合よりも、毛筆の場合により大きく生じやすいとの一端を推察することもできる。左利き者の書字教育における毛筆学習及びその指導にどのように臨むかは、左利きの児童生徒への書字教育に関わる課題において最も根幹に位置する問題とも考えられる。

第 II 部
左利き者の
書字教育に関する
比較研究

第 3 章

漢字圏

—左利き者の書字教育未開拓圏—

1. 中国及び韓国における左利き者の書字教育に関する国としての指針

「第Ⅱ部」において比較教育の見地から左利き者の書字教育の在り方を考察するにあたり、はじめに本項にて、日本と同じ漢字圏である中国や韓国においての、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関して、各国で示される国としての教育指針の現状を約説する。

中国では、教育部（日本の文部科学省に相当）が発行する『教学大纲（教学大纲）』が日本の『学習指導要領』に相当する。2019年現在、中国の小学校の教育指針に対応する『教学大纲』に示された、「写字（日本の「書写」に相当）」に関する内容の全文を転記する。赤色の枠で囲んだ部分が該当箇所にあたる¹。

要教给学生一些汉字的基本知识,使学生在识字的过程中,逐步掌握汉字的基本笔画、笔顺规则、偏旁部首和间架结构。

教会学生查字典,是培养语文自学能力的重要措施,必须予以重视。要教学生会音序查字法和部首查字法,并能用数笔画的方法查难检字,逐步加快查字典的速度,养成查字典的习惯。

要重视正音和正字。要指导学生通过观察、比较,分辨多音字、同音字、形近字和多义字。

识字教学要改进方法,提高质量。要在语言环境中教识字,把字的音、形、义结合起来;要注意引导学生通过观察图画和实物,联系生活实际识字,把识字和认识事物结合起来;学过的字力求在语言训练中反复运用,把识字和听说读写结合起来;在识字的过程中重视写字的指导,把识字和写字结合起来。

写字是一项重要的语文基本功,是巩固识字的手段,对于提高学生的文化素养起着重要作用,必须从小打好写字的基础。从一年级开始就要严格要求,严格训练,逐步培养学生的写字能力。在写字教学中,教师

要激发学生的写字兴趣,教学生正确的写字姿势和怎样执笔、运笔,使学生掌握汉字的笔画、偏旁、结构的书写方法。逐步做到铅笔字、钢笔字写得正确、端正、整洁,行款整齐,有一定的速度。要重视毛笔字的教学,切实加强书写指导。从描红、仿影到临帖,逐步做到写得匀称,纸面干净。要注意培养学生认真写字和爱惜写字用具的习惯。要保证写字课的正常进行,不断提高写字课的教学质量。对于爱好书法的学生要加以鼓励。

3. 听话、说话

¹ 『教学大纲』での当該箇所に続いて提示する日本語訳は、信州大学の佐藤運海が翻訳したものである。文中の表記は佐藤が記したままに示す。

文字を書くのは、国語の重要な基本能力のひとつであると同時に、識字の手段でもあり、児童生徒の文化教養の向上に重要な役割を果たしている。よって、幼いときから文字を書く基礎能力をしっかりと付ける必要がある。小学校1年生から厳しい習字を行い、児童の文字を書く能力を少しずつ高めていかなければならない。

習字訓練および教育においては、教師は、児童生徒に興味を持たせ、正しい姿勢、筆（ペン）の握り方、運び方（書くとき）を教えると同時に、書き順、漢字の偏旁および構造の書き方を児童生徒にマスターしてもらわなければならない。

生徒児童に徐々に鉛筆、万年筆を用いて、正確にバランスが良く、一定の速度で書けるようにしてもらう必要がある。筆字の教育を大事にする必要があり、しっかりと指導すること。倣い（写経のように、見本の上に透明な紙を置いて書くこと）から、真似（見本を見ながら書くこと）を経て、少しずつバランスが良く、紙面が汚されず、書けるようにすること。また、児童生徒は文字を書くという習慣および習字道具を大事にする習慣を付けること。さらに、習字授業の進捗および習字の教育レベルを保証しなければならない。

習字が好きな児童、生徒を励ますこと。

この中に、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関する記載はない。

他、中国における左利き者への書字指導に関しては、文献資料の検索自身が困難である。このような、中国での左利きにまつわる社会的事象の一端として、中国・人民日報社の新聞「人民網日本版」2009年12月30日版に掲載された記事「中国でたった一人の左利き看護師」を紹介する。当該の記事は、日本から湖北省の病院へ看護師隊員として赴任した日本人看護師（左利き者）が投稿したものである。内容を略記する。

「病棟勤務を始めて間もなく、点滴をするために左利き用の点滴針を所望したところ、中国人看護師の同僚から、そのようなものは存在しないので右手で行うよう指導された。中国では、看護学生中に全て右側で処置するよう矯正さ

れるため、左利きの看護師は存在せず、翼状針の翼は右側にしかついていない。人口 13 億人の中国でたった一人のサウスポーの看護師である。生粋の左利きで一切の矯正を受けることなく日本で育ったため大変に困惑し、“点滴が下手な左利きの日本人看護師”として辛いスタートをきった。“日本人の看護師の点滴は痛い”と評判になり怒られた。〔以下略〕

中国における左利き者の割合を示す正確なデータは存在しないが、上記の新聞記事からも、左利き者の教育に関する文献資料が寡少である点からも、現代の中国における左利き者への教育の在り方が推察されるところである。

韓国の場合は、韓国教育部（日本の文部科学省に相当）が発行する『国語科教育課程』が日本の『学習指導要領』の『国語編』に相当する。韓国の『教育課程』は、全教科とも小学校、中学校、高等学校に分けられておらず、教科ごとに 1 冊となっており、その中で学校段階や学年ごとに内容が示されている。2019 年現在用いられている韓国教育部(2015)『国語科教育課程』（2017 年に小学校第 1・2 年生、2018 年に第 3・4 年生、2019 年に第 5・6 年生に適用）から、「教育部告示第 2015-74 号.国語科教育課程.韓国教育部 達成基準（成就基準）」の小学校第 1 学年及び第 2 学年の「쓰기(書くこと)」の部分(pp.15-16)を抜粋する²。韓国での、日本の「書写」に相当する語は、韓国語固有で「글쓰기(クルスギ、「글」(クル)は「文字」、「쓰기」(スギ)は「書くこと」との意味で、合わせて「文字書き」)」となる。

(3) 쓰기

초등학교 1~2 학년 쓰기 영역 성취기준은 한글을 깨치고 학습자가 학교생활을 하면서 자신의 생각이나 학습 결과를 문자로 표현하는 데 필요한 기초적인 쓰기 능력을 갖추는 데 중점을 두어 설정하였다. 글자를 바르게 쓰고, 자신의 생각을 문장이나 짧은 글로 쓰면서 쓰기에 흥미를 갖고 부담 없이 쓰는 태도를 기르는 데 주안점을 둔다.

² 「達成基準」からの抜粋部分に続いて提示する日本語訳は、信州大学の鄭暁静が翻訳したものである。文中の表記は鄭が記したままに示す。

(3)書くこと

小学校1～2年生の「書く」領域の達成基準は、ハンゲルを会得し学習者が学校生活をしながら、自分の考えや学習結果を文字で表現するために必要な基礎的なライティングスキルを備えることに重点を置いて設定した。文字を正しく書き、自分の考えを文章や短い文で書きながら書くことに興味を持って気軽に書く態度を育てることに重点を置く。

[2 국 03-01]글자를 바르게 쓴다.

[2 국 03-02]자신의 생각을 문장으로 표현한다.

[2 국 03-03]주변의 사람이나 사물에 대해 짧은 글을 쓴다.

[2 국 03-04]인상 깊었던 일이나 겪은 일에 대한 생각이나 느낌을 쓴다.

[2 국 03-05]쓰기에 흥미를 가지고 즐겨 쓰는 태도를 지닌다.

[2 国 03-01]文字を正しく書く。

[2 国 03-02]自分の考えを文章で表現する。

[2 国 03-03]周辺の人や物事に対して短い文を書く。

[2 国 03-04]印象深かったことや体験したことの考えや感情を書く。

[2 国 03-05]書くことに興味を持って楽しく書く態度を持つ。

(가) 학습 요소

글자 정확하게 쓰기, 글씨 바르게 쓰기, 완성된 문장 쓰기, 짧은 글 쓰기, 경험에 대한 생각이나 느낌 쓰기, 쓰기에 흥미 갖기

(あ) 学習要素

文字を正確に書くこと、文字を正しく書くこと、完成された文章を書くこと、短い文を書くこと、経験に対する考えや感情を書くこと、書くことに興味を持つこと。

(나) 성취기준 해설

· [2 국 03-01] 이 성취기준은 바른 자세로 글자를 정확하게 쓰는 습관을 기르

기 위해 설정하였다. 바른 자세로 글씨 쓰기에는 바르게 앉아 쓰기, 연필 바르게 잡기, 날자의 모양이나 간격 등을 고려하여 글씨 바르게 쓰기가 포함된다. 글자를 정확하게 쓰기 위해서는 짜임과 필순에 맞게 날자를 쓰게 한다. 글자의 복잡성 정도를 고려하여 처음에는 받침이 없는 간단한 글자부터 시작하여 점차 받침이 있는 복잡한 글자를 쓸 수 있게 한다.

· [2 국 03-02] 이 성취기준은 문장 구성 능력을 기르기 위해 설정하였다. 문장은 글을 구성하는 기본이다. 글을 잘 쓰려면 먼저 자신의 생각을 정확하게 문장으로 표현할 수 있어야 한다. 한두 문장으로 짤막하게 자신의 생각이나 느낌을 표현하되, 마침표, 물음표, 느낌표 등의 문장 부호를 사용하여 자신의 생각을 문장으로 정확하게 구성하는 기본 능력을 기르도록 지도한다. 또한 꾸며 주는 말을 넣어 자신의 생각과 느낌을 구체적으로 표현하도록 지도한다.

· [2 국 03-03] 이 성취기준은 자신의 주변에서 소재를 찾아 글로 표현하는 능력을 기르기 위해 설정하였다. 자신의 주변에 있는 사람이나 사물에 관심을 가지고 그 특징이 드러나도록 짧은 글로 나타내 보게 한다.

(이) 達成基準の解説

- [2 국 03-1] 達成基準は、正しい姿勢で文字を正確に書く習慣を養うために設定した。正しい姿勢で字を書くには、正しく座って書くこと、鉛筆を正しく持って書くこと、文字の模様や間隔などを考慮して、文字を正しく書くことが含まれる。文字を正確に書くためには、仕組みと筆順を正しく書くようにする。文字の複雑さの程度を考慮して、最初はパッチムのない単純な文字から始め、徐々にパッチムのある複雑な文字を書くようにする。
- [2 국 03-02] 達成基準は、文章の構成力を養うために設定した。文章は文を構成する基本である。文をよく書くためには、まず自分の考えを正確に文章で表現することができなければならない。一、二文で短く自分の考えや気持ちを表現するが、ピリオド、疑問符、感嘆符等文章符号を使用して、自分の考えを文章で正確に構成する基本的な能力を育てるように指導する。また、飾る言葉を入れ、自分の考えや気持ちを具体的に表現するように指導する。
- [2 국 03-03] 達成基準は、自分の身近な素材を見つけ、文で表現する能力を養うために設定した。自分の周りにいる人や物に関心を持って、その特徴が

表れるように、短い文で示すようにする。

(다) 교수·학습 방법 및 유의 사항

- ① 가장 기본적인 글자, 낱말, 문장을 바르고 정확하게 쓰게 하는 데 주안점을 두되, 학습자가 생활 속에서 흔히 접하는 것을 중심으로 반복해서 학습하도록 한다.
- ② 글자 바르게 쓰기를 지도할 때에는 학습자의 발달 단계와 수준을 고려하여 기본적인 낱말과 문장을 제시하여 글씨 쓰기를 연습하도록 한다. 학습자의 수준을 넘는 낱말이나 문장을 제시하면 쓰기를 어려워할 수 있으므로 적절한 수준의 낱말이나 문장을 제시하여 쓰기에 흥미를 갖도록 지도한다. 특히 읽기 능력에 비해 쓰기 능력의 발달이 늦다는 점을 고려한다.
- ③ 받아쓰기는 글자를 정확하게 쓰는 데 도움이 될 수 있으나, 학습자가 부담을 갖게 되면 국어 활동에 자신감을 잃을 수도 있으므로 신중하게 활용한다. 너무 어려운 글자를 받아쓰게 하여 국어에 대한 흥미가 떨어지지 않도록 유의하며 요소 중심으로(예 : 된소리되기 현상이 나타나는 낱말) 지도한다.
- ④ 기초 한글 학습이 부족한 학습자를 위해서는 문자 학습에 흥미를 느낄 수 있도록 놀이 중심, 활동 중심으로 교수·학습을 진행한다.
- ⑤ 주변 사람이나 사물에 대한 짧은 글 쓰기를 지도할 때에는 학습자 자신의 주변에 어떤 사람이 있는지, 생활하면서 어떤 사물을 접하게 되는지를 먼저 생각해 보도록 한 다음, 서너 문장의 짧은 글로 표현하도록 한다.
- ⑥ 인상 깊었던 일이나 겪은 일을 쓸 때에는 한 편의 글이 갖추어야 하는 형식적인 측면을 지나치게 강조하지 말고 자신의 생각을 자유롭게 표현하도록 하는 데 중점을 둔다.
- ⑦ 쓰기를 처음 시작하는 단계이므로 쓰기에 흥미와 자신감을 가지도록 격려하고, 최대한 활동 중심, 놀이 중심의 수업이 되도록 한다.

(う) 教授・学習方法と注意事項

- ①最も基本的な文字、単語、文章を正しく正確に書くようにすることに主眼を置き、学習者が生活の中でよく接するものを中心に繰り返し学習す

るようにする。

- ②文字を正しく書くことを指導する際には、学習者の発達段階とレベルを考慮して、基本的な単語や文章を提示して文字を書く練習をするようにする。学習者のレベルを超える単語や文章を提示すると書くことを難しく感じるため、適切なレベルの単語や文章を提示して、書くことに興味を持つように指導する。特に読む能力に比べて書く能力の発達が遅いという点を考慮する。
- ③ディクテーションは文字を正確に書くのに役立つが、学習者が負担を持つようになると、国語活動に自信を失う可能性があるため、慎重に活用する。とても難しい字を書きとるようにして、国語への興味を失わないように留意して要素中心に指導する。
- ④基礎ハングル学習が不足している学習者のためには、文字の学習に興味を持てるように遊び中心、活動中心に教授・学習を進行する。
- ⑤周りの人や物に対する短い文を書くことを指導する時には、学習者自身の周辺にどのような人がいるのか、生活しながらどのような物事に接するかどうかを、まず考えさせるようにし、その後三、四の文の短い文で表現するようする。
- ⑥印象深かったことや体験したことを書くときには一編の文が備えなければならない形式的な側面を強調しすぎないようにし、自分の考えを自由に表現できるようにすることに重点を置く。
- ⑦書くことを初めてスタートする段階であるため、書くことに興味と自信を持つように奨励し、可能な限り活動センター、遊び中心の授業になるようにする。

(라) 평가 방법 및 유의 사항

- ① 평가를 위한 별도의 시간을 마련하거나 활동을 계획하기보다는 수업 및 학교생활에서 학습자의 수행과 태도의 변화 과정을 누적 기록하여 평가한다. 평소 자신이 쓴 쓰기 결과물을 정리해 두도록 하여 이를 평가하는 방법을 적극적으로 활용한다.
- ② 결과 중심으로 평가할 때에는 맞춤법이나 글씨에 지나치게 얽매이지 않

고 표현하고자 하는 내용을 얼마나 충실하게 표현했느냐에 주안점을 두어 평가함으로써 쓰기에 흥미를 가질 수 있게 한다.

(え) 評価方法および注意事項

- ① 評価のための別途の時間を設けたり活動を計画したりするよりは、授業や学校生活の中で、学習者の遂行と態度の変化過程を累積記録して評価する。普段自分が書いた結果物をまとめておくようにし、これを評価する方法を積極的に活用する。
- ② 結果を中心に評価する際には、スペルや文字にとらわれすぎないようにし、表現しようとする内容をどれほど充実に表現できたかに主眼を置いて評価することにより、書くことに興味を持つようにする。

この「達成基準」に則り、『国語科教育課程』に示されている「評価の方向」(全校種に共通した形で提示)の該当部分(同書 pp.70-71)も併せて抜粋する。

나. 평가 방향

- 1) ‘국어’ 교육과정과 연계하여, 평가 내용의 균형, 평가 방법 및 평가 도구의 타당성, 신뢰성, 적절성 등을 고려하여 평가 계획을 수립한다.
 - ① ‘국어’ 교육과정의 목표와 성취기준을 반영하여, 학습 목표 및 학습 내용을 평가 내용 및 평가 도구와 연계하여 평가 계획을 수립한다.
 - ② ‘국어’에서 기르고자 하는 교과 역량 및 창의·인성 등 평가 내용의 특성을 고려하되, 표현 능력과 이해 능력, 인지적·행동적·정의적 요소가 균형을 이루도록 평가 계획을 수립한다.
 - ③ ‘국어’에 관한 단순하고 지엽적인 지식보다는 학습자의 실제적인 국어 능력을 평가할 수 있도록 계획을 수립하되, 국어를 사회적 소통에 복합적으로 활용할 수 있는 능력을 함께 평가할 수 있도록 계획한다.
 - ④ 평가 목적, 내용, 상황 등을 고려하여 양적 평가와 질적 평가, 형식 평가와 비형식 평가, 간접 평가와 직접 평가, 과정 평가와 결과 평가, 지필 평가와 수행 평가 등을 적절히 활용하여 평가 계획을 수립한다.
 - ⑤ 구술 평가, 서술형 평가, 논술형 평가, 연구 보고서 평가, 포트폴리오

평가, 관찰 평가, 컴퓨터 기반 평가 등 다양한 평가 방법을 적절하게 활용하여, 평가 과정에서도 배움이 일어날 수 있도록 평가 계획을 수립한다.

이. 評價의 方向

- 1) 「国語」教育課程と連携して、評価内容のバランス、評価方法および評価ツールの妥当性、信頼性、妥当性を考慮して評価計画を策定する。
 - ① 「国語」教育課程の目標と達成基準を反映して、学習目標と学習内容を評価内容及び評価ツールと連携して評価計画を策定する。
 - ② 「国語」で育てたい教科能力と創意・等の評価内容の特性を考慮するが、表現力と理解力、認知的・行動的・定義的要素がバランスをとる評価計画を策定する。
 - ③ 「国語」の単純で枝葉的な知識ではなく、学習者の実際の国語能力を評価することができるよう計画を策定するが、国語を社会的コミュニケーションに複合的に活用できる能力と一緒に評価することができるよう計画する。
 - ④ 評価の目的、内容、状況等を考慮して、定量的評価と質的评价、形式評価と非形式評価、間接評価と直接評価、課程評価と結果評価、紙筆評価と実行評価などを適切に活用して評価計画を策定する。
 - ⑤ 口頭評価、敘述型評価、論述型評価、研究報告書の評価、ポートフォリオ評価、観察評価、コンピュータ基盤評価など、様々な評価方法を適切に活用し、評価の過程でも学びができるよう評価計画を策定する。

- 2) 학습자의 국어 능력의 신장을 판단하고, 교수· 학습 방법 및 평가 도구 개선에 기여할 수 있도록 학습 과정과 결과를 균형 있게 평가한다.
 - ① 학습자의 수준, 관심, 흥미, 적성, 진로 등 개인차를 고려하되, 학습자의 ‘국어’ 활동의 과정과 결과를 균형 있게 평가할 수 있도록 다양한 평가 방법을 모색한다.

- ② 국어 사용의 실제성이 드러나도록 평가 과제, 평가 상황을 실제 삶의 맥락에서 설정하여 평가한다.
- ③ 사전 지식이나 능력보다는 ‘국어’의 활동을 통해 얻은 배움의 내용과 과정을 중심으로 평가한다.
- ④ 평가 기준이나 방향을 학습자에게 미리 안내하여, 학습자가 무엇에 초점을 맞추어 학습해야 하는지를 알고 교수·학습 과정에서 평가를 준비할 수 있도록 한다. 또한 학습자가 수행한 평가 결과를 분석하여 교수·학습 내용 및 방법을 개선한다.
- ⑤ 평가 목적, 평가 내용, 평가 상황을 고려하여 교사 평가 이외에 자기 평가, 상호 평가를 적극적으로 활용한다.

2) 学習者の国語能力の伸長を判断し、教授・学習方法及び評価ツールの改善に寄与できるよう、学習過程と結果をバランスよく評価する。

- ① 学習者のレベルでは、関心、興味、適性、進路など個人差を考慮するが、学習者の「国語」の活動の過程と結果をバランスよく評価できるように、さまざまな評価方法を模索する。
- ② 国語使用の実際が現れるように評価課題、評価の状況を実際の生活の文脈で設定して評価する。
- ③ 事前の知識や能力ではなく、「国語」の活動を通じて得られた学びの内容と過程を中心に評価する。
- ④ 評価基準や方向を学習者に事前に案内して、学習者が何に焦点を当てて学習するかを知り教授・学習過程で評価を準備できるようにする。また、学習者が行った評価結果を分析して、教授・学習内容及び方法を改善する。
- ⑤ 評価目的、評価内容、評価の状況を考慮して、教師の評価に加えて、自己評価、相互評価を積極的に活用する。

3) 학습자의 국어 능력의 발달 정도를 판단하고 교육 활동을 개선하는 데 ‘국어’ 평가 결과를 활용한다.

- ① 학습자의 개인차를 고려하여 평가 결과를 해석하고 활용한다.

- ② 평가 결과는 교수·학습 방법이나 평가 방법, 평가 도구를 개선하기 위한 자료로 활용한다.
- ③ 평가 결과를 누적하여 학습자의 성장과 발달을 파악하거나 학습자에게 피드백을 할 수 있는 근거로 활용한다.
- ④ 학습자, 학부모 및 교육 관련자가 이해하기 쉽도록 국어과가 목표로 하는 세부 능력과 성취 수준을 중심으로 평가 결과를 상세히 제공한다.

3) 学習者の国語能力の発達の程度を判断して、教育活動を改善するために「国語」の評価結果を活用する。

- ① 学習者の個人差を考慮して、評価結果を解釈して活用する。
- ② 評価結果は、教授・学習方法や評価方法、評価ツールを改善するための資料として活用する。
- ③ 評価結果を累積して、学習者の成長と発達を把握したり、学習者にフィードバックをしたりすることができる根拠として活用する。
- ④ 学習者、親や教育関係者が理解しやすいように国語科が目指す詳細な能力と成就水準を中心に評価結果を詳細に提供する。

このように、「達成基準」及び「評価の方向」の中に、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関する記述はない。

なお、韓国の教科書は、教科によって国定教科書か検定教科書かが異なり、国語科は国定教科書（1種類）を用いている。2000年発行の小学校第1学年国語科用教科書に、左利きの児童に示唆を与える文言やイラストないしは写真は掲載されていない。

2. 左利きに関する漢字圏における文化的背景

「第1章 2.」及び「7.」で記した、久保田の「日本人で左手で字を書く人が圧倒的に少ないのは、家庭でのしつけによって矯正されるため」との指摘³、伊田の「利き手には明瞭な文化差が存在する」こと、そして、「一般に保守的な時代や国、民族ほど左利きは少な」く、「欧米に比べて日本などのアジアの国々に左利きが少ないのも、保守的な社会ゆえ」であり、「日本に左利きの少ないこ

³ 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』（紀伊國屋書店 1982）134p.

とは字を書く手で明瞭に示され」、「主な要因は社会・文化的圧力にあると考えられる」との指摘⁴、前原の「書字と食器に対する習慣の強さは、東洋文化の特徴」であり、「この習慣の強さの根本には、思想の違いというよりも食器や文具の違いにある」との指摘⁵をふまえると、中国、韓国、日本の各国において示される国としての教育指針に、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関する記述が現存しない、公的な指南が提示されていないとの実状には、日中韓の三国に共通する社会的な思想体系の基盤、すなわち、東洋文化の根幹を形成する儒教の考え方に基づいた、礼節を重んじ、しつけを大切にする教育観に加えて、東洋特有の伝統である書道、そして、そのための文具である毛筆の存在が少なからず影響しているのではないかと考える。

筆者は、日本の場合、以下の引用⁶に記されているように、東洋特有の伝統である書道からの影響で、「文字を書くこと」を単に「コミュニケーションの手段」として割り切れない「見方」が存在していることを指摘した⁷。

〔前略〕文字を書くというわざは、西洋人のような實用主義の立場からは何となく律しきれない獨特の藝能だと見なされやすい。だからして、そうした見方からすれば、石橋啓十郎氏（註）のつぎのコトバもまことにもっとものようだと云える。

（註）石橋啓十郎「国民学校の習字」『國語文化講座』第三卷國語教育編。昭和十六年、朝日新聞社。

「しかし書くと云うことも我國に於ては西洋の^{ライティング}Writingの如く簡單にかたづけられるわけには行かない。〔中略〕西洋の書方とはその難易に雲泥の差が存するのである。しかし又それだけ東洋、ことに日本の習字は藝術的であり、教科的であって、恐らく文字の美的表現と云ふ點からすれば世界一と云っても敢て過言ではあるまい。〔中略〕」

〔中略〕文字を書くということに、これまでの日本では特別な色合をつけていたために、文字が正しく書けて、書かれた文字がだれにでも楽に読めるというような、文字を書くことの本當の指導が、とかく實用本意で價值の低いもののように考えられてきた。

⁴ 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』（前掲書）p.120. pp.122-123.

⁵ 前原勝矢『右利き・左利きの科学 利き手・利き足・利き眼・聞き耳…』（講談社 1989）p.62.

⁶ 平井昌夫『新しい國語教育の目標』（新教育協會 1949）pp.126-128.

⁷ 小林比出代「日米の書字教育に関する比較研究 —20世紀における活字及び印字機器の普及と書字教育—」（『青山杉雨記念賞 第四回 學術奨励論文選』2001）p.44

芸術としての書道の存在及びその教育に対する考え方は、日本の書写教育に大きな影響を与えてきている。つまり、日本の書写教育は、元々その土壌に、実用本位では割り切れない「特別な色合」を有していたのである。

東洋の文化圏において昔から存在してきた左利きを右利きに変えさせる風潮には、東洋特有の文化である箸、及び毛筆を使用することが強く影響している。そこには、「左手だと文字が書きにくい。特に毛筆は扱いにくい。だから、右手で書くべきだ。」との固定観念が存在してきたのも事実である。

確かに、言語を問わず、大抵の文字や書式は右手での書字を前提としている。そのため、右手の方が文字を無理なく構成できる上に字形も整えやすい。特に日本の場合、整った漢字（楷書）の横画は右上がりになり、平仮名では右回転の文字が多いことから、左手での書字が不便なのは事実である。日本の文字、特に平仮名には、例えば「あ」「の」に代表される、世界にも稀有な右回転の文字が多く含まれるため、左手ではその運動を為しにくい。また、左手が毛筆を扱いにくいのは、横画を書く際や、毛筆文字の特徴的な要素である右払いや曲がりの部分を書く際に、右手ならば筆を右へ引く動作で書けるものを、左手では右へ押す動作に変わってしまい、筆の穂先がバラバラになってしまうためである。

しかし、現代において、「書写」の学習は、「国語科」として言語の力を育成することを第一の目的としている。「国語科書写」での基礎的な力を受け、高等学校で「芸術科書道」として表現力や鑑賞力を養う。「国語科書写」は、文字が持つ実用性（思考や情報を記録伝達する共通の記号）との視点に立脚し、「芸術科書道」は、文字を表現の媒体として用いる。両者は狙っている学力が異なる。

国語科に位置づけられる「書写」では、言語自身の力や、言語をどのように運用していくかの力を育成することを目指し、「国語科」としての言語の力を育てる。その上で、生活の中において、言語力をどのように生かしていくのかを保証することまでが「書写」の学習となる。表現力や鑑賞力といった芸術の能力を育成していく「書道」とはこの点が明らかに異なる。

現代では、日常の筆記活動には主に硬筆が用いられる。しかし、日本の文字は毛筆文化の中で生まれ発展したことに鑑み毛筆によって書字することで、日本の文字に特有な「はね」「はらい」等の特徴が習得しやすい。このことが、日

常の筆記具として使用する機会が減少した毛筆を、書写学習の学習用具として用いる一番の理由になっている。学習指導要領には、「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導」するよう明言されている。

国語科における言語力の育成に鑑みた時、その一領域である書写においては、「利き手」との観点から右手と左手の平等性に基づいて、利き手にまつわる書字学習の在り方及び指導の方法が何らかの形で提示されてしかるべきである。

本章では、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関する実状を、漢字圏においての視点から把握した。その結果、日本をはじめ、中国や韓国も含めた漢字圏での文化的背景をも考慮すると、漢字圏における左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関して論究を重ねることにより、これからの左利き者の書字教育の在り方を探究していくのには、「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」「学習者研究」のどの観点に鑑みても限界があると考えられる。漢字圏における、書字マイノリティに対するまなざしの弱さの表れとも換言できる。

漢字圏での左利き者の書字教育に関する研究領域は未開拓である一方、アルファベット圏での左利き者の書字教育については、国家的な教育指針や積極的な教育実践が見受けられるものがある。アルファベット圏での先行研究や教育実践に学びながら、当該圏での左利き者の書字教育に関する実状を詳細に検討考察することで、左利き者の書字教育に関する課題を乗り越えられる、新たな考え方の糸口が見出せるのではないか。

次章では、漢字圏とは異なる圏との視点から、アルファベット圏の左利き者の書字教育の現状について解釈を試みる。

第 4 章

イギリス

—左利き者の書字教育検討に肝要な

視点—

前章で把握した漢字圏での現状をふまえ、本章では、イギリス（対象はイングランド）における **Handwriting** の教育に関しての、日本の場合との比較検討から、イギリスにおける左利き者の書字教育の在り方について、教育制度と教育方法の2点から明らかにする。

本章での、イギリスの教育制度、及びナショナルカリキュラムの変遷や特徴（「1.」「2.」「4.」）に関する概説は、以下の文献に基づくものである。

- ・ 吉田多美子「イギリス教育改革の変遷 —ナショナルカリキュラムを中心に—」（『レファランス』平成 17 年 11 月号（2005） pp.99-112.）
- ・ 横尾俊・渡部愛理「イギリスにおけるナショナルカリキュラムとそれへのアクセスの手だてについて」（『世界の特別支援教育』（24）（2010） pp.43-52.）
- ・ 藤田英典・大桃敏行『学校改革』（日本図書センター 2010）
- ・ 大田直子『現代イギリス「品質保証国家」の教育改革』（世織書房 2010）
- ・ 原清治・山内乾史・杉本均『教育の比較社会学』（学文社 2011）
- ・ 藤井泰「イギリスにおける連立政権によるナショナルカリキュラムの見直しの動き —『ナショナルカリキュラムの枠組み』（2011 年）を中心に—」（『松山大学論集』第 24 巻第 6 号（2013） pp.61-86.）
- ・ 勝野頼彦(研究代表者)『諸外国における教育課程の基準（改訂版）—近年の動向を踏まえて—』（国立教育政策研究所 2013）
- ・ 『文部科学省国立教育政策研究所・JICA 地球ひろば共同プロジェクト グローバル化時代の国際教育のあり方 国際比較調査 最終報告書（第 1 分冊）』（独立行政法人 国際協力機構 地球ひろば 2014）
- ・ 福島青史・村田裕子「イングランドのカリキュラム改革と日本語教育 —初等教育への外国語教育必修化を中心として—」（『国際交流基金日本語教育紀要』11 号（2015） pp.95-111.）
- ・ 坂野慎二・藤田晃之『海外の教育改革』（NHK 出版 2015）
- ・ 原清治・山内乾史・杉本均『比較教育社会学へのイマージュ』（学文社 2016）

なお、「イギリス」は、イングランド（England）、ウェールズ（Wales）、スコットランド（Scotland）、北アイルランド（Northern Ireland）の 4 つの地

域から構成され、正式には「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国 (United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)」と呼ばれる。各地域が教育をはじめとする内政に強い独立性を持っており、それぞれの地域で異なる教育制度をとっている。中央省庁である「教育省 (Department for Education : DfE)」は主にイングランドの教育に関わり、その他の地方には各自治政府で教育を担当する担当部局 (「地方当局」=日本の教育委員会に相当) が置かれている。一般的に「イギリス」と表記する場合、本来は4つの地域を含めた呼称となるが、現行のナショナルカリキュラムに関する変更はイングランドを対象とするものであるため、本論考でいう「イギリス」とはイングランドを指すこととする。

1. イギリスの教育制度の概観と特徴

イギリスの教育制度は6-5-2制で、5歳から11歳までの6年間は初等教育、11歳から16歳までの5年間は中等教育であり、この5歳から16歳までの11年間は義務教育となる。公立学校の場合、日本の小学校にあたるプライマリースクールに5歳から11歳まで、中学校にあたるセカンダリースクールに12歳から15歳まで通学する。つまり、日本と比べて1年間早く初・中等教育が始まり、13年間学習した後、日本と同じ18歳で高等教育に進学することになる。

イギリスでは、上記の教育制度とは別途に、教育課程上の区分として、キーステージ (Key Stage, 以後「KS」と略す) がある。KSとは、法令上、5歳から16歳までの義務教育を4つに分割した期間 (ステージ)、学年区分のことである。KS1 (Year 1-2 : 初等学校第1~2学年) は5歳から7歳の2年間であり、KS2 (Y3-6 : 初等学校第3~6学年) は7歳から11歳までの4年間である。初等教育を修了し中等教育においては、KS3 (Y7-9 : 中等学校第7~9学年) が11歳から14歳までの3年間であり、KS4 (Y10-11 : 中等学校第10~11学年) が14歳から16歳までの2年間に分けられている。

2. ナショナルカリキュラムに関する概説

(1) ナショナルカリキュラムの変遷

イギリスでは、第2次世界大戦後の教育制度の骨格を「1944年教育法（The Education Act 1944）」によって提示した。これを大きく転換したのが、「1988年教育改革法（The Education Reform Act 1988）」の制定を含む、1970年代後半からの教育改革である。その一つのターニングポイントが、1976年にジェームズ・キャラハン首相(当時)が、当時の荒廃した教育状況を改善するには、国民全体で教育改革について考えることが重要であるとして、「教育大討論（The Great Debate in Education）」を提案したことによるとされる。こうした改革の流れは、次に政権に就いたマーガレット・サッチャーに引き継がれ、中央政府が主導権を握った教育改革が推し進められた。その集大成が「1988年教育改革法」の制定とされる。1987年の総選挙で圧倒的勝利を収めたサッチャーは、第3次政権（1987年—1990年）で、ケネス・ベーカー教育科学大臣(当時)指揮のもと「1988年教育改革法」を成立させた。その際、ベーカーは、特に英語（＝国語）教育に関わる問題からナショナルカリキュラム（National Curriculum：全国共通教育課程）の導入を認めるようサッチャーを説得にかかった。ナショナルカリキュラムの導入は、ベーカーによって立案され具体化が図られた。

「1988年教育改革法」は、「1944年教育法」以来初の、大規模かつ急進的で、イギリスの教育制度を抜本的に改革する画期的な法律となった。中でも、それまで中央政府が統制してきていなかった義務教育段階の公立学校のカリキュラムについて、イギリス国内で共通に履修すべき教科と教育内容をナショナルカリキュラムとして初めて制定した上で、その実施評価としてナショナルテスト（National Curriculum Test：全国共通教育試験）を行うことを規定した点は注目すべきである。「1988年教育改革法」による重要な変革点は、第一にナショナルカリキュラム及びナショナルテストの導入にある。「1988年教育改革法」の制定により、現在もイギリスで進めている教育改革の根幹が規定された。

サッチャー政権のもと制定された「1988年教育改革法」では、英語（＝国語）・数学・理科の中核教科（core subject）と、美術・地理・歴史・外国語・音楽・体育・技術の基礎教科（foundation subject）の合計10科目によってナショナルカリキュラムが構成された。これもベーカーの提案によるものとされている。また、ナショナルカリキュラムでは、KSごとに、学ぶべき教育内容や習得が

期待される知識・技能、理解度を示す「到達目標 (attainment targets)」が規定されている。

このようなイギリスのナショナルカリキュラムは、英語圏の諸国での先駆けとなり、他の国々にも影響を与えていった。

以上のように、ナショナルカリキュラムは、「1988年教育改革法」によって制度化された後、1989年から初等学校を皮切りに順次導入され、1991年度には正式に第一次ナショナルカリキュラムが実施された。イギリスでのナショナルカリキュラムの改訂サイクルは特に決まっていないが、その後、数度の改訂を経て現在に至っている。

1989年からの学校段階ごとの順次導入を受け、ナショナルカリキュラムは、1993年、1999年と改訂が行われた。1993年の改訂では、学校現場からの批判を受け、基礎学力の育成と教育内容の精選、そして、学校及び教員の裁量権の拡大を目指した。1994年にレビューが行われ、初等・中等カリキュラムが改訂されている。その後、1999年の改訂では、英語(=国語)と算数・数学の指導の強化、市民性教育の中等学校での必修化、情報教育 (Information and communications Technology : ICT) の徹底、初等学校での外国語教育の奨励等が盛り込まれた。この大幅に改訂されたナショナルカリキュラムは「カリキュラム 2000」と呼ばれ、1999年に骨子を発表、2000年9月(=新年度)から実施された。続くブレア政権下においては、進学率低下に伴い中等教育が見直され、その結果改訂されたナショナルカリキュラムが2004年から実施された。

その後、2010年の総選挙により、労働党に代わって保守党・自由民主党の新政権が誕生し、13年ぶりの政権交代が行われた。新首相はデイヴィッド・キャメロン、教育大臣にマイケル・ゴープが就任した。キャメロン連立政権が誕生し、これまでのナショナルカリキュラムを全面的に見直す作業が始まった。キャメロン連立政権の最大の課題はナショナルカリキュラムの全面改訂にあった。

2011年、ゴープは、専門家委員会がナショナルカリキュラムを検討する上での留意事項について、「ナショナルカリキュラムの教育内容は、子どもの学び方や学ぶ内容に関する知識をよく反映させて、世界で最も優れた教育実績をあげ

ている国や地域のカリキュラムに匹敵するものとする。」「世界でも最も優れた教育的水準と合致するような学習到達要件を定める。」「ナショナルカリキュラムは、厳密さと高い水準を備えなければならないし、学校の教育内容は体系的になるようにすべきである。こうして全ての子どもには主要教科の学問における核となる知識（core of knowledge）を身につける機会が確実に与えられるようにする。（系統的な教科の知識を重視する。）」「ナショナルカリキュラムはこれまで通り、公立（公営）学校（maintained school）では義務的な要件となる。」等を掲げた上で、ナショナルカリキュラムを見直すことを発表した。

続く 2012 年、ゴーフは、ナショナルカリキュラムのうちの主に初等教育に関する教育大臣からの指針として、「中心教科すなわち数学・理科・英語（＝国語）については、これまでのナショナルカリキュラムの内容と比べて、より高い水準を期待する内容とすること」「英語（＝国語）は、高いレベルのリテラシー能力を要求すること。特に読み書きの発達に寄与し、詩の暗唱、ディベート、発表を通じて正式な英語を身につけることができる会話言語（spoken language）を重視すること。」等の観点を明示した。

このような、ナショナルカリキュラムの全面的な見直し作業のねらいは、教育水準の向上を目指して、子どもたちに何を学ばせるか、つまり、学習内容を特に知識の側面から明確に規定することとともに、その実践にあたって、学校や教師に、より高い自律性を与えることにあった。また、学習内容を決定する際には、学力の国際比較テストで高い得点を出している国々のそれらをよく研究した上で、国際競争に負けないように高い水準を期待した内容を示すこととしている。ここで、英語（＝国語）・数学・理科が重視されている背景には、当時の政権が PISA テストの結果を初めて真剣に取り上げた点が挙げられる。この時のナショナルカリキュラムの改訂作業では、PISA テストの上位国のカリキュラムから学ぶという姿勢を前面に出している。以上のように、改訂を目指す新しいナショナルカリキュラムは、教えるべき知識内容を明確に示すと同時に、英語（＝国語）・数学・理科に絞った形で簡素化することによって、学校や教師の自律性を高めることを目指した。

2011 年から始まった上記の検討により、2013 年には新しいナショナルカリキュラムの素案が提出され、コンサルテーションを経て同年 9 月に

『Framework document』が発表された。この内容に基づき、2013年9月に新ナショナルカリキュラム（DfE2013f）が確定し、2014年9月（＝新年度）から現在まで実施されてきている。

（２）ナショナルカリキュラムの特徴

ナショナルカリキュラムは、その年齢の子どもに期待される知識や技能などの標準（standard）を示しており、1989年から現在まで、実際にイギリス国内の学校で実施されてきている。ナショナルカリキュラムは法令として定められており、政府によって各教科の「教育(学習)プログラム(Programme of study)」と「到達目標」が設定され公表されている。ナショナルカリキュラムの導入によって、イギリス中のどの学校においても、統一された学習内容が保障されることとなった。しかし、ナショナルカリキュラムは、学校のカリキュラムの全体にわたるものではない。ナショナルカリキュラムは、学校カリキュラムの主要な部分ではあってもその全てではなく、カリキュラムの開発と実施については、各学校の自由な創意に委ねられている部分が多い。

イギリスのナショナルカリキュラムは、日本の学習指導要領にあたるもので、内容的に共通点や類似点も多いとされる。実際、ナショナルカリキュラムの導入時に、当時のイギリスの教育科学省は、カリキュラム作業委員会の委員を日本に派遣し、日本の数学教育の実態を調査してナショナルカリキュラム作成の参考にしている。

一方で、日本の学習指導要領との相違点も何点か挙げられる。例えば、イギリスでは日本のような教科に対する法的な授業時間数の規定がないこと、また、イギリスではナショナルカリキュラムの具現化は各学校に委ねられているが、唯一ナショナルテストを通じてその到達度がチェックされるのに対して、日本では検定教科書の使用によって、学習指導要領に沿った教育を行うことが義務づけられている点等である。イギリスのナショナルカリキュラムはあくまでも学校カリキュラムの最低基準の一つであり、その内容の教育における具体化は各学校や教員に任せられている。日本の学習指導要領とはその法的拘束の仕方が異なっている。

ナショナルカリキュラムは KS ごとに規定されている。KS は生活年齢による区分であり、学校内容については、大まかに「教育(学習)プログラム」と「到達目標」のレベル(レベル1～8)が定められている。ナショナルカリキュラムの政府文書(各教科編)は、日本のような学年別ではなく、KS ごとに、複数の学年にまたがる形で各教科の「教育(学習)プログラム」と「到達目標」が決められている。なお、現行のナショナルカリキュラムでは、初等学校での KS 2 (Y3-6の4年間)を‘Lower KS 2’と‘Upper KS 2’に分割してある。これは、1つの KS が4年間では期間が長すぎるため2年刻みにすることを、初等学校関係者が支持していたことによる。

3. 現行のナショナルカリキュラムでの Handwriting の教育目標における 左利き者への書字指導

本章では、「1988年教育改革法」により導入されたナショナルカリキュラムである Department for Education (1995). *English in the National Curriculum*. London, UK: HMSO. (以下「①」と表記)と、現行のナショナルカリキュラムである Scholastic (2013). *The National Curriculum in England*. London, UK: Ashford Colour Press. (以下「②」と表記)との、初等教育段階(KS1-2)における Handwriting の教育目標に関して比較検討を行う。なお、以降本章の和訳は筆者(小林)による。

①では、KS1(5～7歳)からKS4(14～16歳)までの義務教育段階における国語教育の目標として、まず、Speech や Writing を通して効果的なコミュニケーションが図れる能力や、理解しながら Listening が出来る能力、また、意欲的に反応しつつも判断能力を伴った Reading の能力を育成することが掲げられた。これに続き、「a」として Speaking と Listening、「b」として Reading、「c」として Writing の教育内容が列挙されて、Handwriting は「c」の中に位置づけられた。¹

また、①によって、ナショナルカリキュラムが制定されるまで曖昧にされていた Handwriting の教育目標が法的に示された。KS1-4(義務教育段階)

¹ 小林比出代「The Education Reform Act (1988年教育改革法)」制定以降のイギリスにおける Handwriting の教育の在り方」(『書写書道教育研究』第14号 2000) p.65.

の教育目標を掲げる中で、Handwriting は Writing の項の中に「presentation skills（表現技法）」の一つとして設けられた。² 各 KS での教育内容と到達目標から、①における初等教育段階での Handwriting の教育目標は「表 1」のようにまとめられる。この結果、全ての KS において「読みやすさ」及び「正整美」が掲げられていることが明らかになった。³

表 1 『English in the National Curriculum』(1995) に示された Handwriting の教育目標

Key Stage	Handwriting の教育目標	『English in the National Curriculum』中の原語
Key Stage 1 (5～7歳)	読みやすさ	legible・clearly
	正確さ	correctly・accurately・join letter correctly
	正整美	consistent・regularity・neat・correct size
	連続している	joined
Key Stage 2 (7～11歳)	読みやすさ	legible・clear
	正確さ	correctly・accurately・join letter correctly
	正整美	consistent・correct size
	連続している	joined
	自然な運筆	fluent・flow easily・joins are smooth

一方、②では、「2-1」に記した指針を受け、国語教育の目標にリテラシー能力の育成を掲げている。特に会話言語と読み書きの学習が重視され、国語力の養成は全ての学習の基礎として不可欠なことが強調されている。また、読書教育の重要性も説かれている。⁴

Handwriting に関しては、②も Writing の項の中に設けている。また、Writing の活動の根底には「自然な運筆 (fluent)」「読みやすさ (legible)」「効

² 小林比出代「The Education Reform Act (1988年教育改革法)」制定以降のイギリスにおける Handwriting の教育の在り方」(前掲書) p.66.

³ 小林比出代「教育目標から見た英・米国の Handwriting の教育と日本の書写教育」(『書写書道教育研究』第12号 1998) p.22.

⁴ Scholastic (2013). *The National Curriculum in England*. London, UK: Ashford Colour Press. 8p.

率的な速さ（speedy）」を伴う Handwriting が存在する（Writing は Handwriting に左右される）ことも記されている⁵。さらに、②では KS(学年)ごとに Spoken language, Reading, Writing の教育内容を示している。Handwriting は Writing の一領域として解説され、最初に各学年における Writing 学習全般にわたり概説している。⁶ 「表 2」はその概略を列記し、「表 3」は Handwriting の学習内容をまとめたものである。

表 2 『The National Curriculum in England』(2013) に示された Writing 学習における Handwriting の学習内容の概略

Key Stage 1	第 1 学年	Handwriting の活動に必要な身体的な技能を育成する必要がある。
	第 2 学年	個々の文字を正確に書けるので、最初から望ましい Handwriting の習慣を育成することができる。
Lower Key Stage 2	第 3 - 4 学年	文字を連続して書くこと（続け書き）が標準的にできなければならない。 自分が言いたいことを記すのに十分な速度で書くことができる。
Upper Key Stage 2	第 5 - 6 学年	〔※Handwriting に関する特記内容なし〕

表 3 『The National Curriculum in England』(2013) に提示されている Handwriting の学習内容

Key Stage	法的に規定されている学習内容	注記（法的要件ではない学習内容）
Key Stage 1 第 1 学年	<ul style="list-style-type: none"> ◦正しい姿勢で座り、鉛筆を望ましい持ち方で持つ。 ◦小文字の正しい書き方を習得する。 ◦大文字を書く。 ◦0 から 9 の数字を書く。 ◦類似して書かれる文字を理解し、各類似性に従って練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦頻繁かつ個別に直接指導を要する。 ◦正しく自信を持って書ける。 ◦筆記具(鉛筆、ペン)の大きさは、児童の手にとって大きすぎないようにする。 ◦児童にとって望ましい筆記具であれば、望ましい持ち方が保持でき、悪い習慣を避けられる。 ◦左利きの児童は、それぞれの必要に応じた具体的な指導を受けるべきである。

⁵ Ibid., 13-14.

⁶ Ibid., 16-40.

	第2学年	<ul style="list-style-type: none"> ◦文字相互に配慮して正しい大きさの小文字を書く。 ◦続け書きに必要な斜めや水平な線を使い始め、どの文字を連続させるかさせないかを理解する。 ◦大文字や数字を正しい大きさに書き、他の文字や小文字と調和させる。 ◦文字の大きさを考慮して単語間にスペースを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦正しい字形の復習や練習を頻繁に行う。 ◦確実に正確な字形で書けるようになったら、連続した書き方(続け書き)を学習すべきである。
Lower Key Stage 2	第3 4学年	<ul style="list-style-type: none"> ◦続け書きに必要な斜めや水平な線を使い、どの文字を連続させるかさせないかを理解する。 ◦例えば、文字内の下降線が平行で等間隔になる等、Handwriting の読みやすさ、一貫性(正整美)、質を向上させる。ascenders(「b」「t」に見られるような文字自身の body より上の部分)や descenders(「g」「p」に見られるような文字自身の body より下の部分)が接触しないように、行間が充分とられている。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦各々の Writing を通して、文字を連続して書くこと(続け書き)ができるようになる。 ◦自分が言いたいことを書きとめられるように、自然な運筆(流暢さ)を高めるねらいとして、Handwriting は引き続き指導されるべきである。この学習は、作文と Spelling の学習をサポートする。
Upper Key Stage 2	第5 6学年	<ul style="list-style-type: none"> ◦読みやすく、自然な運筆で、速度を上げて書ける。 ◦個々人の書字スタイルの一環として、目的や必要に応じ、続け書きも含めて、用いる文字の形を選択できる。 ◦課題に最も適した筆記具を選択できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦Handwriting の練習を続けて、書字速度を上げるように促す必要がある。自分の言いたいことを書きとめるのに時間を要しないようになる。 ◦例えば、速くノートを書く時や、手書きによる課題の完成等、個々の課題にどのような Handwriting が的確であるか明確にすべきである。 ◦例えば、図表やデータのラベル、e メールアドレスの記述、フォームへの記入にあたっての数字や大文字は続け書きをしないことを学習すべきである。

ここで①と②を比較してみる。①では、言語学習を「社会的で文化的かつ実用的な生活」の基本とし、**Handwriting** をコミュニケーションのための効果的な手段の一つと見なしていた。**Handwriting** の教育は、日常生活に不可欠な技能の教育として、あくまで実用主義の立場をとっていたのである。その結果として、「読みやすさ」「正整美」が重視されていた。⁷

これに対して、②は、教育水準の向上や基礎学力の底上げを目指し、学習内容に関して知識面からの要件を法的に規定するとの姿勢が随所に見てとれる。英語（＝国語）を全ての学習の基幹教科とし、国語力を体系的に育成する一環に **Handwriting** の学習を位置づけるとの在り方は、①では②ほど強く打ち出されていなかった。双方ともに、同じく「読みやすさ」「正整美」を重視はしているが、その理由が、②では **Writing** の学習、延いては国語力全般ないしは基礎学力の向上に寄与することに導かれていくのは①と異なる点である。ただし、結果としては、①と同様に「読みやすさ」「正整美」が重視され、加えて「正確さ」「自然な運筆」「連続している」にも重きが置かれる点には変わりがない。

なお、①②ともに、望ましい姿勢や筆記具の持ち方、字間や行間、書字速度、用途に応じた書字スタイルの選択等、加えて②では筆記具の選択を学習内容に掲げているが、これは日本の書写教育と共通する。また、②の **KS1**（第1学年）に、左利きの児童に関する指導について特記されている点は注目に値する。

4. イギリスの教科書制度の特徴

イギリスには、日本のような教科書検定制度は存在しない。教科書にあたるテキストブックは存在するが、その内容についてのナショナルカリキュラムからの影響は日本に比べると小さく、授業の中でも教具の一種に位置づけられると考えられる。検定教科書がなく、また、ナショナルカリキュラムでは、教授方法や各教科の年間授業時間数、各学校でのカリキュラム組織方法等まで法的に規定していないことから、イギリスは、教師が独自に授業内容を構成する、緩やかな教育制度をとっているようにも思われる。しかし、実際には、授業内容はナショナルカリキュラムアセスメントによる学力評価と、**Ofsted** (the

⁷ 小林比出代「教育目標から見た英・米国の **Handwriting** の教育と日本の書写教育」（前掲書）pp.25-27.

Office for Standards in Education, Children's Services and Skills.) による学校評価との厳しい評価制度がある。従って、教師はその評価に対応した教育内容を行う必要があり、結果的にナショナルカリキュラムを尊重した授業を構成することとなっている。

授業で使用する教科書や教材に政府は関わっていないが、オックスフォード大学出版やケンブリッジ大学出版、コリンズ出版、ロングマン出版といった大手の教育図書の出版会社がナショナルカリキュラムに準拠した教科書や教材を出版しており、各学校ではそれらを適宜使用しているところが多い。ただし、小学校では基本的に教科書は使用せず、教師が与えられたガイドラインを自分たちで解釈し、それにふさわしい教材を自分たちで選んだり作ったりしている。

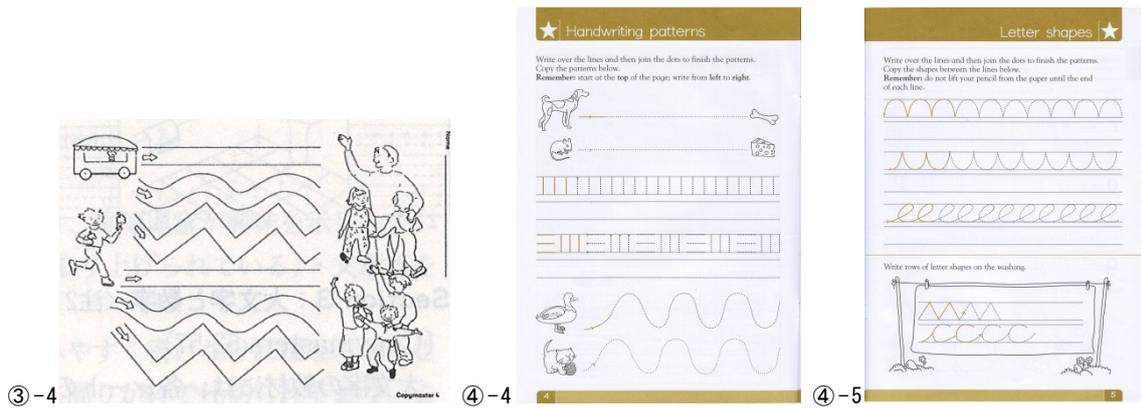
5. 現行のナショナルカリキュラムに準拠した Handwriting のテキストに みる左利き者への書字指導

本項では、「1988年教育改革法」によって導入されたナショナルカリキュラムに準拠した『The Handwriting Book』（「序章 1.(3)」参照。以下「③」と表記）と、現行のナショナルカリキュラムに準拠した Handwriting のテキスト Carol Vorderman (2015). *Handwriting Made Easy Ages 5-7 (Key Stage 1) Printed Writing*. London, UK : DK. (以下「④」と表記) とを、文字学習入門期 (KS1) の教材に焦点を当て比較分析する。

④は、世界最大とされるロンドンの老舗書店 W & G Foyle Ltd. (通称「Foyles」) の教育書専門フロアにおいて、2017年3月現在、販売部数が多い Handwriting のテキストとしてご紹介いただいたものである。本書の著者は数学に優れ、数学教育への影響力が大きい。ナショナルカリキュラムに準拠した数学のテキストの他に一連のシリーズとして、理科や英語 (= 国語) のテキストも編集出版している。本書はその一つである。前述の通り、イギリスには教科書検定制度がなく、授業で使用する教科書に政府が関与しないが、当該テキストは、首都で世界最高の書籍数を誇るイギリス最大の老舗書店における販売数が高い。このことは、多くの学習者や指導者に使用されている可能性が高い、すなわち、学習者や指導者に与える影響が大きいことの一つの指標になると推察し、本書の分析検討を試みることにした。

本書には 32 種の教材が掲載され、巻末に各教材に関する解説が記載されている。以降、例えば、「③-」以下に示す数字は、各テキストにおけるワークシートナンバーを表す。

③④ともに第一教材は線遊びである。これらの教材では共通して、用筆法や文字を書く際の基本的な動きが学習できる〔③-4／④-4 参照〕。教材解説では、④に関しては、「滑らかで流動的な線を書くのに役立つ」とし、特に、④-5 は、左利きの児童であっても利き手に関係なく用いることができる教材である旨を記している⁸。以降、左利き者に特化もしくは特別な配慮をした教材は見受けられない。



⁸ Carol Vorderman (2015). *Handwriting Made Easy Ages 5-7 (Key Stage 1) Printed Writing*. London, UK : DK. 33p.

6. イギリスにおける左利き者の書字教育に関する文献的考察

本項では、イギリスで出版された左利き者の書字教育に関する書籍に関する文献的考察を行う。考察の対象とする文献は以下の4冊である。

○Jean Alston(1996) : *Writing Left-handed*

A guide for parents and teachers of left-handed children.

Manchester, UK : Dextral Books. . . . (1)

○Gwen Dornan(2007) : *Writing Left-handed... .. Write in, not left out.*

The National Handwriting Association. . . . (2)

○Lauren Milson(2008) : *Your Left-handed Child*

Making things easy for left-handers in a right-handed world.

London, UK : hamlyn. . . . (3)

○Julie Bennett(2015) : *HANDWRITING Pocketbook*

A pocketful of tips, tools and techniques for teaching,

improving and troubleshooting handwriting.

Hampshire, UK : Laurel House. . . . (4)

このうち、(1)(2)(4)には邦訳書がない。(3)のみ翻訳版『左利きの子 右手社会で暮らしやすくするために』(ローレン・ミルソム著 笹山裕子訳 東京書籍 2009)が出版されている。

(1)(※書名『左手による筆記』(小林訳))は、イギリスの著名な作家、かつ大学教員、かつ公認の心理学者 Jean Alston の著書である。本書の序文には、Diane Paul による次のような紹介文が記載されている。

「『Writing Left-Handed』はユニークな小冊子である。このようなガイドは他に販売されていない。Dr. Jean Alston によって、これほどまでに深く向き合い、また、彼によって与えられる洞察及び知識を以て、左利きの書き手に助言を与えようとする取り組みは、他には見られない。

本書は、両親や教師からの反応から、1989年に初めて出版されて以来、貴重な資料であったことは明らかである。本書に極めて大きな需要があるため、毎年増刷されているだけでなく、左利きの子供が右利きの子供と同じ容易さで書

くことを助けるための方策を強化し、より高めるために、これまで2回改訂されている。

この『Writing Left-Handed』第3版には、Handwriting を教えるための重要な原則に重点を置いた、新しい方策を加えている。結合、始点と終点、大文字の使用、サンプル手書き文字モデルの例に関しては、今までに一度も取り組んだことがなく、これは、左利きも右利きも、書くことを学んでいる人には賢明なアドバイスである。

書くことを学ぶのに苦勞している全ての左利きの人に、『Writing Left-Handed』を心から勧めることができる。」¹

(2) は、The National Handwriting Association (※「全英ハンドライティング協会」(小林訳)) が発刊した書籍である。当団体は、イギリス政府の助成を受けた非営利団体であり、学校や保護者を対象にした情報を提供している。教育ジャーナルを発行しており、学校はじめ教育現場において参照されている。

(3) の翻訳版では、書名のみ原題の直訳で『左手で書く：腕を置いてきぼりにせず、ぐっと中に入れて書く』と示され、「左利きの人に文字を教える全ての教師や保護者に薦めたい本。実際の手助けの仕方やアドバイス、長期的な考え方などを紹介しながら、左手で書く方法を説明している。」²と紹介されている。

(3) は、先述の邦訳版において、原著の著者は、自身が左利きであり、2008年現在18年間にわたって The Left-Handers' Association (左利き協会) を通じて左利き者のニーズを調査し、広報活動を行ってきた旨が述べられている³。さらに、The Left-Handers' Association は、日常生活の様々な場面で左利き者が直面する問題に目を向けてもらうために活動する団体として、イギリスにおいて1990年に設立されたこと、また、設立以来世界中から会員が集まり、規模が拡大して、現在は、左利きに関する情報センター、かつ、第一線で啓蒙活動を続ける団体として高く評価されていることも明示されている⁴。

¹ Ibid., p. 4.

² 『左利きの子 右手社会で暮らしやすくするために』(前掲書) p.122

³ 『左利きの子 右手社会で暮らしやすくするために』(前掲書) p. 6

⁴ 『左利きの子 右手社会で暮らしやすくするために』(前掲書) p.121

(4) は、(3) の翻訳版において、同じく書名のみ原題の直訳で『手書きのポケットブック』と示され、「文字を教える教師向けのポケットサイズのガイド。左利きの子を教える時のコツが紹介されている。」⁵と記される。

(4) の裏表紙には、Rosemary Sassoon が記した「Julie Bennett は、驚くほど多くの役立つ実践的な情報を、この小さな本の中にうまく入れることに成功している。彼女は、絶対に守るべき規則よりも、むしろそれに代わるアイデアや解決方法を提供してくれている。さらに一つのセクションを使い、より進んだアイデアを提供している。教師はこのポケットブックを、Handwriting を教える際に生じる問題を理解するのに大変役立つとを感じるであろう。」との推薦文が掲載されている。

Rosemary Sassoon は、イギリスを代表する、Handwriting とその教育に関する研究者であり、多くの著書を持つ。Rosemary Sassoon (1999). *HANDWRITING OF THE TWENTIETH CENTURY*. London, UK : Routledge. はその中でも著名な1冊である。ただし、未だ日本における通訳本(邦訳版)は存在しない。ここで参考までに、『HANDWRITING OF THE TWENTIETH CENTURY』に記されている、Rosemary Sassoon の左利き書字に関する言及を要約して列挙する。

p.44

ライティングのスタイル：反対意見

この1898年のHandwritingに関する本では、Jackson は手書きの「直立モデル」(=全く傾けないモデル)は左右どちらの手にも応用が利く、さらには、傾斜させるモデルよりも左利き者により適しているのと主張している。この主張は、その当時は左利きが承認されていなかったのが珍しいものである。

p.66

左利きを認めましょう。

理由：人々に無理に右手を使わせる結果はどうなるのか。

⁵ 『左利きの子 右手社会で暮らしやすくするために』(前掲書) p.122.

1918年までに、左利きの人に右手を **Handwriting** と手作業のためだけに使うように強制するのは最善ではないという意見もあった。強制することは吃音の原因になる可能性があることを示唆した。心理学的理論では、左利きか右利きかは、血液を脳に運ぶ動脈がどのようにつながっているかに依存していることを示唆している。右利きで書くことを余儀なくされた左利きの子供たちは、速くたやすく書けるようには決してならないという証拠が示された。

p.90

態度を変える

20世紀初頭、ほとんどの子供たちは左手の使用を禁じられていた。罰の例として、背中後ろに左手を縛った。1952年までに、**Robert Tanner** は、今や左利きであることは恥じることではないと書いている。左利きの子供たちは常に少数派であり、それは「奇妙で居心地の悪い問題」である。彼らを特別な目で見てはいけない。しかし、彼は実際に役立つ助けには触れていない。

p.120

1963年と1975年にイタリック体を国全体としてのモデルに採用しようとする試みがなされた。ペン用の特別な角度の付いたペン先は左利きの人に与えられたが、ほとんどの場合、イタリック体のスタイルは「克服できないハードル」(＝不可能)であった。

(1) から (4) の文献考察にあたっては、まず、各書が示す左利き者の書字教育に関する記述を抽出し、日本語で記す。その際、(3) は、既述した邦訳版から該当箇所を抜粋する。(1)(2)(4) に関しては、翻訳(解釈)に間違いがないよう万全を期すために、信州大学の長田哲文と **Sue Fraser** から全面的な指導を受けた上で記述する。表記に際し、各冒頭部には抽出した和訳箇所に対応する原著のページ数を示す。また、筆者(小林)が着目した箇所には波線を付す。原文に関しては、〈参考資料〉として和訳のために抽出した箇所を赤色の枠で囲んで提示する。続いて、当該書4冊の内容をふまえて考察を試みる。

(1) Jean Alston(1996) : *Writing Left-handed*

A guide for parents and teachers of left-handed children

p. 6

質問：私の子供が左手を使って書くのをやめるように言うべきでしょうか。

答え：いいえ。どちらの手を使うかの決定は子供に委ねるべきです。利き手を決めるのは脳であって、手ではないのです。彼らに任せれば、ほとんどの子供はより能力を発揮しやすい手を使うことを選択します。つまり、言語と書くことのために、頭脳と手とが一緒に働きやすい方を選ぶのです。

質問：左利きの人より右利きの人よりも書くのが遅いのですか。

答え：いいえ。多くの左利きの人より右利きの人と同じくらい、もしくは右利きの人よりさらに速く書きます。一般的には、左利きの場合と右利きとで書く際のスピードに大きな差はありません。女子は、概して男子よりも速く書きますが、このことはどちらの手を使って書くかということとは無関係です。

質問：どのようにしたら左利きの子供を手伝ってあげることができますか。

答え：保育園や学校に行く際には、先生に左利きであることを伝えたり、また、学校には左利き用のもの（例えばハサミなど）があるかどうかを聞いてみてください。

質問：左利きの子供が書くものは、右利きの子供が書くものよりも読みにくいのですか。

答え：いいえ。多くの左利きで書く人は、右手を使う人と同じように書きます。しかしながら、私達は右利きの人に適した社会で暮らしていますから、左利きの人が学ぶ際には特別な助けを必要とするのです。

左利きの子供のための規則は、あなたのお子さんが書く際によくある失敗を起こさないようにする助けとなるだろう。写真1,2,3,4（※(1) p.8.に掲載

(小林注))は、それらの規則に従わなかった左利きの子供が書いたものである。

p. 7

左利きの子供のために紙が正しく置かれていない、または、人差し指や親指の圧力が正しくコントロールされないと、文字は写真1が示すように不規則な傾斜となる。

書き手が線の上に書くことに慣れていないことで、鉛筆のコントロールが難しいと思うと、写真2が示すように、**Handwriting** は線の上に正しくのらない。

書き手が書いた時の最後の単語が見えないと、写真3が示すように、単語と単語の間のスペースを大きくとってしまう可能性がある。

左利きの人が右利きの人が置くべきところに紙を置くと、写真4が示すように、反対側に傾いた筆記が起こりやすい。

p. 9

Handwriting を教える際の重要な原則

以下は、左利き、右利き両者に教えるために重要なことである。

1. 初めから、全ての文字を正しく書くよう教えなければならない。
2. 文字の連結を学び始める時に備えて、次の語への小さな連結部分を持った文字を教えると役立つ。
3. 全ての文字が正しく特に意識せず書けるようになれば、単語の中の文字は連結されるようになる。the, it, and, he 等のような短い単語の中の連結は真っ先に教えるのがよい。
4. 線の入った紙は役立つ。 小さな子供は線の間には十分なスペースのある紙を必要とする。子供が成長し、文字や単語の形をよりうまくコントロールで

きるようになると、線と線の間隔を小さくすることができる。

5. 紙は筆記を行う場所に正しく置かれるべきである。紙は筆記を行わない方の手でしっかり押さえる必要がある。
6. 子供にあった机や椅子を使い、子供が楽な姿勢で座っていることを確認しなさい。
7. 最も適切な鉛筆やペンを選ぶことがとても重要である。

左利きの子供を注意深く観察しなさい。

子供が単語を書く時にそれが見えるように、Handwriting に用いる手よりも上が見えるように、十分な高さを持って座っていますか。

子供が書く際に体の一部が影にならないように正しい照明になっていますか。

書く姿勢は正しいですか。筆記を近くで見る書き手もいるようである。このことが起きると、彼らは書く際に、筆記に用いる手の下から見ようとするかもしれない。

p.10

左利きの書き手を助けるための（左利きの書き手に役立つ）規則

（※A～Iの項目に関するルール(小林注)）

A Seating（座り方）

- 1 テーブルと椅子は快適な高さに設定する。足は床に平らに置き、テーブルの下部とひざやももの間に隙間ができるようにする。（フットレストやブロックは、小さい子供には大変有効である。） 大雑把な目安だが、筆記用テーブルの高さは身長の半分であり、椅子はおよそ書き手の身長の半分ほどである。もし可能なら、筆記用テーブルは体に向かって傾斜している方がよいし、椅子は身体から逆に向かい少し傾斜しているのがよい。

- 2 書く際の肩、腕、手の動きは、ほとんど身体の中心線より左側で起こる。
左利きの人は、椅子を筆記用テーブルの右側に向け、書くために体の左側に十分なスペースを確保する。

- 3 左利きの書き手は、右利きの書き手とともに書こうとする時、その人の右側には座らないようにする。 このような座り方をすると、書くのに用いる腕はお互い接触してしまい、動きを制限してしまう。

p.11

B Paper (用紙)

- 4 紙やノートは、大きすぎたり長すぎたりしないようにする。書き手が最も楽に手が届き、書けるようにすることが必要である。

- 5 線が入った紙は、常に書き手が正しい行間を取るのを手助けする。子供たちは、筆記の長い経験の初期段階では、線を使用すべきである。

線の幅は様々だが、広い線は、特に小さな子供の場合には最も有効である。全ての子供が線の上を書くわけではない。子供たちは筆記を確立するのに使い、単に線と線の間を書くかもしれない。

どの教室にも様々な線の入った紙を置いておき、そして、子供に線と線の空白が最適な紙を選べるようにする。

C Paper position (用紙の位置 (置き方))

- 6 右利きの人とは異なり、左利きの人は体から離れる方向ではなく、体の方に向かって書く必要がある。 体の中心線の左側に紙を置き、紙の上部を時計方向に傾けることで、左利きの人は最も快適な姿勢を得ることができる。

D Hand and arm positions (手と腕の位置)

- 7 紙は右手でしっかりと押さえる。右手は、筆記を行う線の下の方に置くのではなく、必ず紙の真ん中か右端の方に置く。多くの左利きの人は、右手を書く単語の下に置くことで、書いた部分を見えにくくしてしまう。
- 8 前腕は、筆記を進めていく際に、紙の端と平行に保つ。カギの形（逆手の位置）は、年齢の高い左利きの人によく見られるが、前腕を紙の端に対して正しい角度にし、手首を起こすようにすると改善できる。（傾斜した板は、左利きの人が正しい紙の位置と姿勢を保つことを助ける。）

p.12

E Writing implements （書くための用具）

- 9 ペンや鉛筆は、少なくとも先から2 cm は離して持ち、書き手に書かれたものが見えるようにする。
- 10 子供が紙の上を滑りやすく書けるペンや鉛筆を選ぶのを手伝いましょう。左利きの人は、右利きの人が引くのに対し、ペンや鉛筆を紙の上で押しがちである。

柔らかめの B、HB の鉛筆、サインペン、または極細ペンが役立つだろう。または、もしインクペンを使うなら、reverse oblique というペン先がよいだろう。様々な書く道具があるので、書き手はどれが一番適しているか選ぶのにじっくりと考えるのがよいだろう。

F Grip （(筆記具の)握り方）

- 11 左利きの人の中には、書くための用具を紙に強く押し付け、用具の胴体部をととても強く握る。以下の助言が、握る圧力を少なくするのに役立つ。
- a) 胴体部の高い位置を握るようにしなさい。そうすることで、強く握ることはかなり困難になる。
- b) カーボン紙を筆記用紙の2枚目か3枚目に置く。そして、書き手に、2枚目

または3枚目のカーボン紙に写らないように書くよう促す。

- c) 胴体部がキラキラ光っている、もしくはメタリックのペンや鉛筆に惹かれてはいけない。それらは滑りやすく、より強く握ってしまいがちなものである。

(胴体部を強く握る書き手は、同時に紙を強く押す傾向がある。1つの問題を軽くしようとすれば、普通もう一方の問題も解決する助けになる。)

p.13

G Writing script (script (手書きの文字) を書くこと)

- 12 様々な筆記体系とモデルは学校で利用可能である。また、多くの小学校の先生は、筆記を上手に教えている。学ぶべき最も重要な点は、それぞれの文字は正しい始まりの点と終了の点があり、それによって単語の中にある文字が容易につながられることである。

右利きの人は、f と t の横棒を左から右へと引く。それと対照的に、左利きの人は、次に示すように右から左へ引く方がより容易にできる。

p.15

Handwriting のモデルについて考える場合、左利きの書き手は常に特別な注意を払って扱われるべきである。多くの右利きの人がするように、多くの左利きの人も少し前に倒した筆記を用いる。そして、適切な筆記姿勢は、この伝統的な方法を容易にしてくれる。しかしながら、もっと直立的な筆記体も読みやすさが確保される限り受け入れられることは間違いない。

p.16

H Letter reversal and confusion (文字の反転と混乱)

- 13 筆記の初期段階では、たいてい mirror writing (鏡に映して正しく読める

タイプのもの) の場合であるが、左利き者の中には、紙の右側から左方向へと書き始める者がいる。これは、鏡を通すとうまく読めるのだが、子供の通常の筆記を助けることにはならない。

紙の書き始めの位置に、はっきりとした印をするのが役立つ。例えば、赤い色の星印か、左側に上から下まで色のついた線を引く。そうすることで、改行してもそれによって忘れることはない。

- 14 6歳までは多くの書き手が b と d で混乱してしまう。この点では、特に左利きの書き手にこの問題が見られる。次のアドバイスが役立つかもしれない。
- a) b または d を選び、書き手がそのどちらか片方が正しく確実に書けるようにしてから、もう1つを直すようにする。
 - b) 選んだ方の文字を紙やノートの上部に書き、必要な書き順を示す矢印を添えて、その文字が確実になるようにする。
 - c) 「d は c (の文字) で始まるみたい」という子供の遊び歌を d の形を教える際に繰り返し歌うのもよいだろう。
 - d) 例えば、bed のように b と d を一緒に教えるのは役立たない。(文字の方向の問題を持つ子供には、これはただ混乱を助長するだけである。)
 - e) 6歳を越えて、b と d を混同したり、他の文字でもまたは数字でも反対に書いたりする子供は、目の不安定な動き、または、**binocular convergence** (両眼輻輳) による可能性がある。これらの問題は、普通の視力テストでは見つからない。
 - f) 6歳を越えた児童に見られる文字に関する混乱及び/または鏡文字は、失読症または発達性協調運動障害の可能性がある。さらには、**binocular vision** (両眼で距離をつかむこと) に問題がある可能性がある。もし、目の運動をしても症状が残るのなら、**British Dyslexia Association** (英国失読症協会)、**the Dyslexia Institute** (失読症研究所)、または **Dyspraxia Trust** (発達性協調運動障害トラスト) がアドバイスすることができるだろう。

I Drawing reversals (反転描画 (描画逆転))

- 15 左利きか右利きかは、子供が筆記を始める前のお絵描きの活動に影響を及ぼし、それは学校にいる間やさらに成人してからも影響する。例えば、右利きの者は複数の平行線を右から左へと引くのに対し、左利きの者は左から右へと引く。このことは、小さな子供が塗り絵をする際にも見られる。
- 16 もし正確に描くことが要求されるなら、例えば、人の横顔を描く際、左利きの者は、下の絵（※（1）p.19.参照(小林注)）に示すように、顔が右側を向くように描く傾向がある。一方、右利きの者は、顔が左を向くように描く。
- 17 例えば、✓や£などの記号にも逆転が起こりうる。このことは、音楽で用いる記号、例えばト音記号や音符の方向なども及ぶ。後者は忍耐を持って直さなくてはならない。と言うのは、左利きの子供は、2つの方向を区別するのに多少の混乱を経験しうるからである。

- 18 フランスの研究者らの最近の研究では、Athenes と Guiard は、右利きの者は小学校を終える時までには姿勢が確立すると示している。しかしながら、11、12歳の年齢でも、左利きの者はまだ混乱していることがある。どこに筆記用紙、ペン、手を置くべきかという点で、確立でき自信を持てるどころか、筆記のたびに場所を変えてしまう傾向が残る。筆記の流暢さや体の快適感、姿勢や位置が一定し、そして確立した時に大変高い。位置と姿勢の問題を抱える左利きの子供には（次の）10項目の計画が役立つ。
- 19 大人の左利きの者は、広く分けて2つのグループに入る。
- a) 筆記用紙を時計方向に回す人たちは、鉛筆を紙の上部に向けて、そこから、一般的には、右利きの者を鏡に映したような位置に修正していく。
- b) 筆記用紙を反時計回りに回す人たちは、鉛筆を体の方に向けて、そこから、

一般的には、カギの形の筆記位置（Inverted Hand Posture（逆手の位置））を用いる傾向がある。

左利きの者は、カギの形の、ぎこちない筆記位置を変えるように指導されているかもしれないのとは対照的に、右利きの者は、大人の筆記姿勢を 11 歳までには確立している。

Rules round-up: ten-point plan（規則のまとめ：10 項目の計画）

- 1 筆記のための台の表面や椅子を自分の身長に合わせて選びなさい。
- 2 机や椅子の右側によって座り、体の中心線の左側に、書くための十分なスペースをとりなさい。
- 3 筆記用紙を体の中心線の左側に置きなさい。
- 4 紙を最大で時計回りに 32 度まで傾けなさい。
- 5 紙の上をスムーズに動く筆記道具を選びなさい。
- 6 金属の（または）すべりやすい胴体のペンを選んではいけない。
- 7 右手で紙を押さえなさい。
- 8 筆記具を（筆記）線の下に構えなさい。
- 9 筆記に使う前腕を紙の端と並行に保ちなさい。
- 10 筆記具を書いている位置から十分に離して持ち、書いているものが見えるようにしなさい。

(2) Gwen Dornan(2007) : *Writing Left-handed... Write in, not left out*

p. 1

この冊子は、左利きの人が書く際に補助する人を応援するために書かれたものである。その目的は、両親や教師に左手で書くというプロセスを理解できるようにすることであり、また、彼らと与えることのできる実用的な助けを提案する。この冊子は、左利きの人が快適に、そして、自信を持って書けるようになるための秘訣や方法を提供する。

p. 5

一般の人たちにとって、左利きの人とは左手で書く人たちのことである。しかしながら、私たち全てが何をするにも同じ手を使用するとは限らず、人によってはどちらの手も使用する人 (ambidextrous=両手使い)がいるし、作業によって異なる手を使うことを好む人もいる。このような差異を反映させるのに、研究者は利き手を決めるのに、書くことだけではなく、例えば、髪をとかすなどの行動に関するリストを用いることが多い。

p. 6

教師は、教室に何人の左利きの児童がいると考えるべきですか。

ある調査によると、13%が男性、11%が女性でした。

左利きの人を書いたものは右利きの人よりも読みにくいのですか。

いいえ。左利きと右利きの筆記を比較した信頼できる調査は数点ありますが、存在するいずれの研究も、彼らの間に違いを示すものは見られません。例えば、最近のギリシャでの調査では、7歳から12歳の子供182人を対象に、3種類の筆記課題を比較しました。「写すこと」、「指示に従って書くこと」、そして「自分で考え書くこと」です (Vlachod and Boneti, 2004)。私たちの予想通りに、子供たちは成長するにつれて、より読みやすく、また速く書くようになりまし

たが、どの作業においても、左利きと右利きでは違いはありませんでした。

左利きの人は右利きの人よりも書くのが遅いのですか。

いいえ。9歳から16歳の子供たちの Handwriting のスピードの最近の調査では、どの年齢でも、左利きと右利きとで違いは示されませんでした (Barnett et al, 2007)。平均的には、女子は男子よりも書くのが速く、そして、このことは右利き左利き者ともに見られます。

子供たちは左手を使わないように指導するべきですか。

いいえ。どちらの手を使うべきかの決定は子供に任せるべきです。利き手は脳によって決定します。彼らに任せると、ほとんどの場合彼らが好む手を選びます。つまり、頭と手を働かすのに使いやすい方になります。

多くの左利きの人は、善意であっても、大人から右手を使うことを強制されると、それに起因する嫌な経験を話したり、また、自信を無くしたりすることが起こりうるのです。左手を後ろ手に縛るような極端なやり方は姿を消したと願いますが、しかしながら、未だに少数ながら、左利きの人が自然に好む手を使用しないように教えられることがあるのです。このことは、左手の使用が食事の際や他の活動に許されなかった文化においてはさらにあり得ることなのです。

p. 7

左利きの人は、英語で書くには不自然な多くの動きを修得する必要がある。従って、書くことは難しい作業となる。

左利きの人がしやすいことは：

- ・ 横へ引く線を右から左へ引くため、左から右へと動く筆記システムに違和感を覚える。
- ・ 丸を書くのに時計回りに書くため、a, d, g, o, e, c 等の丸い文字は、より難しく感じるかもしれない。なぜならば、それらは反時計回りでなくてはならないから。

- ・ 書く際に右利きの人よりも押す動きが多く、押す動きは引く動きに比べてコントロールしにくい。
- ・ 書く際に手や鉛筆（またはペン）に隠されるため単語が見えない。
- ・ 手で書いたものを汚してしまう。 このことは、書いたばかりのところをダメにするばかりか、その後インクのついた手で紙を汚してしまいがちである。
これによって、書き手の気分が落ち込んでしまうこともある。

左利きの者が書き方のコツを得ようとしている初期段階では、特に助けが必要である。インターネット上のウェブサイトを見てみると、情報が交換されたり議論されたりしているが（p.44.のリスト参照）、左利きの者の数と同じくらいの方法があり、一人の人によいかもしれない解決策が必ずしも他の人に当てはまらない。

左利きの人には、最適な解決法を見つけるのに思いやりを持った助けを必要とする。

p. 8

（※左利きの子供への具体的な指導法(小林注)）

Activities that develop fine motor skill（運動技能を伸ばすための活動）

筆記に必要な動きをうまくコントロールするのに子供たちが楽しむことができ、また良い準備となる多くの活動がある。その数は多く、また様々であり、例えば、物を分類する、粘土細工をする、落書きをする、切ったりする、また食べ物を用意すること、例えば、混ぜ合わせる、粉などを振る、パン生地をこねる等がある。片手で何かをつかみもう一方の手で何かを行うことは特に役立つ。

Handwriting patterns（Handwriting のための連続模様）

連続模様を描くことは、子供たちには大きな楽しみであり、筆記に使われる基本的な動きに似た連続模様を描く練習は、文字や単語を書くために必要な形や動きを確立するのに大変価値あるものである。

Tip (秘訣)

一端子供が筆記に左手を使うことが明らかになった時、筆記のために使用する用具を左右常に持ち替えることをやめると、子供の筆記の上達に役立ちます。

p.10

Sitting comfortably (快適に座る)

Ensure that the writing surface and seating are comfortable.

(筆記のための、テーブル面と椅子が快適であることを確保しなさい。)

特に、Handwriting 用のテーブル面が高すぎないことは左利きの人には重要である。これは、筆記の手の自由な動きを妨げ、子供が自分の筆記を見ることを困難にする可能性があるためである。

p.11

左利きの方は、肩のほとんど、腕、そして、手の動きのほとんどが体の中心線より左側のため、左側に十分なスペースが必要である。もし、机の右側に座れば、さらに容易に書くことができる。

ぶつかり合う腕に注意しましょう。もし、絵を描いたり色を塗ったり、または、書いたりする時に右利きの方が左利きの方の左側に座れば、彼らはお互いの動きを妨げ合うかもしれない。子供は大人よりもこの問題を意識することが多く、許可を求める必要はなく、単に場所を替え合うことが許されるかもしれない。

Tip (秘訣)

教室や勉強部屋での照明を考える際に、左利きの子供のことを覚えておいて

ください。紙の上にあたる影はこの写真よりも邪魔になるかもしれません。

p.12

Individual boards with white or black surfaces

(黒または白い表面の個人用筆記用ボード)

これらは学校でよく使用され、グループワークにも大変役立つが、しかし、用心してください。左利きの人は、誤って左の腕または手で書いた部分を消してしまう可能性がある。このことを防ぐのに、ボードを 20、30 度時計方向へ回すといいだろう。そして、筆記用具は先端よりも十分離れたところを持ち、筆記に使う手は筆記線よりも下にとどめておく。

Paper and Books

左利きの人が書く時に、体の中心線を超えて押すという動きを少なくするために、紙を書き手の体の真ん中よりも左に置きなさい。このことは、さらに腕の使用と Handwriting の手をより自由に動かせるようにするので、書いているものが容易に見えるようになる。最初はこの体の位置は変に感じるかもしれないが、それによってはるかに自由な動きを獲得できるので、それに慣れるように頑張らせる価値はある。

p.13

20 度から 30 度紙を傾ける。このことは、書かれた単語を見やすくし、特に筆記の手を筆記の線よりも下にしておくと役立つ。Writing mat (下敷きのよう
なもので、線が付いており、それが透けて見える)がそれについて役立つ。

1 枚の紙の上を書くのではなく、本や厚紙、または複数の紙等のように、厚い下敷きの上で書きなさい。左利きの人はよく強く押しつけるので、柔らかい表面によって書き心地がよくなる。

紙が滑らないように、右手で紙を押さえなさい。

p.14

Lines (線が引かれた紙の使用について)

Tip (秘訣)

全ての子供に線を使って書くものではありません。彼らは、それで全体の位置を整えて書く、または、単に線と線の間を書くかもしれません。しかしながら、文字の位置を決め、正しい大きさと書くのに困る左利きの子供は、線の間よりも線の上に書くと役立つとわかります。

p.15

The choice of a pen or pencil is a very individual one.

(ペンや鉛筆の選択は個人で大変異なることである。)

特にペンがそうであるが、今は大変多くの筆記用具が利用できるもので、選ぶのにまごついてしまう。左利きの子供には、最も簡単で上手く書けるのを助けるものが見つけられるように、様々な用具を試してみるよう奨励する価値はある。

pp.16-17

Holding the pen or pencil (ペンもしくは鉛筆の持ち方)

左手を使い、左から右へと書く明らかな問題の1つは、手や筆記具が書いたものを見えにくくしてしまうことが起きることである。このことで、正しいスペルで書くことに加え、書かれたものがきちんとまとまっていることを保つのが困難にしている。結果として、筆記具をどのようにしたら筆記を妨げず、最も快適な方法で持つことができるかを見つけることが必須となる。これは、面倒なことである必要はない。左利きの人々の筆記をよくする持ち方を助ける小さな改善方法は多く存在する。

右から左へと読む場合、例えば、アラビア語を書く際の右利きの人の場合は、英語を左利きで書く場合と同じ問題を抱えると想像できるだろうが、このことは同じではなさそうである。(アラビア系の子供がこの問題を持たないのは(小林注)、) おそらく、絵に似たしるしを使うことによる(※アラビア語を書くとき英語のアルファベットよりも絵文字に似ていることを言っている(小林注))。または、おそらく、ヒントは、ほとんどのアラビア系の子供たちのペンを持つ方法にあるだろう。彼らは、手を筆記線の下に置いて書き、道具をその先端からかなり離して持つ。この2つの、またはそのうちの1つのコツは、多くの英語の左利き者の助けとなるであろう。

A pen or pencil should be held well away from the point (at least 2 cm)

(ペンや鉛筆は、先端より十分(少なくとも2 cm)離れたところを持つのがよい。)

この単純な指導は、書いている際に文字をはるかによく見えるようにし、汚すことは起こりにくくなるので、左利きの人の多くの問題点を解決できる。胴体部の十分上を持つことは、しっかりとコントロールできることを要する。小さな書き手には、それが身につくまでは、おそらく励ましや助けが必要だが、それは辛抱強く頑張るのに値することである。

p.18

指をペンや鉛筆の先から遠ざけるための補助具がある。指を置くべき場所を明確に示しているペンが多くある。また、動いてしまいがちな指をある位置にとどめておくことを促すためのグリップ(固定具)が数種類売られている。指が先端に滑って落ちるのを防ぐ簡単なグリップ(固定具)では、輪ゴムを胴体部の適切な場所に巻くことで簡単につくることができる。

p.19

ペンや鉛筆の持ち方については、様々な議論や関心がある。重要な観点として

は、書き手は書くことができるのには、必要なコントロールと自由の両方を持つ必要があるということである。理想としては、2本の指で持ち、3番目の指は補助的に使う。— 三脚にする。このことによって安定し、また、柔軟性も生まれる。

この三脚は、ペンを親指と人差し指は少し曲げて道具の裏側に置き支えるようにして作るのがよいとよく言われる。これによって、ペンが滑ってしまう危険もなく、幅広い動きが確保される。多くの左利きの人は、この持ち方で成功し、また快適にも感じる。そして、これは子供が書き始める際に、左利きの子供に教えるにはよい持ち方である。

代わりに、ペンは、親指を補助にして人差し指と中指の間に持つことができる。この方法は 1950 年代に Callewaert というベルギーの神経科医によって研究された。そして、Rosemary Sassoon (2003) によって代わりの持ち方として支持された。それは、ペンを立てて持つことを可能にし、それは、ペンによっては正しく機能するために必要であった。

子供たちは、よく、さらに他の指を使ってペンや鉛筆を持つことがある。3番目の指（※日本語では「4番目の指」になる（親指は finger ではないため）（小林注））をペンの裏側に置く代わりに、上側か横に置く子供がいる。さらに、親指をペンの周りに回す子もいるかもしれない。このようなペンの持ち方は、一定ではないが更なる安定を与えるのだが、しかし、自由な動きを犠牲にしている。おそらく、この方法が使用されるのは、子供がペンの持ち方を学んでいる時、まだ tripod holds（三脚持ち）に対応できるには未成熟である（または未成熟であった）ことによる。

p.21

自らの筆記を心配する左利きの人は、大変緊張する可能性がある。彼らは、筆記をうまくコントロールしようとするあまり、ペンを強く握り、紙に強く押し

つけることがよくある。そして、彼らは書くことは大変疲れることで、手や腕が痛くなり得ることだと考える。子供のこの緊張を軽減できるよう助けることは、子供にとって大変な利益となる。

p.22

Getting down to writing (書き始める)

Where to start? (どこから始めるか?)

既に述べたように、左利きの人は右から左に書くのが自然な動きである。従って、左利きの人が、ページの左から書くのに自然で、そして、快適に感じるには時間が必要かもしれない。紙の左側に色のついた線や印をつけたりすることで、書き始める側へ注意を向けさせることができる。信号機の緑「進んでよい」を左に、また、赤「とまれ」の色を右側に使用することで、左から右へと書くという意識を高めることができる。

文字を、同じペン(鉛筆)の動きをするものをグループにして学ぶ。(※例えば、long, ladder, letters (長い梯子の形の文字) であれば、l, I, u, t, j, y である。これらは、上から下に向かっての動きになる。(小林注))
このような学び方によって、子供が文字を正しい形で書く正しい方法を覚えるのを容易にし、特に、左利きによく見られる b と d や、p と q の混乱を避けるのを助ける。

p.23

Letters needing special attention (特に注意を要する文字)

左利きの人は、自然に時計回りに円を描くので、円を含む文字、a, d, g, q, o, c, e を反時計回りに書けるようにするためには、特別な助けが必要とされる。

p.25

大文字の場合は、小文字と違い、他の文字とつなげないので、問題は少ない。

Joining up (連結体)

つなげて書くことは、文字と文字の間でペンを持ち上げ再び置く必要がないため、独立したブロック体よりも速く書ける (p.30 参照)。

Tip (秘訣)

子供たちは、それぞれの文字の形を自信を持って書けるようになれば、すぐに文字をつなげて書くよう励ますのがいいです。

文字の連結は全て左から右への動きであり、従って、左利きの子供には右利きの子よりもペンのコントロールが難しいため、左利きの子供は助けと励ましが必要である。

p.26

Horizontal joins

(平行の連結 (※筆記線に平行に線を引いて連結する(小林注)))

'Over and back' joins (「上向きと戻し」の連結)

前述したように、ここでは、多くの左利きの者にとっては不自然に思える、反時計回りの動きを使う。それゆえ、子供たちは次に示すように、a, c, d, g, o, q, s の文字を連結するには余分な練習が必要となる。(※例えば、他の文字から a に連結するには上に向けての diagonal join だが、次に a を書くためには反時計回りになることを意味する。(小林注))

p.27

The seven 'Ss' of good handwriting

(きれいな Handwriting の 7つの S (きれいな Handwriting の基準))

Shape (形)

全ての文字は読みやすいか。

Sitting (文字の座り)

全ての文字は筆記線の上にあるか。

p.28

Slope (文字の傾き)

同一方向に傾いているか。

多くの Handwriting の手本のスタイルは、向かう方向に傾いているが、それは、右利きの人には自然な動きである。多くの左利きの人にはこの傾きは受け入れられる。しかしながら、左利き者の中には、直立的な筆記の方が簡単な人もいるが、これは全く構わない。左利きの人にはより自然な、進む方向とは反対側に傾いた筆記には偏見も見られるようである。

おそらく、左利きの人には自然な、逆傾きの筆記 — すなわち、筆記は使用する手とペンの位置によること — が自然であるということと、それは、極端でない限りは完全に受け入れられることを認めるべき時である。

p.29

Size (文字の大きさ)

文字は正しい大きさで書かれているか。

筆記全体は適切な大きさか。

Spacing (間隔のとり方)

それぞれの文字は隣の文字と同じ間隔で書かれているか。

単語と単語の間の間隔は一定か。

右利きの子供には、スペースを確保するために、単語と単語の間に人差し指を置くように伝えるが、これは、左利きの子供にやらせようとする、指が邪魔してできない。従って、その配慮が必要である

Sequence or string (一貫性または連結)

筆記は一貫して連結しているか。

Speed (速さ)

多くの左利き者は、速く書くことは難しいと感じるが、学校では、速く書くことを求められる状況が大変多くある。例えば、毎日の授業での作業、宿題の指示を書き取ったり、試験の問題を書き取ったりすることである。これら全ての状況で、もし他の生徒のように速く書くことができないと不利益を被る。

A few common problems (いくつかの一般的な問題)

Letter reversals (文字の逆転)

多くの左利き者は、文字を逆に書くこと (mirror writing=鏡筆記)を容易に思う。最も有名な例はレオナルドダヴィンチで、彼はノートにこのスタイルで書いた。

同様に、左利き者の中には、他の文字と鏡(逆)のイメージを持ったものを書くことは特に難しいと思う人がいる。特に、b と d、そして、p と q である。

ただし、これは、およそ6歳までの全ての子供に共通することでもある。次の助言が役立つかもしれない。

- ・それらの文字を同種ごとに教える。例えば、c, a, d, g, q, o である。
- ・類似した筆運びをする複数の単語を繰り返し、パターンを作る。
- ・begining（開始）の最初の文字である b を紙の左上に、紙の端近くに紙の端に平行になるように書く。そして、d を紙の右下に、紙の端近くに、やはり紙の端に平行になるように書く。

p.33

通常の書き順に従わないことで生じる困難もある

（※ここでは d を例に挙げて、縦の棒から書き始める子供がいることを指摘している。（小林注））

書き手がペンまたは鉛筆を強く押し当てすぎることで生じる問題もある。

p.36

Other sources of help （他にできる援助）

In the family （家庭において）

左利きのいる家庭では親戚に左利きの人がよくいるので、その場合経験を聞くことができ、それが役立つ。

In school （学校において）

左利きの人右手を使うように強制された時は終了したように思える。しかしながら、学校では自ら選んだ手を使用することを許されても、それ以上の助けを与えられないケースが普通である。

学校の方針の中に左利きの子供のための条項を盛り込むことが重要で、特に、

Handwriting に関する方針が重要である。そして、全ての教師やアシスタントが困っている、左利きの子供を手伝う際の役立つ方策を知っていることが重要である。

左利きの子供が入学した時からの記録を残しておき、発達とともにどのように変化したかを観察することが大変役立ち、それによって、特に遅れている生徒が明らかになった時は行動を起こすことが可能である。

学級担任とともに、両親の Handwriting への関心がまずは喚起されるべきで、それによって、担任は SENCO（特別教育支援コーディネーター）に必ず相談するようにする。

A Southpaw Club （サウスポークラブ）

学校の左利きの子供のためのクラブは、左利きの子供にプラスの意味で、彼らは特別であるという感覚を与えることができ、そのクラブの内容の1つとして、Handwriting における経験をお互いに話し合う機会を提供する。

p.38

Children with special needs （特別に何かを必要とする子供）

左利き者は、取り除くのが難しい困難を抱えている場合は少なく、通常この本に書かれている助言で彼らが持つ小さな困難を減らすには十分である。しかしながら、左利きであることがさらに大きな問題点の一部になっているような場合は、子供の問題を解決するのに、様々な専門家が関わることになるかもしれない。専門家と教師の間の意思疎通が常にできることが大切で、また、教師は特別なケアの必要な子供に思いやりを持つことが重要である。広くとらえると、子供たちと彼らの抱える問題を4つのグループに分けることができる。

- ・身体的障害を持って生まれた子供たち

- ・体の一部を失うことで筆記に使うための手を変える必要のある子供たち
- ・脳性まひによって使用できる手が利き手ではない子供たち
- ・学習困難を抱えた子供たち (dyslexia, Developmental Coordination Disorder (DCD) 等)

p.41

In summary (要約すれば)

この小冊子の中に示した提案が、左利きの人たちの筆記を支援、手助けする両親や教師の助けとなることを願っている。重要なポイントは参照しやすいように表になっている。

A left-hander should : (左利きの方は :)

- ・左利きの方は、左利きの方の隣、または右利きの方の左に座ってください。
- ・左利きの方は、左側に十分スペースをとってください。
- ・左利きの方は、体が支えられ、筆記面が高すぎないように座ってください。
- ・左利きの方は、ライティングペーパーを体の中央の左側に置き、時計回りに回転させてください。
- ・左利きの方は、紙が正しい位置になるよう押さえ、身体を支えるのに役立ちますが、書く方の手の邪魔にならないように右手を置くべきです。
- ・左利きの方は、紙の上を滑らかに移動し、手になじみやすく、滑りにくいペンや鉛筆を選ぶべきです。
- ・左利きの方は、ペンを、ペンの先端から十分離れたところを持ってください。
- ・左利きの方は速乾性インクを使ってください。
- ・左利きの方は、書く手を書写線の下に置いておくことが望ましいです。
- ・左利きの方は、紙とペンにできるだけ力をかけないでください。
- ・必要に応じて、集中し、短時間の練習を頻繁に行い、多くの誉め言葉をかけてあげましょう！

(3) Lauren Milson(2008) : *Your Left-handed Child Making things easy for left-handers in a right-handed world*

※『左利きの子 右手社会で暮らしやすくするために』

(ローレン・ミルソム著 笹山裕子訳 東京書籍 2009)

pp.40-43

2 就学前の発達 書くようになるまでの^{スキル}技能

現在、多くのメーカーがトリグリップ（三角）鉛筆というものを作っています。トリグリップ鉛筆は断面が通常の六角形や円ではなく三角形になっていて、左利きの人にはとても使いやすいものです。この鉛筆を使うと、左利きにとっては理想の「3点支持」、つまり親指と人差し指、それに中指で鉛筆を支えコントロールするという持ち方がやりやすくなります。〔中略〕この持ち方が身につくと、文字を書くようになった時にとても助かります。左利きの人たちは、鉛筆を紙の上で押さなくてはなりません。他の持ち方をすると、書いた文字の上に手がついて、こすれてしまいます。

左利きの子どもを見ていると、円を反時計回りに描いたり、水平の線を右から左に描いたりすることに気づくことがあるでしょう。左手を、体の右から左へ進ませるこの動きは、絵筆や鉛筆に余分な力がかからずなめらかです。〔中略〕このような方向性のある筆づかいは、のちに筆記体の練習を楽にしてくれるでしょう。けれども、子どもが記号や文字のようなものを書くようになったら、本来、字は左から右へと進んでいくものだということを教えねばなりません。左利きの人にとっては不自然な向きですが、時間をかけて慣れていかねばならないものだからです。

左利きの人、右から書き始めて左へ書き進んでいくというのは、よくあることです。書かれた文字は完璧な鏡文字となって、本人にはちゃんと読めたりします。書く前に、紙の左上に小さなシールを貼るか星のマークを書くかしておくと、ここから書き始めるという目印になります。

2 就学前の発達 就学前の子どもへの配慮

子どもが左利きらしいが、はっきりしない時には、保育園や幼稚園の先生方に、辛抱強く、励ましたり、支援して欲しいとお願いしておきましょう。

絵と文字

左利きの子どもには、文字を書く時は、ページの左上から書き始めることを教えておきましょう。

鉛筆とクレヨン

三角形の太いクレヨンや鉛筆は、理想的な3点支持の習得を促します。

どちらの手？

利き手ははっきりしないのは、よくあることです。特に左利きの場合、利き手が定着するには時間がかかります。あまり早いうちから利き手を決めるようにプレッシャーをかけてはいけません。

3 毎日の生活で役立つこと 文字を書くこと

左利きの子どもに共通する問題

引くのではなく押す

左から右に向かって文字を書く時、右利きの方はペンや鉛筆を紙の上で引きますが、左利きの方は押さなくてはなりません。すると、ペンや鉛筆の先が紙の上でスムーズに動かず、刺さりやすくなるので、滑らかに文字を書くために必要な、流れるようなリズムのある動きができなくなります。

ぎこちない持ち方

左利きの方は、筆記用具をコントロールしようとして、たくさんの指を使っ

うとする傾向があります。ペンを強く握ったり、紙に押しつけすぎたりするため、正しい形を書くことが難しく、読みにくい字になりがちです。

無理な姿勢

左手で書くのに適した紙の置き方や筆記用具の持ち方をていねいに教わっていない子どもは、自分なりのやり方で書くようになります。ぎこちない、無理の或る姿勢を取ることもあり、手首や背中、首などが痛くなりがちです。

インクの流れ

(前略) ふつうのペン先は紙の上をすべらせるように作られており、右手で引っぱるように書くとインクが流れるようになっています。左利きの人がそのペン先を紙の上で押すと、ペン先は引っかけ、インクの出は不均一になります。

汚れ

左利きの子どもがインクペンを使うと、書いた文字の上を手が通り、こすってしまいます。そこで手をどんどんあげて書くようになり、やがて手を巻き込むような持ち方になります。左利きの人によく見られる、特徴的な持ち方です。このようにして持つと、鉛筆は右利きの人を持った時と同じ角度に傾き、ペンの動きが滑らかになりますが、体の方がねじれてしまいます。

アドバイス

- 鉛筆は、紙を突き刺したり破いたりしないよう、軟らかめのものを選びましょう。〔中略〕左利き用の万年筆は、紙に引っかからないよう、ペン先に角度がつけてあり、インクが滑らかに出るようになっています。
- 鉛筆は、先から少なくとも2センチ上を持つよう指導します。それより先を持つと、書いている文字が指で隠れてしまいます。
- 紙はやや斜めに置き、よい姿勢で書けるようにしましょう。
- 心地よく、効率のよい持ち方を教えます。
- ノートのページの左上に星印をつけたりシールを貼ったりして、左から右に書くことを意識させましょう。(文字を書き始めたばかりの左利きの子どもが、

左右逆に（＝鏡文字を）書くのは、よくあることです。）

- 左利きの文字の書き方を教えましょう。左利き用の練習帳を使って、正しい持ち方や紙の置き方、文字の形の書き方を身につけるようにします。
- 学校でほかの子どもと机を並べて座っている子どもの場合は、先生に相談し、左利きの子ども同士で座るか、右利きの子どもの左隣に座るようにしてもらいましょう（ひじ同士がぶつからないように）。

pp.56-57

3 毎日の生活で役立つこと

書字一よい持ち方・かまえ方

3点支持の持ち方

左利きの人に最適なのは、3本の指を使い「3点支持」の持ち方にすることです。鉛筆を親指と人差し指で軽く持ち、曲げた中指の上に軽くのせます。手は文字の下にくるようにします。人差し指で鉛筆やペンを導くようにして、文字を書いていき、ほかの指はそれを支えます。手首と方には力を入れず、腕は紙の上をすべらせるようにして、手首をまっすぐにして手の形をくずさないようにします。正しい持ち方を促してくれるグリップや、三角形の太い鉛筆やペンを使うと書きやすくなります。

持ち方の要点

- 鉛筆の軸は、親指と人差し指の間のV字になったところに乗せ、左肩の方向に傾けません。立てたり、右側に傾けたりしないようにします。
- 3枚の紙の間にカーボン紙を挟んで、文字を書きます。下の紙に文字が写らないように、軽く書くことができるか、挑戦してみ

Good grip, good posture

Developing a good position and grip for writing right from the outset will overcome the natural difficulties in writing in 'the wrong direction' and avoid having to unlearn bad habits.

The tripod grip
The best technique for a left-hander is the three-finger or 'tripod' grip. The pencil should be held lightly between the thumb and forefinger, and rest lightly on the bent middle finger. With the hand underneath the writing line, the forefinger then guides the pencil or pen to make the letter shapes, while the other fingers just act as support. The wrist and shoulders should remain relaxed as the arm slides across the page, maintaining the straight wrist and hand position. Moulded grips can help, as can fat, triangular pencils and pens (see page 40).

Grip tips

- The pen barrel should rest in the 'V' of the thumb and forefinger, angled towards the left shoulder, not pointing straight up at right angles from the paper.
- To lighten a tight grip and heavy pressure, try a pencil grip for correct finger position and make a game of writing on three sheets of paper with carbon paper between them – the aim is to write lightly enough not to make an imprint on the underneath pages.
- To maintain the correct arm and hand position and avoid it drifting up into a 'hook' shape as your child's writing progresses across the page, he should practise sweeping the hand lightly across the page from left to right a few times, without losing position. Suggest he leans back a little, and try drawing some light lines quickly across the page, while imagining that he is sweeping pencil shavings off the page with his arm at the same time!

A comfortable posture
To prevent writing becoming a strain, your child's shoulders should be square on to the desk or table, and relaxed. Instead of placing the paper straight in front and parallel to the edge of the writing surface, place it a little off to the left and tilted clockwise up to a maximum of 45 degrees. The top right corner should be about opposite the middle of the body.

The ideal grip



The pen is held between thumb and forefinger, resting on the middle finger. The hand is relaxed and sits below the line of writing.

56 Strategies for everyday life

理想的な持ち方



鉛筆を親指と人差し指で持ち、中指に乗せます。手は力を抜いて、文字の下に位置します。

ましょう。

○腕と手を正しい位置に保ち、書き進むうちに腕と手がずれ上がって手を巻き込むようになるのを防ぐには、紙の上で手の形を崩さずに左から右へ手をすべらせる練習が有効です。紙の上にある鉛筆の削りかすをはらっているつもりで、体をややうしろにそらし、紙に軽く線を書くようにすると上手にできます。

字を書く場合、十分にスペースをとり、このページの写真や図のような構え方ができるようにします。このように紙を傾けて置くと、文字を書きながら鉛筆やペンを体のほうに向けて引いてくるようになります。このほうが押して書くよりもスムーズな動きになり、自分が書いている文字もよく見えます。紙を傾けることで、書き始めの位置が体から遠くなるため、手は書いている文字の後を追うこともなくなり、文字の下の正しい位置にきます。手首がまっすぐであれば、手が文字の上や後を追うこともなく、文字をこすってしまうこともありません。右手は広げ、文字から離れたところで紙を押さええます。

姿勢と手の位置、筆記具の持ち方、紙の位置がこのようになれば、完璧です。



The perfect writing position, with good posture, hand position, grip and paper angle.

Position of the paper

Always make sure that your child has ample room to the left of his desk or workspace to enable him to position his work in this way. This offset position means he will be pulling the pen towards his body as he writes – a much smoother action – and have a clear view of his writing. The angle of the paper makes the start of the line too long a reach to curl the hand behind the pen, so should automatically bring the hand into the correct writing position – underneath the writing line. With the wrist straight, the hand will no longer be tempted to curve over the top of the line or follow behind the writing and smudge. The right hand should rest flat on the writing page to keep it still, well away from the writing line.



Slanting the paper clockwise allows room to bring the hand under the line of writing.

Good grip, good posture 57

紙の位置



紙を時計回り方向に傾けると、手が文字の下にきます。

pp.58-59

3 毎日の生活で役立つこと 筆記用具

三角鉛筆、三角ペン

左利き専用というわけではありませんが、軸が三角形になったペンや鉛筆、クレヨンなどは、小さな子どもの字や絵の上達に役立ちます。軸が三角形にな

っていると、自然に正しく持つようになり、疲れにくくコントロールしやすくなります。

万年筆

〔前略〕左利き用のペンはペン先の切り方が逆になっていたり、ペンの先端に回るボールがつ

いたりして、押し書いてもスムーズに進むようになっています。ペン先のデザインも逆になっており、ペン先の右側ではなく左側を紙にあてるとインクの流れがよくなります。

こすれないフェルトペン

〔前略〕軸の形は、手を巻き込むような持ち方をしても、しっかり持てるようになっています（このぎこちない持ち方がよいとは言えませんが、変えることがあまりにも難しいなら、こすれの問題だけでも解決すれば、悩みをひとつ減らすことができます）。

オフセットされたペン先

ペン先の軸の向きがペン軸とは異なる角度のついたペンで、左利きの人でも指先が視野をふさぐことなく、書いているものをきちんと見ることができま

三角の軸は、3本の指を使った握りをやりやすくします。



Writing implements

There are now quite a number of pens, pencils and other aids available to help left-handers acquire and maintain a good writing style. They come in a wide range of funky styles and colours designed to keep your child interested in handwriting.



Triangular barrels encourage the three-finger grip.

rounded ball at the end of the nib that allows it to write smoothly when being pushed. The nib design is also reversed so that the ink will flow smoothly with the left side of the nib pressed to the paper rather than the right. These differences in a small nib may not look very significant, but they make a huge difference when your child is learning to write (and for the rest of his life). A wide range of left-handed pens are available from specialist suppliers, including children's pens that feature a rubberized grip to reduce tension from an overtight grip and a ridge to prevent the fingers slipping on to the inky nib (see Resources, pages 122-123).

Triangular pencils and pens

Although not specifically for left-handers, pens, pencils and crayons that have triangular barrels help small hands develop better writing and drawing skills. The triangular shape encourages an improved grip (see page 58), which is more comfortable, provides better control and reduces writing fatigue. They are suitable for all ages, but ones with oversized barrels are easier for little hands to manoeuvre and grip.

Pencil grips

These moulded grips slide over normal-sized pencils and have specific indents for each finger, to encourage the correct writing grip.

Cartridge/fountain pens

The problems left-handers have with a traditional ink pen (difficulty with ink flow, the possibility of the nib digging into the paper) are greatly alleviated by the use of a left-handed pen. This has the nib cut out in the other direction or has a

Calligraphy/oblique nibs

Some left-handers prefer the slight angle found on a left-handed calligraphic nib, where the tip of the nib is angled rather than being flat on. A similar effect can be produced by purchasing an oblique nib for your existing fountain pen, and a



Pencil grips train fingers in the correct writing grip.

オフセットされたペン先は、書いているものを見えやすくします。



range of left-handed calligraphy sets is available. Pen manufacturers have different names for their oblique nibs, and a left-hand oblique could slant in either direction depending on the manufacturer! It is best to try out oblique nibs in the shop before buying one to make a comparison and find the one that best suits your child's writing style.

Rollerball ink pens

A recent innovation is a rollerball pen designed for left-handers, developed after carefully studying the most comfortable and efficient position for the left-hander to write most effectively and then moulding the pen body to fit exactly that position. The pen remains perfectly placed while writing, with little or no effort, and requires the lightest of grip on the moulded rubber fingerplate.

Non-smudge fibretips

An older child, or one who experiences learning difficulties, may be unable or unwilling to adopt a writing style that prevents smudging. In this case, there are fibretip pens available that have very quick drying ink so they don't smudge, even immediately after writing. The barrel shape also provides a better grip for a 'hook'-handed style. (This awkward style is not to be encouraged, but if change is too difficult, at least the problem of smudging will be overcome, which will dispense with one discouragement.)



Ergonomic pens fit the left-hand writing position.



Offset nibs improve the view of the writing line.

Pens with offset tips

These pens, with their quirky-looking angled tip, ensure that left-handers can clearly see what they are writing as their hand does not obstruct their field of vision. A rubber tipped grip rotates to the most comfortable writing position, while the offset portion of the pen prevents fingers from slipping down towards the pen tip, allowing for a more relaxed grip and keeping the hand away from the writing line, which prevents smudging. A pencil version with an offset leadholder is also available. This unusual offset design is very effective and can alleviate many of the common writing problems left-handers face when writing.

Writing mats

There are on the market writing mats specially designed to prevent or correct smudged work, poor pen grip and bad posture. These mats show the perfect paper position, pen hold and angle of the arm to achieve the most comfortable and effective style of writing as a left-hander, and are printed with child-friendly reminders about pen grip, position and letter formation charts. The same information for right-handers is usually printed on the reverse.



人間工学的に設計されたペンは、左利きの人を持ち方にしっくりなじみます。

す。〔中略〕無理な力を入れずに持つことができ、手が文字から離れているのでこすれる心配もありません。〔中略〕このちょっと変わったデザインはとても使い勝手がよく、文字を書く時に左利きの人を抱える悩みを軽減してくれます。

マット

〔前略〕このマットには紙の位置からペンの持ち方、腕の角度まで、左利きの人が楽に効果的に書くにはどうしたらよいかが載っています。ペンの持ち方、位置、文字の形などが、子どもにも分かりやすい文章で説明してあります。裏面には、たいてい右利きの人向けに同様の内容がプリントされています。

pp.78-79

4 左利きの子どもの学校生活 教室でのサポート

左利きの児童生徒への支援

〔前略〕英国の「左利き協会」が最近行った調査では、学校に通ったことがある 25 歳未満の左利きの人ほとんど（99 パーセント）が、文字を書くのに難しさを感じたと答えているのに、先生から左手で上手に書く方法をきちんと教わった人は 10 パーセントに過ぎません。

左利き協会による調査の結果

文字を書く

〔前略〕さらに気がかりなのは、左手で文字を書くのに最適な姿勢や紙の置き方について習ったことがない人が 85 パーセントにのぼったことです。このような指導が、基本的かつ、とても大切であることは、悪い姿勢で書いているために背中が痛くなったり手が疲れたりするという児童生徒が 76 パーセントもいることから分かります。

文字のこすれは、左利きの人が多くが抱える悩みで、88 パーセントが経験していますが、こすれないように手の位置を変えるようにアドバイスを受けたこ

とのある人はわずか7パーセントです。

〔中略〕

教え方の平等性

左利きの人の大部分が、やりにくい課題があると感じているのに、左利きのために特別に作業の仕方を教えている教科はほとんどありません。特に難しいという指摘が多かったのは、書き取り、技術、被服、体育、調理技術、情報技術、音楽でした。

p.86

4 左利きの子どもの学校生活 学校の用具・用品の使い方

教室での座席の配置

〔前略〕いちばん配慮が必要なのは、2人がけの机に児童生徒を座らせる時に、右利きの子どもを左利きの子どもの左隣に座らせないことです。書く時に互いにひじがぶつかってしまうからです。左利きの子どもは机に向かって斜めに座るようになり、悪い姿勢、ぎこちない書き方、そしてやがては左利きによく見られる、手を巻き込むような鉛筆の持ち方を身につけてしまいます。先生は、この問題を次の3つの簡単な方法のいずれかで解決できます。

- ふたりの児童生徒の席を入れ替える。
- 左利きの児童生徒同士を並ばせる。
- 長机の場合は、左利きの児童生徒を左端に座らせる。

〔中略〕正しい姿勢で書く時、左利きの人にとっては右側に黒板があると見づらく、板書をノートに写し取る場合には特に重荷になります。できることなら、左利きの児童生徒は教室の右半分に座らせると（黒板が前の壁の中央にある場合）、書く姿勢を変えることなく黒板を見ることができます。

また、左利きの児童生徒の体や手が光をさえぎり、右利きの児童生徒の手元が暗くならないような配慮も必要です。

pp.90-91

4 左利きの子どもの学校生活 手書き

文字を書く時、左利きの人は、右利きの人
たちとはまったく違うシンプルで基本的なテ
クニックを身につける必要があります。それ
ゆえ、左利きの子どもは、右利きのクラスメ
イトに教わったテクニックを鵜呑みにしたり、
「自分なりに解決」したりするのではなく、
左利き特有の文字の書き方をきちんと学ぶこ
とが大切です。

人間工学的に左利き用に成形されたペン
を使った、完璧な持ち方 →

Back to basics

It is comparatively easy to teach young schoolchildren the correct writing style, as they enjoy the rhythmic movement of creating letters and have not had any setbacks to create tension (see pages 40-43 for setting the groundwork for a good writing style).

Many children do not experience difficulties until they start using ink pens, when a poor grip causes smudging, or even later, when they are taking lots of notes, when poor posture and a slow writing style lead to tension, backache and aching hands. If your child has started formal writing and is having difficulties, it is usually best to go back to the basics of handwriting (see pages 92-93), alleviate tension and stress, and try to create in your child a positive attitude to writing, where he sees lots of achievement and progress.

Overcoming 'muscle memory'

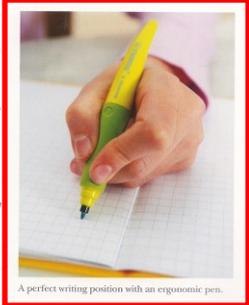
If your child has been writing for some time, he will find the new positioning you are encouraging strange and possibly a bit awkward, which may sound ridiculous if you are correcting a severely hooked hand and hunched writing posture! But all of us, when repeating tasks on a regular basis, develop a 'muscle memory' where our body, after a while, automatically assumes the position we have always used to perform a task, and writing is no different. When a child has learned to form letters with his hand in a certain position, it will be hard for his body and brain to accept doing it in a different way. Consequently, while he improves posture, grip and paper position, his writing will at first appear more juvenile and poorly formed, and the effort to form the letters will seem greater. Always reassure him that this is perfectly natural, and will quickly pass.

As he learns the new techniques and uses them regularly, he will very quickly regain the speed and control he had before, and then continue to improve in leaps and bounds. A few school days of diligently using the new positioning for all lessons should be all that's needed to make him feel comfortable.

Do make sure that all teachers are aware that your child is practising to improve his writing style, so they can make allowances if his written

Softly, softly

When first working with a child who has handwriting difficulties, I start by asking them to show me how they write, and make sure I praise something about their current writing they do well. After a brief chat to put them at ease, possibly comparing the way we form letters, or which pens we like to use, I then share with them a trick I know to make the smudging disappear (or whatever the problem is) and they can see that by following my advice, the problem often goes away!



A perfect writing position with an ergonomic pen.

work appears less neat for a few days, and can also remind him to adopt the correct writing position if he forgets - old habits die hard! Don't make your child feel he is being 'corrected' for writing in a different style, and never force him to write or draw if he doesn't feel inclined, or it will feel like a chore.

Handwriting 91

pp.92-93

4 左利きの子どもの学校生活 基本的な文字の形

学校のポリシー

ほとんどの学校では、ひとつの書き方を採用し、すべての児童生徒にそれを守らせます。それは学校のポリシーと言えますが、学校には左利きの児童生徒を支援するポリシーもあるべきです。左利きに出来ないことや不便なことを画一的に強要することは、生まれもった人となりを認めないことであり、教育本来の理念にも反するはずです。左利きの子どもたちが、快適によりきれいな字を書けるようになるために、書き方にもこのような例外が認められるべきでしょう。

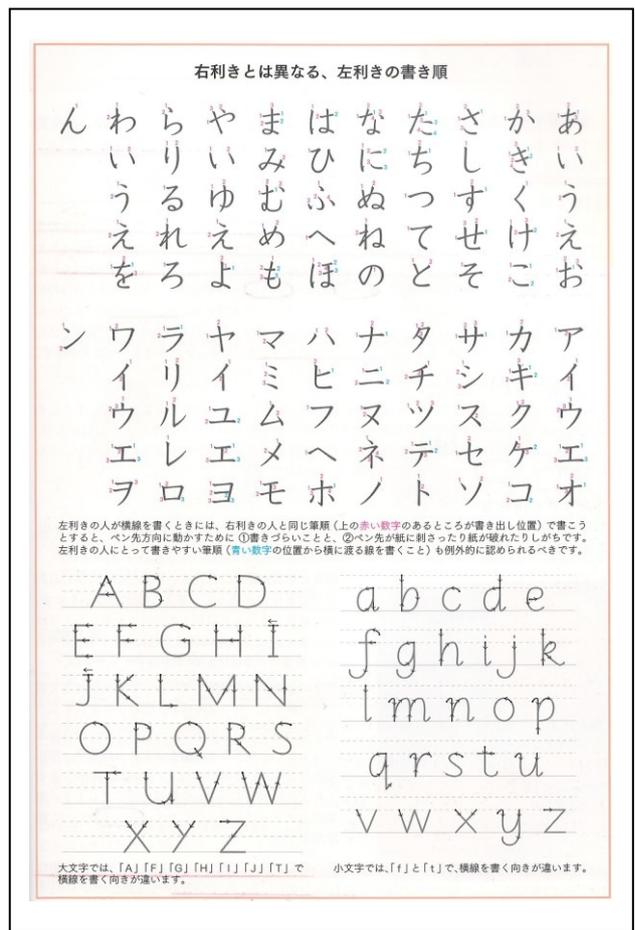
文字を形づくる

文字を形づくる時、いくつかの文字では、左利き向けの少し違った書き方があります(次のページ(※p.93の「右利きとは異なる、左利きの書き順」を指す(小林注))参照)。主な違いは水平な線の書き方です。左利きの人は、この線

を右から左に書きます。線を押しながら書くより、引きながら書くほうが、抵抗が少ないからです。

この傾向は、万年筆を使うようになるとさらに顕著になります。ペンを押すとインクの流れが悪くなり、ペン先が引っかかるからです。アルファベットの「O」の字も、反時計回りに書くことがあります。

子どもが文字（特に筆記体の文字）を覚える時に、この左利き独自の書き方を一緒に教えておくとよいでしょう。これを覚えておけば、子どもが万年筆を使うようになった時にも書きやすく、役に立ちます。



Lauren Milson(2008): *Your Left-handed Child*

『左利きの子

Making things easy for left-

右手社会で暮らしやすくするために』

handers in a right-handed world.

(ローレン・ミルソム著 笹山裕子訳

London, UK : hamlyn.93p.

東京書籍 2009) p.93.

(※唯一本ページのみ、原著と邦訳書とで提示している図版が異なる。(小林注))

字の間隔を覚える

字を覚えたての子どもは、単語と単語の間は、つねに指の幅くらいあけるようにと教わります。右利きの子どもなら、単語を書いてから左手の人差し指を置くことができますが、左利きではそうもいきません。単語を書いてから右手の人差し指を置くと、次の文字を書くのに邪魔になるからです。ですから、指を置く代わりに「O」の文字があると思って、その分の間隔をあけて次の文字を書くようにします。

pp.94-95

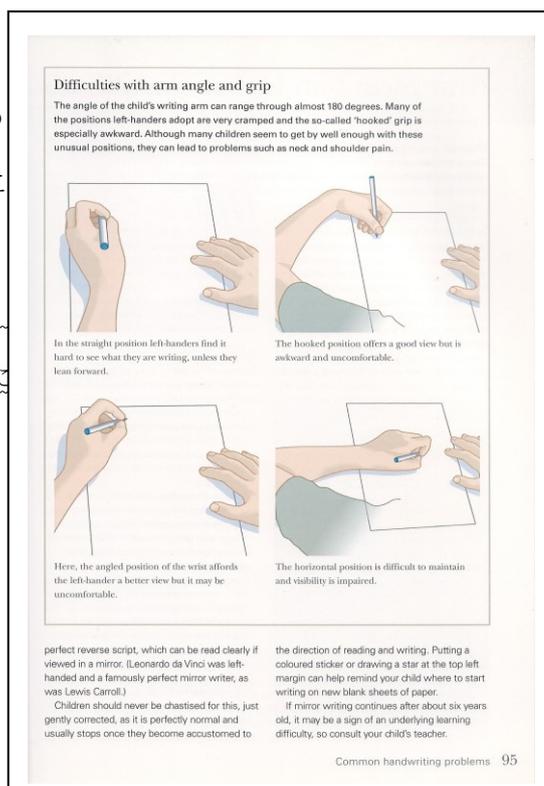
4 左利きの子どもの学校生活

文字を書く時によく見られる問題

文字を上手に楽に書こうとする時に、多くの子どもがひとつやふたつ、難しさを感じています。中でも左利きの子どもによく見られる問題は、そもそも左から右という「不自然な」方向に書かなくてはならないことが原因になっています。

「手を巻き込むような」かまえ方

95 ページの右上のイラスト（※p.95、「腕の位置とペンの持ち方」参照(小林注)）のようにペンを体の前の方から手前に向かって持ち、書き終えた文字の上にその手がくる書き方は、右利きの人がペンを持つ時と同じような角度に保とうとするために起こります。このような書き方をすると腕と体がねじれてぎこちない姿勢になり、書きづらく時間もかかります。手と紙の正しい配置（56～57 および 90～91 ページ参照）を身につけるのは時間がかかりますが、その価値はあります。また、子どもが使う机と椅子が、適切な高さであることも確認してください。机が低いと方が上がり、背中が曲がったり、前かがみになって「手を巻き込むような」体勢



になってしまいます。傾斜のついたもの書き台を使うと、それを防ぐことができます。

鏡文字

文字や数字を裏返しに書くのは、小さな子どもがよくすることです。特に左利きの子どもが文字を書き始めたばかりの時期には、鉛筆を自分の体のほうに引くように、自然に紙の右から左に向かって書こうとします。そうすると、左手が視界をさえぎらず、自分が書いた文字をよく見ることができるからです。鏡文字を書く人は、完璧に裏返った文字を書くことが多く、文字通り鏡に映すとはっきり読むことができます（左利きだったレオナルド・ダ・ヴィンチやルイス・キャロルが、完璧な鏡文字を書いたことはよく知られています）。

子どもが鏡文字を書いても、決して叱ったりせず、やさしく訂正しましょう。これはごく普通のことですし、読み書きの方向に慣れてくればたいてい直ってしまいます。新しいページの左上に、色のついたシールを貼ったり星印を描いたりして、書き始めの位置をはっきりさせておけば、子どもにもすぐ分かるでしょう。

6歳を過ぎても鏡文字を書き続けるようなら、別の障害がひそんでいる可能性がありますので、担任の先生に相談してみましょう。

(4) Julie Bennett(2015) : *HANDWRITING Pocketbook*

*A pocketful of tips, tools and techniques for teaching,
improving and troubleshooting handwriting*

p.101

左利きの子供が抱える様々な問題点とその解決方法

Difficulty (問題点)	Solution (解決法)
角には狭いスペース：右利きの子供と肘どうしがぶつかり合う。	<u>同じ利き手の生徒と一緒に座らせる。</u>
ペン部分の手が鍵の形になる。生徒は手と腕を筆記線の上に常に置く。	効果的なペンの持ち方、紙の位置、机に座る位置になるように調節する (p.28, pp.30-35.参照)。ペンの持ち方にもよるが、様々な基本的な <u>紙の位置</u> を試しなさい。
遅く、ぎこちない Handwriting、または、詰まった筆記スタイルで、全ての指を使ってペンを強く紙に押しつける。	腕を筆記線の下に持っていく。 <u>紙を体の中心線より左に置き傾ける。</u> 3本の指で握る。 <u>大きめの文字を、紙の左から右へと軽く速く書けるようリズムカルに書く練習をする。</u>
書き手がペンを紙の上を押ししていくために紙を汚してしまう。	効果的なペンの持ち方に変える (pp.33-35.参照)。
左から右ではなく、右から左へと書いていく。	<u>紙の上部に矢印で印をして、書き始めの場所と書いていく方向を示す。</u>
文字が左右逆転する (pp.103-104.)。そして、 <u>Mirror Writing (鏡文字)</u> がよく起こる。	基本的には、もし <u>6歳</u> を過ぎても続くのなら、 <u>dyslexia (読書障害)</u> 、 <u>dyspraxia (統合運動障害)</u> 、または、目に異常がないか確かめる。

（５）（１）から（４）に鑑みるイギリスでの左利き者の書字教育

本論考で考察対象とした４冊の文献には、共通して、利き手は脳機能と密接な関係にあるとの根拠に基づき、「左利きの子どもに右手で文字を書かせるような指導をしてはならない」との基本姿勢が存在する。

しかし、学校生活を含む社会一般での日常生活は、圧倒的に右利きの人たちが過ごしやすい形態にできている。よって、左利き者たちの不便さが少しでも回避できるようにするための工夫が必要となる。文字を書くこと及びその教育に関わる事柄は、その最たるものの一つと考えられる。

書字学習の場面では、右利きか左利きかに関係なく、児童それぞれに個人差があり、より時間をかけた指導を要する児童も在籍する。このような場合には、利き手がどちらであるかに関わらず、個別指導が必須となる。その上に、左利きの児童の書字場面には、右利きの児童に比べて書きにくい要素が多分に伴う可能性が高いため、学習指導者にはより正確な理解と適切な配慮が求められる。考察対象の文献から、現代のイギリスでは、左利きの児童生徒の **Handwriting** の教育に際して、学習指導者に何を希求しているかを読みとることができる。そして、それらは、日本の書写教育に重ね合わせて運用応用できる内容である。日本における左利き者への書字教育について検討するにあたっての重要な視点として、当該文献の要点をまとめる。

学習指導者に求められるのは、まず、左利き者の書字において起こりやすい課題や問題点をできるだけ具体的に理解把握することである。その上で、左利き者にとって文字が書きやすくなるための方策、例えば、机や椅子の的確な高さ、机や椅子に対して書字者が座る位置、書きやすい筆記具の種類、書き手の体と用紙を置く位置との関係、書きやすくするための用紙の傾け角度、右手（＝文字を書かない手、用紙を押さえる手）の位置、右利きの人との座席の位置関係、教室内において左利き者が座るのに適切な場所、照明に関わる配慮等々、たとえ些細な事柄であっても、左利き者にとって、よりわかりやすく具体的に提示することである。実際に左利き者の書字に関わる課題に対峙して、その多様性を認めながら、具体的な示唆をなるべくわかりやすく提唱している点において、イギリスでの当該文献に学ぶ内容は多い。書字教育を遂行するにあたり、

左利きの書字者が鏡文字を書くメカニズムに触れる文言が提起されるだけでも、現実の問題として鏡文字を書いている児童やその保護者には何かしらの安心感を与えることができると推察される。

当該文献における、イギリスでの「左利きの子どもに右手で書字させる指導は行わない」との考えの根底には、「“利き手”との観点に立脚すると、右手と左手は平等の関係にある」との確たる見解が存している。そのためもあるのか、各文献で示している **Handwriting** の学習及びその指導の要点には、右利き者にも左利き者にも共通する事柄が多数含まれている。

その上で、具体的な筆記具の持ち方（「3点支持」の持ち方）や、左利きの書き手にとって、自身が書字する直中に書いている文字（＝筆記具の先端）が見えるようにするための、筆記具を把持する際に適切な先端からの高さ、また、望ましい筆圧や握圧のかけ方、さらには、横書きの場合、右から左に書くのが自然な動きとなる左利きの人が、左から右に無理なく快適に書字するために出来得る工夫や、時計回りへの円運動が為しやすい左利きの人が、円を含む文字を反時計回りに書けるようにするための方策、鏡文字への対処法等々、概念的抽象的ではなく、具体的でわかりやすいポイントを何点も提示している。書式や文字体系の違いはあれども、日本においても、同様な視点から理解しやすい示唆を与えるべき必要性や必然性が感受できる。

また、これらの文献では、左利き者が横画を書く際に「押す」動作となるところを「引く」動作に変容させるための方策を詳細に考案している。これは、「**第2章**」で考察した箱崎氏の先行研究と全く同一の考えによるものである。

なお、先述の「3点支持」の持ち方は、日本における硬筆筆記具の望ましい持ち方の定義とほぼ重なるものである。参考までに、先行研究での定義を次の枠内に再掲する。当該文献に掲載された筆記具の望ましい持ち方を示した図版から、⑤はイギリスと日本での全く同一の要件であることがわかる。しかし、親指と人差し指との股の間に筆記具の軸を落とし、人差し指が反り返り気味になる点は、人差し指（＝点画を書く際に用具を正しく推進するために働く指）の伸縮運動が困難となるため、日本での望ましい持ち方の要件にはそぐわない。

《右利き者における硬筆筆記具の望ましい持ち方（日本の場合）》

- ①筆記具に接する指の位置：親指＝第一関節より先の中央部
示指 1＝第一関節より先の中央部
示指 2＝第 3 関節から第 2 関節の間
中指
- ②机に接する指と形状： 中指／薬指／小指をそろえた状態で軽くまるめ、
小指が机に接する。
- ③指が接する筆記具の位置：示指 1＝筆記具の先端部（鉛筆の場合、削り際の
やや上）
親指＝示指より先端部から離れた位置
- ④角度： 前方から見て 20 度程度、側方から見て 60 度程度。
- ⑤筆記具を把持した際、親指・示指・中指の三指と筆記具の軸との接触点を
結んだ形が正三角形になる。

押木秀樹・近藤聖子・橋本愛「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について
（『書写書道教育研究 第 17 号』2003. p.14.）
小林比出代「新しい筆記用具が指向する方向性の分析」
（『書写書道教育研究 第 18 号』2004. p.24.）

イギリスにおける左利きの児童生徒の Handwriting の教育には、日本の書写教育に還元できる要点が多い一方で、当該の文献に提唱されている内容には若干の課題も含まれている。その一つは、「第 1 章」で検討した「逆手」での書字に関してである。これら当該の文献では、いわゆる「逆手」は、左利き者が筆記具を把持する際に、右利き者が筆記具を把持する場合と同じ角度に保とうとすることに起因するものとしており、脳機能との関係性は考慮されていない。「逆手」にまつわる諸課題に対して、目の前の視覚的な現象のみによって対処するのは拙速とも考えられる。しかしながら、その背後に如何なる要因があるとしても、逆手による書字に伴って、腕と体がねじれたぎこちない姿勢になるのは自明であり、この持ち方に付随する課題に対しての指導の在り方は熟慮する必要がある。

当該の文献におけるもう一つの課題は、Lauren Milson (2008). *Your Left-handed Child Making things easy for left-handers in a right-handed world.*

London, UK : hamlyn. 及びローレン・ミルソム著 笹山裕子訳『左利きの子
右手社会で暮らしやすくするために』（東京書籍 2009）にて提唱されている、
左利き特有の筆順に関して、どのように考え対応するかである。「左利き者に特
有な、左利き者にとって書きやすい筆順を認めるべき」との考え方は、これま
でに再三述べてきた、「左利き者が横画を左から右に書く動作」＝「横画を押し
ながら書く動作」に伴って生じる書きにくさを回避するために、「横画を引きな
がら書く動作」＝「横画を右から左に書く動作」に変える（替える）方が書字
する際の抵抗が少なくなり書きやすいとの見識に則っている。

この提言に関して、現代日本における書写教育の在り方をふまえた見解は、
平成 29 年告示の新学習指導要領の姿勢とも関わってくると推察される。平成
29 年に告示され、令和 2 年に全国の小学校で、令和 3 年に同じく中学校で完全
実施される新しい学習指導要領の国語科書写では、字形と運動のバランスを考
慮した改訂がなされた。今回の学習指導要領に至るまでに、平成 10 年版（前
版）の学習指導要領では、字形やその整え方に関する事項を前面に出した、基
礎基本の徹底を図っており、続く平成 20 年版（現行版）の学習指導要領では、
動き、すなわち書字過程に注視着目した。今回の学習指導要領は、その両者が
それぞれに呈した、字形と運動（＝運筆・文字を書く過程）とのバランスがと
れた学習を求める、現行版のブラッシュアップが図られた改訂になっている。
学習指導要領から読み解く、時勢に求められているものと、変わりなく維持し
続けるべきものの双方に鑑みつつ、左利き者の書字と筆順とにまつわる課題に
関しては更なる検討を要する。

第 5 章

日本の学習指導要領に相当する

教育指針が存在する

アルファベット圏の国（イギリスを除く）に

おける例

一書字マイノリティへのまなざし一

本章では、日本の学習指導要領に相当する教育指針が存在し、その中で、左利き者の書字教育に言及しているイギリス以外のアルファベット圏の国として、オーストラリア、及びフランスにおける在り方について、教育制度と教育方法の観点から把握する。

1. オーストラリア —南オーストラリア州を一例として—

オーストラリアの Handwriting の教育は、日本の場合と同様に国語教育の一領域として位置づけられている。管見によると、オーストラリアにおける日本語教育の盛行に対し、日本においてオーストラリアの Handwriting の教育に関して論じた文献は見受けられない。本章では、筆者がこれまでに書字教育について試みた先行研究（アメリカと日本、イギリスと日本との比較研究）での研究対象と同じ英語圏にあり、かつ日本語教育に関心の高いオーストラリアにおける Handwriting の教育に関して、左利き者の書字教育の観点から考察を試みる。

(1) オーストラリアの教育制度

オーストラリアでは、6つの州（ニューサウスウェールズ州(NSW)・ビクトリア州(VIC)・タスマニア州(TAS)・南オーストラリア州(SA)・クイーンズランド州(QLD)・西オーストラリア州(WA)）と2つの連邦政府直轄区（ノーサンタリートリ地区（北部準州）(NT)・キャンベラ特別自治区（首都直轄区）(ACT)）においてそれぞれの教育省が教育行政を担当しているため、各州や区の教育制度は異なり多様である。しかし、多文化・多民族主義に基づいて教育を大切にする点は国家の方針として共通しており、外国語教育や多文化教育の促進は、教育に関する国家共通の目標の一つに掲げられている。特に、英語以外の言語教育は重視され、アジア言語の学習を学校教育の一環として実施する指針が出されている。日本語の教育も初等中等教育段階で盛んに行われており、また、日本語の学習者は急増している現実がある。

オーストラリアでの各州・区による教育制度や内容に関する違いの一例を【参考】に記載する。なお、ナショナルカリキュラムには、全ての州や区の教育の在り方を一つに規制する統制力がない。

オーストラリアにおいて各州により教育制度等が異なる点は、アメリカにおいて州各々により教育の指針が作成されている点と類似するが、アメリカでは、全米共通の基準 CCSS に Handwriting に関する言及がないのに対し、オーストラリアでは、州ごとの指針とはいえ、Handwriting の教育及び左利き者への Handwriting の教育に関する言及が詳細に行われている点で両者は異なる。

本章では、南オーストラリア州の場合を例にとり、当該州においてナショナルカリキュラムの役割を担う『SACSA (the South Australian Curriculum, Standards and Accountability)』から、現在の南オーストラリア州における Handwriting の教育の在り方を教育政策及び具体的な教育内容・方法の側面から考察することによって、オーストラリアにおける左利き者への Handwriting の教育の一端を明らかにする。

【参考】オーストラリアの教育段階（3～16歳に関して／後期中等教育以降は省略）

年齢		学年	SA	NSW	VIC	TAS	QLD	WA	NT	ACT	
15-16	中等段階	10	③ 中等教育	「Senior Years」							
14-15		9		「Middle Years」	③	③	③	③	③	③	③
13-14		8									
12-13	初等段階	7	② 初等教育	「Primary Years」							
11-12		6		「Early Years」 ※準備学年 = 「Reception」							
10-11		5									
9-10		4			②	②	②	②	②	②	②
8-9		3			②	②	②				②
7-8	2										
6-7	1										
5-6	K										
4-5	就学前段階		① 就学前教育	「Early Years」		①	①	①	①	①	
3-4											

南オーストラリア州の Primary School の場合

Reception : 5～6 歳 (4 歳でも月の数え方によって入学可)

Y1 : 6～7 歳 Y2 : 7～8 歳 Y3 : 8～9 歳 Y4 : 9～10 歳 Y5 : 10～11 歳

Y6 : 11～12 歳 Y7 : 12～13 歳

- ※。 The State of South Australia, Department of Education and Children's Services, *R-10 English, Teaching Resource*, 2004.
- 。 The State of South Australia, Department of Education and Children's Services, *South Australian Curriculum, Standards and Accountability Framework: the required elements*, 2005
- 。 石附実・笹森健編『オーストラリア・ニュージーランドの教育』(東信堂 2001) を参考に小林作成

(2) 『SACSA』にみる南オーストラリア州での左利き者の書字教育

① 『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』¹における左利き者への書字指導

『SACSA』のホームページには、Handwriting の教育を支援するため南オーストラリア州の教育省が 2006 年に編集発行した『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』と保護者へのパンフレットが、2007 年、南オーストラリア州の全学校に配布された旨が記されている。

『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』の巻頭言冒頭には、本書が 1983 年南オーストラリア州の教育省によって編集発行され、2013 年現在も南オーストラリア州の Handwriting の教育におけるテキストとして使われ続けている『Handwriting: South Australian Modern Cursive』に代わるものであることが述べられている。本項では、『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』における左利き者への書字指導の詳細について分析考察する。なお、以降本章の和訳は筆者(小林)による。

まず、Handwriting の学習の基本理念²として挙げられているのは次の 3 点

¹ Government of South Australia, Department of Education and Children's Services, *Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd edition*, 2007.

² Ibid., p.3, p.7.

である。

「○書き手が **Handwriting** によって自由に表現やコミュニケーションが図れるようになることを通して、**Writing** の過程を習得できる。

○**Handwriting** は個々人の発達段階及び適切な指導と模範に基づく身体的な技能である。

○**Handwriting** は芸術及び個々人の表現の一つの形として評価される。」

ここで、芸術や表現との観点が盛り込まれていることに着目したい。オーストラリアでは、**Handwriting** をコミュニケーションの一つの手段としている点において、アメリカ〔詳細は「第6章」参照〕やイギリス、もしくは日本とも共通するが、一方で、これらの国々には見られない芸術性や表現性に立った観点が提示されている。これは、後述の「評価項目」にも深く関わっている。

なお、上記の理念に関しては以下の注意点が喚起されている。

「○学習方法は本書に提示する指導方針に規定される。

○学習者は、情報や考えを記録できる、読みやすくて流暢な **Handwriting** を奨励されるべきである。

○**Writing** の模範が学習者に提供されるべきである。字形や書式を練習し、**Writing** の目的を見極めるために、様々な教材やメディアを経験する機会が提供されなければならない。

○**Writing** 活動との相互作用や **Writing** 活動と共有できる体験を奨励する。

○**Handwriting** は技能の学習であり、習慣化した身体的活動に基づくものとする。

その指導は学習者の発達段階に適切なものでなくてはならない。

○指導者自身が字形や書式の美しさについて認識し、かつ書き手の技能や努力を認めた際、学習者の **Writing** は評価される。」

これらの事項を実践するにあたっては、**Handwriting** の技能を育成する機会が学習者に最大限与えられるよう、**Handwriting** の指導を学校全体で取り組んでいくことが重要であるとし、本書では、**Handwriting** の技能の育成を **Early Years** から **Middle Years** で行うとしている。

続いて、本書の pp.8-16 には、「学習の発達段階」と称した章が設けられ、Handwriting の指導内容と要点が教育段階に応じて明示されている³。その具体的な内容を次の表にまとめる。

教育段階	特 徴	指導内容・指導のポイント
<p>Early Years (誕生－5歳)</p>	<p>1. Writing の始まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦線描 ◦左から右への落書きのようなもの <p>2. 最初に現れる Writing</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦言葉を表すための記号（線描と文字の双方）の使用を模索 <p>3. 新しく起こった Writing</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦文字間隔をとりながら文字のようなものを創造 <p>4. 初期の Writing</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦単語のスペルを創造 ◦大文字と小文字の認識 ◦単語間のスペースの統一 	<ul style="list-style-type: none"> ○創造的な描画は Handwriting の発達に極めて重要である。 ○手と目の相互作用、バランス、空間認知、全体として優れた自動的無意識的な技能が育成されるように支援する。 ○幼児用の質の高い教材を必要とする。

³ Ibid., pp.8-16.

	<p>◦単語や文章を書く 楽しみ</p> <p>5. 過渡期の Writing</p> <p>6. 拡大した Writing の最初の4段階 でが適用</p>	
<p>Primary Years (Reception —第2学年)</p>	<p>○読みやすい Hand- writing を目的と して、フォームや自 分の名前に使われ ている文字や数字 を認識する。</p> <p>○書くことの学習は 心身ともに難しい 活動である。身体的 にウォーミングア ップできる活動や、 話し言葉と書き言 葉を結びつける言 語体験により児童 を支援する。</p> <p>○指や肩のウォーミ ングアップを充実 させる。</p> <p>○Handwriting の基 礎的な学習事項を 習熟して各自の言 語体験に生かす。</p>	<p>○正しい文字、数字の形、姿勢、用紙の置き方、姿 勢と鉛筆の持ち方に関する特別な学習を含むプロ グラムが指導の明確な焦点となる。</p> <p>○学習者の実態や発達段階に応じて以下の側面に 焦点をあてる。</p> <p>◦読みやすい Writing</p> <p>◦描画と Writing を区別する能力</p> <p>◦Writing は考えや発言を表現できるということへ の理解</p> <p>◦望ましい筋力相互の発達</p> <p>◦利き手の選択</p> <p>◦手書きもしくは印刷物の要素 —間隔・余白、単語、 文字、方向— に関する用語や概念への認識</p> <p>◦字形</p> <p>—始点と終点、方向、書き順</p> <p>—傾斜、大きさ、形、全体のバランス（均整）、 文字の配置と間隔</p> <p>—文字の接続（hook と kick（両者とも文字の 終筆部に現れる画．kick は文字の基部から、 hook は文字の上部から現れる．）</p> <p>—行頭、行の中程、行尾での統一された大きさ</p> <p>◦数字の形</p> <p>◦望ましい鉛筆の持ち方</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ◦用紙の置き方・手腕の位置・姿勢（左利きと右利き双方に関して） ◦字形に関する視覚的記憶 ◦発達段階に応じた Handwriting の基礎に基づく書字動作 ◦小文字と大文字を識別し、字形を正確に形成する能力
<p style="text-align: center;">Primary Years</p> <p style="text-align: center;">（第3学年 —第5学年）</p>	<p>○ Handwriting の学習は当該学年（= 第3～5学年）を通して重要であり続ける。</p> <p>○ 学習者は基礎力を固め学習を統合する。また、print から cursive writing へ移行する必要がある。</p> <p>○ 読みやすさと流暢さの観点において、一度基本的な文字の形と書き順が習得できれば、その後は最初に学習したことの延長上で文字を提示することができるようになる。</p>	<p>○ 用語と、書かれた教材と印刷された教材とを関連させる概念（間隔・余白、単語、文字、文字と方向の関係）を理解する。</p> <p>○ 26 の小文字と大文字を認識し、正しく書ける。</p> <p>○ 英語の中に規則正しく恒常的に現れる文字のパターンを自然のうちに習得する。</p> <p>○ メッセージや書式、Writing の目的に焦点をあてた十分な読みやすさと流暢さを育成する。</p> <p>○ 読みやすい Writing の目的をより理解できるように育成する。</p> <p>○ 文字を続け書きできるようになるのは以下の時期である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 望ましいペンの持ち方で、単語を書く際 26 の小文字を正しい字形で書ける。 ◦ 傾斜、大きさ、間隔・余白、文字の配列に関して一貫した書き方を提示できる。 ◦ 文字を連続させようと努める兆候を見せる。 ◦ 一般的な文字の書き方に関する理解を発展させている。 <p>○ 文字を続け書きするのに不適切な技能を育成することを避けるため、続け書きに関する指導は学習者が上記の特性を示したらすぐに始めるべきであ</p>

		<p>る。これらは通常第3学年の初めに現れる。</p> <p>kicks と hooks は続け書きの前兆であり、通常は第2学年の最後に導入される。</p> <p>○多くの教師は、先述の文字の終筆部に現れる画（kicks と hooks）を文字の連続に関する学習時と同時に紹介する。</p>
<p>Middle Years (第6学年—第9学年)</p>	<p>○標準的なフォームを一度しっかりと育成したら、Middle Years ではそれぞれ固有の Handwriting を奨励した方がいい。</p> <p>○基本的なスタイルが確立し、Writing の用途に適応させている。</p> <p>○この時点で読みやすい署名の育成に注意を促す。</p>	<p>○読みやすく、流暢で、安定感があり、美的に好まれる個々人の書きぶりを発展させる。</p> <p>○適度な範囲で模範的なフォームから効果的に逸脱する。</p> <p>○必要に応じて様々な目的のための装飾や代替のフォームを用いる。</p> <p>○異なった筆記具の使用、外見やスタイル、書く速さが書字に与える影響について試みる。</p> <p>○電話のメッセージ・インタビュー・放送・短い講演の記録を的確な速さで書けるよう練習する。</p> <p>○スピード ループの練習を促す。</p>

ここで注目すべきは、文字体系による差異（例 大文字小文字の学習）や学習用具の違い、**Cursive writing** の学習は小学校／行書の学習は中学校との相違は別として、南オーストラリア州での発達段階に応じた指導内容が日本の場合と近似していることである。中でも、日本の行書学習での筆脈に関する指導の在り方と、南オーストラリア州の **Cursive writing** の学習での **Hook** と **Kick** に関する指導の在り方が類似していること、また、学年が進むに従って指導内容が実用的日常的な場面のものへと広がっていくことから、文字を書くことの教育に関する共通性を見てとれる。さらには、利き手に関して、文字を書くことにおける右利きと左利きの平等性に立脚し、それぞれの詳細について説明しているところに着目したい。

教育段階に応じた指導内容に続いては、Handwriting の学習プログラムが詳細に提示されている。さらには、実際に Handwriting の学習プログラムを作成するにあたり、3つの項目が提示されている⁴。その3つめ「技能とスタイルの決定」において、「Handwriting の技能は、用具の持ち方、用紙の置き方や姿勢、及び実際の Handwriting の動きと関連している。」「Handwriting のプログラムを成功させるのに影響を与える最も重要な事柄の一つは、学習者が基礎的な技能をどのように教えられ、その育成がどのように奨励されたかである。」として、Handwriting の基本的な技能における望ましい在り方を提示している。以下各項目の要点のみ列記する。

鉛筆の持ち方の 提示方法	三角形の持ち方が望ましい。
Handwriting の 動きの 明確な教授法	<ul style="list-style-type: none"> ○Handwriting の動きは指と手と腕の動きと連動している。 ○鉛筆を持つ時、指は先端から3 cm上の部分を持つ。左利きは書いていると ころが見えるように、もっと上の方で鉛筆を持つ。 ○用紙の置き方も重要である。 ○空中、ホワイトボード、黒板、大きな用紙を用いての指と手、腕の動きは、 Handwriting の課題に臨む前に学習者がリラックスもしくはウォーミン グアップするのに有効である。
文字の形成	<ul style="list-style-type: none"> ○続け書きは流暢さと速さを容易に促進する点において重要である。 ○楕円形の文字は全て反時計回りで2時の位置から書き始める。
大きさ	<ul style="list-style-type: none"> ○字形は均整がとれていなくてはならない。文字においては heads と bodies と tails の調和がとれていなくてはならない。文字はそれぞれの 幅と高さの相関性が保持される必要がある。文字の heads と bodies と tails が3分割した時揃って見える。 ○大きな文字の字形は指一頭一腕の連携に左右され、小さな文字の字形には ペンの持ち方が影響する。
傾斜	<ul style="list-style-type: none"> ○各人の書きぶりの中で一貫した傾斜角度でなければならない。

⁴ Ibid., pp.20-25.

	○ 5 度から 15 度の傾斜角度が望ましい。
文字間隔	○ 文字間隔が一貫していると読みやすさ及び Handwriting の外観が向上する。
配置・配列	○ 単語の配置に一貫性があると文字相互の関連性が規則正しく見える。
Cursive style	○ 読みやすさと一貫した cursive のスタイルを育成するために、各文字の正しい書き順を学習すべきである。 ○ cursive の構造について指導されている際は以下の 2 点に考慮する。 ◦ 文字の終筆部に特別な注意を払う。 ◦ 文字間隔により注意を払う。
連続（続け書き）	○ 文字の連続に関しては以下の具体的な規則がある。 ◦ 大文字から小文字への連続はない。 ◦ 各字形の始点や動きの方向は連続の動作の延長上にある。 ◦ 連続は単語の中の文字と文字との間で起こる、自然に流れるような動きの結果である。 ◦ 連続が上手く行われなことは文字にゆがみを起こす原因となる。 ◦ 連続した書き方での動きをシミュレーションするのにより適切であることから、少字数の文字をグループとした練習は、単独の文字の練習より行われるべきである。 ◦ 次の文字へ連続する場合は、その文字の終点から次の文字の始点へ直接連続させる。 ◦ 文字の終筆部は連続して書くことにとって重要である。 ◦ g, j, x, y, z は他の文字に連続しない。 ◦ 次の文字へと続く連続線の終筆部は o の出口以上に高くない。 ◦ 例えば glasses のように、 s は連続しない。 ◦ f もしくは z は連続しない。 ○ 学習者が連続の学習を始めたら、以下の練習が必要となる。 ◦ 連続自身の学習の前に、 a, d, h, i, k, l, m, n, t, u の終画に関する習熟。 ◦ o, r, v, w の hook に関する育成。 ◦ 他の文字への直接連続。

	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 2つの文字の連続方法、もしくは直接連続する短い単語の書き方。 ◦ 単語を最後まで書いてから i の点や t の横画を書くこと。 ○ Handwriting の指導は正しいスペルの育成を援助する。
ペン リフト	<ul style="list-style-type: none"> ○ 筆圧が 0 になること、筆圧を抜くことを意味する。 ○ 完全に紙からペンが持ち上げられ、連続した線がとぎれること。 ○ 自然な休息は手をリラックスさせ、読みにくさを回避する助けとなる。
書く速さ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単語が相当な速さで書かれた場合、不適切な Handwriting の技能が展開されたり、文字構造や連続の方法が望ましくない形で行われたりするために、その読みやすさは低下する。 ○ 各人のスタイルが維持できる速さで、かつ、会議でのメモをとるといった状況を設定して、速さに関する練習をする。

書字動作に関する項目の中で、左利き者の鉛筆の持ち方について特記しているところに注目したい。

学習プログラムに関する最後には、評価の観点がまとめられている⁵。評価項目の柱としては

- 読みやすさ [legibility]
- 美しさ (見た目のよさ) [aesthetic appeal]
- 速さと流暢さ [speed and fluency]

の3点が挙げられている。1点目と3点目は、アメリカでの Handwriting の教育の目標「読みやすさ [legibility]」と「速さ [speed]」〔詳細は「第6章」参照〕、イギリスでの Handwriting の教育の目標「読みやすさ [legible・clear]」と「連続している [joined]」、及び日本の書写教育の目標との共通性を有する。しかし、アメリカやイギリス、もしくは現在の日本では、「正整美 [neatness・consistent・regularity]」や「正確さ [correctly・accurately]」を「読みやすさ」や「速さ」と同等に重視するところ、南オーストラリア州の場合、前者3国には盛り込まれていない見た目の美しさといった観点が打ち出されている点は注目に値する。⁶⁷ 先述の「基本理念」を踏襲するものと捉えることができる。

⁵ Ibid., pp.30-31.

⁶ 小林比出代「教育目標から見た英・米国の Handwriting の教育と日本の書写教育」『書写書道教育研究 第12号』1998

南オーストラリア州での、上記3つの評価の観点に関してなされている解説の要点を以下にまとめる。

評価項目	観 点 の 詳 細
読みやすさ	<p>〈技能と態度・行動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ Writing の準備 <ul style="list-style-type: none"> ◦正しい鉛筆の持ち方 ◦適切な姿勢 ◦正しい用紙の置き方 ○正しく一貫した構造の文字 <ul style="list-style-type: none"> ◦始点 ◦線上の配置 ◦Writing の方向 ◦間隔・余白 ◦形 ◦大きさ ◦傾斜 ○速さと書きやすさ（年長の学習者向き） <p>〈文字構造の質〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○始点 ○動きの方向 ○適切な連続を伴う文字の完成 <p>〈Handwriting の一貫性〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○間隔・余白 <ul style="list-style-type: none"> ◦単語間は等間隔か、開きすぎか、詰め過ぎか。 ◦文字の間隔は一貫しており、また適切か。 ○形 <ul style="list-style-type: none"> ◦類似した字形や文字のグループは一貫した形状か。 — 特に文字の bodies において ○大きさ <ul style="list-style-type: none"> ◦文字 — 特に文字の bodies は一貫した大きさか。 ○傾斜 <ul style="list-style-type: none"> ◦Writing の傾斜は均一か。 ◦文字は直立、もしくは 10 度から 20 度右に傾いているか。
美しさ（見た目のよさ）	<ul style="list-style-type: none"> ○ Handwriting の美しさ（見た目のよさ）は読みやすさによって決定される。 ○ 指導者は以下の点を考慮する。

⁷ ただし、イギリスの場合は、Key Stage 3（11～14歳）になって初めて「作品として読者を引きつける [attractively]」との目標が掲げられている。

	<ul style="list-style-type: none"> ◦容易に速く読めるか。 ◦見た目が魅力的で心地よいか。 ○指導者は文字構造と質を観察する。 ◦head (= ascender : b, d, f, h 等の小文字で a, c 等より上に高く出る部分) と tail (= descender : p, q, j, y 等の小文字で基線より下に伸びる部分) のバランスは一貫しているか。 ◦適切な筆圧で書いているか。 ◦字形、連続、ループに過度の回転はないか。 ○プレゼンテーションと書式も Writing の魅力の要因となる。指導者は以下のようなコンベンションを利用する。 ◦余白の使い方 ◦見出し ◦日付 ◦ページのレイアウト
速さと流暢さ	<p>必要な技能を習得し、自然な Handwriting のスタイルを開発している流暢な書き手は、本格的な文章の中で自分の Handwriting の速さに関して評価ができる。</p>

② 『R-10 English Teaching Resource』⁸における

左利き者への書字指導

『R-10 English Teaching Resource』は、『SACSA』での **Handwriting** の教育に関する内容を具体的かつ実践的にまとめたものである。本書が刊行される前、2003年に『R-7 English Teaching Resource』が発表されているが、本書はその改訂版であり、2013年現在は『R-10 English Teaching Resource』に基づいて **Handwriting** の教育が展開されるよう通達されている。両者ともに、南オーストラリア州の全学校間においてカリキュラムの統一性一貫性が図られることを目的として編集された。

本書によると、**English** は ① **Listening and speaking** ② **Reading and viewing** ③ **Writing** の3つのモードから構成されており、**Handwriting** は **Writing** の中に設定されている。**Reception** から **Year 5** までの各学年における **Handwriting** の教育目標は以下の通りである。

⁸ The State of South Australia, Department of Education and Children's Services, *R-10 English, Teaching Resource*, 2004.

学 年	目 標	
Reception	○正しい鉛筆の持ち方を試みる。 ○利き手を確立する。 ○正しい文字構造を練習する。 ○左から右へ書く。	9
Year 1	○調和がとれた一貫性のある文字や数字の構造を提示する。 ○単語や文字の間に空間をつくる。 ○罫線の上を書く。	
Year 2	○小文字と大文字の正しい文字構造を使う。 ○数字の正しい構造を使う。 ○罫線に対して文字を正しく配置する。 ○kick（例 t）を使い始める。 ○文字の大きさや形、及び単語間の空間での一貫した調和がとれており、整然として読みやすく書ける。 ※R-7 には設定されておらず。	
Year 3	○正確かつ適切にアルファベットと数字を形成する。 ○小文字と大文字を一貫性のある調和した大きさと形で使う。 ○連続した書き方を始める。 ○リラックスした姿勢で指の動きを保ち、Cursive script を書くときは腕を滑らせる。	10
Year 4	○一貫した形、大きさ、傾斜具合、文字構造を使って書く。 ○writing の時に文字を連続させる。 ○正しい鉛筆の持ち方で正しい姿勢を保つ。	
Year 5	○現在の書き方を保ち、一貫性、流暢さ、読みやすさを向上させる。 ○速さが字面に与える効果影響を様々な文房具によって試す。 ○記録を速く記す練習をする。 (例：電話のメッセージ インタビューの記録)	

先に述べた『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』での評価項目をふまえると、本書でより具体的な目標が掲げられていることがわかる。これらの目標は、先にまとめた『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』での内容と重なる。また、Reception での教育目標に利き手に関する事項が設けられている点を注視したい。

⁹ Ibid., p.29.

¹⁰ Ibid., p.49.

③ 『Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts』

¹¹における左利き者への書字指導

続いて、『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』(2006)の原点となる学習テキストで、2014年現在も教育現場において確たる支持を得て根強く活用される『Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts』(1983)で取り上げている、Handwritingの教育にまつわる諸問題への考え方や具体的な施策から、左利き者への書字指導について分析検討する。

以下、『Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts』から、左利き者への書字指導に示唆を与えると捉えられる内容(訳は筆者(小林)による)を抽出する。なお、各グループに冠した見出しは、考察の便宜上、筆者が付したものであり、特に着目したい内容には本文中に下線を記す。また、各文末 [] 内のページ数は当該書でのページ数を示す。

【左利き者の筆記具の持ち方】

- 左利き者は自分が書いている文字が見えるように、筆記具の先端部よりさらに上を持つ。 [p.14]
- 左利き者は筆記具の先端から3 cm以上離れたところを持たなければいけない。 そうすることによって、書き手は、手首をかぎ状に曲げたりつったりしなくても、自分が書いているところ(※今書いているペン先と用紙の接点)を見ることが出来る。 [p.14]

【左利き者の書字及びその指導】

- 右利き者にとって、右方向へのわずかな傾斜は、cursiveの技能が良好に育成されている結果(成果)である。
左利き者にとって、左方向へのわずかな傾斜は、指と手と腕の動きをリラックスして行っている児童の自然な結果(成果)である。傾斜は個々人(各単語)で一貫している必要がある。しかし、垂直から左もしくは右へ5°から

¹¹ Education Department of South Australia, *Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts*, 1984.

15° の変動（変化）は個人（各単語）の中で許容される。 [p.28]

○〔質問〕左利き者のためにどのように援助したらよいか？

→左利き者が流暢でリラックスした **Handwriting** を育成しよう（伸ばそう）とするならば、特別な注意が必要である。

- お互いの肘をぶつけないように、右利き者の左側に座る。
- 通常よりも低い机を使う。
- 筆記具は先端部から少なくとも 3 cm 以上離して持つように教える。
- 用紙は真っ直ぐな位置から少し時計回りの位置に回して、体の正中の左側に置く。
- 左利き者を支援するのに適切な技能を用いている左利きの教師や親をお願いする。

- 角度が傾斜しすぎたり、傾斜角度に一貫性がなかったりするのでなければ、左利き者は自然な左傾斜のままで、その傾斜を変える必要はない。（＝傾斜方向に関して、右利き者に倣う必要はない。）
- 手と腕が照明を遮らないように座る。理想的には、背後から右肩越しに採光する。 [p.37]

以上、『Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts』での左利き者の **Handwriting** の教育の在り方について考察してみると、筆記具の持ち方・望ましい書きぶり・実際の指導方法それぞれに関して、より具体的な指南が提唱されていることがわかる。先述の『Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd Edition』において、**Handwriting** の基本的な技能での望ましい在り方を提示する中で、望ましい鉛筆の持ち方（親指・示指・中指と軸との接点が三角形になる持ち方）や、右利き者の場合と左利き者の場合それぞれでの鉛筆を持つ位置（先端部からの長さ）を明示していたが、本書にはさらに詳しく、望ましい筆記具の持ち方の観点として、左利き者の筆記具の持ち方が説明されている。

ただし、本書と日本の場合とでは、例えば筆記具と用紙の角度が異なることと同様に、本書で提言する左利き者の筆記具の持ち方や用紙の置き方がそのま

ま日本の場合に当てはまるかは改めての検討を要する。また、右手書字ではアルファベットが右傾斜になるところ、左手書字では文章全体の傾斜角度に一貫性があれば自然な左傾斜も良しとする在り方が、右手書字で右上がりとなる日本の文字の場合に適応されるかについても軽率には判断ができない。しかし、筆記具の持ち方、用紙の置き方、左利き者にとって自然な文字の傾斜角度等に関する既述の視点を手掛かりとして、日本の場合での検証は試みられるべきであろう。また、その他の詳細な記述について、例えば、左利きの児童が書字活動に関わる学習を行う際の教室での座席の位置、机の高さ、採光の方法、左手で望ましい書字活動を行っている成人からの援助等に関しては、日本の場合にも転用応用できる点が含まれている。まずはこれらの具体的な内容を日本の書写用教科書や教師用指導書に提示できるか検証するのは意味あることだと考える。ちなみに、本書では、先述の通り、**Handwriting** の学習指導に関する学校での実践方針に含むべき要件として「左利きの児童のための指針」を挙げている。また、「体の位置」と題して望ましい姿勢や筆記具の持ち方、用紙の置き方を提示したイラストの説明には、筆記具を持っている手腕を「書く方の腕」、筆記具を持たずに用紙を押さえている手腕を「書かない方の腕」と記し、「右手」「左手」との語は用いていない。なお、筆記具の持ち方及び用紙の置き方に関しては、右利き者と左利き者双方の図をペアの形で提示している¹²。これは、「序章 1.(3)」に既述の通り、アメリカやイギリスでの場合にも共通することである。

¹² Ibid., pp.14-15.

2. フランス

これまでに筆者が比較研究を試みてきた研究対象は、全て英語圏である。管見によると、日本と他国との比較書字教育研究において、その研究対象を漢字圏及び英語圏以外にした先行研究は寡少であるのが現状といえる。

一方、フランスは、日本やイギリスより早く、既に 18 世紀末には公教育制度が発足した国である。また、フランスにおいても、日本やイギリスと同じように、全国的な教育課程の基準として、国の定める学習指導要領が存在する。それでは、現在フランスでは、学習指導要領に基づいてどのように書字教育が行われているのか。

本項では、主として第 2 次世界大戦後におけるフランスの教育制度の変遷や学習指導要領の内容を概観しながら、現代フランスにおける書字教育のねらいと具体的な教材の在り方について、特に左利き者の書字教育に着目して考察を試みる。

なお、英語の「Writing, and also Handwriting」に相当する仏語は「L'écriture」であり、さらに手で書くことをより明確に表す場合は「L'écriture à la main」になる。（「à la main」は「by hand」の意味を持ち、すなわち「手で書くこと」との意味になる。） また、文字を学習する前に子どもたちが曲線などを書くこと（いわゆる線遊び的な学習）は「Le graphisme」と言うが、時に「Handwriting」の意味で使われることもある。以上の点をふまえて、本論考では、フランスでの「手で文字を書くことに関する教育」に日本語の「書字教育」の語を充てて表記することとする。

本項では、フランスの教育制度、学習指導要領、教科書の特徴（「(1)」～「(4)」）について、以下の文献に基づいて概説する。

- ・ セレスタン・フレネ著 石川慶子 若狭蔵之助訳『フランスの現代学校 シリーズ・世界の教育改革 7』（明治図書 1979）
- ・ 手塚武彦編著『各年史／フランス 戦後教育の展開 一九六〇年版 一九九一年版まで』（エムティ出版 1991）
- ・ 柴田義松編『世界の学校はどう変わろうとしているか：アメリカ・ソ連・ドイツ・イギリス・フランスの教育事情』（日本標準 現代教育問題シリー

ズ 32 1991)

- 中西一弘「フランスの教科書の特色 - 四つの観点からみたフランスの国語教科書 - (量と形式が決定する教育観の相違)」(『現代教育科学』486(4) (1997) pp.86-88.)
- フランス教育行政担当者協会著 小野田正利訳『フランスの教育制度と教育行政』(大阪大学人間科学部 2000)
- 三好美織・角島誠「目的・目標からの新教育課程への提言：フランスからの示唆」(『年会論文集』26 (2002) pp.37-38.)
- 下條美智彦『ヨーロッパの教育現場から - イギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』(春風社 2003)
- 浅野清編『成熟社会の教育・家族・雇用システム - 日仏比較の視点から』(N T T出版 東洋大学先端政策科学研究センター研究叢書 2 2005)
- 諸外国の教科書に関する調査研究委員会編『フランスの教科書制度』(教科書研究センター 2007)
- 文部科学省編『フランスの教育基本法 - 「2005年学校基本計画法」と「教育法典」 - 』(国立印刷局 2007)
- フランス教育学会編『フランス教育の伝統と革新』(大学教育出版 2009)
- 大津尚志「フランスの教育制度と教育費(特集 日本の教育・世界の教育)」(『学校運営』53 (10) (2012) pp.24-27.)
- 上岡学「ドイツならびにフランスの教育制度と教育実践に関する研究 - 幼稚園・小学校・中学校・高等学校を対象として - 」(『武蔵野大学教職研究センター紀要』(2) (2013) pp.13-26.)
- 中島さおり『哲学する子どもたち - バカロレアの国フランスの教育事情』(河出書房新社 2016)
- フランス教育学会編『現代フランスの教育改革』(明石書店 2018)

(1) フランスの教育制度の概観と特徴

フランスで教育行政にあたる行政機関は「国民教育省」であり、国民の教育に関する公役務のほとんど全てに関して責任を負っている。また、「学校は教育の時間を独占しない」というのがフランスの伝統的な教育思想である。教育は

学校という場を主体に展開されるものの、それは親、教会、地域社会、さらにはコミュニティがその時間を共有することによって成り立つとする。さらに、フランスの教科構成は日本のように固定的なものではない。

以降、本章では教育に関する法律名が多出するが、フランスには、特に重要な法律について、制定時の所管大臣の名前による通称を用いる慣例があることを附記しておく。

【公教育 3 原則】

フランスの公教育は、1881年から1882年の「フェリー法」より、「義務性、無償性、中立性—非宗教性（ライシテ）」が三大原則とされている。義務性については、フランスの場合、日本のような就学義務型ではなく、その場を問わず教育を受けること自体を義務づける教育義務型である。教育は、フランスに住んでいる満6歳から満16歳の全ての男女にとって義務であり、小学校第1学年（6歳）からリセの第1学年（16歳）までの10年間は義務教育の期間にあたる。つまり、義務教育は、小学校の5年間、コレージュ（中学校）の4年間に、リセ（高等学校）もしくは職業学校の最初の1年までといった変則課程によって編成されている。次に、無償性については、1946年憲法前文で「全ての段階での無償かつ非宗教的な公教育の組織化は、国の責務である」と規定し、義務教育の期間に行われる公教育も無償であると定めている。無償は公教育の原則の一つであり、3歳での保育学校、小学校から高等教育まで公教育は無償である。フランスも高等学校は義務教育ではない〔※詳細後述〕が、授業料は公立であれば無料である。また、小学校及びコレージュでは教科書も無償で提供される。さらに中立性については、「非宗教性（ライシテ）」が共和国の憲法原則に掲げられており、厳格な政教分離を成している。非宗教性の原則のため、フランスの公立校では宗教教育をしない。公教育で実施される教育は中立であり、宗教的事項に関する中立性、思想的及び政治的な中立性は、教員及び生徒の義務である。逆に宗教を学校から排除したフランスでは、全ての高校生が「哲学」を学ぶ。

【義務教育】

フランスの教育制度は、保育学校(3～4年)―小学校(5年)―コレッジ(4年)―リセ(3年)の単位型をとる。3歳以上の就学率はフランス全土でほぼ100%に上り、保育学校は小学校と合わせ初等教育の一部とされる。現在、義務教育は6歳からであるが、1989年の「ジョspan法」によって3歳以上の全ての幼児に無償の就学前教育が保障された。

ただし、2019年秋からは、保育学校を明確に学校と位置づけ、義務教育を3歳からに引き下げる。

フランスの義務教育制度の特徴は、以下の3点にまとめることができる。

- ①親権者に教育選択の自由を保障する一方、教育を受ける場所を特定しない。
- ②フランスも、日本と同様、教育に関する知的・技術的水準は国の基準で示しているが、そこに到達する教育方法は、教育現場の自由に任されている。これは日本と異なる点であり、その一端は、例えば教科書の使用に現れている。フランスでは、教科書を使うかどうかは現場の教師の自由に任されている。フランスの学校では、同一学年でも教師が違くと教科書や教材も異なり、指導法も異なることが多い。
- ③教育課程マスター主義が徹底している。

なお、フランスの学年の数え方は、日本と逆に、大きな数字から順に小さな数字へと上がる。小学校の1年生は「第11学年」であり、11→10→9→8→7学年までが小学校、ついでコレッジの最初が「第6学年」である。

2005年「フィヨン法」の『付属報告書』には、「義務教育は、児童生徒に対し、就学を成功裏に達成し、教育を継続し、〔中略〕、共通基礎知識技能の獲得に必要な手段を最低限保障しなければならない。共通基礎知識技能には、次に掲げる事項を含む。」として、筆頭に「フランス語の習得」を挙げている。同法は、小中学校の指導内容のうち、児童生徒全員に共通に補償すべき内容を「知識及びコンピテンスの共通基礎」として定めている。

【初等教育／保育学校／初等学校】

フランスの初等教育には、一般的に小学校とともに就学前教育機関である保育学校が含まれる。「学校」との用語も保育学校と小学校を総称することが多い。この場合、コレッジやリセの中等学校は含まれない。つまり、フランスの初

等教育には日本における就学前教育も含まれ、フランスの「初等学校」には保育学校とそれに続く小学校の両方が含まれる。保育学校は、家庭外での最初の教育の場である。保育学校では、義務教育以前の、2歳児を含めて3歳から6歳までの子どもたちを受け入れている。

1975年の「アビ法」では、「初等教育は、話し言葉及び書き言葉による表現・読み方・計算といった、知識の基本的な道具の習得を保障する。」と定め、1989年の「ジョspan法」では、「小学校において行う初等教育は、話し言葉及び書き言葉による表現、読み方と計算からなる知識の基本的道具の獲得を保障し、」と明記した。2005年「フィヨン法」の『付属報告書』には、「幼稚園は、幼児の人格形成及び初期言語形成に貢献する。年長組の幼児は、小学校における最初の基礎的学習の準備を行うと同時に、幼稚園における学習の仕上げを行う。」とある。満3歳からの就学により、保育学校を小学校とは異なる独自の学校としてではなく、小学校と同等な学校とすべきとし、言語の習得を最優先の課題、特に、話し言葉の教育が保育学校の根本的な使命であるとして、3年間にわたる年齢ごとのカリキュラムと各年齢に応じた進度の詳細を示している。

言語教育は、フランスでの初等教育改革の課題として焦点が当てられることが多く、幼児教育においても、言語教育が学習指導要領の主要な活動領域、ないしは領域の一つとされ、重視されてきた。なお、フランスの保育学校では、小学校との連続性を重視して、文字に関する教育を実施している。

【小学校】

フランスにおいて、小学校は保育学校と同じカテゴリーで考えられている。つまり、保育学校と小学校の教員は、日本の場合と異なり同一の職業的範疇に属する。フランスは、保育学校を学校教育として一元化した就学前教育機関と考えているため、3歳から5歳までは保育学校のための単線型になっているが、日本は、3歳から5歳までは保育園と幼稚園の複線型で、小・中・高等学校は基本的に単線型になっている。さらに、フランスの保育学校の多くは公立であるのに対し、日本の幼稚園の多くは私立である。フランスでは、保育学校も小学校も公立が多く、監督行政機関は市であるため、両者を同様に考えられるが、日本では、小学校は中学校や高等学校と同じカテゴリーに捉え、幼稚園は保育

園と同じカテゴリーとの意識がある。従って、日本の小学校教員の意識は中学校教員の意識に近いが、フランスの小学校教員の意識は保育学校教員の意識に近い。また、日本の幼稚園教員は保育士と意識に近いが、フランスの保育学校教員は小学校教員に意識に近い。

小学校は男女共学であり、その多くは、既に保育学校または小学校に付置された幼児級もしくは幼児班に通っている。標準年齢でみると、6歳で入学し、5年の課程を経て卒業するが、小学校から落第制度があり、一定の学力を身につけた児童生徒しか進級させない制度をとっているため、実際の年齢は多様である。小学校での落第及び飛び級については、1989年の「ジョスパン法」制定以降、一度のみに制限されている。

なお、「ジョスパン法」の『付属報告書』には、「小学校は、読み・書き・計算の基礎の学習をすることを、その基本目標とする。」、2005年「フィヨン法」の『付属報告書』には、「小学校は、第一に、読むこと、口頭で自己表現すること、書くこと及び計算することを教える。」と明記されている。

【学習期 (cycle)】

前述の通り、就学前教育を行う保育学校は、小学校とともに初等学校を構成するものとして位置付けられる。

フランスの小学校は5年制であり、フランスの教育課程は伝統的に「準備科 (CP、1年)」「初級科 (CE、2年)」「中級科 (CM、2年)」の「科」(cours)により区分されてきたが、1989年の「ジョスパン法」により、初等学校に学習期制が導入された。同法には、「就学期間は学習期 (cycle) に組織し、」と規定され、保育学校から小学校の修了までの期間は3つの学習期から編成されること、また、そのねらいは「子どもの平等と学校での成功を保障するために、教育は、各学習期内及び修学期間全体を通じて、教育的連続性により、子どもの多様性に適応する。」ことにあると明記されている (第4条)。

「学習期」とは、複数の学年をまとめた一定の期間を意味しており、教育課程の単位である。学習期ごとに教育課程の基準や内容を定めることによって、学年間のカリキュラムの連続性を高めることを目指している。この規定に基づいて、初等教育では、保育学校と小学校の9年間で3年ごとの学習期、すなわ

ち、保育学校（原則3年制）の年少組と年中組が「前・基礎学習期（初期学習期）（le cycle des apprentissages premiers）」に、保育学校の年長組と小学校の第1～2学年までが「基礎学習期（le cycle des apprentissages fondamentaux）」に、小学校の第3～5学年が「深化学習期（le cycle des approfondissements）」に分けられた。このような期間の括り方から、学校間の接続を円滑にする働き、特に、保育学校と小学校の連続性を重視していることがわかる。ここで用いている「深化」との語は、フランス語や数学等の基礎学習の理解に余裕がある児童は、教師の示す学習課題をさらに掘り下げていかれる自主的な学習活動を意味するものであり、児童の学習リズムに対応して意欲的に深く掘り下げられる可能性を示している。さらには、同規定により、コレージュ（中学校／4年制）の第1～2学年が「観察期（le cycle d'observation）」に、同第3～4学年が「進路指導期（le cycle d'orientation）」に区分された。しかし、1995年の法改正で、コレージュの区分は、「観察・適応期（le cycle d'adaptation）」（第1学年の1年間）、「中間期（le cycle central）」（第2～3学年の2年間）、「進路指導期」（第4学年の1年間）に改められた。

保育学校の幼児は、3つの学習期システムのうち、第1学習期と第2学習期の1年目を構成する。従って、保育学校の年長組（GS）は第2学習期に属する、保育学校の最終学年にあたる。こうした構成は、CPからの基礎の学習を習得する準備を行うためであるが、また同時に、保育学校の学習方法の特殊性を堅持することによって、その教育目的を達成することを期待するものによる。保育学校の教育内容は、小学校の教育内容と分離することができない。保育学校と小学校の教育は一貫したものとして初等学校の学習指導要領により定められている。

フランスでは、現在も学習期による上記3つの区分が用いられており、学習指導要領は、学習期ごとに教科別の到達目標を設定している。また、評価には特別の重要性が与えられており、「深化学習期」の最初の段階とコレージュの「観察・適応期」の最初の段階で、毎年全国規模の試験が実施され、生徒たちの学力評価が行われる。

ただし、2013年の「ペイヨン法」により、保育学校は1つの学習期（「第1学習期」）となり、小学校の最初の3年間で「第2学習期」となった。同法の『付

属報告書』によると、この改定の趣旨は、保育学校の任務を再定義し、保育学校のみで1つの学習期を創設することによって一体性を与えることにある。また、法案の『趣旨説明書』には、保育学校の独自性は、保育学校が単なる小学校への準備機関になるに従い消滅する傾向があるとされ、その独自性を回復するために小学校と切り離されることになったと解説されている。

【コレージュ・リセ／中等教育・高等教育】

日本の中学校は義務教育の最終段階であり、小学校とセットになっているが、フランスの「中学校」は「高等学校」とセットになって、大学やその他の高等教育機関の前段階として位置付けられる。

前期中等教育はコレージュ（日本の中学校に相当／4年制）で行われる。コレージュは、小学校課程を修了した全ての生徒を受け入れる。コレージュでの観察及び進路指導の結果に基づいて、生徒は後期中等教育の諸学校や課程に分けられる。日本で言う高校入試はない。フランスにおける後期中等教育の大部分を担うのは、リセ（3年制）及び職業リセ等の教育機関である。リセはコレージュに続く段階に位置し、通常15歳から18歳に至るまでの生徒を対象とする。リセは日本の高等学校に相当するが、日本の場合と比較した特色として、①（フランスの義務教育期間は10年間のため）リセの1年次までが義務教育に該当する ②バカロレア取得に向けた準備教育が行われる ③多岐にわたるバカロレアに応じて多様なコースが設けられている の3点を挙げることができる。

高等教育は、国立大学、私立大学、3～5年制の各種のグランゼコール、リセ付設のグランゼコール準備級、及び中等技術者養成課程等で行われる。これらの高等教育機関に入学するためには、原則として、バカロレア取得試験に合格し、同資格を取得しなければならない。

【バカロレア】

「バカロレア」は、リセ最終学年末の6月に全国一斉に実施される、中等教育修了認定と高等教育（大学）入学資格付与を兼ね備えた国家資格、すなわち、国家が認める学位の一つである。フランスには、高等学校を卒業しても「高卒」

との資格はなく、バカロレア試験で合格点を得た者のみが高等教育への進学資格を得る。フランスの中学校や高等学校はバカロレアと密接に繋がっており、高等学校はこの試験を準備する機関として位置付く。ただし、フランスの中等教育は、高等教育を受けるに必要な準備教育として、知識の詰め込みではなく、その知識をどのように使うかまで教え、全科目にわたり徹底した論述を行わせる。バカロレアはフランスの中等教育の到達点であり、高等教育学位の修得を目指す者にとって必ず越えなければならない関所である。

(2) フランスの学習指導要領の概観と特徴

フランスには、日本と同様に、全国的な教育課程に関する基準として、国の定める学習指導要領 (programme) がある。フランス教育法典第 311-3 条では、「学習指導要領は、学習期ごとに、当該学習期の過程で習得されるべき基本的知識、及び身につけるべき方法を定める。これは全国的な枠組みであり、その枠内において、教員は、一人ひとりの児童生徒の学習リズムを考慮して、教育を編成する。」のように規定している。学習指導要領と訓令 (les instructions) は、フランスにおける全ての学校及び教員にとって義務的性格を持つ。学習指導要領では、「共通基礎知識技能」に対応し教科領域ごとに各学習期の修了時に到達すべき能力を示している。

学習指導要領は、1989 年の「ジョスパン法」により一貫して実施された。1995 年に『初等学校学習指導要領』との形で保育学校の学習指導要領が誕生し、その後、「ジョスパン法」をもとに 1995 年から年次進行で、保育学校、小学校、コレージュ (4 年制の前期中等教育機関(日本の中学校に相当))、リセ (3 年制の後期中等教育機関(日本の高等学校に相当)) の学習指導要領の改訂が実施された。また、初等中等教育の教育内容については全国教育課程審議会が検討を進めた。1990 年 8 月には小学校の授業時間が改正され、9 月の政令で幼稚園・小学校の組織と運営の改革が始まった。

(3) 『2002 年初等学校学習指導要領』における左利き者への書字指導

2001 年 9 月、国民教育省は、小学校 (保育学校を含む) の新しい学習指導要領を 7 年ぶりに改訂し発表した。その内容は 1989 年の「ジョスパン法」に則

っている。本学習指導要領は、2002年秋より各学習期の第1年次から学年進行で実施に移った。2002年学習指導要領の進行に応じて1995年学習指導要領は廃止となり、2004年秋には全面的に入れ替わった。この2002年学習指導要領は、教育にあたり何を扱うかといったカタログ的な立ち位置ではなく、教育を行うために真の道具となるように作成され、「全ての児童生徒が基礎学習（話す・読む・書く・数える）を行い、共通の文化の基礎を手にすることができるような一貫した教育内容」を提供することが意図された。1995年学習指導要領に比べて、教育課程の構成における連続性がわかりやすくなっている。また、2002年学習指導要領には、「基礎学習期」及び「深化学習期」において特記すべき改定事項が「表1」のように示された。「表2」には、「言語とフランス語の習得」に着目して、『2002年初等学校学習指導要領』の抄訳をまとめる。なお、表中で用いる訳語は、引用した文献において用いられている語をそのまま記載したものである。

ここで注目すべきは、「基礎学習期」に「言語（フランス語）の習得」を最重要視している点である。その上で、「保育学校では、音声による表現が優先され、書き言葉との接触が準備される。」とし、「書き言葉の技術への最初の導入を厳密で確実な学習に変えるという難しい任務が課せられる。」とする。さらには、文字を書くために必要な動きを習得かつ自動化し、姿勢や鉛筆の持ち方に留意したところで、「速くそして読みやすい草書体を書くよう徐々に促す」ために「児童の表記の動作に必要な運動性を発達させる」ことを目指す。これを受け、小学校では、「確実で読みやすい草書体（小文字と大文字）を身につけなければならない。」とする。これらの文言が学習指導要領に明記されている点を勘案しながら、フランスにおける文字学習入門期の書字教育の在り方について、改めて「(5)」で考察する。

表1 2002年学習指導要領における「基礎学習期」及び「深化学習期」での特記すべき改定事項（抜粋）

※『ヨーロッパの教育現場からーイギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』（前掲書）pp.115-118.より抜粋

(1) 基礎学習期（保育学校年長組～小学校第2学年）

21世紀に向けての「基礎学習期」の教育重点事項〔中略〕の特徴は、5つの新しい学習活動領域を設定している点にある。以下それぞれのねらいを記述する。

①言語の習得

今回の小学校の新学習指導要領案で、最も重視したのは、言語（フランス語）の習得である。それは会話表現能力を重視した学習方法で、以前のような語彙・綴り・文法を個別に学習するのをなくし、口頭での表現練習を増やしている。〔以下略〕

（2）深化学習期（小学校第3学年～第5学年及びコレージュ第1学年）

新学習指導要領から、21世紀に向けての深化学習期の特徴を挙げると、次の4つにまとめることができる。

①読みの重視

第一の特徴は、フランス語学習において、特定の授業時間枠を設けずに全科目を通じて指導するスタイルを採用したことである。特に小学校の高学年では「フランス語」という時間を設けず、全科目を通じて言語指導を行う方法が注目される。なお、小学校低学年では、フランス語学習で選定図書から毎月1冊の文学作品を読ませるなど「読み」重視の方法を採用している。〔以下略〕

表2 「言語とフランス語の習得」に着目した『2002年初等学校学習指導要領』の抄訳〔※下線部筆者〕

※『フランスの教科書制度』（前掲書）pp.28-51.より抜粋

I. 序文 2. 共有される一つの学校的教養

初等教育では、言語及びフランス語の習得と公民教育が2つの主要な軸を構成する。国語の伝達は基本的目標である。フランス語を我が家のように感じることはあらゆる知識に至るために不可欠である。初等学校の全体を通して、この要請は教員の絶えざる関心とならなければならない。保育学校では、音声による表現が優先され、書き言葉との接触が準備される。読めることと読みたいと思うことは小学校の最初の学級の主要な目標である。基礎学習期の終わりから、児童は容易に読み、簡単な文章を理解できなければならない。この読みの学習は深化学習期の全体を通して継続される。〔中略〕書くことの学習は、保育学校から準備される長い獲得の成果である。

III. 基礎学習期—第2期 はじめに

基礎学習期は保育学校（年長組）から始まり、この学年では、その教育方法を取り入れる。この学習期は、小学校の最初の2学年（準備級と初級第1学年）まで続き、そこには、書き言葉の技術への最初の導入を厳密で確実な学習に変えるという難しい任務が課せられる。この2つの段階の間で最良の接続を実現することは、それぞれの学校において読み書き計算に児童を導く責任を有する教員にとって困難な目標である。

基礎学習期が保育学校から始まるとして、子どもが文字文化の道具（算数もその一部である）を身につけるために行うべき努力の中心は、言語への関係に変える能力にかかわる。すなわち、読み書きとさらには計算も学ぶのは、まずは話し言葉の中である。したがって、保育学校の教員の仕事は、話せるためのみならず話し方のためにも言語に関心を持つように、担当するすべての子どもたちを導くことである。年長組の大部分は、教えるというよりも形作られるこの困難な変化に充てられる。

小学校の教員はこのダイナミズムに加わらなければならない。見方によっては、担当するこの学習期の2年間は保育学校の延長であり、部分的には継続してその方法に拠る。話し言葉への注意がそこでも依然として決定的に重要である。同様に、学校配置により可能ならば（そうであることが望まれるが）、2つの学校の教育計画がこの連携を丁寧に想定し、活動の共通計画を提案する。〔中略〕

こうした観点から、基礎学習期の学習指導要領は、まず、保育学校と小学校の間の連続性を提案する。実際に、そこでの教育は、教科領域よりもむしろ主要な活動領域から編成され、そのいくつかの領域は保育学校のそれと直接的な連続性を持つ点に気づかれるであろう。

Ⅲ. 基礎学習期—第2期 教育課程 3. 文章を書く

書くことと読むことは基礎学習期のすべての活動において密接に結びついている。しかし、本学習期の終わる前までに、物語文であれ説明文であれ、短い構成された文章を自分で生み出す能力を児童が身につけるように導く活動のために特有の時間が割り当てられなければならない。

こうしたことは、すべてを同時に示すことなく、文章作成の様々な構成要素を別々に練習するために、困難な点を順に並べる条件でのみ可能となる。実際に、基礎となる能力（字の線を引く、つづりの基本を操る）が獲得され、自動化されていない限り、情報の動員、文章の編成、発話の練り上げといったより難しい活動に児童が十分に取り組むことは困難である。実際のコミュニケーション場面に根ざした書き方の計画を実施することにより、

教員が他の構成要素を管理する間に、その都度、これこれの構成要素を強調することが可能となる。

教育課程 3. 文章を書く 3. 1 文章を書き表す活動

保育学校では、子どもは書き方の必要不可欠な動作を習得することを学んだ。右利きであれ左利きであれ、子どもは手を引きつらせることなく鉛筆やペンを普通に持ち、紙をほぼ前腕の延長線上に置くことができ、速くそして読みやすい草書体を書くよう徐々に促すために、主な線を習得し、回転の意味を尊重する。書き方と同様に描画において示される良好な運動性はより一般的な運動的容易さを土台とする。多くの子どもたちは小学校入学時にはまだこの容易さに達していない。文字の書き表す活動は、この段階でもまだ、すべての児童の表記の動作に必要な運動性を発達させる効果的方法である。

小学校では、確実に読みやすい草書体（小文字と大文字）を身につけなければならない。教員は国民教育省が発行した手本に拠ることもできる。それは、児童がアルファベットの各文字の書記的特徴を身につけ、徐々に、完全に読みやすかつ速く書けるための運動性の容易さを獲得するために作成されたものである。

パソコンのキーボードは児童が保育学校から利用する道具の一部である。それは、文字の個別化を強化することにより、我々の正書法アルファベット〔※〕の構造に児童を親しませる。保育学校では文字が非常に自由に「発見される」ことが必要であるとしても、基礎学習期からは、いくつかのタイプ技術の機能性が両手や親指などの使用によりいっそう効果的に動員されうることを示すことにより、多様な使用において児童を援助することができる。

特に視覚芸術の領域において、他の書き方や他の表記動作を発見することにより、書くことの道具的使用とその美的使用を結びつけることができる。作成された文章の手書き版の作成は書道(ママ)の多様な側面を探索することを可能にする。電子版あるいは印刷版を目的とするとき、文章を取り扱うソフトウェアの印刷管理においても同様である。

〔※「正書法」：表音に関する正確な正書法 語の綴りの形態 語の綴りの書き方

(小林注)]

学習期の最後までに獲得されるべき能力

2. 読むことと書くこと 2. 4 書くこととつづり

次のことができる。

。一語一語を書き写し、読みやすい草書体で、4、5行の文章を間違いなく書き写す。

。活字の象徴の印（ピリオドと大文字）を正確に用いて、コンマを使い始める。

「教育課程 3.」の「3. 1」に、利き手に考慮した文言が記述されていることに着目したい。

（４）フランスの教科書制度の特徴

日本とフランスの教育行政制度はともに中央集権的であるが、教科書制度については対照的である。日本の場合、教科書に関する法規定は少なくない。教科書は文部科学大臣の検定を経て、教科書採択の権限は教育委員会が有し、各学校には教科書の使用義務が課せられている。一方、フランスの場合は次の3つの自由を特徴とする。

①出版社の教科書発行の自由

教科書の編集は公権力から独立した私的なものとして捉えられているため、検定制はなく、出版社は教科書を自由に発行することができる。フランスにおける学習指導要領と教科書の関係は、国民教育省中央視学官の報告書『教科書』（1998年）に、「フランスの状況は、他の民主主義国と比較して逆説的である。フランスは学習指導要領の非常に中央集権的で強制的な考え方を有している。〔中略〕しかし、出版社は全く自由に学習指導要領を解釈し、教科書に代表される教材の選択は教員の責任である。〔中略〕教育の平等の原則は制度の基礎であるから、学習指導要領は全国的に義務的である。教科書の選択は、その教育的自由の象徴として教員に委ねられている。」のように記述されている。一般的に教科書が学習指導要領に則っていることを公的機関が保証する仕組みはない。

②学校の教科書選択の自由

教員には教育方法の自由が保障されている。その具体的な形が、教科書の選択の自由である。教科書は学校ごとに教員もしくは教員集団によって選択される。教科書選択について教育行政が関与することは原則としない。

③教員の教科書使用の自由

フランスの教科書制度の最も大きな特徴の一つ、教員は教科書を使ってもよいが使わなくてもよいとの自由である。日本の教科書使用義務とは対照的である。このため、教科書の使用の実態も極めて多様である。学習指導要領に定める内容は教えなければならないが、そのための教材の選択は教員の自由である。

教科書はあくまで多数ある教材の一つとされる。教科書の実態について全国調査した、前掲の、国民教育省中央視学局の報告書『教科書』（1998年）によると、「深化学習期」の最終学年の授業では、平均すると、教科書は4分の3の授業で机の上に置かれているが、絶えず用いられているのは4分の1の授業のみであった。5分の1を超える授業では教科書はなく、コピーが唯一の使用教材であった。

教科書費に関しては無償が原則であるが、各学校の予算の中から購入することになる。つまり、教科書検定は存在せず自由発行である上、教科書の定価も決められていない。基本的に、小学校、コレージュ、リセ等では教科書は貸与制であり、次の年には他の子どもが引き継いで使う。多くの教師は、古い教科書も含め複数の教科書を使用して授業を行う。また、学校は、様々な世代の教科書を在庫として持っており、学習指導要領の改訂が教科書の交換を常に自動的に行わせるわけではない。教科書を備える1000学級の調査によると、1995年の学習指導要領施行から2年後に、この施行後に編集されたフランス語の教科書を使用していたのは17%のみだった。

（5）現在フランスにおいて用いられている書字教育のテキストにみる

左利き者への書字指導

前章に記述した通り、フランスに教科書検定は存在しないが、各出版社は学習指導要領に準拠して作成した教科書を発行している。教科書の販売に特化した店舗を持つ、1888年創設の老舗書店 GIBERT JOSEPH（2017年12月現在、フランスの主要都市に17店舗）で、書字教育に関する指導書ないしはテキストとして高い販売部数を誇る下記6冊の書籍をご紹介いただいた。首都パリの、教科書販売にも優れた老舗書店において販売部数が多いことは、多くの学習者や指導者に使用されている可能性が高いと推察し、これらの書籍の分析検討を試みることにした。

1] Jacobi, J. & Quattrone, A. (2016). *Votre enfant à la Maternelle*, Paris, France : PlayBac.

（※書名英訳「Your child at Kindergarten / Nursery School」）

2] Amor, S. & Moka, C. (2017). *ÉCOLE PRIMAIRE, Le Guide de Survie pour*

les parents, Comprendre les programmes scolaires. Autechaux, France : Nathan.

(※書名英訳「PRIMARY SCHOOL, The Survival Guide for Parents, To understand school curricula / programmes」)

③ Sansey, G. (2015). *“Cahier d’écriture” Écrire les lettres.* Autechaux, France : Belin.

(※書名英訳「“Exercise book for Writing” To write the letters」)

④ Hebting, C. (2017). *“Graphilette” Cahier d’écriture, GS-CP de 5 à 7 ans.* Tours, France : MAGNARD

⑤ Hebting, C. (2017). *“Graphilette” Cahier d’écriture, CP-CE1 de 6 à 8 ans.* Tours, France : MAGNARD

⑥ Hebting, C. (2017). *“Graphilette” Cahier d’écriture, CE2-CM1-CM2 de 8 à 11 ans.* Tours, France : MAGNARD

(※書名英訳「“Writing letters / Drawing letters” Exercise book for Writing」 5 – 7 歳(GS-CP)用 / 6 – 8 歳(CP-CE1)用 / 8 – 11 歳(CE2-CM1-CM2)用

注：「Graphilette」は現存する仏語ではなく「drawing + letters」の意の造語である。)

なお、これらの書籍を通読分析するにあたっては、信州大学の Sue Fraser が当該書を仏語から英語に翻訳したものを、筆者（小林）が和訳する方法で行ったことをお断りしておく。

これらのテキストにおいて、左利き者の書字教育に関して注目するのは

④ ⑤ ⑥ である。

④ ⑤ ⑥ は、学習期ごとに編集された書字学習に関する幼児児童用の学習書である。これらに共通して特出している点は、全書の表紙に記された点線

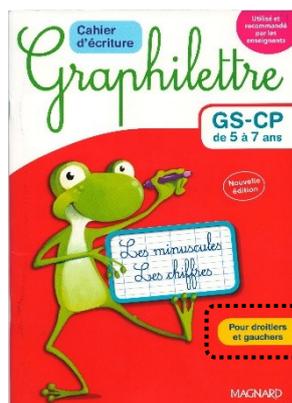


図 1 ④ 表紙

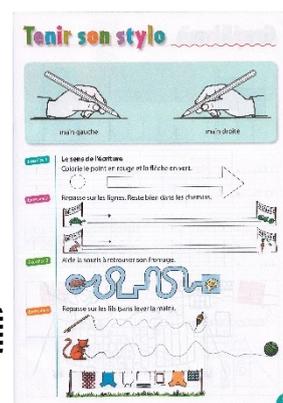


図 2 ④ p. 5

囲みの部分に関してである〔「**図 1**」参照〕。英訳すると「For right and left handers」、すなわち、本書は右利き左利き双方に対応する旨が謳われているのである。**4**の解説では、本書は右利き左利き双方のために考案されたテキストである点を明記している。しかし実際には、本文の中に利き手に関わっての具体的な解説がなされているところ、ないしは利き手に配慮した教材が示されているところは、鉛筆の持ち方の部分〔「**図 2**」参照〕以外見受けられない。先の表紙における文言は、宣伝のためのキャッチコピー的な要素かとも推察される。

ここまでの、フランスにおける書字教育のねらいと具体的な教材に関する考察から、特に左利き者の書字教育について着目すべき点をまとめる。

フランスの学習指導要領には、利き手に考慮した文言が記述されており、具体的な教材においても、右利き左利き双方に対応できる、利き手に配慮した内容が提起されている。また、教科書や教科書に準拠するテキストにおいては、右手での筆記具の望ましい持ち方を提示するのと一緒に、左手での筆記具の望ましい持ち方を提示している。一方で、右利きと左利き双方に対応する旨がアピールされているテキストにおいて、実際のところは、右手と左手それぞれでの筆記具の望ましい持ち方が示されているのみで、利き手に関わる具体的な解説や、利き手に配慮した具体的な教材は提示されていない。

「**第 3 章**」から「**第 5 章**」の考察を受け、次章では、漢字圏とアルファベット圏の国々での、左利き者への書字教育に関する比較を大局的に行う。

第Ⅲ部
左利き者の
書字教育に関する
今後の展望

第 6 章

左利き者の書字教育に関する考察 及び諸外国の教育から得られる示唆

本章では、まず、「第4章」及び「第5章」での考察に基づき、左利き者の書字教育に関して、アルファベット圏諸国の書字教育から日本の書字教育に寄与できる観点を把握するとともに、本論考での課題に必要な視点を整理する。

1. アルファベット圏諸国から得られる示唆

はじめに、アルファベット圏諸国から得られる示唆についてまとめる。

《イギリスの書字教育から得られる示唆》

- 利き手は脳機能と密接な関係にあるとの根拠に基づき、左利きの児童生徒に右手で書字させる指導は行わない。
- 「利き手」との観点に立脚し、右手と左手は平等の関係にあるとの見解を堅持する。
- 学校を含む社会及び日常生活は、右利き者が生活しやすい形態にできていることに鑑み、左利き者の不便さが回避できる工夫をする。
- 左利き者の書字場面には、右利き者に比較して書きにくい要素が伴うため、学習指導者にはより適切な理解と配慮が求められる。その具体例を次に示す。
 - 机や椅子の的確な高さ
 - 机や椅子に対して書字者が座る位置
 - 書きやすい筆記具の種類
 - 書き手の体と用紙を置く位置との関係
 - 書きやすくするための用紙の傾け角度
 - 右手（＝文字を書かない手．用紙を押さえる手）の位置
 - 右利き者との座席の位置関係
 - 教室内において左利き者が座るのに適切な場所
 - 照明に関わる配慮
- 左利き者の書字指導に際しては、概念的抽象的な指示でなく、例えば次のような具体的でわかりやすいポイントを提示する。
 - 筆記具の具体的な持ち方
 - 左利き者自身が、書字している直中の文字（＝筆記具の先端部）を見ることができ、筆記具を把持する指の筆記具先端からの適切な高さ。

- 望ましい筆圧や握圧のかけ方
- 横書き書式において、左から右へ無理なく書字するための工夫。
- 円運動を含む文字を、反時計回りに書けるようにするための方策。
- 鏡文字への対処法
- 左利き者が横画を書く際に「押す」動作となるところを「引く」動作に変容させるための方策を示す。
- 教科書やそれに準拠するテキストにおいて、左手での望ましい筆記具の持ち方の図版を、右手での望ましい持ち方とペアにして提示する。
- 学習指導要領に左利き者の書字指導について特記する。
- 文字学習入門期の教材に、左利きの児童も、利き手に関係なく用いることができる教材を設ける。

《オーストラリアの書字教育から得られる示唆》

- 書字指導に際しては、書字における右利きと左利きの平等性に立脚し、右手書字、左手書字それぞれの詳細について説明する。その具体例を次に示す。
 - 左利き者が書字学習を行う際の教室内での座席の位置
 - 机の高さ
 - 採光の方法
 - 左手で望ましい書字活動を行っている成人からの援助
- 学習指導要領もしくはそれに相当する指南書に、左利き者の望ましい鉛筆の持ち方について特記する。
- 左利き者の筆記具の持ち方や望ましい書きぶり、実際の指導方法それぞれに関して、より具体的な示唆を提唱する。
- 望ましい姿勢や筆記具の持ち方等を提示する図版の説明には、筆記具を持つ手を「書く方の手」、筆記具を持たずに用紙を押さえる手を「書かない方の手（もしくは紙を押さえる手）」と記し、「右手」「左手」との語は用いない。
- 筆記具の持ち方及び用紙の置き方に関する図版は、右利き者と左利き者双方の図をペアの形で提示する。

《フランスの書字教育から得られる示唆》

- 学習指導要領に利き手に考慮した文言を記載する。
- 右利き左利き双方に対応できる、利き手に配慮した教材を提起する。
- 教科書もしくは教科書に準拠するテキストには、右手での望ましい持ち方を提示するのと同様に、左手での望ましい筆記具の持ち方を提示する。

2. アルファベット圏諸国から見出す課題

続いて、アルファベット圏諸国から見出す課題についてまとめる。

《イギリスの書字教育から見出す課題》

- 「逆手」での書字とこの持ち方に付随して生じる姿勢等に関わる諸課題
- 左利き者の書字と筆順にまつわる課題
 - (日本の場合、日本の現行学習指導要領で提唱する、字形と運動（文字を書く過程）とのバランスを考慮した際の、左利き特有の筆順に関する対応。)

《オーストラリアの書字教育から見出す課題》

- オーストラリアで提言する左利き者の筆記具の持ち方や用紙の置き方が、そのまま日本の場合に当てはまるかとの疑義と検討。
- 筆記具の持ち方や用紙の置き方、及び左利き者にとって自然な文字の傾斜角度等に関するオーストラリアでの視点を手掛かりとした日本の場合での検証。

《フランスの書字教育から見出す課題》

- 右利き左利き双方に対応する旨が謳われているテキストでの、利き手に関わる具体的な解説、ないしは利き手に配慮した教材の実状や実態。

研究対象諸国から日本の場合に寄与できる観点と課題を勘案すると、日本でも、右手と左手は「利き手」との観点から平等の関係にあるとの見解に基づき、学習指導要領において、少なくとも、左利きの児童生徒に右手での書字を強いる指導は行わない旨を明示する必要がある。また、左手書字とその指導法の詳細については、当該国が具体的に示す要点を参照して、アルファベット書字の場合から日本語書字の場合に置き換え検証し、明らかにすることが求められる。

3. 日本における「文字を書くこと」に関しての「伝統」「文化」

アルファベット圏諸国の書字教育から日本の書字教育に寄与できる観点をふまえて、改めて「第3章」から「第5章」にわたる考察に立ち返ってみると、漢字圏とアルファベット圏それぞれの国においての、左利き者の書字教育に関する在り方の違いは、その根底に、小林比出代「日米の書字教育に関する比較研究 —20世紀における活字及び印字機器の普及と書字教育—」（『青山杉雨記念賞 第四回 学術奨励論文選』2001、以下「小林(2001)」）において論じた要件と重なる部分を有すると考えられる。

先述の小林(2001)は、アメリカにおける Handwriting の教育の目標と、20世紀アメリカにおける Handwriting の教育の動向を考察し、日本の書字教育の場合と比較検討した上で、アメリカにおける Typewriter の歴史と日本における日本語ワードプロセッサ（ワープロ）の歴史をたどり、アメリカにおける Typewriter と Handwriting の教育の在り方、及び日本におけるワープロと書字教育の在り方を比較考察して、印字機器の普及と書字及びその教育の在り方について論考を試みたものである。

当該稿の中から「Ⅲ 活字及び印字機器の普及と書字教育」の要旨を以下に記述する。

日本では、1970年代末から10年余りの間に、ワープロが爆発的な普及をみせた。続く1990年代にはパーソナルコンピュータ（パソコン）の普及が著しく、21世紀を迎えて以降、パソコンは日常生活での必須アイテムに定着した。

20世紀末当時は、学校教育においてもパソコンの積極的な導入が行われた。これは、中曽根康弘政権の折、文部省（当時）が臨時教育審議会において「国際化」と「情報化」への対応を重要視した結果、学校教育がコンピュータ時代に対応するための施策として、平成元年版学習指導要領にコンピュータ教育の全面的認知を旨とする教育内容を盛り込んだことに端を発している。

こうした一連の動きに伴って、当時の日本人の文字意識も大きく変化した。ワープロやパソコンを使えば文字を読めるだけで「書く（打つ）」ことができることから、「最早文字を書くための努力など要らない」「今や文字は読める程度

に書ければいい」といった声も聞こえるようになった。延いては、文字を書くことや、文字を書くことの教育も不要となるのではないかとの見解まで聞かれるようになっていた。

このような社会情勢の時代的な背景として、文書を効率よく作成する事務用機器が短期間にあまりにも急激に普及したことにより、その周辺に位置したものが狼狽した点が挙げられる。ワープロの誕生以降、爆発的に普及するまでの一連の動向は、当時の日本において未曾有の、革命的な出来事だった。ワープロの普及定着と同時に、「文字を書くことは必要なくなるのではないか」「書字教育は不要になるのではないか」との問いかけが多く聞かれるようになったのは、こうした狼狽や不安感を如実に表した事象として捉えることができる。

その上、「第3章」で述べた通り、日本には、文字を書くことに対して特有な意識が存在してきたことが挙げられる。アメリカの場合、**Handwriting** の教育の目標は、“**Legibility** (読みやすさ)” “**Speed** (速さ)” “**Neatness** (正整美)” とされている¹。この3点が唱えられる根底には、アメリカでの基本的な言語観、すなわち、言語をコミュニケーションの手段や道具として捉える「言語道具観」が存在している²。この見解に基づき、**Handwriting** もコミュニケーションの手段として認識されているのである。これは、**Typewriter** に関しても同じであると考えられる。このことから、両者はそれぞれコミュニケーションの手段としてその役割を果たすための利点を有しており、用途や場に応じてそのどちらかを用いているにすぎないといった考え方が推測できる。**Handwriting** と **Typewriter** それぞれの特徴や効用を考慮し、用途に合わせたコミュニケーションの手段を幅広く使いこなしていく。このような認識が存在している場合、文字を書くことと印字機器とを比較して、その優劣を問う、もしくは、どちらか一方の有用性を強調して、もう一方の存在を否定するといった考え方は生じてこないと考えられる。

また、先述の通り、アメリカの場合、**Handwriting** はコミュニケーションのための **tool** (手段・方法) とみなされていることから、文字そのもののデザイ

¹ Frances A Rosen : “The Second “R” in Today's Schools”, *The Education Digest*, 16, (1951)
この論文は1950年代に書かれたものであるが、これらの目標はその後現代に至るまで変わらない。
² 井上尚美「ボイヤー報告とアメリカの母国語教育」(『東京学芸大学紀要2部門人文科学第36集』(東京学芸大学)1985) p.56.

ンに趣向を凝らす Calligraphy とは教育上関連がないものとされている³。Handwriting の教育は、日常生活に不可欠な技能の教育として、あくまで実用主義の立場をとっているのである。同じ「文字」という素材を扱っているとはいえ、芸術の分野に属する Calligraphy との関連性や影響を考慮する必然性は存在しない。

ところが、日本の場合は、「第3章」で紹介した引用に記されているように、東洋特有の伝統である書道からの影響で、「文字を書くこと」を単に「コミュニケーションの手段」として割り切れない「見方」が存在している。

文字を書くことは、思考の記録や情報の伝達に必要な技能である。その技能によって表された文字は、あくまで記録や伝達の内容を表しているのものであって、文字そのもののための文字ではない。読み手が読むのは、筆記用具でも書体そのものでもなく、書かれている内容である。ワープロも従来の筆記用具も、双方ともに文字によるコミュニケーションのための道具、すなわち文字を「書く」手段にすぎない。この点において、文字を書くことの教育が実用本位に徹しても問題はない。むしろ、書写教育において実用本位を軽視することの方が特異かもしれない。

このような日本での書字を特別視する「見方」が、「書字とワープロの活用とは、文字表記という側面において相反する関係にある」との感を抱かせるのではないかとの推察に基づき、小林(2001)では、「ワープロの普及によって、文字を書くことは不要になる」等の困惑は、文字を書くことに関して独自の伝統や文化を持つ、日本ならではのものとして考えることができると結論づけた。

続く「第7章」では、以上の見解をふまえて、左利き者の書字教育に関する今後の展望について考察する。

³ 「鷺ペンから印刷機へ」慶応義塾図書館主催・慶大稀覯書展における Mark van Stone 氏の講演より (1991.11.20)

第 7 章

左利き者の書字教育における 今後の展望

本章では、漢字圏とアルファベット圏における文化や社会性の違いを熟考しながら、左利き者の書字教育に関する今後の展望について考究する。

1. 利き手及び左利き者に関する書字学習の在り方を公的に提示する必要性

(1) 漢字圏での左手書字から右手書字への「矯正」に関する

毛筆使用の影響

「第6章」での見解をふまえると、文字を書くことと印字機器とを比較してどちらかの存在価値（存在意義）を強調するとの意識は、東洋特有の伝統である書道と、そのための文具としての毛筆を有する国に共通して存するものではないかと推測できる。

毛筆書道が文化として存在する漢字圏において、左手書字を右手書字に変えさせるとの古からの風潮には、毛筆の使用が強く影響している。一例を挙げる。

昭和43年版の『小学校学習指導要領』（昭和43年7月告示／昭和46年4月施行）¹の「第1節 国語」「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」において、新たに「毛筆を使用する書写の指導は、第3学年以上の各学年で行ない、」との文言が設けられ、書写の授業時数における毛筆を使用する時数に関しては、初めて「毛筆を使用する書写の指導に充てる授業時数は、各学年それぞれ年間20時間程度とするものとする。」と記された。

ここで、「第2章 3.」において既述した松田の見解を再掲する。当該の学習指導要領が完全実施となった昭和46年当時に、左利きの児童生徒に対しては、「右手で筆をもつように矯正(強制)」し、「左利き児童に対する考慮は全く払われていないというのが現状」であって、「殊に、小学校三年より正課として採用されている書道教育(ママ)は、すべて右利き児童を対象として実施され」たその「結果として、少数者である左利き児童は、右利きになるための矯正をよぎなくされ、その結果さまざまのストレスを発生させる」事態を起している²と指摘されている。すなわち、松田の見解は、左利きの児童生徒に右手で文字を書くよう変更を強いるのは、学習指導要領に明記された、毛筆を使用する書

¹ 学習指導要領データベース <https://www.nier.go.jp/guideline/s43e/index.htm> (2020年6月20日閲覧)

² 松田道雄「左利き友の会」始末記(『暮らしの手帖 第2世紀』(暮らしの手帖社)1975) pp.174-177.

写の指導に関しての指針に起因しているとする見解と捉えることができる。

加えて、第二次世界大戦以前に中学時代を過ごした成人が、「書道」の授業で「日本国語文字は左手で書く様にはできていない」と担任に殴られたとの史実を記した後の、「それとおなじことが今日、民主主義のいわれている時代にもおこってい」との記述も考え合わせると、これらの事象は、漢字圏における、右手書字を左手書字に変更させるといった昔からの慣習に、毛筆の存在とその使用が色濃く影響していることが端的に顕れた一例と考えられる。

「第2章 4.」には、箱崎の、「がんらい書道は、わが国に古くからある伝統芸術ですので、その筆法や運筆の手じゅんなどについては多くのきめごとがあります。たとえば、左手で筆を持つてはいけないというのもその一つです。」

「そのために書道を習うさいや、ペン字を習うさいにはほとんどの場合、左利きの人達は全部右手で書くように無理に矯正されてしまうのが従来までの方法でした。」との見解³を紹介した。「左利き友の会ではこの左きき筆法を発表する前にいくつかの書道団体や、書道家の方たちに左手で書道を学ぶという点について質問をし」たところ、「その返答は残念ながら例外なく冷たい返事しか返って」こなかった点、さらに、その返答例は、「左手で書いた書家は誰もいなかった。」「左手で筆を持つことなど出来るはずがない。」であり、「このような態度が現代日本の左利き筆法に対する反応」であった点⁴も、毛筆書道の存在の、左手書字から右手書字への変更に対する影響を示す好例と捉えることができる。

再度、「第2章 3.」の、昭和50年に記された松田の見解²に戻ると、「どうしても右手ではうまくいかない左利き、というものがあることを知るべき」であり、「書き方が正課であるということは、特別の左利き用の筆法をおしえないかぎり、右手で筆をもつように強制していることになる」との指摘がある。さらに、「特別の左利き用の筆法をおしえない」理由は、「左利きの子どもを、左利きのまま書道をやらせることは、先生にはめんどろ」で、「一律に右利きにして、右利きに都合のいい書き方にかかせるほうが先生にはらく」だからであると。左利きの児童が左手で毛筆書字に臨むのが「先生にはめんどろ」である、ないしは、全ての児童に右手で書字させる方が「先生にはらく」との文

³ 箱崎総一編『左きき書道教本』（左利き友の会 1972）pp.1・2

⁴ 箱崎総一編『左きき書道教本』（前掲書）pp.18・19

言が、現在の日本社会及び教育の状況や教師の心情を正確に表現しているかには疑念を持つ一方で、松田のこの見解は、現代においても全面的には否定できない部分を有すると考える。

あわせて、「第2章 4.」の、昭和47年に記された箱崎の見解⁵に戻ると、「左利きを矯正するのは子供に悪い結果を与えます。そのことは医学的にも、心理学的にも証明されています。それなのに書道の世界だけはいぜんとして右手でしか習字を教えないのです。」との指摘と、続く「しかしそれも当然のことかも知れません。いまだかつて左きき筆法などは存在したことがなかったからです。誰も左手で筆の字を書けるとは想像もできなかったからです。」との記述も、日本での、左手書字から右手書字への変更を強いる慣例に関して毛筆の存在が与えた影響を如実に伝えるものと判断できる。

なお、箱崎が中心となり「全国的な左利きの人たちのための組織」として創設した「左利き友の会」は、「左利きの人たちの福祉の向上と親睦をはかる目的で設立され」たが、「会員の特典」として、「左利きの矯正にかんして問題があったとき(とくに学校での無理な矯正や、社会での左利きの差別があったとき)には左利き友の会・事務局にご連絡頂きます。本会としては可能なかぎりこうした問題の解決に努力します。」⁵といった社会運動的な要素を帯びてしまった点がかえって足かせとなり、箱崎が望んだ形には展開しなかったと推察する。

(2) 教育の質的な向上が成就するための要件

ここで改めて、日本をはじめとする漢字圏とアルファベット圏とでの「文字を書くこと」に対する考え方の違いを、正誤や善悪もしくは優劣の問題として捉えているのではないこと、かつ、手書きの文化における毛筆の存在に畏敬の念を抱いていることをお断りしながら、やはり、言語力の育成、文字学習の観点から、漢字圏においても、利き手及び左利き者に関する書字学習の在り方や指導の方法を検証し、公的に提示する必要性は唱えたい。

文化としての毛筆書道が存在する漢字圏において、毛筆書字による「美的表現」や、書“道”を通じた人格的修養、ないしは、しつけにまつわる慣習的な観念等から左利きを排除する風習が存在してきたとの史的な実状は否めない。

⁵ 箱崎総一編『左きき書道教本』(前掲書) pp.19-22

しかし、文化的背景及び社会的常識や習慣、伝統や慣習、偏見、多数派文化を重視する風潮等をも包括した上での、文化的制約を乗り越えたところ、少数派を包摂し多様性を認め合い尊重し合うところに、教育の質的向上は成就すると考える。

2. 左利き者の書字学習と

アメリカの特別支援教育における書字学習に通底する見解

前項「1.」をふまえて、文化的背景、社会的習慣、伝統、多数派文化を尊重する趣向等々の全てを包含し、かつ、文化的制約を乗り越えることによって教育の質は向上するとの観点から、本項を展開する。

「序章 1.(3)」において、アメリカでは、左利きの児童生徒の学習指導に関して、特別支援教育の文脈の中で扱う向きも見られる点に触れた。左利き者の書字教育に関する展望について考察するにあたり、アメリカの特別支援教育においては書字教育がどのように捉えられているのか、問題意識がどこにあるのかを把握するために、Cermak, S.A. and Larkin, D. (Eds.) (2002) *Developmental Coordination Disorder*. New York, USA : Delmar. の「Chapter17. Hand Skills and Handwriting」(pp.248-279) について検討する。

本書の当該章では、「Developmental Coordination Disorder (DCD)」、すなわち発達性協調運動障害を持った子供たちが、ペンを持ち、文字をより上手に書くことができるようにするためにはどのように支援したらよいかとの課題に関する見解と提案を記している⁶。本章に、左利き者の書字教育に対する示唆は示されていない。本章で扱っているのは、あくまでもペンを正しく持つことが困難な運動障害を持つ子供に関する内容のみである。ただし、彼らの書字に関わる記述には、「右手」「左手」との語ではなく、「a dominant hand=利き手」との語を用いており、また、「右利き者」「左利き者」との区別も行っていない。

⁶ 「第4章 6.」で考察した Jean Alston(1996) : *Writing Left-handed A guide for parents and teachers of left-handed children.*, p.16.では、「左利きの書き手に役立つ規則」として、「文字の反転と混乱」との課題に関し「6歳を越えた児童に見られる文字に関する混乱及び/または鏡文字は、失読症または発達性協調運動障害の可能性がある」点を指摘し、Gwen Dornan(2007): *Writing Left-handed ... Write in, not left out.*, p.38.では、DCDを持つ子供を「左利きであることがさらに大きな問題点の一部になっている」ために、特に配慮を要す学習困難を抱えた子供の例として記している。

ここで、本章の概要をまとめる。

- 本章では、ペンの持ち方と文字の形を整えることを援助する練習を提供している。ここで扱うのは就学前と小学校（第1及び第2学年）の子供がほとんどだが、年齢がもっと上であっても、筆記体で文字の形を整えることに問題があるため速くたやすく書くことができない児童生徒についても扱っている。
- 本章の内容は、DCDの問題を抱える子供たちに焦点を当てたものであり、一般的な教育とは異なる。また、アメリカでの教育に関してのみ言及している。
- 子供たちの利き手に関する記述は、次の2点である。
 - 子供たちがどちらの手を主に使用するかは、就学前に確立する。
 - 主に使用する手の確立は、彼らが文字の書き方を習い始めるかなり前になされる。
- ※この見解の記述にあたり、「右手」「左手」との記載はなく、「**dominant hand** = 優勢な手」「**regressive hand** = 退化的な手」との語が使用されている。
- 1つの簡単な提案として、利き手が決まる前に、左右対称的な図形を、両手を使って描く（両手にペンを持ち、両手を使ってハートの形を描く（左手で左半分を、右手で右半分を描く））ことを挙げている。
- ※ほとんどのイラストは右手をモデルとして描かれているが、唯一 p.266 に左手で鉛筆を持つイラストがある。

続いて、本章の結論と要旨が書かれている p.279 を要約する。

「**Handwriting** の技能上達には、手の一部の動き、視覚、理解、刺激への反応等の要素が複雑に絡み合っているが、特に **DCD** を持つ子供たちにとってはその傾向が強い。キネステシス(体の一部や筋肉の動きや位置)は、**Handwriting** の上での問題点を理解し、予防し、修正する上で非常に重要である。(手の)運用能力が十分に教えられ実践されない場合、悪い習慣が定着してしまい、生涯を通じて **Handwriting** に悪影響を与えることがあり得る。

DCD の子供たちは、**Handwriting** が良き経験になるように、早期的な段階での支援を必要とする。教師は、(手の)運用能力上の問題を分析して、問題修正の技術を適切な順序で用い、技能が自然に身につくまで練習を確かなものに

することである。」⁷

本章に述べられている内容は、いずれも DCD の問題を持った子供たちを対象としており、左利き者を含む一般的な子供を対象にはしていない。

しかし、本章 p.275 に「(※DCD を持つ(小林注)) 子供が抱える問題点を議論する際に次の点に着目する。」として示される3つの視点、すなわち、

- (a) 手、紙、そして座る姿勢。
- (b) 書く際の鉛筆の握り方。
- (c) 子供がどれだけ手本を真似ることができるか。

の (a) (b) は、「第6章」にまとめた、左利き者の書字教育に関しアルファベット圏諸国から日本に寄与できる観点と重なる。さらには、書字マイノリティとの視座に鑑みた際、「第4章」「第5章」「第6章」で既述した「利き手」の観点に立脚し、右手と左手は平等の関係にあるとの見解」は、左利き者の書字学習と特別支援教育における書字学習に通底するものと捉えることができる。

3. 「Society5.0」の方向性に沿った試論

前項「2.」を含めて、本論考では、文字体系の違いを超えた比較教育学的な見地から左利き者の書字教育について考察を試みた。同時に筆者は、脳生理学による科学的な研究手法の導入は萌芽の段階にある書写書道教育研究において、臨床生理学的な見地から左利き者の書字活動について臨床実験的に検証することも考え続けてきた。該当実験から得られたデータは、書字教育延いては左利き者の書字教育に関する有用な論証材料になると推考するためである。

「第1章 10.」で述べた通り、筆者は、検証の一端として、利き手と非利き手それぞれでの書字活動時における脳活動の差異を、脳活動計測装置を用いて測定することにより、書字行為に際しての利き手と脳活動との関係について検証を試みた(=「小林(2017)」)。その結果、専門領域からの解明が必要とは考えるが、脳生理学、脳活動の観点から検証考察すると、非利き手での書字は望ましいものではないとの推論が導き出せた。

⁷ Ibid., p.279

(1) 「Society5.0」に基づく展望

ここで、「序章 1.(1)」で述べた「問題の所在」に立ち返ってみる。

「序章」において、現在、日本の教育改革で重視する「インクルーシブ教育」の方向性は、左利き者の書字教育に関する課題を講究する必要性と合致すること、また、SDGs の目標「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育」を提供することにも資すること、しかし、左利き者の書字教育と問題が共有されていないことを指摘した。

SDGs は 2015 年の国連サミットで採択された 2016 年から 2030 年までの国際目標であるが、日本政府においては、2016 年に内閣府が科学技術政策の一つとして「Society 5.0 (ソサエティ 5.0)」を発表した。内閣府によるソサエティ 5.0 の定義を記す⁸。

Society 5.0 とは

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）

狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会を指すもので、第 5 期科学技術基本計画において我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱されました。

第 5 期科学技術基本計画は平成 28 年から令和 2 年までの 5 年間で行われる。

「ソサエティ 5.0-政府広報オンライン」では、第 5 期科学技術基本計画において、ソサエティ 5.0 は、安倍晋三政権が掲げる「成長戦略」でも日本社会の抱える課題を解決する重要なキーワードになっている旨を述べた上で、内閣府によるソサエティ 5.0 の定義について次のように解説している⁹。

(※ソサエティ 5.0 の定義を(小林注)) わかりやすく言い換えると、情報が溢れている現在（Society 4.0）の課題に対して IoT（Internet of Things：モノのインターネット）や AI（Artificial Intelligence：人工知能）などの最新テク

⁸ 内閣府 HP https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html（2020 年 2 月 29 日閲覧）

⁹ ソサエティ 5.0-政府広報オンライン

<https://www.optim.cloud/blog/iot/society-5-0-real-world-examples/>（2020 年 2 月 29 日閲覧）

ノロジーを活用した便利な社会が「Society 5.0」というわけです。

〔中略〕

これら最新テクノロジーの活用により、最終的には少子高齢化・地域格差・貧富の差などの課題を解決し、一人ひとりが快適に暮らせる社会を実現することが「Society 5.0」の真の目的となります。

経団連は、2018年に発表した「Society 5.0 -ともに創造する未来-」の中で、「Society 5.0は、国連で採択された持続可能な開発目標（SDGs）の達成にも貢献できる概念である」として、「Society 5.0 for SDGs」を提唱している¹⁰。

情報社会の次の像としてソサエティ 5.0を捉えた時に、左利き者の書字教育についてはどのように考えることができるか。この課題に関する展望として、左利き者の書字活動に関わる一つの試論を呈したものが「第1章 10.」である。

（2）毛筆のみ常時右手で扱う左利き者に関する附記

筆者は、「第1章 10.」において、小林(2017)に関する解釈の信憑性と客観的な指標を確認するとともに、当該実験の考察に必要な分析視点を整理することにも努めた。その結果として、小林(2017)における推論を確認支持できる内容、及び、小林(2017)での分析を補充するために必要と考えられる視点をまとめた。その中の、硬筆書字は左手で行うが、毛筆のみ常時右手で扱う左利き者に関して、ここで附記する。

はじめに、LQにより「左利き」と判断され、実際に、日常の硬筆による書字活動は左手で行うが、毛筆のみ常時右手で扱う左利き者が存在するとの実態があることを把握する必要がある。次に、毛筆書字のみ利き手である左手ではなく非利き手である右手で行うようになった事情、及び非利き手での毛筆書字にどれだけ精通しているかの違いに関わらず、また、仮に非利き手（右手）での毛筆書字に高い能力を示すようになっても、硬筆書字は左手で行うが、毛筆のみ常時右手で扱う左利き者は、非利き手での書字行為を「やや書きにくい(どちらかと言えば書きにくい)」と感じており、「硬筆と毛筆は全く他のものであり、自分には毛筆による書写学習は硬筆による書写力の基礎として寄与しない」

¹⁰ 一般社団法人 日本経済団体連合会 HP <https://www.keidanren.or.jp/policy/society5.0.html>
「Society 5.0 -ともに創造する未来-」 https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/095_sasshi.pdf
(2020年3月1日閲覧)

と実感しているとの実情に関して理解しなければならない。

このような、小林(2017)に続く論考で指摘した事柄は、たとえ非利き手での書字活動に慣れ、器用にこなせたとしても、非利き手による書字行為は文字の学習活動になっていないとの重大な問題性を内在している。再三記す通り、学習指導要領には「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導」するよう言及されているにもかかわらず、毛筆のみ右手で扱う左利き者にとって実態は大きく異なるのである。ここに、再度、左利き者の毛筆学習及びその指導はどのようになすべきかとの重要な課題が生じる。延いては、書字活動全般にわたり右手で行うよう指導され、止むを得ず変更した左利き者に関しては、非利き手での書字学習は推奨できない、左利き者に右手での書字を強要する学習指導はしてはならないとの推論が立つ。

しかし、既述のように、これらの実験でのデータは限られた人数によるものであり、その実験結果については未だ断定ができる段階ではなく、あくまでも事例の一つにとどめられる。データの蓄積と多角的な分析により、実験結果の解釈の客観性、信憑性が求められる。ただし、脳生理学からの根拠をもとに、書字に関する「利き手」「非利き手」との概念を前提にして、「利き手」「非利き手」との観念に基づき書字及びその指導に関して考究する姿勢は必至となる。

(3) 左利き者の脳機能や認知機能に関する検証において考慮する点

なお、ここで、医学（生物学・生理学）や心理学の分野での先行研究に立脚した、左利き者の脳機能や認知機能に関する検証に際して考慮すべき点を記す。

「第1章」での考察の通り、医学（生物学・生理学）や心理学の分野での先行研究に基づくと、左利き者に右手で書字するよう強いる、いわゆる「矯正」は不適切だと考えられる。一方で、脳機能自身に着目して考えた場合、「苦手なことを訓練する、例えば、非利き手で文字が書けるように練習すると、脳が活性化されるのではないか」との推論も成り立つ。確かに、行動の獲得において繰り返し練習することは重要であるが、教育場面においての書字に関わる利き手の「矯正」は、右利き者と左利き者での学習への負荷の程度が変わるために、学習の平等性を欠いている。また、非利き手での書字には負荷がかかるために、脳の左右でコンフリクトが起こり、学習課題そのものへの集中が低下してしま

う虞もある。さらには、「第1章」に記した通り、「矯正」による心理的なストレスについても報告されている。これらの要素を勘案すると、教育場面においての書字に関わる利き手の「矯正」は不適切であると結論づけることができる。ただし、脳機能そのものに特化して考えた場合、行動獲得や脳の活性化、もしくはリハビリテーション等の側面から推測すると、ポジティブな要素も可能性としては存在し得る。脳機能を重視した際の非利き手を用いた行動の是非は、教育場面における書字活動とその他の場面での活動で違えて考える必要がある。

4. 日本での左利き者の書字教育に関して必要な研究の方向性及び方法

(1) 本論考各章に記した具体的な文言に関するカテゴリー分類

「序章 1.(2)」にて記した通り、現在、左利き者の書字教育に関して、日本における書写教育研究の立場からの先行研究では、「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」「学習者研究」のどの側面も充填されていない。また、「第3章 1.」で述べた通り、現時点では、漢字圏において左利き者の書字教育の在り方を探究するには、「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」「学習者研究」のいずれに関しても局限される。

本章をまとめるにあたり、本論考で考察した、日本における左利き者の書字教育に関して必要となる、これからの研究の方向性や方法について、各章にて記した具体的な文言を、「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」「学習者研究」のカテゴリーに分類して「表1」に示す。表の左端の列には当該文言を記述した章及び項を、その右隣の列には項の見出しを附す。

表 1 本論考で考察した

日本での左利き者の書字教育に関するこれからの方向性や方法

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第1章	9.	<p>左手書字から右手書字への「矯正」の是非</p> <p>○利き手及びその変更に関する問題は脳のプログラムと直接かつ密接に関わるという点を理解した上で、根本的・本質的な課題について熟慮し、利き手に関する問題において本当に変えていかなければならないものは何であるのかを再考する。</p> <p>○少数派とされる左利きの在り方を理解し、日常生活のあらゆる場面において様々な方策を講ずる。</p>				<p>○利き手は、その発達段階における各人の自然な姿を尊重すべきであり、その変更に関しても、保護者や周囲の意向ではなく本人の意思を重んじるべき。</p>
第1章	10.	<p>○脳生理学、脳活動の観点から検証考察すると、</p>				

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第1章	10.	<p>非利き手での書字は望ましいものではない。</p> <p>○書字に関しては「“右手”“左手”」といった概念ではなく、「“利き手”“非利き手”」との認識が不可欠である。</p>				
第2章	3.	<p>学校教育における左利き及び左利き者の書字の受けとめ方</p>	<p>○文字は右手で書きやすい構造や運筆になっていることへの理解を促すために、試みに右手での書字を体感させてみるのは一案であるが、それをきっかけに右手での書字の定着を強要するのは避けるべき。</p> <p>○左利き者のための、左手での望ましい筆記具の持ち方をはじめ、左利き者に有用</p>		<p>○左利きの児童生徒への書写指導において最も重視すべきことは、字形・筆順・運筆といった文字の有りようではなく、「左利きである」という児童生徒の実態である。右利きの論理を押しつけた、文字の構造や運筆ありきの書写教育ではなく、まず、左利きであることを尊重し、左利き</p>	

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第2章	3. 学校教育における左利き及び左利き者の書字の受けとめ方		な書字学習の在り方について検討することは必須であり、また、それらに関する具体的な方策が右手での場合と同様に明示されるべき。		の児童生徒が無理なく書字に臨めるよう、左利き者の立場に立った書字及びその教育の在り方を探求していく。	
第2章	4.(8) 紙の置き方の検証が示唆する具体的方策を検証することの意義と課題			○左手書字者が毛筆及び硬筆によって効果的な書写学習を行う要件として、紙の置き方に関する顧慮は有効な一方策になる。 ○体の中心から左側へずらす置き方は、書写学習延いては文字学習との観点から、毛筆書写においても硬筆書写においても、有用に働く可能性が高い。		

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第2章	4・(8)			○硬筆の場合よりも、毛筆、特に大筆での場合の方が、文字の形状・用筆・字形に、紙の置き方の違いが強く反映されやすい。		
第3章	2・	左利きに関する漢字圏においての文化的背景				
第6章	1・			○教科書やそれに準拠するテキストにおいて、左手での望ましい筆記具の持ち方	○学習指導要領に左利き者の書字指導について特記する。	○利き手は脳機能と密接な関係にあるとの根拠に基づき、左利きの児童生徒に右

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第6章	1. 《イギリスの書字教育から得られる示唆》	○「利き手」との観点に立脚し、右手と左手は平等の関係にあるとの見解を堅持する。	○学校を含む社会及び日常生活は、右利き者が生活しやすい形態にできていることに鑑み、左利きの不便さが回避できる工夫をする。 ○左利き者の書字場面には、右利き者に比較して書きにくい要素が伴うため、学習指導者にはより適切な理解と配慮が求められる。 [例] ・机や椅子の的確な高さ ・机や椅子に対して書字者が座る位置 ・書きやすい筆記具の種類 ・書き手の体と用紙を置く位置と	の図版を、右手での望ましい持ち方とペアにして提示する。 ○文字学習入門期の教材に、左利きの児童も、利き手に関係なく用いることができる教材を設ける。		手で書字させる指導は行わない。

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第6章	1. 《イギリスの書字教育から得られる示唆》		<p>の関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦書きやすくするための用紙の傾け角度 ◦右手（＝文字を書かない手、用紙を押さえる手）の位置 ◦右利き者との座席の位置関係 ◦教室において左利き者が座るのに適切な場所 ◦照明に関わる配慮 <p>○左利き者の書字指導に際しては、概念的抽象的な指示でなく、具体的でわかりやすいポイントを提示する。</p> <p>[例]</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦筆記具の具体的な持ち方 ◦左利き者自身が書字している直中の文字（＝筆 			

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第6章	1. 《イギリスの書字教育から得られる示唆》		<p>記具の先端部) を見ることができ、筆記具を把持する指の筆記具先端からの適切な高さ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦望ましい筆圧や握圧のかけ方 ◦横書き書式において、左から右へ無理なく書字するための工夫 ◦円運動を含む文字を反時計回りに書けるようにするための方策 ◦鏡文字への対処法 <p>○左利き者が横画を書く際に「押す」動作となるところを「引く」動作に変容させるための方策を示す。</p>			
第6章	1.		○書字指導に際しては、書字における右利きと左	○学習指導要領もしくはそれに相当する指南書	○望ましい姿勢や筆記具の持ち方等を提示する図	

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第6章	1. 《オーストラリアの書字教育から得られる示唆》		<p>利きの平等性に立脚し、右手書字、左手書字それぞれの詳細について説明する。</p> <p>[例]</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦左利き者が書字学習を行う際の教室での座席の位置 ◦机の高さ ◦採光の方法 ◦左手で望ましい書字活動を行っている成人からの援助 <p>○左利き者の筆記具の持ち方や望ましい書きぶり、実際の指導方法それぞれに関して、より具体的な示唆を提唱する。</p>	<p>に、左利き者の望ましい鉛筆の持ち方について特記する。</p> <p>○筆記具の持ち方及び用紙の置き方に関する図版は、右利き者と左利き者双方の図をペアの形で提示する。</p>	<p>版の説明には、筆記具を持つ手を「書く方の手」、筆記具を持たずに用紙を押さえる手を「書かない方の手（もしくは紙を押さえる手）」と記し、「右手」「左手」との語は用いない。</p>	
第6章	1. 《フランスの		<p>○学習指導要領に利き手に考慮した文言を記載する。</p>	<p>○右利き左利き双方に対応できる利き手に配慮した教材を提起す</p>		

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第6章	1. 書字教育から得られる示唆		○教科書もしくは教科書に準拠するテキストには、右手での望ましい持ち方を提示するのと同様に、左手での望ましい筆記具の持ち方を提示する。	る。		
第6章	1. アルファベット圏諸国から得られる示唆	○日本でも、右手と左手は「利き手」との観点から平等の関係にあるとの見解に基づき、学習指導要領において、少なくとも、左利きの児童生徒に右手での書字を強いる指導は行わない旨を明示する。	○左手書字とその指導法の詳細については、当該国が具体的に示す要点を参照して、アルファベット書字の場合から日本語書字の場合に置き換え検証し、明らかにする。			
第7章	1. 利き手及び左利き者に関する書字学習の在り				○言語力の育成、文字学習の観点から、漢字圏においても、利き手及び左利き者に関する書字学	

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第7章	1. 方を公的に提示する必要性				習の在り方や指導の方法を検証し、公的に提示する。	
第7章	2. <small>左利き者の書字学習と「利き手」の概念に関する研究</small>	○「利き手」との観点に立脚し、右手と左手は平等の関係にあるとの見解を持つ。	○子供が抱える問題点を議論する際に次の点に着目する。 ◦手、紙、座る姿勢。 ◦書く際の鉛筆の握り方			
第7章	3. 「利き手」との概念に基づく比較教育学と臨床生理学両面からの検討	○左利き者に右手での書字を強要する学習指導はしてはならない。 ○書字に関する「利き手」「非利き手」との概念を前提にして、「利き手」「非利き手」との概念に基づき書字及びその指導に関して考究する。 ○教育場面における書字に関する利き手の「矯正」は不適切で	○脳機能を重視した際の非利き手を用いた行動の是非は、教育場面における書字活動とその他の場面での活動で違えて考える。			○日常の硬筆による書字活動は左手で行うが、毛筆のみ常時右手で扱う左利き者が存在するとの実態があることを把握する。 ○上記の書字者は、「硬筆と毛筆は全く他のものであり、自分には毛筆による書字学習は硬筆による書字力の基礎として寄与しない」と実感して

章	名	目標研究	教育内容研究	教材研究	カリキュラム研究	学習者研究
第7章	「利き手」との観念に基づく比較教育学と臨床生理学両面からの検討	ある。				<p>いるとの実情に関して理解する。</p> <p>○教育場面においての書字に関わる利き手の「矯正」は、右利き者と左利き者での学習への負荷の程度が変わるために、学習の平等性を欠く。</p>

(2) 研究の方向性及び方法に関するカテゴリーごとの提起

「表1」に基づき、日本での左利き者の書字教育に関して必要な研究の方向性及び方法を、「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」「学習者研究」のカテゴリーごとに提起する。

① 目標研究

はじめに、利き手及びその変更に関する問題は脳のプログラムと直接かつ密接に関わるとの理解のもと、利き手に関する問題において本当に変えていかなければならないものは何であるのかを熟考する必要がある。少数派とされる左利き者が右利き者と変わらない日常生活を当たり前で過ごせるよう、日頃あらゆる場面において様々な方策を講ずることが求められる。

その中でも、特に、教育場面における書字活動においては、第一に、脳生理学、脳活動の観点から検証考察した結果として、非利き手での書字は望ましいものではないことを前提として遂行する。さらには、「利き手」との観点に立脚し、右手と左手は平等の関係にあるとの見解を認識した上で、書字に関しては「右手」「左手」といった概念ではなく、「利き手」「非利き手」との概念を堅持に持つ。「利き手」「非利き手」との概念に基づき書字及びその指導に関して考

究する姿勢は必至のものとなる。

また、国語科における言語力の育成に着視した場合、その一領域である書写においては、先述の「利き手」との観点から右手と左手の平等性に基づいて、利き手にまつわる書字学習の在り方及び指導の方法を何らかの形で提示してしめるべきである。日本では、学習指導要領において、少なくとも、左利きの児童生徒に右手での書字を強いる指導は行わない旨を明示する。

これらの提案の根底には、教育場面においての書字に関わる利き手の変更（「矯正」）は不適切であるとの確たる考え方が存在する。左利き者に右手での書字を強要する学習指導はしてはならない。

② 教育内容研究

学校を含む社会及び日常生活は、右利き者が生活しやすい形態にできているとの実状に対する理解に努め、左利き者の不便さが回避できる工夫をする。

その中でも、左利き者のための、左手での望ましい筆記具の持ち方をはじめ、左利き者に有用な書字学習の在り方についての検討は必須であり、また、それらに関する具体的な方策が、右手での場合と同様に公的な形で明示されるべきである。

「目標研究」に関してと同じく、「教育内容研究」の観点からも、学習指導要領に利き手に考慮した文言を記載することが求められる。また、その具体的な示唆を教科書もしくは教科書に準拠するテキストにおいて提示する必要がある。

この「具体的な示唆」に含まれる内容には、左利き者の筆記具の持ち方や望ましい書きぶり、実際の学習指導方法等が挙げられる。筆記具の持ち方に関しては、右手での望ましい持ち方を提示するのと同様に、左手での望ましい筆記具の持ち方を提示する。

左手書字とその指導法の詳細については、本論考で研究対象としたアルファベット圏諸国が具体的に示す要点を参考に、アルファベット書字の場合から日本語書字の場合に置き換えての検証を試み、明らかにすることが必至となる。その際、書字指導に際しては、「目標研究」でもまとめた、書字における右利きと左利きの平等性に立脚し、右手書字、左手書字各々の詳細について説明するようにする。一例として、本論考にて比較対象としたアルファベット圏諸国の

在り方から確認できた、左手書字とその指導法の詳細な観点について列挙する。

○左利き者の書字活動や書字場面には、右利き者に比して多くの文字が書きにくい要素を伴うため、学習指導者には、次のような、より適切な理解と配慮が求められる。ただし、これらの中には、左利き者に限った要件ではなく、利き手に関係なく学習者全員に共通する要件も含まれる点に留意したい。

[例] ◦机や椅子の的確適切な高さ

◦書字者が机や椅子に座る位置

◦書きやすい筆記具の具体的な種類

◦書字者の体の位置と用紙を置く位置との関係

◦書字者が書きやすくなるための用紙の傾け角度

◦右手（＝文字を書かない手、用紙を押さえる手）の位置

◦左利き者と右利き者が隣同士に並ぶ場合の座席の位置関係

（それぞれの書字する手腕(左利き者の左腕と右利き者の右腕)がぶつからないようにする)

◦書字学習を行う際の左利き者の教室内における座席の位置

（教室内において左利き者が座るのに適切な場所）

◦照明に関わる配慮（採光の方法）

○実際、左利き者の書字指導を行うにあたっては、概念的抽象的な指示でなく、具体的でわかりやすいポイントを提示する。

[例] ◦筆記具の具体的な持ち方

◦左利き者自身が、書字している最中に自分の書いている文字（＝筆記具の先端部）を見ることができる、筆記具を把持する指の、筆記具先端からの適切な高さ。

◦望ましい筆圧や握圧のかけ方

◦横書き書式において、左から右へ無理なく書字するための工夫。

◦円運動を含む文字を反時計回りに書ける（＝左利き者には書きにくい方向への動きを含む文字を書きやすくする）ようにするための方策。

◦鏡文字（反転文字）を書く学習者への対処方法

◦実際に左手で望ましい書字活動を行っている成人からの援助

これらの例示の中に、「左利き者には書きにくい方向への動きを含む文字を書きやすくする」ことへの具体的な方法の提示が求められているが、日本語（漢字や仮名）の場合、特に、横画を書く際に代表される動き、すなわち、左利き者が横画を書く際に「押す」動作となるところを「引く」動作に変容させるための方策を示す必要がある。そのための工夫の一つが、この後の「教材研究」でも示す用紙の置き方に関するものである。

なお、文字は右手で書きやすい構造や運筆になっていることへの理解を促すために、試みに右手での書字を体感させてみるのは一案であるが、それをきっかけに右手での書字の定着を強要するのは避けるべきである。また、脳機能を重視した際の非利き手を用いた行動の是非は、教育場面における書字活動とその他の場面での活動で違って考える点に留意する。

③ 教材研究

「目標研究」や「教育内容研究」に記した内容と重複するが、「教材研究」に関しても、本論考で研究対象としたアルファベット圏諸国の例に倣い、日本においても、学習指導要領の解説や書写用教科書、もしくはそれに準拠するテキストにおいて、鉛筆の望ましい持ち方を掲載するページに、左手での望ましい筆記具の持ち方の図版を右手での望ましい持ち方の図版とペアにして提示する、左利き者の望ましい鉛筆の持ち方について特記する必要があると考える。

ところが、日本においては、現時点で、左利き者の望ましい鉛筆の持ち方に関する詳細が研究途中の段階にある。ただし、本論考で比較研究の対象とした国全てにおいても、左利き者における鉛筆の望ましい持ち方の詳細、すなわち、左利き者にとって望ましい、鉛筆の具体的な持ち方は、公的に定義（明文化）されていない。しかし、アルファベット圏諸国の **Handwriting** のテキストには、鉛筆の持ち方の図版（イラスト）が、用紙の置き方に関する図版（イラスト）とともに、右利き者と左利き者双方の図をペアにした形で提示されている。

研究結果が確定していない段階で、左利き者の筆記具の持ち方に関して、公的な場面で具体的に提示することには疑念を抱く。一方で、イギリスをはじめとするアルファベット圏諸国における、左利き者の書字に関わる課題に対峙して、その多様性を認めながら、具体的な示唆をなるべくわかりやすく提唱しよ

うとする姿勢には学びたいと考える。なぜならば、たとえどんなに些細な内容であっても、左利き者にとっては、すなわち、現実かつ日常の話として、左手書字の課題に向かい合っている児童生徒や保護者にとっては、よりわかりやすく具体的に文言が提起されるだけでも、安堵感を得られるからである。この点において、左利き者の書字教育に関する方策を講ずる、換言すれば、左利き者の書字教育に関する不安要素を軽減する方策を練ることは肝要になる。

また、左手書字者が効果的な書写学習を行う要件として、紙の置き方に配慮することは有効な一方策になる。中でも、使用する紙を書字者の体の中心から左側へずらす置き方は、書写学習延いては文字学習との観点から、毛筆書写においても硬筆書写においても有用に働く可能性が高い。さらには、硬筆で書字する場合よりも、毛筆、特に大筆で書字する場合の方が、文字の形状、用筆、字形に、紙の置き方の違いが強く反映されやすい。

紙に関する考慮の一方で、筆記具、特に毛筆に関しても、左手書字者に特有な課題への配慮を要すると考える。日本の文字（漢字や仮名）自身が、例えば、右上がりを伴う漢字（楷書）の横画や平仮名に多出する右回転等、左手では書きにくい要素を有する上に、左手書字者は、横画や右払い及び曲がりの部分を、右手書字のように右へ引く動作ではなく、左手書字に特徴的な、右へ押す動作へと変化させて書くために、毛筆を用いると、穂先がバラバラとなってかなりの書きにくさが生じる。先述の紙の置き方に関する工夫は、紙を書字者の体の中心から左側へずらすことで、左手で毛筆を右へ押す動作を、右へ引く動作に変えるものである。ここで、毛筆そのものに着目した場合、各文具メーカーでは、例えば、毛筆を執った際の筆軸の角度を変化させ、始筆部での穂先の入筆角度を、右手書字での入筆角度と同じ角度に変容させる補助器具等を考案する向きもある。右手書字による毛筆の動きに関しての理解が促せる教具となれば用いる意義は大きいですが、補助器具の使用がかえって字形の理解等に支障を来す要因となる可能性があるのならば、慎重な判断のもとでの使用が必要であろう。

なお、アルファベット圏諸国の在り方に模して、文字学習入門期の教材について、左利きの児童が利き手に関係なく用いることができる教材を設ける工夫や、右利き者左利き者双方に対応できる、利き手に配慮した教材を提起する方法の検討も望まれるところである。

④ カリキュラム研究

左利きの児童生徒への書写指導において最も重視すべきことは、字形や筆順、運筆といった文字の有りようではなく、「左利きである」という児童生徒の実態である。右利きの論理を前提とする文字構造や運筆ありきの書写教育ではなく、まずは、左利きであることを尊重し、左利きの児童生徒が無理なく書字に臨めるよう、左利き者の立場に立った書字及びその教育の在り方を探求していく姿勢が求められる。

これまで「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」の中にも既述したが、左利き者の書字指導に関するカリキュラム内容を、学習指導要領及びその解説や書写用教科書に記載することは必須の事柄となる。言語力の育成や文字学習の観点から考察しても、日本のみならず漢字圏において、利き手及び左利き者に関する書字学習の在り方や指導の方法を検証し、公的に提示する必要がある。

その際、例えば、望ましい姿勢や筆記具の持ち方等を提示する図版の説明には、筆記具を持つ手を「文字を書く手」、筆記具を持たずに用紙を押さえる手を「紙を押さえる手」等と記して、「右手」「左手」との語は用いない方がよいと考える。

⑤ 学習者研究

利き手は、それぞれの発達段階における各人の自然な姿を尊重すべきであり、その変更に関しても、保護者や周囲の意向ではなく、本人の意思を重んじるべきである。このことは、利き手は脳機能と密接な関係にあるとの根拠に基づくものである。左利きの児童生徒に右手で書字させる指導は行わない。教育場面における書字に関わる利き手の変更（「矯正」）は、右利き者と左利き者での学習への負荷の程度が変わってしまうために、学習の平等性を欠くからである。

さらには、日常の硬筆による書字活動は左手で行うが、毛筆のみ常時右手で扱う左利き者が存在するとの実態があることを把握する必要がある。当該の書字者は、「硬筆と毛筆は全く他のものであり、自分には毛筆による書写学習は硬筆による書写力の基礎として寄与しない」と実感しているとの実情に関しても理解を要する。

綴章

1. 研究の成果

本章のはじめに、「序章 2.(1)」に記した本研究の目的に基づいて、本研究の成果をまとめる。

- 利き手及び左利き者の書字に関する研究を多角的に行うための基礎研究、すなわち、医学（生物学・生理学）や心理学の分野における、利き手及び左利きに関する学際的文献を渉猟整理し、関係学問領域の成果を援用することを通して、左利き者の書字教育研究における課題の視点を明確にした。
- 「利き手」との観点からの右手と左手の平等性に基づく、学習者（左利き者）の多様性に応じた学習指導の方法を探求し、その具体的な方策について明示した。

本論考では、まず、「第1部」で、医学（生物学・生理学）や心理学の分野における、利き手及び左利きに関する先行研究について考察した上で、教育及び学習者としての観点から左利き者の書字について検討することで、利き手との平等性に立ち、左利き者が無理なく書字に臨めるように、学習者の多様性に応じた学習指導の在り方を探求する必要性とその具体的な方策について考究した。

その上で、インクルーシブ教育やSDGsの視点に則り、IoTやAI等に代表される最新テクノロジーを活用する視座から、利き手に関して各人の脳機能が活かされる書字活動の在り方に関して講究することが必定となる点を論述した。

医学的・心理学的な論拠をふまえれば、書字における右手の優位性を理由にして、利き手を変えるとといった、一番大事な脳の働きを無視するかのような方策、つまり、左利きの学習者に右手での書字を定着させるよう強要するのは避けるべきだと考えられる。

世界の言語において、その文字や書式は、大抵の場合右手での書字を前提としているため、右手の方が文字を無理なく構成できる上に、字形も整えやすく、書字しやすいのは確かなことである。特に、整った楷書の横画は右上がりになり、平仮名は右回転の文字が多いことから、左手で日本の文字を書字するが不便なことは事実である。また、左手で毛筆を扱いにくいのは、横画、及び右払いや曲がりの部分を書く時に、右手であれば筆を右へ引く動作で書けるものを、左手では筆を右へ押す動作に変わり、毛筆の穂先がバラバラになるからである。

しかし、左利きの学習者への書字指導において、最も大切なのは「左利きである」という学習者の実態である。利き手やその変更に関する問題は、脳のプログラムと密接に関わることを認識し、「右利きの論理ありき」の学習指導ではなく、左利きの学習者が無理なく書字に臨めるように、左利きの学習者の立場に立った書字およびその学習指導の方法を探究することが求められている。

左利き者の書字指導に関する詳細が明確になっていない中、左利き者が無理なく書字するための要件に用紙の置き方を挙げた上で、左利き者が書字する際用の紙の置き方に関して具体的な方法を提示した文献に、箱崎総一編『左きき書道教本』がある。当該文献において、左手書字に特有な、横画に関する問題を合理的に解決する方策に基づき紹介された用紙の置き方の中でも、特に、用紙を体の中心から左側へずらす置き方は有効に働く可能性が高いことから、通常通り用紙を真っ直ぐ体の真ん中に置く方法に加えて学習者に提示し、学習者自らが自分に合った用紙の置き方を選択してみるのも一案かと考えられる。

○比較書字教育研究の意義に鑑みて、左利き者をめぐるアルファベット圏での書字教育の実状を明らかにした。

「第Ⅱ部」では、比較教育学の見地から、日本と同じ漢字圏である中国や韓国においての、左利きの児童生徒への書字学習及び指導に関して概観した上で、英語ないしはアルファベット圏の国々においての左利き者をめぐる書字教育の実状について考察することにより、日本における左利き者の書字教育に寄与できる詳細な観点を把握することに努めた。文字体系の違いを超えて遂行する、「手で文字を書くことに関する教育」にまつわる比較研究には、漢字圏においての視点だけでは捉えきれない事象や内容が内包されている。このことは、例えば、Gwen Dornan (2007). *Writing Left-handed... ... Write in, not left out.* The National Handwriting Association. に記された、右から左へと読むアラビア語を書く右利き者に、左利き者が英語を書字する場合と同一の問題が生じるのではないかとの予測のもとに比較を試み、英語を書く左利き者への方策を模索した姿勢に通じるものがある。比較教育研究の意義を改めて痛感している。

○比較教育学の見地からの、日本における左利き者の書字教育に寄与できる

観点を把握し、左利き者の書字教育研究に必要な分析視点を整理した。

○文化的な制約等乗り越えて教育を向上させる姿勢をふまえて、左利き者の書字教育の在り方を大局的な着眼点から展望した。

「第Ⅰ部」と「第Ⅱ部」を総括する「第Ⅲ部」では、まず、アルファベット圏諸国における左利き者の書字教育の在り方から、日本における左利き者の書字教育に寄与できる観点の把握と、本論考での課題に必要な視点の整理に努めた。

さらには、教育の質的向上を図るために、教育文化論としての、文化的制約等をも乗り越えた左利き者の書字教育論が必要であることに鑑み、書字マイノリティの観点から、左利き者の書字学習と特別支援教育における書字学習に通底する考え方について追究した。

これらの考察をふまえて、日本での左利き者の書字教育に関して必要な研究の方向性及び方法を、「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」「学習者研究」のカテゴリーごとに提起した。

2. 研究の課題

続いて、本研究の課題に関して述べる。

「第2章」で考察した箱崎考案の「左きき筆法」の普及と実践に尽力した、元小学校教諭の細川芳文は、次のように語っている¹。

「左ききの子どもだけを個別に指導することは絶対に避けてほしいものです。」

「教室では右利きの児童と同じ環境の中で、『こうして書いてごらん』とさりげなく教えることが大事です。」

「まずは、使いやすいほうの手の能力を伸ばす意識を持たせながら指導しましょう。」

「やはり児童には「まず自分で考えてみる」という意識を持たせ、それを可能とするだけの時間と心の余裕を持たせることが、教師を含めた大人の側の課題ではないでしょうか。」

また、大路は次のように述べている²。

¹ フェリシモ左きき友の会&大路直哉『左ききでいこう！—愛すべき21世紀の個性のために—』（フェリシモ 2000）pp.71-72.

² 大路直哉『見えざる左手—ものいわぬ社会制度への提言—』（三五館 1998）pp.177-178.

「もはや、右利きが、右手で書いても上手に書けないと悩む時代だ。「左手だと上手に書けない」という固定観念じたい、ふりほどく時期にさしかかっている。だからこそ、左利き児童のための指導指針を確立する必要がある。今後も左利きは少数派であるとしても、これまで矯正されがちだった行為に左手使用の波が、もうすでに押し寄せているからだ。」

「子どもたちの未来は子どもたち自身のものだ。だからこそ、あるがままの利き手を使う自由が、子どもたち自身にあってしかるべきである。そのためには、家族をはじめ社会のさらなる意識変革と、左利きを個性としてはぐくむための環境づくりが必要だ。」

利き手に関する無理解や、「日本の文字は左手だとうまく書けない」といった類いの固定観念等が、左利き者の心理的なストレスやそれに付随する諸問題を引き起こす要因となる。また、少数派とされる左利きの児童生徒は、書字に伴う周囲との違和感を抱きやすく、更には、「矯正」によってその思いが簡単に劣等感と化してしまう虞もある。「手は「外側に飛び出た脳」³との言葉を改めて認識した上で、利き手の違いも個性の一つとして尊重し、児童生徒の多様性を理解して、その状況に合わせた学習指導法を検討していく姿勢が望まれる。

新しい元号のもとで、新しい学習指導要領が順次実施となる。この学習指導要領には、小学校国語科書写で、低学年における水書用筆等を用いた運筆指導の工夫に言及する文言が、日本の学習指導要領史上初めて提示された。左利き者の書字教育に関しても、本論考で考察した諸国での在り方に倣い、学習指導要領等に公的な形で具体的な示唆を提起する時期に来ているのではなかろうか。

ちなみに、韓国では、2019年発行の小学校第1学年国語科用教科書（国定）において、『国語科教育課程』の「達成基準」に規定されている「鉛筆を正しく持って書くこと」に対応するページに、左利きの児童に向けて、筆記具の望ましい持ち方を教示するイラストを掲載している。家庭経営及び家族・家庭生活教育を専門とする信州大学の鄭暁静によると、韓国教育部発行の家庭科教科書に関する教師用指導書には、韓国における小学校家庭科での、左利きの児童に

³ 坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の“性格”と“クセ”』（日本実業出版社 1998）p.21.

関しての最新研究（例えば、運針指導や包丁の扱い方等）が掲載されているという。

本論考は、左利き者の書字に関して、医学（生物学・生理学）及び心理学と、比較教育学の視点からの諸文献の考察に基づいた基礎研究である。今後は、今回の試論を臨床的に検証していく必要がある。また、各研究分野と連携し、巨視的な理論に基づいた考察も要すると考える。

なお、本論考では、英語ないしはアルファベット圏の国々における左利き者の書字教育に関して比較考察することに重きを置いて論を展開したため、左利き者の最も大きな関心事といっても過言ではない、毛筆を用いた書字の学習内容及びその指導法については詳しく言及しなかった。日本及び漢字圏の特有な筆記用具として毛筆が存在する。「第3章」で述べた通り、毛筆を手書きの土台とする土壌を持つ日本及び漢字圏での、毛筆の手書き文字への影響は計り知れず、この点において、日常の筆記具が硬筆のみの英語ないしはアルファベット圏の国々とは一線を画すところがある。

「第3章」でも記した通り、現在、日本での日常の筆記活動には主に硬筆が用いられている。しかし、日本の文字は、毛筆文化の中で育まれ発展してきたため、毛筆を使って大きく書くことで日本の文字に特有な「はね」「はらい」等の特徴を習得しやすい。日常生活の筆記具として使用される機会が少なくなった毛筆を、書写学習の学習用具として用いる理由はここにある。学習指導要領には「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導」するよう明言されている。

ところが、日常的に左手で書字する左利き者たちからは、左利き者が右手で毛筆を扱っても、学習指導要領がねらう「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養う」形となって寄与しないとの声がよく聞かれる。中でも、硬筆は左手で、毛筆は右手で扱う左利き者からは、「硬筆と毛筆は全くのベツモノである。連動しない。」「右手によって毛筆で文字を書く時は、文字を書いている感覚はない。絵を描く感覚と同じ。」といった実感が寄せられる。

左利き者の右手による毛筆書写は、運動的部分の理解は難しくとも、知覚的部分での理解は促せると考えられる。例えば、収筆部分等について、運動的に

は理解できないないしは難しいが、知覚的には理解できる。左利き者の右手による毛筆書写には、右手で書かれている文字に、ある程度の理解を持つための可能性が大きく秘められている。

左利き者の毛筆学習及びその指導をどのようになすべきか。この課題に関わる基礎研究として、例えば、現代の書写学習が字形と書字過程とのバランスに重点を置いていることをふまえ、「第4章 6.(5)」で述べた、左利き者の書字と筆順とにまつわる研究があってもよい。『左きき書道教本』の更なる検証も含め、左手での毛筆書写の学習の在り方に関しては今後の課題としたい。

[謝辞]

第1章 **第2章**

「第1章 10.」での研究は JSPS 科研費 JP15K04419、JP15H0349801 の助成を受けたものである。

「第1章」「第2章」の執筆にあたり、資料紹介及びご示唆をくださいました大路西哉氏、「第1章 10.」での実験の解析に関してご教授をくださいました齊藤忠彦先生、向山和男氏に感謝申し上げます。

第3章

本章の執筆にあたり、中国語ないしは韓国語文献の邦訳にご尽力とご教示をくださいました、佐藤運海先生と鄭暁静先生に御礼を申し上げます。

第4章 **第5章 2.** **第7章**

「第4章」「第5章 2.」「第7章」での研究は JSPS 科研費 JP15K04419 の助成を受けたものである。

「第4章」と「第7章」における英語文献の和訳及び文意の解釈、並びに、「第5章 2.」の伝語の英訳及び和訳にあたっては、長田哲文先生と Dr Sue Fraser より全面的なご指導を賜りました。衷情を以て御礼申し上げます。

また、「第7章 2.」での文献についてご教授くださいました永松裕希先生、「第4章」「第5章 2.」において研究対象とした国での現地文献蒐集に関してご指南くださいました西一夫先生に深謝申し上げます。

第5章 1.

本章の執筆にあたり、資料の提供とご助言をくださいました、南オーストラリア州 Sandy Creek Primary School (調査当時) の阿部真理子先生に感謝の意を表します。

本学位論文の執筆及び完成にあたり、御指導をくださいました
松本仁志先生に衷心より御礼申し上げます。

〈 参 考 资 料 〉

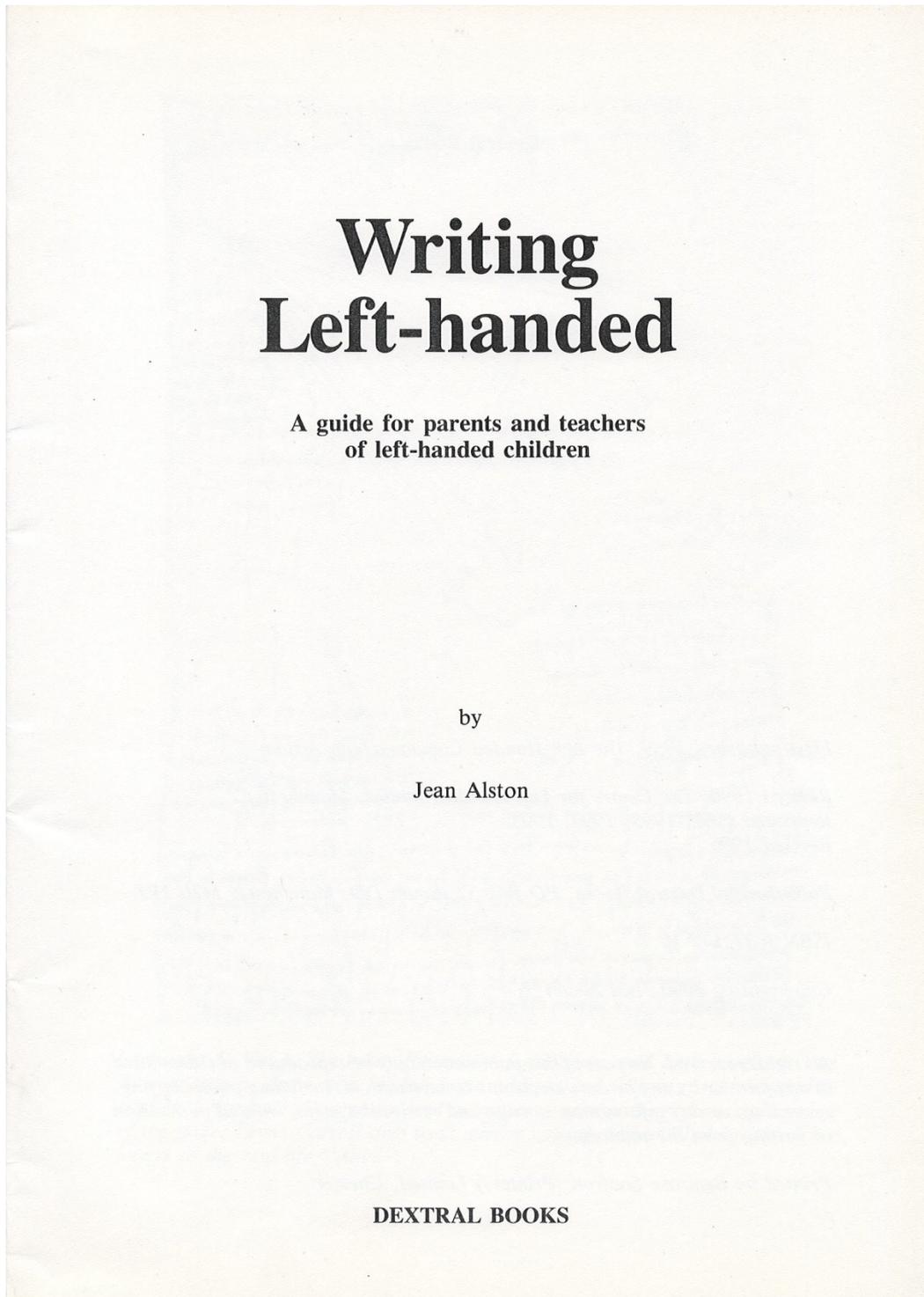
「第4章」で考察対象とした文献において和訳のために抽出した箇所を赤色の枠で囲んで示す。

(1) Jean Alston(1996) : *Writing Left-handed*

A guide for parents and teachers of left-handed children.

Manchester, UK : Dextral Books.

中表紙



Some questions and answers

Q: Should I discourage my child from writing with the left hand?

A: NO. the decision about choice of hand should be left to the child. Handedness is determined by the brain, not by the hand. Left to themselves, most children elect to use their more versatile hand, i.e. the one which helps brain and hand to work together for language and writing.

Q: Do left-handers write more slowly than right-handers?

A: NO: Many left-handers write as quickly, or even more quickly, than right-handers. Some left-handers write slowly but so do some right-handers. On average, there is no significant difference in the speed with which left and right-handers write. Girls, on average, write faster than boys and this would be the case regardless of which hand is used for writing.

Q: How can I help my left-handed child?

A: Remember that door handles, tools and equipment are designed for right-handed people and that he may manage them more awkwardly until he learns to use them. When he goes to nursery class or school, inform the teacher that he is left-handed. Ask if the school has equipment, such as scissors for left-handed pupils.

Q: Do left-handers write less legibly than right-handers?

A: NO. Many left-handed writers are also good writers. However, we live in a society designed for right-handers, so left-handers need particular guidance when they are learning to write.

The rules for left-handed writers will help your child to avoid some common handwriting faults. Figures 1, 2, 3, and 4, show writing by left-handers who have not followed the rules.

If the writing paper is not correctly positioned for left-handed writing, and if forefinger and thumb pressures are not well controlled, letters may become irregularly sloped, as Figure 1 shows.

If the writer is not accustomed to writing on lines and finds pencil control difficult, handwriting may not sit on the lines correctly, as Figure 2 shows.

If the writer cannot see the last word that was written, he or she may compensate by leaving large spaces between words, as Figure 3 shows.

If the writer places the paper as a right hander, rather than as a left hander should, a backward sloping script is likely to develop, as Figure 4 shows.

The thing he can't do is
 fly although he is a bird he is
 a greenish color he has little feet
 and a small beak. he is a very funny
 person (bird) he talks funny!

Fig.1. The handwriting of an eight-year-old left-handed boy, shows variable slant.

Lee Majors (allway) always wears a checked
 shirt and brownish trousers. Once Lee Majors was
 in there own aeroplane and he was with his friends
 when he told thier body and his pater to jump

Fig.2. The handwriting of a nine-year-old left-handed boy shows poor alignment.

I	like	the	part	were?	were
the	little	girl	puts	a	wig
on	it	and	a	hat	that
part	was	very	funny		and

Fig.3. Word spacing is a problem for this left-handed eight-year-old girl. She compensates by making the spaces unduly large.

My best friend is Ellen She
 has medium length dark brown hair and
 hazel eyes. She is ten years old but
 will be eleven on March 2nd.

Fig.4. This ten-year-old left-handed girl has adopted a backward sloping script.

Important principles for teaching handwriting

These are important for teaching both left- and right-handed writers.

1. The correct way to form each letter must be taught from the beginning.
2. It is helpful to teach letters which have small exit strokes ready for when joining can begin.
3. When all letters are correctly formed automatically, letters within words can be joined. The joins within small words such as *the it and he* should be taught first.
4. Lined paper is helpful. Young children will need widely spaced lines. Line widths can then be reduced as the child develops and becomes more able to control letter and word formation.
5. Paper should be placed correctly on the writing surface. It should be held steady by the non-writing hand.
6. Make sure that the child is sitting comfortably, using suitable furniture.
7. Choosing the most appropriate pencil/pen is very important.

Observe the left hander carefully

Is he sitting high enough to see above his writing hand, so that he can see the words as he writes them?

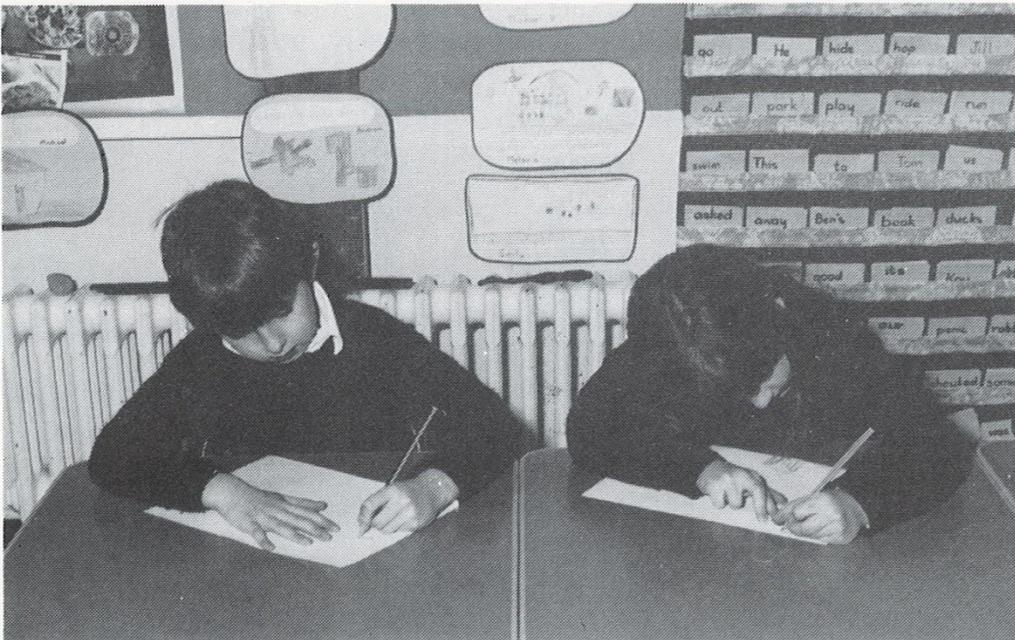
Is lighting correct, so that his body does not cast a shadow as he writes?

Is writing posture correct? Some writers seem to peer closely at their writing. When this occurs they may be attempting to look beneath the writing hand as it writes.

Rules for helping left-handed writers

A Seating

- 1 Table height and seating should be at comfortable heights. Feet should be placed flat on the floor and there should be space for thighs and knees between the seat and writing surface. (Foot rests/blocks can be used for the very small child.) As a rough guide, the writing surface should be about half the writer's height and the seat should be about a third of the writer's height. If possible, the writing surface should slope towards the body. The seat should slope slightly away from the body.
- 2 Most of the shoulder, arm and hand movements in writing will occur on the left of the body midline. Make sure that the left-hander sits with his chair towards the right of the writing surface, leaving plenty of space for writing on the left side of the body.
- 3 The left-hander should not sit on the right of a right-hander when both intend to write. With this arrangement, writing arms will come into contact with each other and restrict movement.



*Two left-handers sit together and their paper is correctly positioned.
The pencil hold of the child on the right needs correction.*

B Paper

- 4 The paper or book should not be too large or too long. The writer needs to be able to reach and write with minimum effort.
- 5 Lined paper always helps the writer to space out his writing. Children should be introduced to lines early in their writing careers.

Line widths can be varied and well spaced lines are most likely to suit the younger child. Not all young children will write on the lines. They may use them to organise their writing and simply write between them.

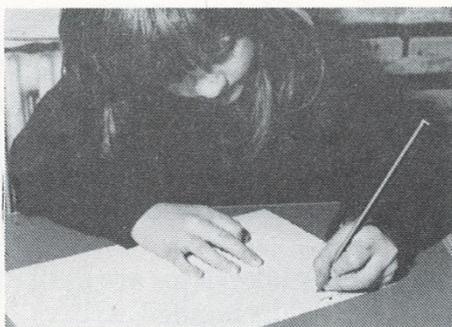
Each classroom should have a variety of lined paper, so that lines of appropriate spacing can be selected for each child.

C Paper position

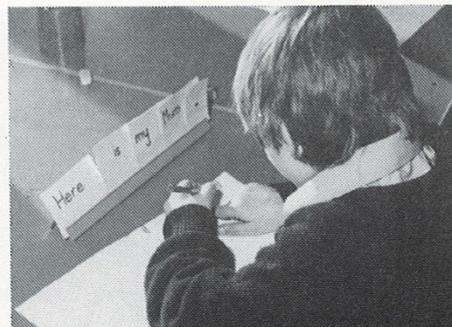
- 6 Unlike the right-hander, the left-hander will need to write towards the body rather than away from it. Placing the paper to the left of the body midline and tilting the top clockwise will give the left-hander the most comfortable writing position.

D Hand and arm positions

- 7 The paper should be held steady by the right hand. Make sure that the right hand is held in the middle or towards the right edge of the paper, rather than beneath the line of writing. Many left-handers obscure what they have written by placing the right hand beneath the words they write.
- 8 The left forearm should remain parallel with the sides of the paper as writing proceeds. The hook (inverted hand posture), common in older left-handed writers, can develop if the forearm is at right angles to the paper edge and the wrist is turned on its side. (A sloping board helps the left hander to maintain good paper position and posture.)



A left-hander with incorrect paper position — it could lead to hooked/inverted hand posture.



a left-hander who cannot see what he is writing, because his hands are crossing over as he writes.

E Writing implements

- 9 The pen or pencil should be held at least two centimeters from the point, so that the writer can see the writing as it is written.
- 10 Help the child select a pen or pencil which moves smoothly across the paper. Left-handers tend to push the pen or pencil across the paper, rather than pull it as right-handers do.

A softer, B, HB pencil, fibre tip or roller ball pen may be helpful, or reverse oblique nib if an ink pen is used. There is a wide choice of writing tools available and each writer should give considerable thought to selection of one which is likely to suit him or her best.

F Grip

- 11 Some left-handed writers press the writing tool heavily on the paper and grip the writing tool barrel very tightly. The following suggestions can help to reduce pressure of grip:

- a) hold the writing tool higher up the barrel. Gripping tightly will then become much more difficult;
- b) place carbon paper between two or three sheets of writing paper and encourage the writer to write without allowing the carbon paper to make its mark on the second or third sheet;
- c) do not be attracted by a pen or pencil which has a shiny or metallic barrel. They tend to be slippery and encourage an even tighter grip.

(Writers who grip the writing tool barrel tightly tend also to press heavily on the writing paper. An attempt to alleviate one problem normally also helps to resolve the other.)

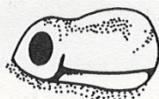
'Grippy' Grip



Tri-Go Grip



Deluxe Grip



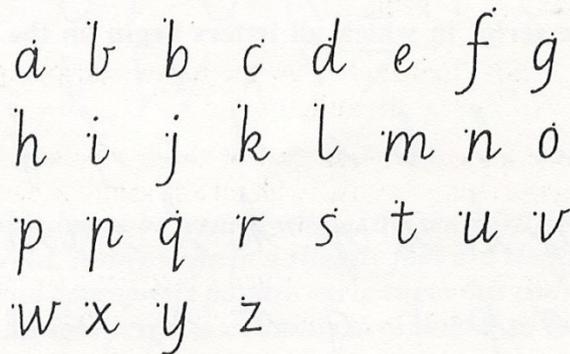
Plastic pencil grips are moulded to the shape of the thumb and index finger. They can be used by both left and right-hander and slip easily onto any standard pencil or ballpoint pen.

Stetro and Deluxe Grips are available for left or right handed writers. Tri-Go Grips also help left handed writers.

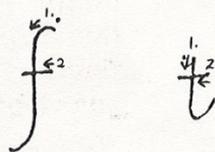
G Writing script

12 A range of handwriting schemes and models is available for schools, and teachers in many infant and junior schools teach handwriting well. The most important aspect to learn is that each letter has a correct starting point and a correct finishing point, so that letters within words can be easily linked together. The handwriting model presented here has a number of characteristics which are likely to be beneficial to the early writer. The first script (Figure 5) shows how each letter can be formed with a simple line. It is slightly forward sloping, so that the writer will be encouraged to develop a flowing hand as writing progresses and the writer becomes more competent. These letters each have exit strokes so that learning to join will eventually be much easier for the young writer. However, *it is very important that all letters should be correctly formed, before the child begins to join letters within words.*

Figure 5. A simple handwriting script for children beginning to write
A small dot shows the correct starting point for the formation of each letter.



Right-handers will cross *f* and *t* in the left to right direction. Left-handers, in contrast, cross these letters more easily in the right to left direction, as shown below.



Once letters are correctly formed, joins should be encouraged as follows:

- Letters which finish at the base line join diagonally to the next letter. Diagonal joins are illustrated in the following words and letter sequences:
an at in it din dim lit tin tim city

Capital letters should be taught as they are needed in pupils' early stages of learning to write. For example, all children will need capital letters in order to write their own names. Gradually, all capital letters will need to be taught. Some children remain uncertain about capital letters for a very long time, often placing capital letters within their general writing. The use of capital letters for proper nouns tends also to be an uncertainty for some children. Teaching capital letters and their use for sentence beginnings and for proper nouns should occur from time to time, and should be regularly revised for Year 2 pupils.

Fig.7. Capital letters suitable for all handwriting scripts

A B C D E F G
H I J K L M N
O P Q R S T U
V W X Y Z

Left-handers should always be treated with extra sensitivity when handwriting models are considered. Many write in a slightly forward sloping script as many right-handers do, and appropriate posture encourages this conventional practice. However, a more upright script is certainly acceptable, so long as legibility is retained.

H Letter reversal and confusion

- 13 In the early stages of writing, some left-handers begin at the right hand side of the paper and write from right to left, usually in mirror writing. This can often be read well through a mirror but does not help the child to make normal writing progress.

It is helpful to place a distinguishing mark at the starting point on the page, for example a red star or even a band of colour down the whole left-hand edge of the paper, so that the child is reminded at the beginning of every line of writing.

- 14 Many writers confuse *b/d* up to six years of age. Some left-handers have particular difficulty in this respect. The following suggestions may help:
- a) Select *b* or *d* and ensure that the writer has the correct movement for the one letter well-established before you attempt to correct the other;
 - b) put the selected letter on the top of each writing page or sheet of paper, with arrows to show the direction of the movement required until the chosen letter is well-learned;
 - c) the rhyme 'd begins like c' can be chanted at regular intervals to teach 'd' formation;
 - d) it is not helpful to teach 'b' and 'd' together as in 'bed', for example. For the child with directional difficulties, this simply adds confusion.
 - e) the child who confuses *b/d* and reverses other letters and numerals beyond the age of six years may be affected by eye movement instability and/or binocular convergence difficulties. These problems may not be identified during a normal eye examination, but occur when both eyes are required to work together in the close proximity vision that is needed for reading and writing. Some optometrists and/or orthoptists are more experienced than others in dealing with children who have reading and writing difficulties. It is beneficial to seek out an optometrist who is a member of the British Association of Behavioural Optometry. Exercises to encourage the two eyes to work together for near vision will usually be recommended.
 - f) letter confusion and/or mirror writing, beyond the age of six years, can also be symptoms of dyslexia or dyspraxia, as well as of difficulties with binocular vision. If the symptoms remain after eye exercises have been followed, the British Dyslexia Association, the Dyslexia Institute, or the Dyspraxia Trust will be able to offer advice.

sl 1 n g l t E n o s B J

Fig.8. A five-year-old writes his name in mirror writing

l b n j	b n b r 1
s p a	b n a n 8
e t a d	s p f e
l c o n	n b c 4

Fig.9. A six-year-old reverses letters and numerals in his spelling test

Fig.10. A left-handed 10-year-old continues to reverse letters in the word 'because'

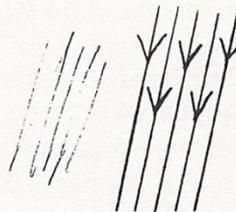
I am intruded in electraety deaw is get to make of the and
a circuit I am intruded in by trying deaw you get to try

I Drawing reversals

- 15** Handedness influences a child's drawing activities before he begins to write, and throughout the school and adult years. The right-hander will draw parallel strokes from right to left, for example, whilst the left-hander will draw them from left to right. This can be observed when the younger child colours in shapes and pictures.

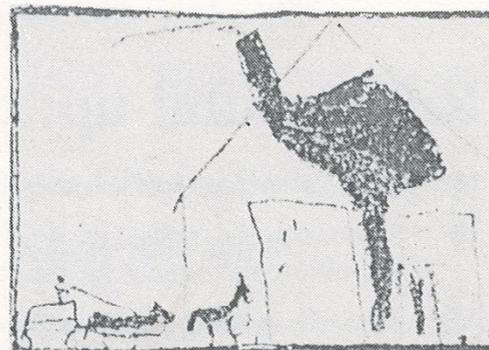
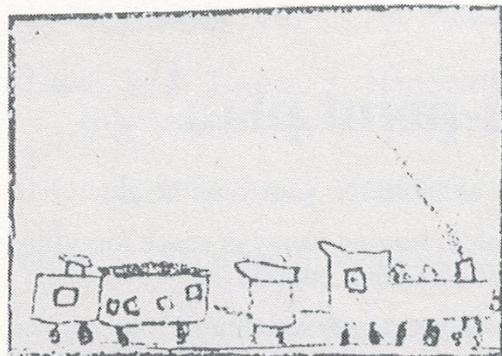


Left-hander's strokes



Right-hander's strokes

- 16** If precision is required, e.g. as in the profile of a face, the left-hander will tend to draw the profile facing towards the right, as in the pictures below, whilst the right hander will draw it facing towards the left.



The engine and the donkey face towards the right in the two left-handed drawings. In right-handed drawings, the details normally face towards the left.

(From E.E. Lord, L. Carmichael and W.F. Dearborn, *Special Disabilities in Learning to Read and Write*, Harvard Monographs in Education, 1925.)

- 17** Symbol reversals, such as ✓ and £ signs ₤ may also appear. This may extend to musical symbols, like the treble clef and the direction of musical notation, such as quavers, semiquavers etc. 12 The latter should be corrected, with patience, for the left-handed child may experience some confusion differentiating between the two directions.

- 18** Recent research by French researchers, Athènes and Guiard shows that right-handers have developed a consistent posture for handwriting by the time they leave primary school. However, even at the age of 11 or 12, the left-hander may remain confused. Far from being confident and consistent about where the writing paper, pen and hand are placed, the inclination still remains to change positions from one writing occasion to the next. Handwriting fluency and body comfort will be best when posture and positioning are consistent and well established. The ten-point plan will help the left-handed child who has problems with positioning and posture.
- 19** Adult left-handed writers fall broadly into two groups:
- a) Those who rotate the paper clockwise, hold the pencil pointing towards the top of the paper and generally adopt a position which is the mirror image of right-handed writers.
 - b) Those who rotate the paper anticlockwise, placing the pencil pointing towards the body and generally adopt a hooked writing position (Inverted Hand Posture).

Right-handers tend to have developed their adult writing posture by the age of 11 years, in contrast to left-handers, who can still be helped to prevent the awkward hooked writing position.

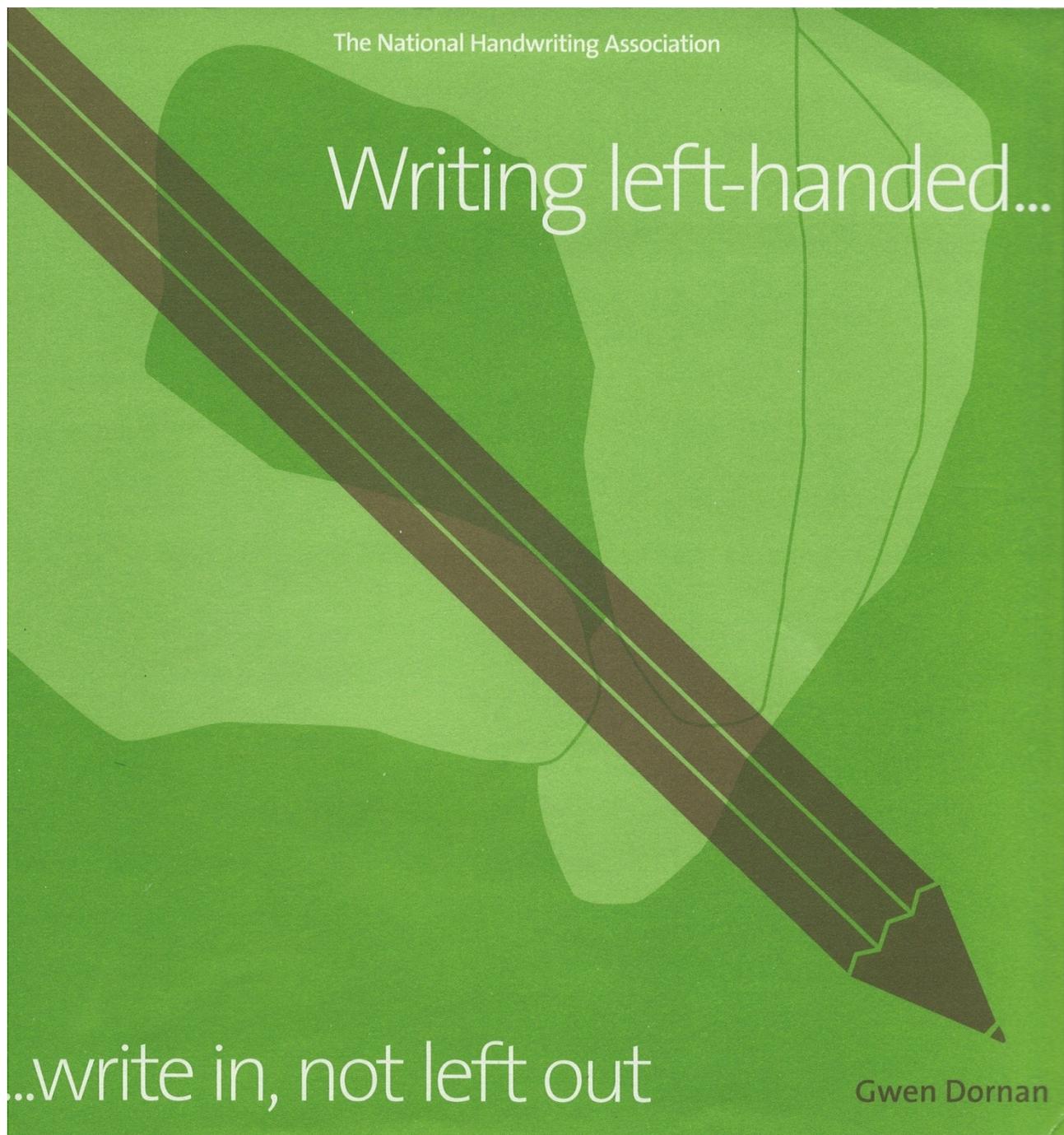
Rules round-up: ten-point plan

- 1** Select a writing surface and chair, suitable for your own height.
- 2** Sit towards the right of the desk or table, leaving plenty of space for writing and elbow movement on the left side of your midline.
- 3** Place the writing paper to the left of your body midline.
- 4** Tilt the paper up to 32 degrees in a clockwise direction.
- 5** Select a writing tool which moves smoothly across the paper.
- 6** Do not select a pen with a metallic and/or slippery barrel.
- 7** Support the paper with the right hand.
- 8** Position the writing tool in a 'below the line' position.
- 9** Keep the writing forearm parallel with the paper edge as you write.
- 10** Hold the writing tool sufficiently far from the point to ensure that you can see what you are writing.

(2) Gwen Dornan(2007) : *Writing Left-handed... ...Write in, not left out.*

The National Handwriting Association.

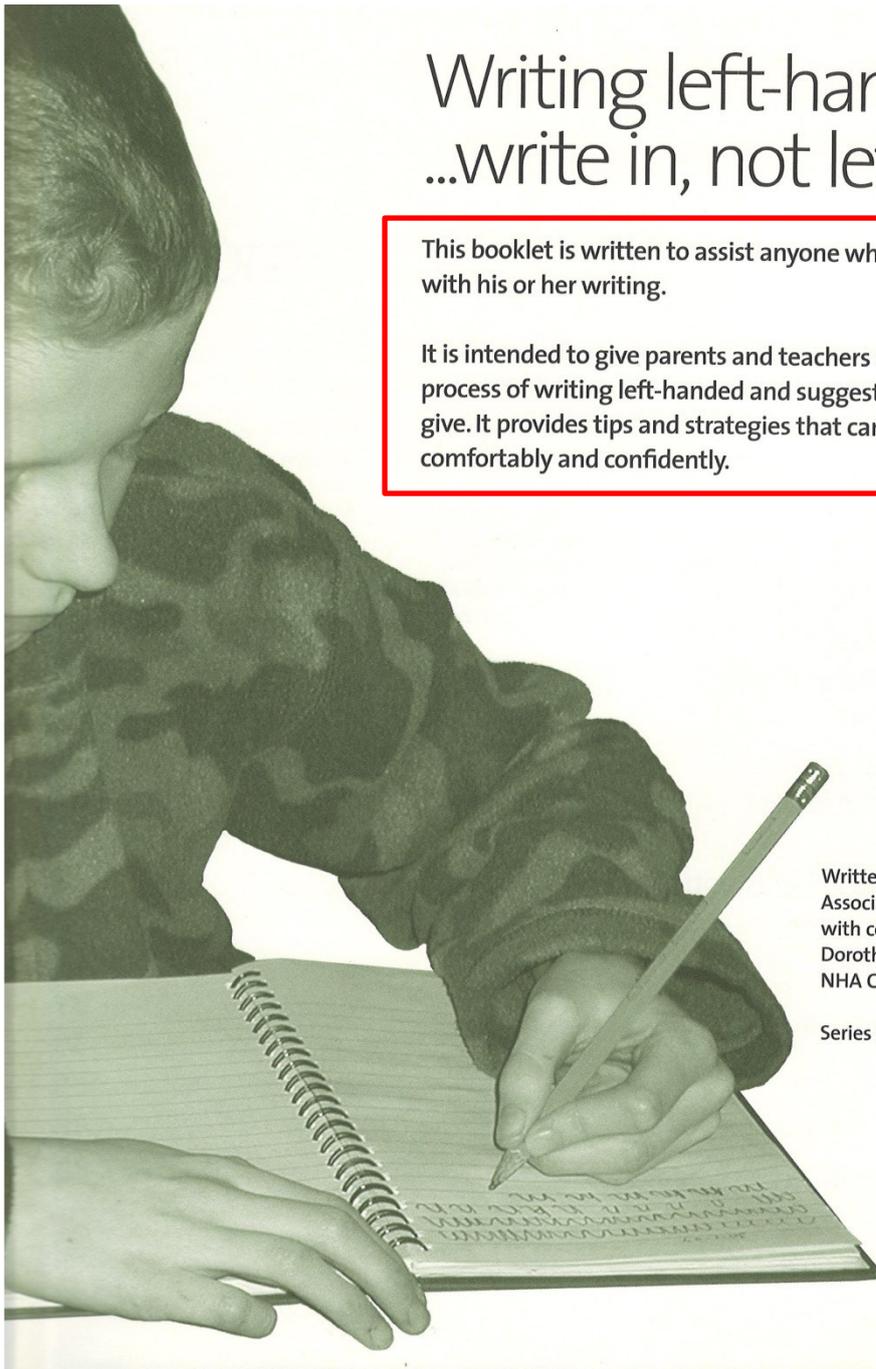
表紙



Writing left-handed... ...write in, not left out

This booklet is written to assist anyone who is helping a left-hander with his or her writing.

It is intended to give parents and teachers an understanding of the process of writing left-handed and suggests practical help they can give. It provides tips and strategies that can help a left-hander to write comfortably and confidently.



Written for the National Handwriting Association by Gwen Dornan with contributions from Sheila Henderson, Dorothy Penso and other members of the NHA Committee.

Series Editor: Beverly Scheib

For simplicity a left-hander has been referred to as 'he' in the text but all content naturally applies equally to boys and girls.

How is left-handedness defined?

To the layperson, left-handers are people who write with their left hand. However, not all of us use the same hand for every task, some using either hand for some tasks (ambidextrous) and others preferring different hands for different tasks. To reflect this variation, researchers often use checklists containing lists of activities such as combing one's hair, as well as writing, to determine handedness.

We have a dominant foot, eye and ear as well as a dominant hand. When a person is left handed and right footed, for example, he may then be described as being "cross lateral" or of mixed laterality. In the 1960s, much was written about mixed laterality. This has proved to be an enormously complex area. The idea that this should become a major focus of attention for teachers and therapists has now fallen by the wayside.

Those working with left-handers may like to be aware that researchers are interested in the possibility that some people use their left hands for writing because of an early change in the brain that switched their hand preference, and so are 'pathological' rather than 'natural' left-handers. In practical terms this means they are basically right-handers who for complex reasons are having to write with their left hand. see Hiscock and Chapieski (2004)

Beauty, as well as speed, sometimes conflicts
with easy legibility.
Fairbanks, 1949.

David Livingstone went to Africa three times and
reported on the wonders of Victoria Falls and the Kalahari

The plan is hot.
Mum has a wig.

I do not have that difficulty with a fountain pen
as the ink will seem to work equally well in
either direction, the problem of the writing

Soaring Heavenwards
Like a great cathedral.

Left-Handed writing comes in a variety of styles & qualities

How many left-handers should a teacher expect in a classroom?

Researchers vary in their assessment of the numbers of left-handers in the population, partly because handedness is difficult to define. One survey found the incidence of left-handedness in the population to be 13% male and 11% female (McManus 2002). However, left-handed children are not equally distributed amongst classrooms: one teacher may have six and another with a similar sized group could have none.

Do left-handers write less legibly than right-handers?

NO. There are few reliable research studies that compare the handwriting of left and right-handers but those that do exist show no difference between them. For example, a recent Greek study compared the handwriting of 182 children, aged 7 to 12 on 3 tasks: copying, writing to dictation and spontaneous writing (Vlachod and Bonoti 2004). As we would expect, children wrote more legibly and faster as they got older but there was no difference between the left and right-handers on any task.

Do left-handers write more slowly than right-handers?

NO. A recent survey of handwriting speed in children aged 9 to 16 showed no difference between left and right-handers at any age (Barnett et al 2007). Girls on average write faster than boys and this is the case for both right and left-handers.

When do children develop handedness?

Although handedness, or manual asymmetry as it is sometimes called, has been reported in very young infants, many children show considerable variability for several years. In some cases, for example, a child will show a preference for one hand on a particular activity, which disappears for a while and then reappears and stabilises. By the time the child starts 'proper' school (in the UK this is at age 5), however, the vast majority will use one hand consistently. Now that so many children attend playgroups and nurseries, teachers often want to know what to expect between the ages of 3 and 5 and are relieved to find that it is not unusual for 3 to 4 year olds to show no distinct preference.

Should children be discouraged from writing with the left hand?

NO. The decision about choice of hand should be left to the child. Handedness is determined by the brain. Left to themselves most children elect to use their preferred hand i.e. the one that better helps brain and hand to work together. Many left-handers can tell tales of their unhappiness and lost confidence when they were made to use their right hands by some well-meaning adult. It is hoped extreme measures such as tying the left hand behind the back have disappeared but there are still small numbers of left-handers being discouraged from using their naturally preferred hand. This is even more likely in cultures in which the left hand was traditionally not permitted for eating and other activities.

Writing with the left hand is different

A left-hander has to learn to make many movements that are not natural to him in order to write in English. Writing is therefore a more difficult task for him.

A left-hander is likely to:

- Make a horizontal line from right to left, so is less comfortable with a system of writing that moves from left to right
- Draw a circle in a clockwise direction and therefore might find writing the rounded letters, a d g q o e c, more difficult because they need to be made in an anticlockwise direction
- Make more pushing movements than a right-hander when writing and these are more difficult to control than pulling movements
- Be unable to see words as he writes them because they are obscured by his hand or pencil/pen
- Smudge his work with his hand as he writes. This not only spoils the immediate writing but there are likely to be further smudges from an inky hand onto the paper. This can be demoralising for a writer.

Support is particularly vital in the early stages when the left-hander is working out his writing strategies. A glance at many of the websites for left-handers where information is swapped and discussed (see list on p. 44) will reveal that there are almost as many strategies for writing as there are left-handers and what may be a good solution for one will not necessarily be right for another.

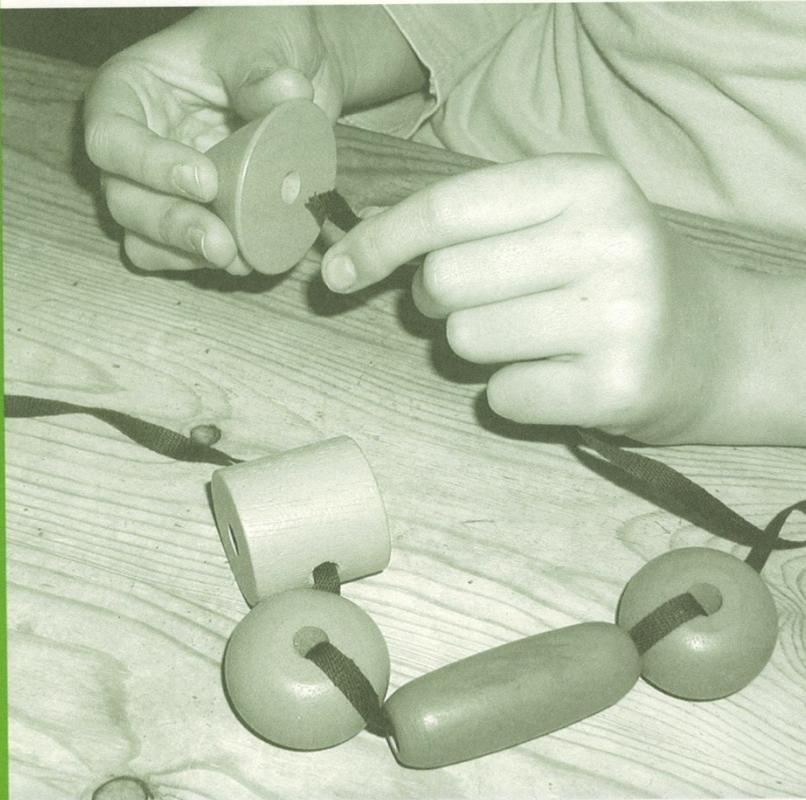
The left-hander needs sympathetic guidance to find the best solution for him.

Preparing for writing

Activities that develop fine motor skill

There are many activities that children enjoy and are good preparation for the finely controlled movements necessary for handwriting. The list is long and varied and includes sorting, modelling, scribbling,

cutting and the many activities involved in food preparation, such as mixing, sprinkling and rolling dough. Activities that involve holding with one hand and performing an action with the other are particularly useful; for example, screwing, threading beads, stirring.



Handwriting patterns

Pattern making can be great fun for children and practising patterns that mimic the basic movements used in writing are very valuable in establishing the shapes and movements needed for writing letters and words. These patterns can be made with felt pens, paints, large crayons, in paste, sand, foam – or even snow!

Older children also benefit from using them as warm-up exercises, borders or as texture in pictures instead of flat colour, and they can create their own patterns by repeating pairs of letters or short words. When making patterns rather than words, it is easier to establish a rhythm and move the writing tool more freely.

Tip
Once it is clear that a child's preference is for writing with his left hand it will help the development of his writing if he does not keep changing hands when using a writing tool.

Sitting comfortably

Ensure that the writing surface and seating are comfortable.

The choice of a correctly sized table and chair is important and should be reviewed as a child grows.

Ideally:

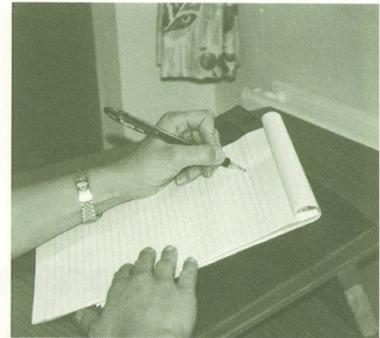
- Feet should be flat on the floor so that the body is stable
- Ankles and knees should be bent at right angles
- Elbows should be bent at right angles when resting on the writing surface
- The chair should be the correct depth with the writer's back supported
- The tabletop should be just above waist level.

It can be difficult for schools to provide correctly sized furniture for each child but at home it is easier to make adjustments using firmly placed seat pads and foot supports as necessary.

It is particularly important for the writing surface to not be too high for left-handers as this can impede free movement of the writing hand and make it difficult for the child to see his work.



The adult-sized table and chair are making it difficult for this girl to write well.



If possible, the writing surface should slope towards the body.

A surface sloping at about 20°:

- makes it easier to see the writing
- improves posture
- makes the writer less likely to develop a hooked hand position.

Take care that an additional sloping surface on top of a desk or table does not make the writing area too high for the seating.

Sloping boards can be:

- purchased
- constructed from a board with wooden supports attached to create a slope of ~20°. If single sheets of writing paper are to be used, the surface needs to be padded – 5 sheets of newspaper finished off with sugar/cartridge paper – or better still, Dycem – will make a surface that is not slippery. (see Wallis Myers, 1987)

I don't like Handwriting because My
 old teacher put me on
 the wrong side so that means
 I sit next to a right hander
 So his right hand hits my
 left hand so I knock my
 Pen over the paper

A left-hander needs plenty of space to his left side as most of the shoulder, arm and hand movements when writing are to the left of the midline of his body. He will be able to write more easily if he sits to the right of the desk.

Look out for bumping elbows. If a right-hander sits to the left of a left-hander when drawing, colouring or writing they may impede each other's movements. The children are often more aware of this problem than the adult(s) in the room and could perhaps be allowed to simply exchange places without having to ask permission.



Tip

Remember the left-handers when considering the lighting of a classroom or home study room. Shadows on a page can be more intrusive than in this picture.



This situation can be seen every day in many schools. It can be easily avoided if the children are allowed to swap their places when necessary.

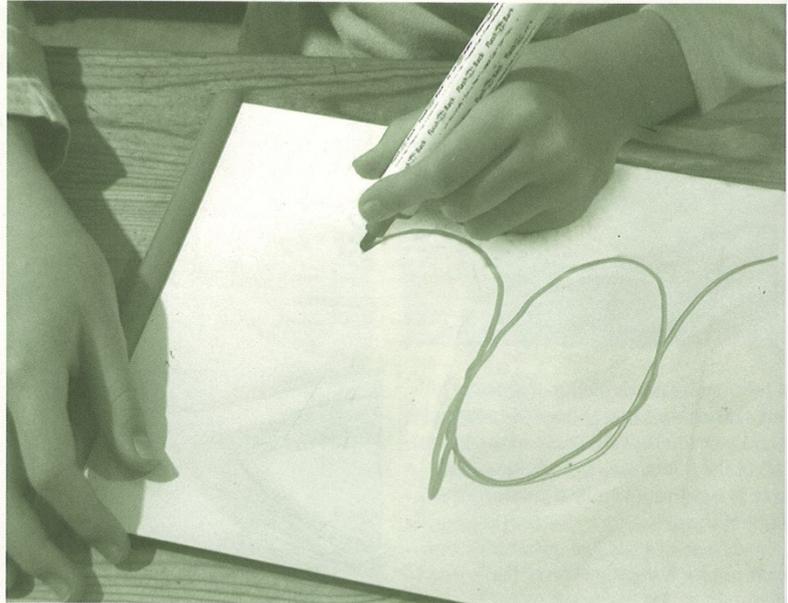
Writing surfaces

Air/sand/water/chalk boards

Initially, letter shapes are best made on a large scale in the air /in sand or foam/ on a wall-mounted chalk or white board and made with hands/fingers/a large paint brush/ etc. so that whole arm movements are possible and the direction and shape of the letter can be understood before writing on paper.

Individual boards with white or black surfaces

These are popular in school and can be very useful for group work but be wary, it is easy for a left-hander to erase marks accidentally with the left arm or hand. To avoid this the board can be rotated 20/30° clockwise, the tool held well back from the point and the writing hand kept below the writing line.



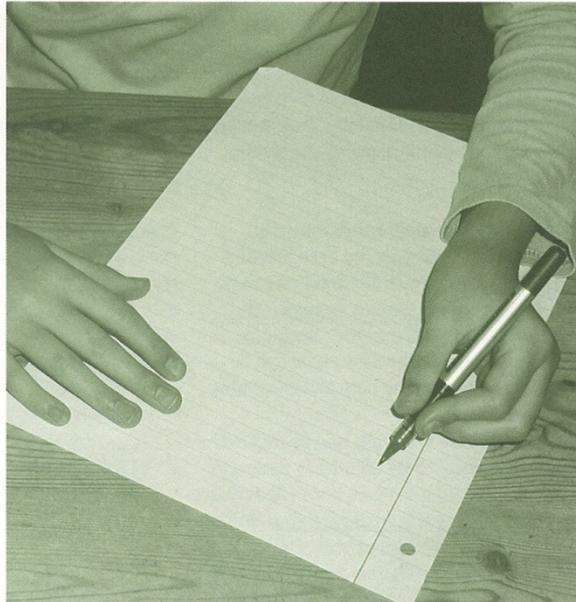
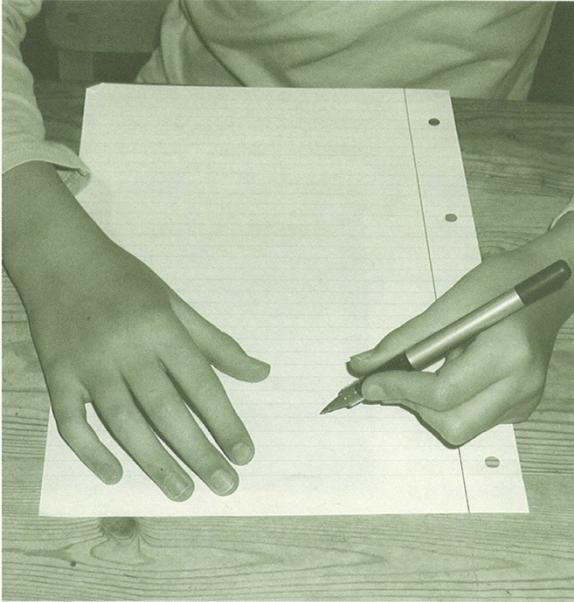
Writing large on any surface is fun and aids flow.

Paper and Books

Paper or exercise books should not be too large or too long. The writer, especially in the early stages, needs to be able to reach and write with minimum effort. A5 landscape paper is a good size for beginning writers.

Place the paper to the left of the centre of the writer's body so that a left-hander will have to make fewer pushing movements across the midline of his body when he

writes. This also allows a freer use of the arm and writing hand and makes it easier to see what is being written. At first, this paper position may feel strange but it is worthwhile encouraging him to become accustomed to it as he will then have much greater freedom of movement.



Rotating the paper gives a clearer view of the writing line.

Rotate the paper 20-30° clockwise. This makes it easier to see the words as they are written and is especially helpful if the writing hand is held below the writing line. A writing mat with the paper position marked can help to establish the habit of putting the paper in a good position. These can be purchased or a child may prefer to make and decorate his own. If the child regularly writes at the same desk or table, coloured sticky tape can be fixed to the surface to mark the best position for the paper or exercise book.

Write on a padded surface such as a book, pad or layers of paper and not on a single sheet. Left-handers often press heavily and a softer surface makes writing more comfortable.

Hold the paper with the right hand to stop it slipping. This helps to keep the body evenly balanced and the shoulders horizontal so that the writer's back is in a more stable position. Take care that the right hand is positioned so as not to obstruct the movement of the writing

hand. This usually means it is better placed above the line of writing.

Paper quality varies. Some exercise books are made of surprisingly poor quality paper that can be rough and impede the easy movement of the pen along the surface. It is worth investing in smooth paper.

Lines

Lined paper helps a writer to organise his writing and his understanding of the alignment of letters. Once children are fully able and confident to create letters using the correct movements, they will be ready to think about aligning the letters appropriately.

Paper with two parallel lines drawn so that each letter 'sits' on the base line and the small letters touch the top line can be helpful. Ideally the spacing between the lines should be suited to the size of the child's writing. Appropriate paper can be easily created with the help of a computer.

Multi-lined paper can be purchased from high street shops and educational suppliers. This type of paper often has 4 'tram lines' with the outside lines in red and the two inner ones in blue. The inner pair is intended to contain the small letters but if the ascenders (tall strokes of **h** and **k**, for example) and descenders ('tails' of **y** and **g** etc) are made to touch the outer red pair the strokes will be disproportionately long. It is preferable to estimate the height of the ascenders as twice the height of the small letters (and treat the descenders similarly) so that the child becomes accustomed to writing letters that are a pleasing proportion.

It is helpful if each classroom has a variety of lined paper for writing on directly or using as an underlay beneath plain paper, so that lines of appropriate spacing can be selected for particular tasks and to suit individual children.



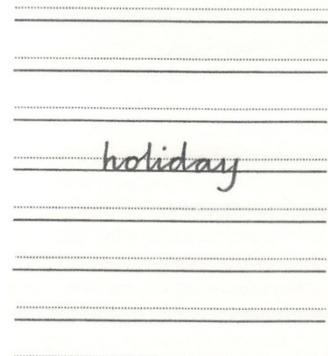
Tip
Note that not all young children will write on the lines. They may use them to organise their writing and simply write between them. However a left-hander who is having difficulty aligning letters and sizing them correctly will find it helpful to write on the lines rather than between them.



The solid lines are 15mm apart and the small letters 5mm tall.



The solid lines are 10mm apart and the small letters 3mm tall.



The solid lines are 8mm apart (the size of commonly-used file paper) and the small letters 2mm tall.

out of the paper comes the hot breath
of the chips. And I shall blow off them
stop them burbling my Lips.

There was a young farmer of Leeds,

who swallowed six packets of seeds.

Note the improvement in this boy's writing when he uses lined paper

Choosing a writing tool

The choice of a pen or pencil is a very individual one.

There are so many writing instruments, especially pens, now available that the choice is bewildering. It is worth encouraging a left-hander to try different tools so that he finds one that best helps him to write easily and well.

A pen or pencil makes writing easier if it:

- Moves smoothly across the paper
- Has a non-slippery surface where the fingers grip (Some pens and pencils have shaped and flexible grips)
- Feels comfortable to hold and move.

Pencils

A standard pencil is HB but a left-hander may find a softer (B) pencil is helpful as it is less likely to dig into the surface of the paper.

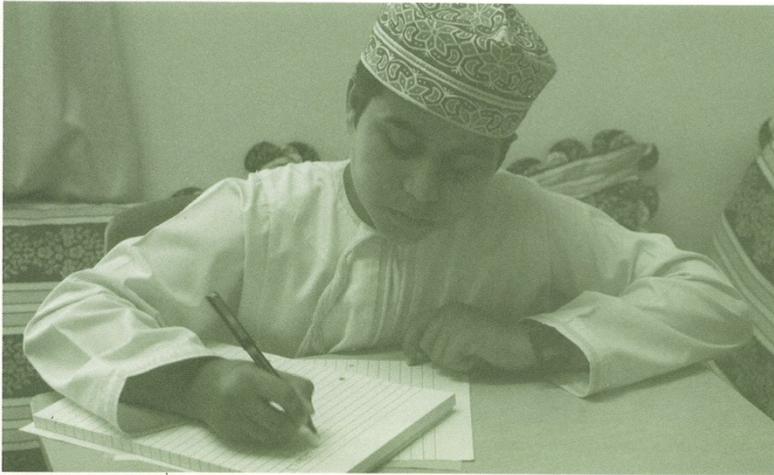
Pens

When choosing a pen the writer needs to consider:

The weight and shape of the barrel. Pens range from short and dumpy to long and slender; some are as light as a feather and others feel quite weighty to hold.

The feel of the pen in the hand. Some pens are specially shaped to help position the fingers accurately and/or have a non-slippery surface where the fingers are placed. These modifications can help the writer to feel in better control of his writing.

The type of pen (fountain, roller, fine-liner, plastic tip etc). Apart from suitability for a particular purpose, pen points vary in the 'drag' they make on the surface. Just as writing on a board with chalk feels very different from writing with a marker pen on a white board, there is a difference in the way pens move across the paper. Writers who prefer a pen that drags a little on the surface and so gives them a little more control of the movement are likely to choose a fine-liner, felt-tip or fountain pen. Those who find the pushing movements of writing left-handed difficult, may prefer a pen that slides along more easily, such as a roller or gel pen.



This boy is right-handed and is writing from right to left, in Arabic, so should encounter the same problems as a left-hander writing in English. However, he looks very comfortable; his paper is placed well to the side and rotated, his arm is parallel to the edge of the paper and his fingers are well away from the point of his writing pen. He is able to see clearly what he is writing.

ease of writing for an individual. It might be assumed that right-handed writers of scripts that read from right to left, such as Arabic, should share the same problems as left-handers writing English but this does not seem to be so. Perhaps it is because the scripts use marks that are more akin to drawing. Or perhaps the clue is in the way most Arabic children hold their pens: they write with their hands below the writing line and hold their tools well away from the point. Either or both of these tips would help many left-handed writers of English.



This pen is shaped to fit a left hand. (Stabilo 'S Move Easy).

A pen or pencil should be held well away from the point (at least 2cm).

This simple instruction can solve many of the difficulties of left-handed writing, as it is far easier to see the letters as they are being written and smudging is less likely. Holding the pen further up the shaft requires good control. A young writer may need encouragement and support to acquire the habit but it is well worth persevering.

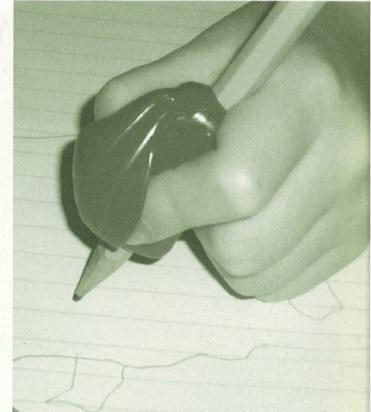
There are aids that help to position the fingers away from the point of a pen or pencil. Many pens now have clearly defined areas where the fingers should be placed. There are also several types of grips on the market that can be placed on pens/pencils to encourage roving fingers to stay in place. A simple grip that helps to prevent the fingers from slipping down towards the point can be made by winding an elastic band round the barrel of the tool at the appropriate position.



A simple means of defining the position of a writer's fingers



This pen is designed to keep the writer's hand well away from the point. (Voropen).



Cross-guard ultra pencil grip



This boy is holding his pen close to the point. Just moving this thumb back from the point would help him to see his writing more easily.



Start right pencil grip



A recommended tripod penhold



An alternative penhold

There is much discussion and concern about pen/pencil hold. The important considerations are that the writer needs to have both control and freedom to perform the complex movements that are necessary to be able to write. Ideally the pen should be held between two digits with a third acting as support – making a tripod. This provides both stability and flexibility.

It is frequently recommended that this tripod should be formed by holding the pen between the thumb and forefinger with the middle finger slightly curled and placed behind the tool to act as support. This allows a wide range of movement without danger of the pen slipping.

Many left-handers use this pen hold with success and comfort and it is a good one to teach to young left-handers when they are beginning to write.

Alternatively the pen can be held between the first and middle fingers with the thumb supporting. This method was researched in the 1950s by Callewaert, a Belgian neurologist, and suggested as an alternative hold by Rosemary Sassoon (Sassoon, 2003). It enables the pen to be held in an upright position, which is necessary for some pens to function properly.

Children often use additional fingers to hold their pens/pencils; some may place the third finger on the top or side of the pen instead of behind it and some may wrap

the thumb round the pen. These pen holds give a varying amount of extra stability but at the expense of freedom. Perhaps these methods are used because the child does not (or did not have, when learning to hold his pen) sufficient maturity and dexterity to cope with the tripod holds.

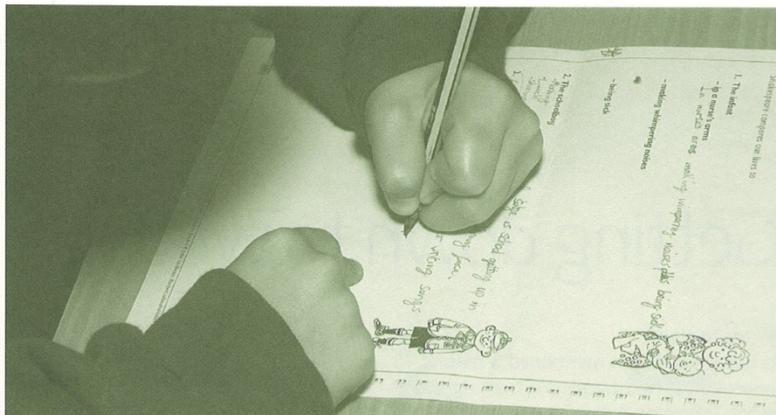


Tip

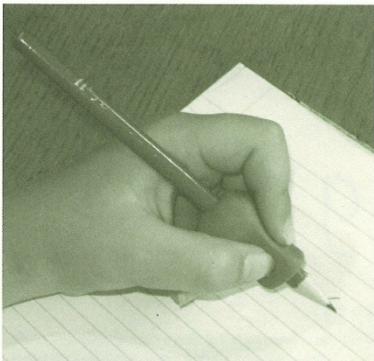
There are many simple games that can help to increase strength and dexterity and make the tripod grip easier. For example, playing jacks, rolling a scroll or ribbon, touching the thumb with each finger of the same hand in turn, twisting the pencil in the hand to use the eraser at the end, finger tug-of-war with string or plastic strip.



The elastic directs the pencil into the angle between thumb and forefinger (Dolphin Handwriter).



The white knuckles indicate that this child is holding the pen tightly.



This grip directs the fingers into a tripod position (Ultra).

Changing a well-established habit is only worth attempting if the student understands the need and is prepared to put in the necessary practice and effort. He will need support, encouragement and praise.

Aids for improving pen hold

There are a number of tools that can help a child to hold a pen or pencil well and these are constantly being researched and improved. Pen/pen grips made of flexible material that can direct the fingers into a tripod hold or keep the pencil positioned in the groove between the first finger and thumb can be very effective aids.

Taking out the strain

Left-handers who are anxious about their writing can become very tense. They often grip their pens tightly in an effort to control their writing and frequently press heavily on the paper. They then find writing very tiring and their hands and arms can begin to ache. Helping a child to reduce this strain will benefit him greatly.

Encourage him to:

Hold the pen/pencil lightly

Pretending the pen is animate and can be hurt if squeezed tightly may be helpful and prevent tension building up.

Avoid pressing heavily

Writing on alternate layers of writing and carbon paper (or something similar) shows a writer how hard he is pressing; he can be challenged to make a mark on as few copies as possible.

Writing patterns can be useful to help to reduce pressure as it is easier to maintain light pressure when making repetitive patterns than when writing words.



Tip

The writer could imagine his pen is skimming the surface like an ice skater or rollerblader.



Tip

Writers could become signed-up members of the unofficial SPCPP (Society for the Prevention of Cruelty to Pens and Pencils!

Getting down to writing

Where to start?

As has already been mentioned, a natural movement for left-handers is from right to left. Therefore, it may take some time before a left-hander begins to write comfortably and automatically from the left side of the page. Placing a coloured line or special mark on the left side can help to direct attention to the starting side. Traffic light spots, green for 'go' on the left and red for 'stop' on the right can help to reinforce the idea of writing from left to right.

Learning to write the letters

The letters of the alphabet can be divided into 'families' according to the movement the pencil takes to begin writing the letter. The Department for Education and Skills and others recommend introducing the letters in groups with one representative letter 'setting the style' for the rest. This makes it much easier for a child to remember the correct way to form each letter and helps to avoid the confusion between **b** & **d**, and **p** & **q**, which is common, especially amongst left-handers.

The illustrations on the right are the groups suggested in the 'National Literacy Strategy - Developing Early Writing' (2000) with a possible 'patter' that could be used with them. When a child meets a new letter for the first time he may well find that he knows how to begin to form it as long as he is told to which family it belongs.



Long ladder letters – l with i u t j y
(Down the ladder and round the corner)



Curly caterpillar letters – c with a d g q o e s f
(Stroke your caterpillar from head to tail)

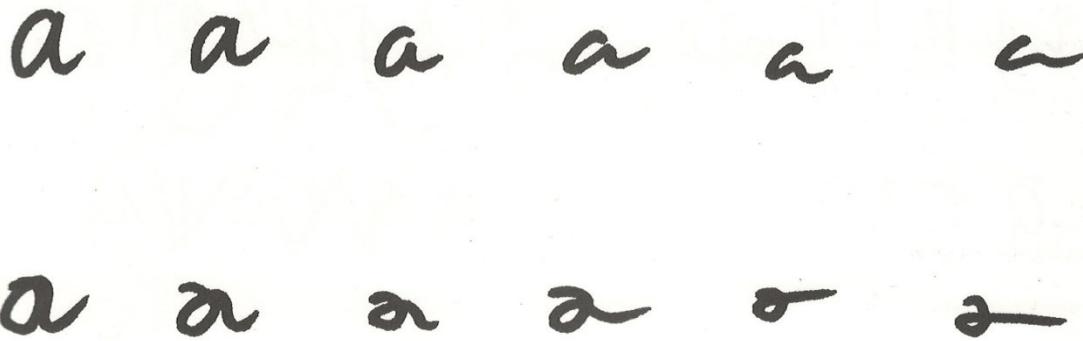


One-armed robot letters – r with n m h b k p
(Down his body and over his arm)



Zigzag letters - z with x v w y k

Letter families



The a's at the top were made in the conventional direction and those at the bottom in a clockwise direction. When they were each repeated at increasing speed the top set remained more recognisable than the lower set.

Letters needing special attention.
 Because a left-hander naturally draws circles clockwise, special care needs to be taken to make certain he learns to make the rounded letters **a d g o c e** in an anticlockwise direction.

It is vital that letters are formed correctly when they are first taught as incorrectly made letters can:

- Be difficult or impossible to join properly. The defects may not be discovered for years and be then difficult to change
- Become totally illegible when written quickly.

Watching a child write is the best method of ensuring that he is using the correct movements.



Capital letters suitable for all handwriting scripts

Joining up

The order and direction of the strokes in forming the capital letters is not as crucial as it is for the lower case as they stand alone and are never joined to other letters. Many left-handers prefer to make the horizontal strokes in a right-to-left direction and there is no disadvantage in doing so.

How a child can learn

As children learn in different ways it is a good idea to use a variety of experiences:

- **Making the movements** - making the letters in the air, on the back of another child, in sand, paste or paint and with eyes closed
- **Verbally describing** how to make letters
- **Watching demonstrations and following arrows** to indicate the correct direction.

Joined writing is speedier than printing separate letters as the pen does not need to be lifted and re-positioned between each letter. (see p30)



Tip

Children should be encouraged to begin to join their letters as soon as they can confidently form each letter correctly.

Left-handers need support and encouragement while learning to join their letters as all joins are left to right movements and therefore more difficult for a left-hander to control than a right-hander.

Diagonal joins. This is the most efficient way of moving the pen from the base of one letter to the top of the next as in:

joins to small letters -

in, up, am,

joins to tall letters -

it, all, the



Tip

Children who have learned their letters ending with a flick will find this join easy to write.

Horizontal joins. Letters that finish at the top, including the cross bar of the letter f, join horizontally to the next letter. (Ensure that o is made in an anti-clockwise direction)

joins to small letters -

or, row

joins to taller ones -

owl, rob, wool



Tip

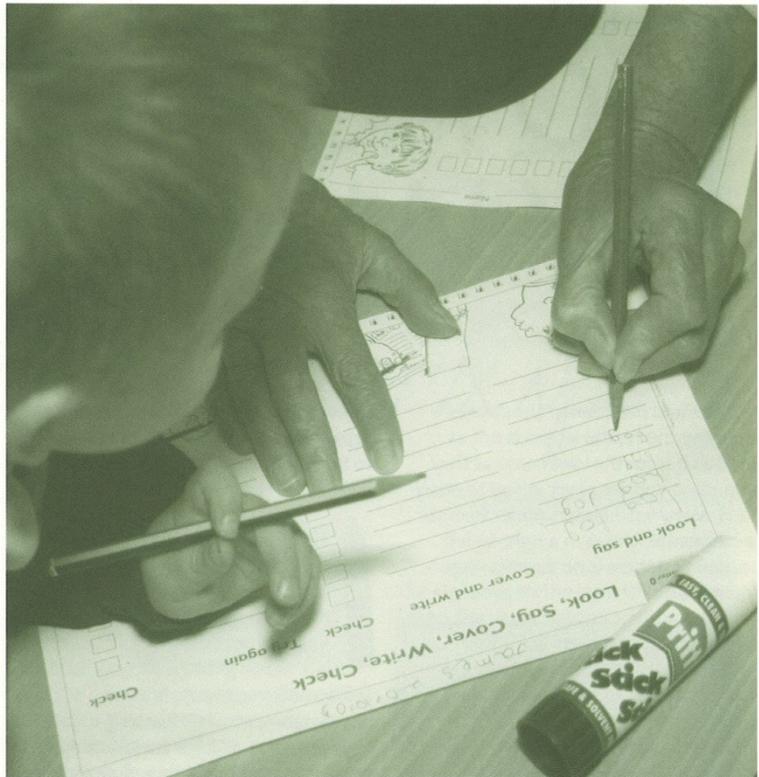
Children who have learned their letters with an entry stroke will need to be careful when making these joins as the diagonal entry stroke is no longer needed.

'Over and back' joins. As previously mentioned, these use the anti-clockwise movement that many left-handers do not find natural. The children will therefore need additional practice before they become fluent in joining letters to **a c d g o q s**, as in the following:

dad, to, and, is

The process of joining letters can be gradual with the learned joins eg. **oo**, being incorporated into a child's writing whilst the rest of the letters are written separately.

moon, soon, sit, bit



Tip

It is helpful when working with left-handers to demonstrate with the left hand even if that is not the teacher's chosen hand. The resulting writing may be less than perfect but it is helpful for the left-hander to see the process and the student will understand the difficulties of using the non-preferred hand very well! Another solution is to sit opposite the child and write upside down but this requires greater writing skill.

The seven 'Ss' of good handwriting

Understanding the criteria for good writing will help a left-hander to write well. These can be broken down into a useful set of headings that conveniently begin with the letter S.

A good way of beginning is to ask the left-hander to write out a few lines of writing, preferably including all the letters of the alphabet.

Tip
"The quick brown fox jumps over the lazy dog." is a favourite alphabet sentence.

The writing should be looked at carefully with the points below in mind (not necessarily in this order). If working with a younger child this observation would be made primarily by the teacher or parent but children in the upper years of primary school and older could take a more active

part in this analysis. Always try to involve children in any decisions about action to be taken so they will be more informed and more motivated to take charge and improve their writing.

Shape

Are all the letters legible?

Ensure that all the letters are formed correctly.

Sometimes letters that have been learned correctly lose their legibility when the writing speed increases. For example: if the letters **a d g o** are not completely closed they can be mistaken for different letters, so that day can become clay, bat can become but.

day bat

Are these day and bat or clay and but?

Are the shapes of the letters consistent?

For example: a circular **o** looks better with a circular **a**; an oval **a** needs an oval **o**. Similarly there should be consistency in the shape of descenders, whether looped or open, wide or narrow.

a o a o

Sitting

Do all the letters 'sit' on the writing line?

(with the 'tails' hanging below)

I like football because score goals. A goal is when someone slide tackle you from behind or someone does something to you, for a goal you get a freekick or a penalty

This writing would look better and be easier to read if all the letters were sitting on the writing line

Slope.

Is the writing sloping in a consistent direction? A consistent slope improves the appearance of a piece of writing and invites the reader to read more.

Many handwriting copy styles are written sloping forward, which is a natural movement for a right-hander. Many left-handers are able to conform to this slant, however, upright writing may be easier for some left-handers and is perfectly acceptable. There seems to be some bias against backward-sloping writing that is more natural for a left-hander; graphologists often make little allowance for the hand used in writing and ascribe negative attitudes towards

backward-sloping writing. Perhaps it is time to acknowledge that backward sloping writing can naturally result from writing left-handed - depending on the hand and pen position used - and that it is also perfectly acceptable when not extreme.

Bronia was very worried now but, suddenly, it felt like someone was tugging on the boat! "Bronia, look" said Ruth said. They were being tugged by the soldier they had seen back in Poland.

The down strokes in this writing are written at a variety of angles.

A large ~~faunt~~ jumped quickly over white zinc boxes.

A test that will show the slope of a piece of writing clearly can be made by extending all the downstrokes with a contrasting pen/pencil. It is then easy to see how the majority of the letters are sloping and which ones break the pattern.

The first thing that made the passenger start to think the ship was rolling was

because there were bats flying in and out of broken window. The driver said "That's your."

My name is Amy
I am eight years old.

These samples show writing that slopes consistently. It is less important whether it leans backwards, forward or is upright.

Size

Are the letters written at the correct size?

In good handwriting the 'small' (often called x-height) letters: **a c e i m n o r s u v w x z**, should all be written the same size and the 'body' parts of **b d g h k p q y** should conform in size.

Some letters have ascenders that ideally should be written approximately twice the height of the x-height letters (**b d f h k l**), and some have descenders that drop a similar distance below the writing line (**f g j p q y**, plus **z** if it is written with a descender).

Some children who understand these rules write particular letters too large or small; common faults occur with **k** and **s** written too large and letters at the end of a word written too small.

A clear demonstration of the evenness of letter sizing can be made by drawing a line along the top of the small letters. It is then usually possible to highlight particular letters that are larger or smaller than the norm.

Is the writing a suitable size?

Many children are asked to write on lined paper with lines too close together for the size of their writing so that the descenders become tangled with the letters of the line below. Ruled paper with lines 8mm apart is very commonly used both in and out of school and does not

Jan and Edah were going to fast and they capsized and there canoe went on down the river without them and they were stranded. Bronis and Ruth came and to.

This writing would be easier to read if the sizes were consistent.

provide enough space for many KS 1 & 2 writers. One solution is to provide paper that has wider lines but sometimes this is not practicable and it is preferable for the child to adjust the size of his writing. Practising on paper ruled with lines at the desired size can be helpful.

Spacing

Is each letter spaced evenly from its neighbours? In joined writing, the joining line linking one letter with the next helps to establish an even pattern of spacing and prevents two letters bumping against each other.

Is the space between the words consistent?

Too little space or excessive use of space between words can make reading more difficult. This may not be a problem when reading a 6-year-old's account of a day at the seaside but reading a full page of poorly spaced script for an A-level examination can be tiring.

A little thought for left-handers would stop many KS1 teachers asking children to place a forefinger on the page to measure the space between two words. Apart from leaving a space that will be far too large when the child is older and his writing has become smaller, this well-meaning recommendation can involve a left-hander in very complicated contortions.

The teachers giving this advice have presumably never tried writing with the left hand and marking the space with the

right. A much better rule for everyone is to leave a space big enough for a letter 'o'. Children can test the evenness and size of their spacing by using a contrasting colour to draw in as many o's as will fit between the words.

Sequence or String

Is the writing consistently joined? This is of course only relevant if the left-hander has already learned to join his writing. Many children who are perfectly able to write in a joined style fail to do so in their normal school work, as distinct from handwriting lessons.

Joined writing has great advantages:

- It is potentially quicker because there are fewer pen lifts
- The joining line helps to create even spacing
- The physical movement of writing strings of letters together helps in establishing spelling patterns.

Note that some writing styles have spaces after descenders and perhaps some other letters, such as **b** and **p**. These can provide a break when the hand can be moved along the page.

Once joined writing has been learned children should use it as much as possible so that constant repetition makes it easy and familiar.

Some children use joined writing for 'best work' but continue using separate printing for notes and drafting. This means that the joined writing gets less practice and is therefore less likely to become automatic and fluent.

Speed

Many left-handers find it difficult to write quickly and yet in school there are so many situations when fast writing is required: everyday class work, jotting down homework instructions and examination questions. In all these situations a student is at a disadvantage if he needs longer to write than his peers.

Encouraging a child to write quickly if there are aspects of his writing that need attention will only reinforce incorrect habits. It is better to first consider the above criteria for good handwriting and remedy any problems before encouraging greater speed (See pp. 33 for further help).

A few common problems

Letter reversals

Many left-handers find it easy to write in reverse: mirror writing. The most famous example is Leonardo da Vinci who wrote his notebooks in this form.

In the same way, some left-handers find particular difficulty in writing letters that are a mirror image of another, particularly **b** and **d**, **p** and **q**, although it is common in all children up to about six years of age. The following suggestions may help:

- teach the letters in family groups, for example,

c, a, d, g, q, o

- make patterns of repeating letters with similar strokes eg.

hbh cdcd pqp

- write a **b** for *beginning* in the top left-hand corner with its down stroke parallel and close to the edge and a **d** for *end* in the bottom right-hand corner also with its down stroke parallel and close to the edge of the page.

*2 times on paper leaves
 2 times on paper leaves
 dancing in the blueberry wind*

An adult left-hander mirror-writing fluently

b _____

_____ **d**

These unusual d's have resulted from the letter being made incorrectly. The first two start at the top of the tall stroke and then the bowl is made anticlockwise or clockwise; the third begins with the bowl made in a clockwise direction.

Difficulty in joining

Sometimes the difficulty is caused by the letters being made in an unusual direction.

This may not be detected until the child is asked to join his letters and finds what should be easy is quite difficult. For example, a child who has always formed the letter **d** by starting with the tall down stroke will find he is making strange garlands when he writes the word 'good.'

Looking carefully at the child's work may show that the problem is caused by relatively few letters and it may be possible to correct their formation and renew confidence in joining.

Sometimes the difficulty is caused by the writer pressing too heavily on his pen/pencil. This can make it more difficult to write the pushing strokes needed for joining. Practising handwriting patterns or short words while concentrating on reducing the pressure may help to make the writing more fluent and rhythmical.

If the above suggestions are not effective and the left-hander is experiencing very real difficulty it may be better for him to make a break between some of the letters. He may need to practise miming the link between one letter and the next so that the second letter is begun in the correct place and the link between the two is as efficient as possible.

Slow writing

- Ensure that he is positioning himself and his pen comfortably
- Help him to use joined writing
- Help him to reduce the pressure on his pen and the paper
- Encourage him to practise handwriting patterns and gradually increase the speed of movement
- Work out a programme of regular short practice with him. Use short words, either from memory or dictated
- Institute a series of regular, timed copy-writing sessions. The writing task could be as short as one sentence or as long as a paragraph. It can be very encouraging for the child to keep a record and chart his writing speed. (for additional ideas see Dornan (2006).

Other sources of help

In the family

Some left-handers have relatives who also write with their left hands. Listening to a member of the family talk about how they remember learning to write, what pens they prefer and how they hold them can be very useful. If there is no one in the immediate family who is left handed it can be worth broadening the search to the wider family and even consulting the family tree to see if there is someone who could give advice and share their experiences. Finding a strand of left-handedness in the family could help to avoid any feeling of 'difference'.

In school

Left-handers and school policy

The days of left-handers being forced to use their right hands seem to be over. Nevertheless, it is now very common for left-handers to be allowed to use their chosen hand at school and then given no further support.

It is important that schools include provision for left-handers in the schools' policies, especially the handwriting policy, and for all teachers and assistants to be aware of the strategies that could help a left-hander if he is struggling.

Making a record of left-handers on entering the school and monitoring their progress as they mature is very helpful,

so that action can be taken if there is any evidence of poor performance.

Parents' concerns with handwriting should initially be raised with the class teacher, who will no doubt consult the school's SENCO (Special Educational Needs Coordinator).

A Southpaw Club

A club for left-handers in a school can make the left-handers feel special in a positive way and provide a forum for sharing experiences in handwriting as a part of the programme.

The author ran a Southpaw Club in a junior school for a number of years. This was formed so that the older children in the school could share their experiences and successes in writing with the younger children (Dornan 1993). It was felt important that the club should not exclusively focus on handwriting and needed to include many more activities in the programme. All the left-handers in the school were invited to be members and the meetings were held at a time when all the children could attend without missing either lessons or breaks. As many left-handed teachers and support staff as possible were also included. The meetings were held once or twice a term.

The programme could include:

- Finding out about famous left-handers
- Searching for alternative names for left-handers from dialects and other languages
- Designing a tee shirt/mug
- Designing gadgets/games
- Making up poems/raps
- Trying mirror writing (if many children in the club have difficulties with reversing letters this may not be a suitable topic)
- Finding out about other left-handers in the family
- Setting up activities to discover if members use their left hands for other actions: threading needles/beads, screwing, hammering, cutting with scissors, eating with a spoon, using a knife and fork, using a computer mouse, throwing a ball, using a bat or racquet
- Setting up equipment to discover which side members prefer to be dominant in other activities such as: kicking a football, wheeling a bike, skateboarding, doing a cartwheel, hopping, looking through a microscope or camera view-finder
- Using the website of the Left-handers Club for additional ideas.

Children with special needs

Many left-handers are unlikely to have persistent difficulties and will usually find the suggestions made in this book sufficient to alleviate any minor difficulties they may experience. However, when left-handedness is part of a larger set of difficulties various professionals may be involved in helping children with their problems. It is important that lines of communications between these professionals and the teacher are kept open and the teacher is sympathetic to the special needs of the children. Broadly, we can divide the children and their difficulties into four groups:

Children who have a simple anatomical defect from birth

A very small number of children are born without a right arm, a hand or fingers. The majority of these children would have been 'naturally' right-handed but because of their problem have to use their left hand to do the things they would normally have done with the right. Provided that they do not have any other learning difficulty, however, these children usually find it relatively easy to cope and often devise ingenious strategies for managing with just one arm or hand. When it comes to handwriting, however, the teacher must be sensitive to the fact that the child might need to take things more slowly and require some additional help, especially in relation to the movements required to form letters.

Children who have to change hands because they lose parts of the body required for writing.

A very few children lose fingers, a hand or arm in an accident after they have learned the basics of handwriting. Changing hands for handwriting can be quite traumatic for them and teachers should be sensitive to both the physical and emotional difficulties they are facing. Special allowances should be discussed and put in place for these children, especially if exams are approaching.

Children with cerebral palsy who have a 'good' hand that is not their dominant hand.

Cerebral palsy is a condition caused by damage to the brain around the time of birth. Some children are very severely affected, are wheelchair bound and cannot use their hands at all. Others are less severely affected. Among the less severely affected, there are some children who are described as having hemiplegia. This means that only one side of the body is affected. Among these, many would be naturally right-handed but with their right hand most affected, while a few would be naturally left-handed, with the left side most affected. Sometimes, but not always, children with hemiplegia have other difficulties that will affect their ability to learn complex tasks like handwriting.

Physio- and occupational therapists working with these children will try to help them decide on the best hand for tasks such as handwriting. When the left hand becomes the 'working hand', all the suggestions made in the text above apply. In addition, a specialist teacher or therapist may be able to suggest additional adaptations and alterations, which will suit each child's particular needs.

Children with 'specific' learning difficulties.

This encompasses by far the largest number of children the class teacher is likely to encounter. They include children with Dyslexia, Developmental Coordination Disorder (DCD) or Dyspraxia, Specific Language Impairment, ADHD, Asperger Syndrome and other groups of children whose difficulties cannot be explained in terms of a global delay and/or known damage to the developing brain. In a practical booklet like this one, it would be quite impossible to summarise the vast literature on left-handedness, various types of inconsistent dominance and their relationships to 'specific' learning difficulties. Since the turn of the century researchers have been debating (a) whether there are really proportionately more left-handers than right-handers in these populations, more cross laterals etc., and (b) if there are, what might be the reason. With regard to (a)

In summary

It is hoped that the suggestions in this booklet will help parents and teachers who are supporting and assisting left-handers with their writing. The key points are listed for easy reference.

A left-hander should:

- **Sit next to a left-hander or to the left of a right-hander**
- **Have ample space on his left side**
- **Sit so that the body is supported and the writing surface is not too high**
- **Place the writing paper to the left of the centre of the body and rotate it clockwise**
- **Position the right hand so that it holds the paper in place, helps to support the body but does not get in the way of the writing hand**
- **Choose a pen or pencil that moves smoothly across the paper, feels comfortable in the hand and is not slippery to hold**
- **Hold the pen well back from the point**
- **Use quick drying ink**
- **Preferably keep the writing hand below the writing line**
- **Use as little pressure as possible on the paper and pen**
- **If necessary, have frequent, short, concentrated practice sessions brimming with praise!**

(4) Julie Bennett(2015) : *HANDWRITING Pocketbook*

*A pocketful of tips, tools and techniques for teaching,
improving and troubleshooting handwriting.*

Hampshire, UK : Laurel House.

P 101

Left-handed writers



Difficulty	Solution
Cramped Space for writing: elbow clash with right-handed student.	Seat students next to other writers according to 'handedness'.
The 'hook' position where the hand is hooked around the pen. The student contorts their hand and arm, with their hand above the line of writing.	Make changes in effective pen hold, paper position and position at desk. (See pages 28, 30-35.) Try varying the standard paper position, depending on pen hold. (See expert advice below.)
Slow, laboured handwriting or cramped writing style , often using all fingers to 'push' the pen, pushing it hard into the paper.	Bring arm underneath writing line; position paper to left of body midline, top tilted; use dynamic 3-finger grip. Practise writing bigger letters rhythmically across the page to promote lighter, faster writing.
Smudging because the writer is pushing their pen across the page.	Change to a more effective pen hold. (See pages 33-35.)
Writing from right to left instead of left to right.	Mark the paper at the top left with an arrow to indicate start point and direction of writing.
Letter reversals (pages 103-104) and mirror writing are common in left-handed writers.	As a rule of thumb, if either persists beyond age 6, investigate to eliminate dyslexia, dyspraxia or eye problems.

〈 引用 ・ 参 考 文 献 〉

序章

- 『独往の人 會津八一展』（中村屋サロン美術館編）2018
- 「全国大学書写書道教育学会・第27回（京都）大会ラウンドテーブル」
【テーブル①記録】「書写・書道教育の実践論」『書写書道教育研究 第12号』（全国大学書写書道教育学会編）1998
- 「全国大学書写書道教育学会・第27回（京都）大会ラウンドテーブル」
【テーブル③記録】「書写・書道の学習者論」【小学校での指導から左利き児童生徒の指導について】『書写書道教育研究 第12号』（全国大学書写書道教育学会編）1998
- 清水文博「ラウンドテーブル テーブル③書写・書道の学習者論 学習者の立場から考えていかなければならないことは何か」『書写書道教育研究 第27号』（全国大学書写書道教育学会編）2013
- 杉崎哲子「書写・書道の学習者論に関する研究の方向性」『書写書道教育研究 第28号』（全国大学書写書道教育学会編）2014
- 田上美由紀 猪狩恵美子「日本におけるユニバーサルデザイン教育をめぐる研究動向 ―インクルーシブ教育の実現を目指した通常学級改革の視点から―」『福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学 第3号』2017
- 外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/000270587.pdf>
(2019年12月30日閲覧)
- 『国語科教育課程』（韓国教育部）2015
- 平井昌夫『国語教育学原理』（明治図書）1969
- 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』（朝倉書店）1997
- 小林比出代「教育目標から見た英・米国の Handwriting の教育と日本の書写教育」『書写書道教育研究 第12号』（全国大学書写書道教育学会編）1998
- 小林比出代「「The Education Reform act（1988年教育改革法）」制定以降のイギリスにおける Handwriting の教育の在り方」『書写書道教育研究 第14号』（全国大学書写書道教育学会編）2000
- STANLEY THORNES (1995) . *English Key Stage 1 ages 5-7 Teacher's Resource Book.*

- STANLEY THORNES (1996) . *The Handwriting Book*.
- Zaner-Bloser, Inc (1984) . *HANDWRITING BASIC SKILLS and APPLICATION*.
- 西口啓太「米国の国語教育における書くことの領域の教育課程 —Common Core State Standards にみる初等・中等教育の系統性—」『神戸大学 研究論叢 第25号』2019
- Common Core State Standards Initiative. Standard in Your State.
<http://www.corestandards.org/standards-in-your-state/> (2019年12月31日閲覧)
- Handwriting and the Common Core State Standards
<http://www.upub.net/The-Great-Debate-Writing-by-Hand-vs-Keyboarding-News.html> (2019年12月31日閲覧)
- Mary Grace N. Bamba (2019). RECOGNIZING SPECIAL NEEDS OF LEFT-HANDED PUPILS IN WRITING, Depedbataan.com Publications, The Official Website of DepED Division of bataan.

第1部

第1章

- 石田肇「IV. 左きき Left handedness」『小児の微症状 病気と健康の間』(馬場一雄・上田穰編 医学書院) 1966
- 馬場一雄「左利き」『小児内科 第28巻第10号』(東京医学社) 1996
- 伴貞彦「左利き者の言語中枢について(第一報) —文献的考察—」『神戸市看護大学短期大学部紀要 第19号』2000
- 八田武志『左ききの神経心理学』(医歯薬出版株式会社) 1996
- 坂野登『かくれた左利きと右脳』(青木書店) 1982
- 坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の“性格”と“クセ”』(日本実業出版社) 1998
- 橋本愛『書字における利き手の差に関する研究』(上越教育大学修士論文) 2003
- 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』(紀伊國屋書店) 1982

- 小川嗣夫「利き手に関する研究」『人間文化研究(京都学園大学人間文化学会紀要)』1999
- 酒井清「児童における利き手の意義と矯正指導」『明星大学部紀要』1984
- 大井学「利き手の発達と指導についての試論」『乳幼児保育研究』(京都大学乳幼児保育研究会編)1976
- 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(朝倉書店)1997
- クリス・マクマナス著 大貫昌子訳『非対称の起源 偶然か、必然か』(講談社)2006
- 八田武志『左対右 きき手大研究』(化学同人)2008
- 八田武志『「左脳・右脳神話」の誤解を解く』(化学同人)2013
- 前原勝矢『右利き・左利きの科学 利き手・利き足・利き眼・聞き耳…』(講談社)1989
- Jerre Levy and Marylou Reid (1976). Variations in Writing Posture and Cerebral Organization, *Science*, 194.
- Gesell, A., and Ames, L. B. (1947). The Development of Handedness, *The Journal of Genetic Psychology*, 70.
- 亀口憲治「利き手の理論とその指導」『教育と医学』(教育と医学の会編)1976
- フェリシモ左きき友の会&大路直哉『左ききでいこう！—愛すべき21世紀の個性のために—』(フェリシモ)2000
- 鈴木匡子 山鳥重 遠藤佳子 藤井俊勝「ジャルゴン失書を呈した右利き右半球性ブローカ失語の1例」『臨床神経学 第37巻第5号』(日本神経学会編)1997
- 山鳥重「左利きに生じた純粹失書」『失語症研究 日本失語症学会誌』(日本失語症学会編)1981
- Hildreth, G (1950). The Development and Training of Hand Dominance, *The Journal of Genetic Psychology*, 76.
- 小枝達也 竹下研三「利き手の矯正と書字の誤り」『脳と発達 第20号第3巻』(日本小児神経学会編)1988
- 林隆 市山高志 西河美希 古川漸「利き手の矯正により鏡像文字が悪化した痙攣性両麻痺の1例」『脳と発達 第30巻第4号』(日本小児神経学会編)1998
- 小林比出代「利き手・非利き手での書字活動時における脳血液動態の比較

- 「N I R S 及び筆圧握圧計測装置による測定を通しての試論」『書写書道教育研究 第 31 号』（全国大学書写書道教育学会編）2017
- 小林比出代「利き手・非利き手の違いによる書字活動時での脳血液動態の差異 — 「ウェアラブル光トポグラフィ」を用いたデータ蓄積—」（第 34 回全国大学書写書道教育学会口頭発表資料）2019

第 2 章

- 安藤悦子 兼成恵利子 鎌田美穂 前田優子 町屋香奈子 山本春江「左利きに関する親の意識調査」『小児保健研究 第 56 巻第 2 号』（日本小児保健協会編）1997
- 『小学校学習指導要領』（『昭和 22 年度（試案） 学習指導要領 国語科編』（文部省）1947
- 『昭和 26 年(1951)改訂版 小学校学習指導要領 国語科編（試案）』（文部省）1951
- 『昭和 33 年改訂 小学校学習指導要領』（文部省）1958
- 『小学校学習指導要領』（文部省）1968
- 『小学校学習指導要領』（文部省）1977
- 『小学校学習指導要領』（文部省）1989
- 『小学校学習指導要領』（文部省）1998
- 『小学校学習指導要領』（文部科学省）2008
- 『小学校学習指導要領』（文部科学省）2017
- 松田道雄「左利き友の会」始末記『暮らしの手帖 第 2 世紀』（暮らしの手帖社）1975
- 箱崎総一編『左きき書道教本』（左利き友の会）1972
- 宮前珠子 佐々木光子「書字の利手交換」『第 13 回日本作業療法学会論文集』（日本作業療法士協会編）1979
- 末松孝「左手による書字練習 合理的な三筆法の紹介」『理学療法と作業療法 第 7 巻第 2 号』（医学書院）1977
- 押木秀樹・近藤聖子・橋本愛「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について」『書写書道教育研究 第 17 号』（全国大学書写書道教育学会編）2017

会編) 2003

- 小林比出代「新しい筆記用具が指向する方向性の分析」『書写書道教育研究 第18号』(全国大学書写書道教育学会編) 2004

第II部

第3章

- 久保田競『手と脳 脳の働きを高める手』(紀伊國屋書店) 1982
- 坂野登編『脳と教育 心理学的アプローチ』(朝倉書店) 1997
- 前原勝矢『右利き・左利きの科学 利き手・利き足・利き眼・聞き耳…』(講談社) 1989
- 平井昌夫『新しい國語教育の目標』(新教育協會) 1949
- 小林比出代「日米の書字教育に関する比較研究 —20世紀における活字及び印字機器の普及と書字教育—」『青山杉雨記念賞 第四回 學術奨励論文選』2001

第4章

- 吉田多美子「イギリス教育改革の変遷 —ナショナルカリキュラムを中心に—」『レファランス』平成17年11月号(2005)
- 横尾俊・渡部愛理「イギリスにおけるナショナルカリキュラムとそれへのアクセスの手だてについて」『世界の特別支援教育』(24) 2010
- 藤田英典・大桃敏行『学校改革』(日本図書センター) 2010
- 大田直子『現代イギリス「品質保証国家」の教育改革』(世織書房) 2010
- 原清治・山内乾史・杉本均『教育の比較社会学』(学文社) 2011
- 藤井泰「イギリスにおける連立政権によるナショナルカリキュラムの見直しの動き —『ナショナルカリキュラムの枠組み』(2011年)を中心に—」『松山大学論集』第24巻第6号(2013)
- 勝野頼彦(研究代表者)『諸外国における教育課程の基準(改訂版) —近年の動向を踏まえて—』(国立教育政策研究所) 2013
- 『文部科学省国立教育政策研究所・JICA 地球ひろば共同プロジェクト グロ

- ーバル化時代の国際教育のあり方 国際比較調査 最終報告書（第1分冊）』（独立行政法人 国際協力機構 地球ひろば）2014
- 福島青史・村田裕子「イングランドのカリキュラム改革と日本語教育 ー初等教育への外国語教育必修化を中心としてー」『国際交流基金日本語教育紀要』11号（2015）
- 坂野慎二・藤田晃之『海外の教育改革』（NHK出版）2015
- 原清治・山内乾史・杉本均『比較教育社会学へのイメージ』（学文社）2016
- 小林比出代「The Education Reform Act（1988年教育改革法）」制定以降のイギリスにおける Handwriting の教育の在り方」『書写書道教育研究 第14号』（全国大学書写書道教育学会編）2000
- 小林比出代「教育目標から見た英・米国の Handwriting の教育と日本の書写教育」『書写書道教育研究 第12号』（全国大学書写書道教育学会編）1998
- Scholastic（2013）. *The National Curriculum in England*. London, UK: Ashford Colour Press.
- Carol Vorderman（2015）. *Handwriting Made Easy Ages 5-7 (Key Stage 1) Printed Writing*. London, UK : DK.
- Jean Alston（1996）. *Writing Left-handed A guide for parents and teachers of left-handed children*. Manchester, UK : Dextral Books.
- Gwen Dornan（2007）. *Writing Left-handed... ...Write in, not left out*. The National Handwriting Association.
- Lauren Milson（2008）. *Your Left-handed Child Making things easy for left-handers in a right-handed world*. London, UK : hamlyn.
- Julie Bennett（2015）. *HANDWRITING Pocketbook A pocketful of tips, tools and techniques for teaching, improving and troubleshooting handwriting*. Hampshire, UK : Laurel House.
- ローレン・ミルソム著 笹山裕子訳『左利きの子 右手社会で暮らしやすくするために』（東京書籍）2009
- Rosemary Sassoon（1999）. *HANDWRITING OF THE TWENTIETH CENTURY*. London, UK : Routledge.
- 押木秀樹・近藤聖子・橋本愛「望ましい筆記具の持ち方とその合理性および

検証方法について」『書写書道教育研究 第 17 号』（全国大学書写書道教育学会編）2003

- 小林比出代「新しい筆記用具が指向する方向性の分析」『書写書道教育研究 第 18 号』（全国大学書写書道教育学会編）2004

第 5 章 1 .

- The State of South Australia, Department of Education and Children's Services (2004). *R-10 English, Teaching Resource*.
- The State of South Australia, Department of Education and Children's Services (2005). *South Australian Curriculum, Standards and Accountability Framework: the required elements*.
- 石附実・笹森健編『オーストラリア・ニュージーランドの教育』（東信堂）2001
- Government of South Australia, Department of Education and Children's Services (2007). *Handwriting in the South Australian Curriculum 2nd edition*.
- 小林比出代「教育目標から見た英・米国の Handwriting の教育と日本の書写教育」『書写書道教育研究 第 12 号』（全国大学書写書道教育学会編）1998
- The State of South Australia, Department of Education and Children's Services (2004). *R-10 English, Teaching Resource*.
- Education Department of South Australia (1984). *Handwriting South Australian Modern Cursive R-7 Language Arts*.

第 5 章 2 .

- セレスタン・フレネ著 石川慶子 若狭蔵之助訳『フランスの現代学校 シリーズ・世界の教育改革 7』（明治図書）1979
- 手塚武彦編著『各年史／フランス 戦後教育の展開 一九六〇年版 — 一九九一年版まで』（エムティ出版）1991
- 柴田義松編『世界の学校はどう変わろうとしているか：アメリカ・ソ連・ドイツ・イギリス・フランスの教育事情』（日本標準 現代教育問題シリーズ 32）

1991

- 中西一弘「フランスの教科書の特色－四つの観点からみたフランスの国語教科書－（量と形式が決定する教育観の相違）」『現代教育科学』486(4)(1997)
- フランス教育行政担当者協会著 小野田正利訳『フランスの教育制度と教育行政』（大阪大学人間科学部）2000
- 三好美織・角島誠「目的・目標からの新教育課程への提言：フランスからの示唆」『年会論文集』26（2002）
- 下條美智彦『ヨーロッパの教育現場から－イギリス・フランス・ドイツの義務教育事情』（春風社）2003
- 浅野清編『成熟社会の教育・家族・雇用システム－日仏比較の視点から』（N T T出版 東洋大学先端政策科学研究センター研究叢書2）2005
- 諸外国の教科書に関する調査研究委員会編『フランスの教科書制度』（教科書研究センター）2007
- 文部科学省編『フランスの教育基本法－「2005年学校基本計画法」と「教育法典」－』（国立印刷局）2007
- フランス教育学会編『フランス教育の伝統と革新』（大学教育出版）2009
- 大津尚志「フランスの教育制度と教育費（特集 日本の教育・世界の教育）」『学校運営』53（10）（2012）
- 上岡学「ドイツならびにフランスの教育制度と教育実践に関する研究－幼稚園・小学校・中学校・高等学校を対象として－」『武蔵野大学教職研究センター紀要』（2）（2013）
- 中島さおり『哲学する子どもたち－バカロレアの国フランスの教育事情』（河出書房新社）2016
- フランス教育学会編『現代フランスの教育改革』（明石書店）2018
- Jacobi, J. & Quattrone, A. (2016). *Votre enfant à la Maternelle*, Paris, France : PlayBac.
- Amor, S.& Moka, C. (2017). *ÉCOLE PRIMAIRE, Le Guide de Survie pour les parents, Comprendre les programmes scolaires*. Autechaux, France : Nathan.
- Sansey, G. (2015). *“Cahier d’écriture” Écrire les lettres*. Autechaux,

France : Belin.

- Hebting, C. (2017). “*Graphilettre*” *Cahier d’écriture, GS-CP de 5 à 7 ans*.
Tours, France : MAGNARD
- Hebting, C. (2017). “*Graphilettre*” *Cahier d’écriture, CP-CE1 de 6 à 8 ans*.
Tours, France : MAGNARD
- Hebting, C. (2017). “*Graphilettre*” *Cahier d’écriture, CE2-CM1-CM2 de 8 à 11 ans*.
Tours, France : MAGNARD

第Ⅲ部

第6章

- 小林比出代「日米の書字教育に関する比較研究 —20世紀における活字及び
印字機器の普及と書字教育—」『青山杉雨記念賞 第四回 学術奨励論文選』
2001
- Frances A Rosen : “The Second “R” in Today's Schools” (1951), *The
Education Digest*, 16,
- 井上尚美「ボイヤー報告とアメリカの母国語教育」『東京学芸大学紀要 2 部門
人文科学第 36 集』（東京学芸大学）1985

第7章

- 学習指導要領データベース <https://www.nier.go.jp/guideline/s43e/index.htm>
(2020年6月20日閲覧)
- 松田道雄「左利き友の会」始末記『暮らしの手帖 第2世紀』（暮らしの手
帖社）1975
- 箱崎総一編『左きき書道教本』（左利き友の会）1972
- Cermak, S.A. and Larkin, D. (Eds.) (2002). *Developmental Coordination
Disorder*. New York, USA : Delmar.
- 内閣府 HP https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html (2020年
2月29日閲覧)
- ソサエティ 5.0-政府広報オンライン

<https://www.optim.cloud/blog/iot/society-5-0-real-world-examples/> (2020年2月29日閲覧)

○一般社団法人 日本経済団体連合会 HP

<https://www.keidanren.or.jp/policy/society5.0.html>

「Society 5.0 –ともに創造する未来–」

https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/095_sasshi.pdf

(2020年3月1日閲覧)

綴章

○フェリシモ左きき友の会&大路直哉『左ききでいこう！ –愛すべき21世紀の個性のために–』（フェリシモ）2000

○大路直哉『見えざる左手 ものいわぬ社会制度への提言』（三五館）1998

○坂野登『しぐさでわかるあなたの「利き脳」 自分でも知らなかった脳の“性格”と“クセ”』（日本実業出版社）1998

広島大学大学院教育学研究科

(博士課程後期)

学位論文

左利き者の書字教育に関する研究

小林 比出代

2020(令和2)年9月16日